THE KAIZO

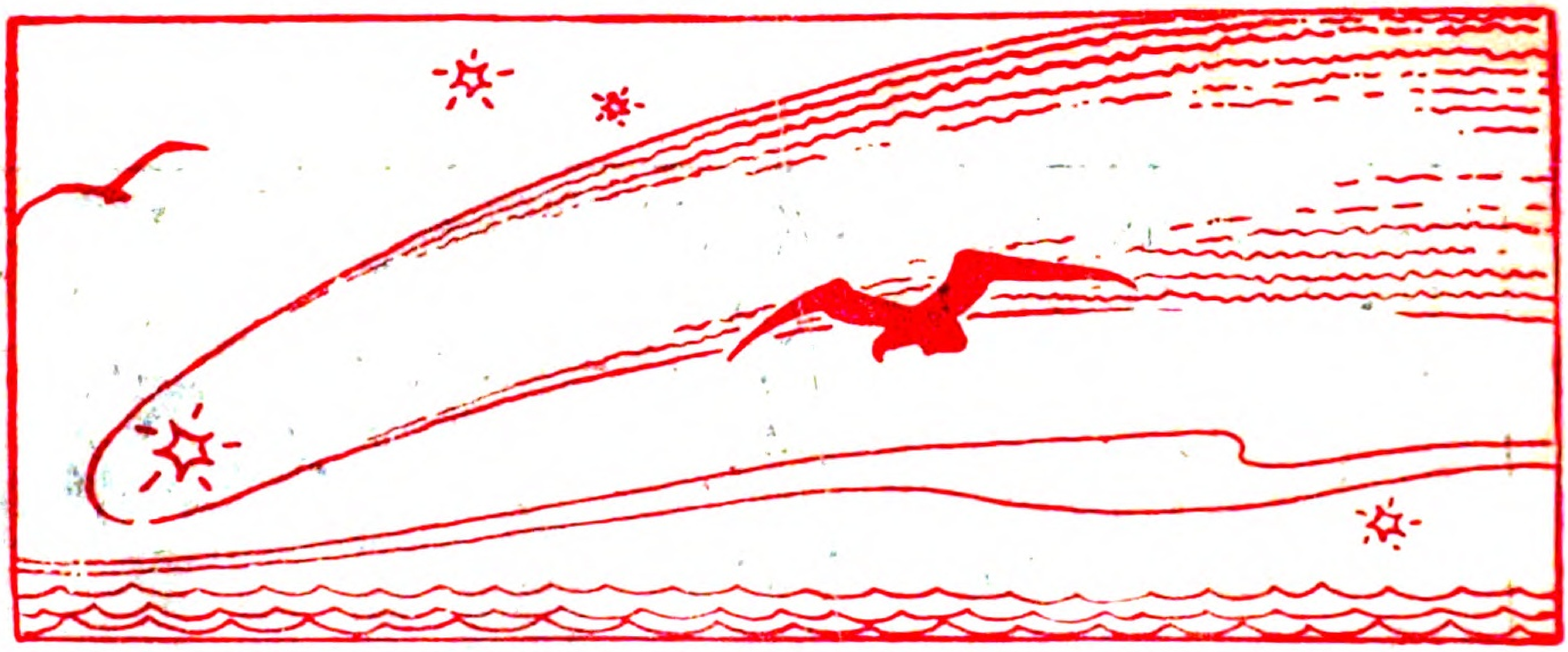
改造

八月号

1921



改造八月號目次



創作



來朝せる

ラツセル教授と

ブラツク女史

WELCOME TO THE HON. BERTRAND RUSSELL

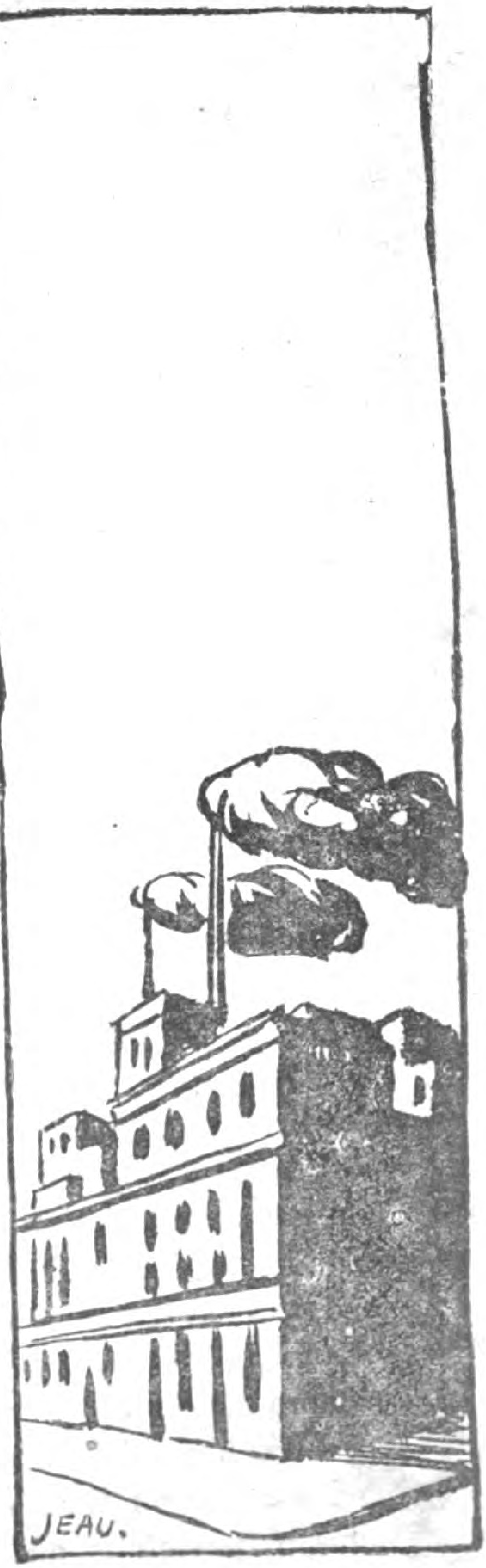
The Honourable Bertrand Russell, a devout friend and sympathizer of the proletarian, is the object of our admiration and a source of our inspiration. When his intention to visit this country was first announced, with what rejoicing the news was received by us and by our young men at large whose bosoms are burning with new ideas! When we heard shortly afterwards that he was critically ill in Peking, we were greatly disappointed. But Heaven, which must have something great in store for him, saved him, to the great relief and joy of all his friends. A champion for the reconstruction of the world and an apostle of new thought, the Honourable Bertrand Russell is now among us, a star to illuminate the dark sky of our realm of thought. His mere presence, to say nothing of his inspiring remarks, will, no doubt, have a boundlessly beneficial influence on our young men.

He is the first of the great thinkers of the West to be invited by *Reconstruction* to lecture in this country. His kind assceptance of our invitation, in spite of his impaired health, is highly appreciated.

The grievances of our workingmen, the defects of our political and economic systems, and the recognition by our young men of the necessity for social reconstruction—how will these appear to the eyes of the professor? It is our earnest prayer that he may observe all these things and criticize them boldly and without reserve, and that he may teach us how to get out of our difficulties, so that our social structure may be placed on a more substantial foundation.

We hope that, among the hot springs, the blue mountains, and the natural beauties of our countryside, he will recuperate himself peacefully and at leisure, a wish which we are certain will be shared by all his Japanese admirers.

工業主義の內面的傾向



バートランド・ラッセル

上

政治及び經濟上の力の働き方を了解するには、物理學者の方法に倣つて、各々の力を人爲的に分離して研究することが必要である。勿論實際に起る事件は、一つの力のみが働いた結果ではなくて、さういふ力全體の効果が結合した結果である。然しながら種々の單一なる力の傾向を豫め探究しておけば、此合成的結果を考量することが、著しく容易になる。孤立的地位におかれた國民主義の効果は、特に研究するにも當らぬほど著明である。けれども工業主義の効果は、共活動が他の要素によつて妨害され、又は復雜にされぬ限り、それほど著明でない、但し苟も現代の世界を了解しよう

と望む以上、その重大さに變りは無いのであるが。現在の混亂の原因を論ずる際に、私は此點について一寸意見を述べては置いたが、それはホンの行掛りの言葉丈でに過ぎなかつたので、今度は此問題を主として考へなければならぬ。

社會に於ける工業主義存在の必須の條件として、私は共同の仕事に從事する勞働者の大組織と、産業の管理者等が、將來の利益のために現在の貨物の使用を差控ふることゝ、秩序ある鞏固な政府と、熟練勞働者と、科學的知識とを擧げた。そこで工業主義の成長に必要な條件は既に備はつて居るものとして、その成長は、他の傾向に阻害されぬ限り、いかなる效果を伴ふものであるかを研究して見たいと思ふ。

工業主義は單に多くの勞働者を必要とする大事業のみに依て成立するものではない。三角塔の建立は壯業ではあつたが、工業的ではなかつた。工業主義の本質は、精巧なる機械及び生産上の勞働の總計を節減する他の手段（鐵道の如き）を使用することとである。橋は工業時代以前に存在したにも拘らず、渡船に代ふるに橋を以てしたことは、工業主義の總ての特徴の一例證である。若し少數の人々が川を越えようとするならば、橋を架けるよりも小舟で河を渡つた方が、少量の勞力で濟む。けれども非常に多くの人々が河を渡らうとする時には——小舟を作るよりも橋を架ける方が非常の勞苦を要するに拘らず——橋の方が勞働の節約だといふことになる。一には橋は壞れ易いため、一には世間の落ちつかぬ時代には、何人も多少遠い未來にしか利益を得られぬ目的のために、精力なり思考なりを費すことは出來ない、そこで或程度の法律と秩序との維持を豫想した上でなければ、軍事上の目的以外に橋を架ける者がないのは當然である。

工業主義の本質は、それ自身としては消費物でなく、單に他の消費物を生産する手段に過ぎぬ事物のために、多くの合同されたる勞力を使ふことである。工業主義の總ての他の特徴は、此根本的の性質から生じた結果である。

第一には、細胞の集合である人體が、單一な細胞から成立してゐる原生類の群よりも有機的であるのと同じ意味に於

て、工業主義の社會がより有機的である點に留意しなければならぬ。各々の原生類は、生命の維持に必要な一切の職分を盡すことが出來る、それは他の物の助けを必要とせず、他のものが死んだ結果として自分も死ぬといふことはない。所が人體を造つてゐる細胞にはさういふ獨立は無い、其等は生命全體のために、恐く必要であるか、又は少くとも有用である所の、種々なる職分を有してゐる。そして最も重要な職分を果す機關のどれかゞ破壞された時は、他の部分も死滅する。眼は見ることだけ、耳は聽くことだけしか出來ぬといふ有樣である。身體の他の部分から引離された眼なり、耳なりは、原生類のように、生命を保つに必要な働きをすることが出來ぬ。かように、協力のために獨立を犧牲とする點には、一長一短がある。細胞の集合體が一の致命的創傷に依て殺され、隨つて人體は原生類の群よりも脆弱であるといふ點は、その短所である。けれども一方、分化作用に依て、數個の機關が、いかに多くの原生物を以てしても能くし得ぬことを成し遂げること、且つかやうにして人間の生命は豐富にせられ、環境に對する其反應が著しく銳敏にされる、といふ利益もあるのである。恰度これに符合した差異が、工業的社會と、非工業的社會との間には存在する。

原始の牧畜又は農業社會に於ては、各々の家族は自家のために必要な總てのものを生産した。さういふ家族の幸福を、ポープは

『その望みも憂ひも、
數エーカーの父の持地の外に出でぬ者は幸なり』

といふ言葉を以て始まつてゐる詩の中に歌つてゐる。けれどもさういふ時代には、人は詩を賣つて生活することは出來ないのであるから、ポープが果して眞にさういふ狀態を愛したかどうかは疑問である。詩を賣つて暮すといふような分業を許す社會は、既に工業主義へ向つて進んでゐる社會である。

工業主義の社會に於ては、自足自給の生活をする者はない。何人も或貨物を多量に生產し、又は貨物を作る或部分を生產する過程に參與しては居るが、生命を維持するに必要な、あらゆる種類の貨物を自ら生產する者はない。隨つて交易、又はとにかく生產物交換の或形式は工業の存在する所には、生命維持の上に絕對に必要である。工場で働いてゐる人は、他人の勞働に依て養はれ、衣せられなければならず、然もその工場內で出來るものでさへ、機械と他の勞働者の協力とを俟たなくては、生產することが出來ない。彼は經濟的に獨立の單位ではなくなつた。資本家とても、少くとも勞働者と同等に他人の力に賴るもので、若し人々が彼のために働かなかつたならば、彼は餓死しなければならぬ。農業も科學的となるに隨つて、工業ほどでは無いが、多少工業と同じ傾向を帶びるものである。農業も又其場で作ることは出來ず、屢々非常に遠い處から運搬されて來る肥料や機械を必要とする。斯樣に、個體の生命は全體の生命に依て左右されるように、社會全體が聯結されて居るのである。

人體と同じく、工業的社會は、それを破壞すれば全有機體が痲痺するような、重要な機關を持つてゐる。工業が益々進步し、益々科學的となるに連れて、この弊は愈々剴切となつて來る。發電所の破壞は、一地方の總ての工場、電車、電燈、及び電力應用の事業を中絕せしめる。是は組織の高等なものほど敏感であるといふ宇宙の法則の一例に過ぎない。隨つて無法な行爲や破壞主義は、生產方法の幼稚な時代よりも、工業的社會に於て一層勢威を振ふことが出來る譯になるのである。

社會がより組織的となるに連れて、政府が重要なものになることは已むを得ない。個人の行爲が他人に及ぼす影響は益々大きくなり、隨つて社會の利益のために制御される必要が愈々加はるのである。そこで個人的自由の縮小と、人生の無政府的方面とも云はるべきもの、即ち人が單に自己の出來心に隨ふ方面とが出來るのである。若し人生の此方面が

て、工業主義の社會がより有機的である點に留意しなければならぬ。各々の原生類は、生命の維持に必要な一切の職分を盡すことが出來る、それは他の物の助けを必要とせず、他のものが死んだ結果として自分も死ぬといふことはない。所が人體を造つてゐる細胞にはさういふ獨立は無い。其等は生命全體のために、恐く必要であるか、又は少くとも有用である所の、種々なる職分を有してゐる。そして最も重要な職分を果す機關のどれかゞ破壞された時は、他の部分も死滅する。眼は見ることだけ、耳は聽くことだけしか出來ぬといふ有樣である。身體の他の部分から引離された眼なり、耳なりは、原生類のように、生命を保つに必要な働きをすることが出來ぬ。かように、協力のために獨立を犧牲とする點には、一長一短がある。細胞の集合體が一の致命的創傷に依て殺され、隨つて人體は原生類の群よりも脆弱であるといふ點は、その短所である。けれども一方、分化作用に依て、數個の機關が、いかに多くの原生物を以てしても能くし得ぬことを成し遂げること、且つかやうにして人間の生命は豐富にせられ、環境に對する其反應が著しく銳敏にされる、といふ利益もあるのである。恰度これに符合した差異が、工業的社會と、非工業的社會との間には存在する。

原始の牧畜又は農業社會に於ては、各々の家族は自家のために必要な總てのものを生產した。さういふ家族の幸福を、ポープは

『その望みも憂ひも、
數エーカーの父の持地の外に出でぬ者は幸なり』

といふ言葉を以て始まつてゐる時の中に歌つてゐる。けれどもさういふ時代には、人は詩を賣つて生活することは出來ないのであるから、ポープが果して眞にさういふ狀態を愛したかどうかは疑問である。詩を賣つて暮すといふような分業を許す社會は、既に工業主義へ向つて進んでゐる社會である。

工業主義の社會に於ては、自足自給の生活をする者はない。何人も或貨物を多量に生產し、又は貨物を作る或機械を生產する過程に參與しては居るが、生命を維持するに必要な、あらゆる種類の貨物を自ら生產する者はない。隨つて交易、又はとにかく生產物交換の或形式は工業の存在する所には、生命維持の上に絕對に必要である。工場で働いてゐる人は、他人の勞働に依て養はれ、衣せられなければならず、然もその工場內で出來るものでさへ、機械と他の勞働者の協力とを俟たなくては、生產することが出來ない。彼は經濟的に獨立の單位ではなくなつた。資本家とても、少くとも勞働者と同等に他人の力に賴るもので、若し人々が彼のために働かなかつたならば、彼は餓死しなければならぬ。農業も科學的となるに隨つて、工業ほどでは無いが、多少工業と同じ傾向を帶びるものである。農業も又其場で作ることは出來ず、屢々非常に遠い處から運搬されて來る肥料や機械を必要とする。斯樣に、個體の生命は全體の生命に依て左右されるように、社會全體が聯結されて居るのである。

人體と同じく、工業的社會は、それを破壞すれば全有機體が麻痺するような、重要な機關を持つてゐる。工業が益々進步し、益々科學的となるに連れて、この點は愈々剴切となつて來る。發電所の破壞は、一地方の總ての工場、電車、電燈、及び電力應用の事業を中絕せしめる。是は組織の高等なものほど敏感であるといふ宇宙の法則の一例に過ぎない。隨つて無法な行爲や破壞主義は、生產方法の幼稚な時代よりも、工業的社會に於て一層勢威を振ふことが出來る譯になるのである。

社會がより組織的となるに連れて、政府が重要なものになることは已むを得ない。個人の行爲が他人に及ぼす影響は益々大きくなり、隨つて社會の利益のために制御される必要が愈々加はるのである。そこで個人的自由の縮小と、人生の無政府的方面とも云はるべきもの、即ち人が單に自己の出來心に隨ふ方面とが出來るのである。若し人生の此方面が

工業主義の下に於て多少なりとも保存せらるべきであるならば、そのために特殊の方法を採らなければなるまい。けれども是もまた後段に論ずべき問題である。

政府と組織との増加の結果としての自由の喪失に對しては、人生の必要品が工業主義以前の社會よりも少量の勞働で得られるといふ利益を擧げなければならぬ。個人の欲望は、二種の抑制、即ち社會より受ける抑制と、物質的條件より受ける抑制とに服さなければならぬ。工業主義は前者を増加する一方、後者を大に減少する。物質的條件に依て課せられる抑制は、第一に死の豫防に關連して居る。大抵の動物は、先見を缺いでゐるので、飢餓のために死ぬ。大抵の人間は、僅か許りの先見のお蔭で、さういふ形の死を避けることに成功する。けれども工業主義以前の社會に於ては、少數の富者ならざる限り、食物及び他の必要品の生産に殆ど一生涯激しく勞働することに依て、辛うじて餓死を免れるのである。此仕事は過度であるために、それ自身としては屢々不快であり、知識、美、又は享樂に關する一切の欲望を滿たすことを、完全に妨害する。工業が幼稚な處では、さういふ慾望は、幸運なる少數者、即ち國王、僧侶、貴族等のみの滿たし得るところである。けれども工業主義の下に於ては、必要品の生産は、社會の精力の少部分を要求するに過ぎず、他の一切の精力は、閑暇や贅澤品――贅澤品の中には、教育、科學、文學、藝術、及び戰爭もはいる――の生産のために解放されるのである。斯樣に、自然から受ける束縛は減少したので、工業主義に依て人間は自由にされた。けれども個人に對する社會の壓迫は加はつたので、一人一人の人はより自由にはならない。

是も亦、人體の細胞と原生物の集合體との間の相異に符合してゐる。人體の個々の細胞は、身體の他の部分と協力するか、さもなくば死ぬほか無いので、原生物より遙かに自由を失つてゐる。けれども身體は全體としては、その環境を支配し、より鋭敏な感覺をもち、感覺から得られた知識を利用することに依て、より高尚な習慣をもつてゐるので、原

生物よりも遥かに自由である。

工業主義は、自然に對する人間の束縛を減少することに依て、過去の時代に於ては極めて稀にしか得られなかつた、非常に貴重な多くのものを、物質的に可能にした。生命を維持するといふだけの仕事は、人間と共に動物もやることで、それは何等重要な方面に於て、人間を動物以上の地位に置くものではない。人間を動物以上のものとするのは、單に物質的なものに留まらぬ欲望を伴隨する精神能力である。人間が食物獲得の壓迫から免れる時、悉くの人が怠惰と無爲の生活に陥るものでは無く、知識、藝術、又は他の純粋に精神的な目的のために活動する者が出て來る。人類全體の上に光輝を放つてゐるのは、其等の人々の事業である。人間は何年かの間生き永らへ、食物の或分量を消費し、自分と同じような子供を何人か生んで死んで行くだけの事しか出來ぬ者ではない。けれども勞働の生產力が僅少であつた結果、近來まで、大抵の人はそれ以上を望むことが出來なかつた。今日では、物質的條件に關する限りでは、より多くの可能性が存在してゐる。若し吾々がそれを欲するならば、教育と十分な閑暇とは全社會に與へられ、生命維持の仕事は、吾々の毎日の仕事の中で、些細にして容易な一部分となるにすぎぬのである。

所謂文明とは、生物學的に生活に必要でない事物の追求を指すものである、と定義を下すことが出來る。文明は最初、大河川の豐饒な三角洲、特に埃及やバビロニアのさういふ場所に於ける農業の勃興に隨つて發生した。他處では何處でも、原始農業は土地を傷めて頻繁な移住を餘儀なくさせる。けれども埃及の場合はさうでなかつた。埃及では一人の勞働に依て一人の必要を滿すより以上の剰餘食物が得られたので、少さな有閑階級を作ることが出來た。著述、建築、數學、天文學、及び其以後の一切の文明に必須の他の技術を發明したのは、此小有閑階級であつた。文明的事業に參與する階級は、農業の進歩と商業の發達とのために增加しはしたが、勞働は猶ほ、社會の大部分の成員が全力を盡さない

でも、生活の必要品を十分に生產するだけの力を持たなかつたので、有閑階級は勢ひ少數の人々をしか包含しなかつた。今日猶ほ藝術と科學とは依然として少數者の特權となつては居るが、決して其等が少數者の特權でなければならぬ理由はないのである。總ての男女は自己の希望通り、藝術や科學にいくらでも參與することが出來る筈である、若し總ての男女が一日四時間、必要な勞働に從事したならば、何人も衣食に事を缺かぬ筈である。そして四時間の勞働の後に殘る閑暇は、どんなに熱心な科學や藝術の研究に對しても十分である。此事實は經濟的たると政治的たるとを問はず、在來存在した社會の寡頭組織を是認する唯一の論據を破壞し、且つ若し工業主義が無事に續いたならば、其終局の形式は共產主義でなければならぬことを、殆ど必然にした。今日では舊來の不平等の存在する理由はもはや消滅して居るが、その不平等を除去する唯一の道は、實に共產主義の外にないのである。

工業主義のこれまでの發達の上に、文明を普及しようといふ欲望が、餘り多く働いて居なかつたのは事實である。そして共產主義が確立せられた後でなければ、さういふ欲望が多く働くことは望まれない。けれども主として經濟的な動機のために、工業國の間には非常に文明が普及された。多少教育ある者は、讀み書きの出來ぬ者よりも、勞働者としての能率が高い。そこで總ての工業國は、一般的な義務教育の制度を施いた。工業主義以前の時代に於ては、教師も生徒も直接必要な勞働以外に多く時間の餘裕をもたないので、義務教育制度は工業主義と伴つて始めて行はれることである。工業主義とそれに伴ふ複雜な過程の到來と共に、一般的教育が一層容易にもなり、必要にもなつた。故に教育の進歩は、工業主義特有の傾向の一つと認めることが出來る。

一般的教育と共に、非常に重大な他のことも起つて來る。第一には、勞働階級が無教育な場合には殆ど不可能であり、勞働階級に教育のある場合には、避けることの不可能な政治的民主々義である。民主々義なる言葉に依て、私は必ずし

も、議會制度を意味するものではない。ソヴィエット制度とても、本來の考へは、民主々義と兩立し得たかもしれぬ。私の云ふ民主々義とは、多數者の望む政府を暴力に依て樹立しようと努めるような例外の人々は措いて、普通の男女が、基礎的な政治上の權力に平等に參與し得るような制度を意味して居るのである。かように廣い意味に解すれば、政治的民主々義は、革命や戰爭のような非常の際を除くの外、進歩した產業的社會にとつて自然な政府組織であると思はれる。

上述のように、工業主義は、對社會の關係における個人の自由を減少する、けれどもそれによつて、對自然の關係に於ける社會の自由は增大されゐのである。言換へれば、個人の行動は、少くともその生活の經濟的方面に於ては、社會の行動に依て益々制肘を加へられることが多くなる。けれども社會の行動は、生命維持の原始的必要に依て支配されることが次第に減少するのである。隨つて藝術や小說を生むような個人的熱情は消滅する一方、戰爭、衞生、及び初等敎育を興すような集合的熱情が、解放せられ、有力となるのである。

個人的熱情の衰微は、第一に個性の縮少を伴ふ。合衆國のように徹底的に工業主義化せられた國に於ては、人と人との間に顯著な相異が見られず、風變りな事は嫌はれて、總ての男女は、能ふ限り其隣人に倣はうとする。彼等の衣服、彼等の家屋、彼等の家具は、總て見本によつて何百萬と生產せられ、手工による生產物の特徵である個別的差異を全然缺いて居る。そして男子も女子も製造せられた品同樣、同一型にはまることを自己の上に强いて、自分の使ふ物品に自己を同化させたがつてゐるらしく見える、恰かも造物主自ら工業的方法を採用し、個々の品物が見本通りに作れるといふ保證つきの最新の機械を用ゐて、男も女も一纒めにどし／＼生產してでもゐるかのように。

藝術やローマンスや個人的愛情は、本來自己の裡に於ける個性の維持と、他人の個性の承認とを必要としてゐるので、合衆國のような氣分の中では榮へることが出來ない。これまで經驗せられたように、工業主義の下に於ては、何故藝

術やローマンスが衰微するかといふことについては、他に理由もあるが、その理由を論ずる時、もう一度此問題に返つて來ることゝしよう。が、ローマンスの衰微については、現に論じてゐる問題と關聯した一事がある。人は自分自身の生活の裡に、ローマンスに對する本能の捌け口をもつことが出來ない時、他の諸本能の場合と同じように、想像の中で假に滿足を求める。そこで胸のおどるような小說や、メロドラマや殺人事件などが好かれるのである。あらゆる殘酷さを以て妻を殺した狂人は、社會の恩人である。彼は何千の人々の溫柔な、沒趣味な生活に對して、猛烈な激情の想像的滿足を與へるのである。自分の仕事を失ふ恐れのために、自分自身としては凝一筋世間並みと違つた行動に出で得ない人々は、さういふ事件に關する新聞記事を、細大洩らさず貪るように讀むのである。戰爭に參加せぬつもりの人々が、開戰當時の一般的な悅びも、同じ原因に基いてゐる。拳闘などの見世物はフートボールや競馬よりも、事務所や工場の堪へ難い單調を慰めるに適してゐる。戰爭に參加せぬ者は、現代の戰爭の戰慄すべき機械的虐殺は、個人的ローマンスに飢ゑてゐる本能を滿足させ得ないので、さういふ戰爭がホーマー時代の戰爭と全然違つてゐることを知りぬいてゐながら、依然として其時代同樣、戰爭を以て、個人的武勇と創發との仕事であると強いて想像することを已めない。この倦怠と刺戟を欲する心とが、革命運動の激しさと、漸進的な、地味な方法よりも、革命運動をよろこぶ傾向とを、大に助長して居るのである。

工業主義の最も重大なる結果の一つは、婦人の雇傭による家庭の崩壞である。婦人の雇傭には二つの結果が伴ふ。卽ち一方に於ては、それは婦人を經濟的に男子から獨立させ、隨つて彼等を、夫に對する從屬的地位から脫せしめる、又他方に於ては、それは婦人に自身で子供を育てることを困難にさせる。總ての主要な工業國では、一夫一婦的家族制度の傳統が極めて強いので、工業主義の効果が現れるには大分時がかゝつた。今日に於てさへも、悲慘教がな浸行はれて

ゐる米國に於ては、それは多く見られない。けれども全歐羅巴を通じて、既に始まつて居つた家庭崩壞の過程は、婦人が諸官省に、軍需品工場に、又は農業に容易に職業を見出し得た結果、戰爭に依て著しく促進せられたのである。婦人は一般に、經濟的に獨立すれば、舊式結婚の抑制にも甘んぜず、一人の男を守つてもゐる者でもないことは、經驗が證據立てゝ居る。暫くの間、かようにして起つた變化の範圍は、傳統的道德の支持者が行うた抑壓や隱蔽によつて、表面に現れなかつた。けれども此變化は工業主義固有の傾向である以上、時と共に增大するであらう。工業主義以前の社會に於ては、富者は妻を財產とし、貧者は妻を仕事仲間とした。農婦は激しい農作に從事し、勞働階級の婦人は、過去に於ては家事と育兒とに、總ての時間を奪はれて居つた。斯樣に都會に於ても農村に於ても、家庭は經濟的單位を成して居つた。

けれども婦人が夫と同じように工業的勞働に出かけ、子供が一日の大部分を學校で過す時には、夫婦間の經濟的連鎖は著しく弱められる。工業主義の發達と共に、飮食店で食事を取る習慣が行はれ、家事は最少限度に縮少せられる。子供等は、最初は晝食を、後には總ての食事を學校で給せられる。斯樣にして在來婦人の手を俟つた特殊の仕事は次第に減少する。是等の事情によつて、人間が農業に着手して以來存在したような結婚は、遂に消滅するであらう。婦人は共獨立を保留して、もはや個々の男子の氣まぐれなお情に縋らうとはすまい。彼等は偶にではなく、益々多く、夫よりも寧ろ國家と共に、我子を共有するであらう。此變化が望ましいことか、望ましくないことかは、私の關與する所でない。たゞ私は、それは工業主義固有の傾向の一つであり、且つ何等かの極めて强大な力によつて遮られぬ限り、工業主義の繼續によつて、必ず起らねばならぬ變化だと主張するまでゞある。勿論それは、大仕掛の工業につきものゝ特徵である。個人に對する社會の壓迫を增加させるといふ結果を伴ふのである。家庭は在來秘密を維持する避難所であつて、それは

國家を免れ、或程度まで世評をさへも免れることの出來る場所であつた。普通と變つた趣味又は意見を有する人は、自分と同じ特異な點を子供にも傳へるつもりで、子供を育てることが出來たが、是は國家が子供の敎育を引受け子供等を扶養する經濟的負擔の一切をも引受けるようになつた時（結局さうならねばならないが）には、出來ないことである。斯樣に家庭の崩壞は、社會の全員の間に、劃一的傾向を增大し、全然公共的に營まれる生活に於ては、發達も繁榮もすることの出來ぬ總ての個人的特性を弱めるのである。

傳統的な形式を帶びた宗敎は、何故工業主義と一致しないか、その理由は容易に看取できないが、とにかくこの者が兩立することは困難に思はれる。勿論景氣の好い資本家は信心家である、それは一つには彼等がその受けた祝福に對して神に謝すべきあらゆる理由をもつてゐるのと、一つには宗敎は賃銀勞働者の反抗性を抑壓しようとする、保守的な力だからである。けれども工業的賃銀勞働者は、何處に於てもその宗敎的信仰を失ひかけて居る。これは一つには、宗敎家がその收入を富者よりの手當や喜捨に仰ぎ、宗敎それ自身も富者の味方であるかの如く思はせる所の、單なる偶然的な理由からであると私は考へてゐる。けれども是のみが唯一の理由である筈はない。何故ならば、若しそれが唯一の理由であつたならば、英國獨立敎會員が第十七世紀にしたように、又は中世紀及びルーテルの時代に、農民壓迫に對して起つた農民がやつたように、勞働者は傳統的宗敎の民主的な別派を發明したであらう。基督敎はたゞ基督の敎へに立ち返りさへすればよいのであるから、基督敎を貧者の要求に適順させることは、極めて容易である。然し工業的勞働者はさういふ方面に向はず、何處に於ても彼等は無神論と唯物主義とに傾いてゐる。故に傳統的宗敎に對する彼等の反感は、現在の政治に伴ふ單なる偶發的事件であるよりも、一層深い原因を有するに相異ないのである。

私の信ずる所では、工業的賃銀勞働者の幸福は、もつと原始的な生活樣式をとつてゐた人々の場合に比して、自然の

力よりも、人間の力に俟つことの多いのが、其主要原因である。天候に依頼することの多い人々は、天候は氣まぐれで人力以外のものであり、隨つて神性を帶びてゐると認められてゐるので、宗教的に傾き易い。大西洋の暴風雨のために航海が絕えず極めて危險にされてゐるブリタニーの岩礁の多い海岸に於ける漁夫は、歐洲中で最も宗教的である。海岸、特に其最も危險な箇所には敎會が櫛比し、どの岬にも十字架にかゝつた基督の像が立ち、高い十字架は、何哩の沖から遙に望み得られるように屹立してゐる。漁夫が沖に出てゐる間、彼とその妻とは無事に歸れるように祈りを捧げる。彼が上陸するや否や、その安心は泥醉となつて現れる、絕えず人力以外の危險に曝されてゐる此種の生活は、傳統的宗敎にとつて最も有利なものである。實際、傳統的宗教の一切は、破壞的な自然力によつて起された恐怖を軟げようとする企てゞあると認めてよい。サー・ジエー・ヂー・フレーザーは、其著『金の小枝』(Golden Bough)の中に基督教の要素の大部分は、植物の精に對する信仰、即ち農業の幼稚な時代に、土壤を豐沃にすべく發明された宗敎から出てゐるといふことを明かにした。收獲感謝祭、雨乞、晴天を乞ふ祈願等は、宗教の眞の本質をよく現はしてゐる。農民にとつては、豐作と飢饉とは神の御業であり、宗教的儀禮は豐作を來し、飢饉を避けるために存在するものなのである。

工業勞働者は極めて僅少にしか、天候又は季節に依て影響されることがない。彼に禍福を與へる原因は純粹に人間的なものであり、容易に左右し得られるものだと彼には思はれる。自然的原因が彼等とも關係をもつてゐることは事實であるが、其等は吾々が通例超自然的な力として考へてゐるようなものとは違つてゐる。宗教が猶ほ幼稚で創造的であつた時代には、雨が必要だから雨乞をすれば、神がそれに應じ給ふたと考へた。けれども今日、炭坑が廢坑になつた爲めに其地方の人民が破產しようとも、坑夫がどんなに熱心に祈つた所で神が新しい石炭の層を造つて呉れようとは、誰も想像しない。石油は繁榮を齎らす。けれどもよしモーゼが水の代りに岩から石油を出した處で、吾々はその出人間を以て

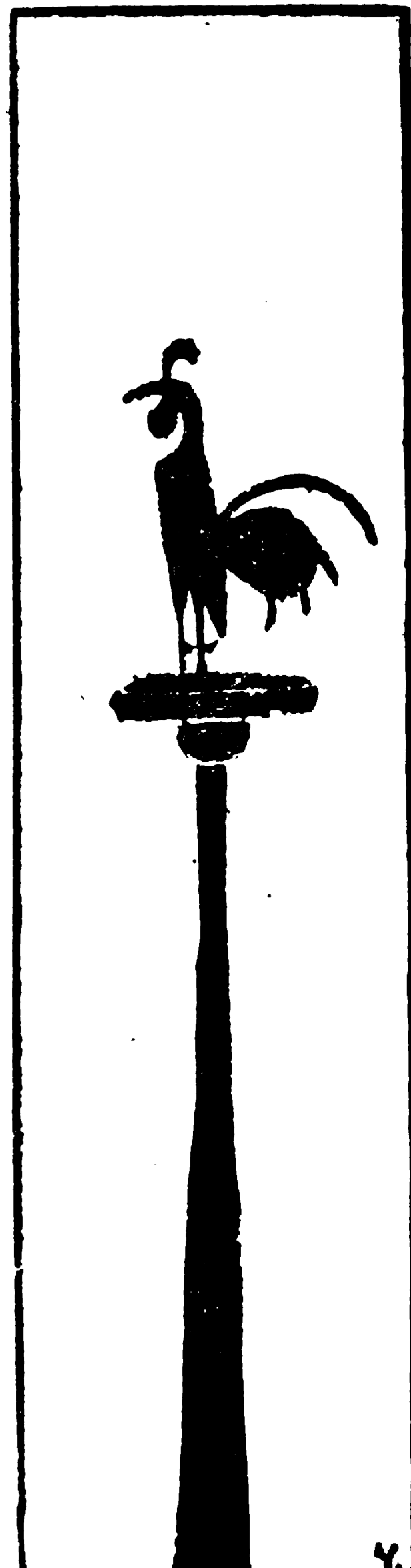
蹟とは思はず、地質學上の事實と看做したに相異ない。要するに宗教はもはや何でも新しい出來事に適順しなければ、自十分な活力を備へてゐないといふのが事實である。宗教は往昔に於て、古代の或要求に應ずるために起り、傳統の力によつて存續して來たが、傳統的に觀ることの出來ぬ一切のものと同化することが出來ないのである。そこで工業主義の結果としての日常の習慣や利害の變化は、宗教的見解の致命的な打擊を與へ、宗教を明白に否定してしまはぬ人々の間に於てさへも、その力が弱くなつたのである。これが近代の社會における宗教衰微の根本的理由であると私は信ずる。宗教の活力減退は、主として科學の賜物である。そこで科學は果して全然新しい宗教、即ち工業的社會の習慣や向上心に適順した、マルクス主義の如き宗教の發展を防止する力があるかどうかといふ問題が殘つてゐる。

今一つ、在來の工業主義の極めて顯著な傾向ではあつたが、共産主義の下に於ける工業には伴ふまいと思はれる特徴がある、それは事物をその內在的價値よりも、使用上の價値によつて評價する傾向である。上に述べたように、工業主義の本質は、器具を使用する經驗の擴充である。工業的社會に於ては、大多數の人々は消費物を作らずに、他の人々が消費物を作る手段とする機械や道具を作つて居る。かうなると共生産物はそれ自身としては、直接の人間的價値を有しないので、此種の作業は、人間を藝術的よりも功利的に働かしめる。鐵道の目的が、その上を旅行させることに在るにしても、鐵道を造る人は、その上を旅行する人よりも重要な人物だと看做される。紙を作る人、タイプを打つ人、製本する人、及びそれを目錄に編入する圖書館員は、總て有益な職分を盡してゐると思はれてゐるのに、書物を讀む人は時間を浪費してゐると思はれてゐる。手段より目的に達する經路が極めて長く、工業主義の長所が專ら手段に關して居るために、人々は目的を全然見失つてしまつて、單なる生産が、唯一の重要事であると考へるようになる。量は質よりも重んぜられ、手段にすぎぬ所の機械は、それを使ふといふ、目的そのものよりも重んぜられる。

上に述べた一つの理由と共に、これも工業主義の下に於ける藝術とローマンスとの衰微の理由である。けれども工業主義化した思想の功利的傾向は、藝術やローマンスの衰微より更に深い所まで行つてゐる。即ちそれはより善き世界に對する人間の夢想と、行動の源泉に關する全ての概念を覆してしまふ。生産と實利とに關係あるものは、人間生活の經濟的方面であるから、人間生活で重要なのは經濟的方面だと考へられるようになつて來た。現在に於ては、經濟的方面が病氣にかゝつてゐるので、吾々がそれに氣を遣はねばならぬのは實際である。それは恰度、人が足を挫いた時には、それが一時其人の身體のうちで一番大切な部分であるのと同じ譯で。けれども足が直つて歩けるようになれば、彼はその事を忘れてしまふ。人生の經濟的方面についても同じでなければならぬ。吾々は一日中それの事を考へつめてゐることなしに、それを利用することが出來てよい筈である。社會のうちの總ての男女が毎日數時間働くことに依て、萬人の肉體上の要求を滿たすことは出來る。そして他の時間——娛樂、藝術、學問、愛情、綠の原野の日光や森林に費さるべき時間こそは、重要な時間と思はれなくてはならない。機械主義的ユートピアンは、さういふ事物を尊むことを知らない。彼は貨物が益々容易に生産せられ、それを樂しむには餘りに疲れ、餘りに倦怠し切つてゐる勞働者の間に、其貨物が公平に分配される世界を夢みてゐる。彼は、人々が閑暇をどう使つたらよいかといふことを、知りもせず、氣にもかけない、恐らく彼等は再び勞働時間が廻つて來るまで眠つてゞもゐる譯なのだらう。

斯樣な功利主義的人生觀は工業主義に固有のものではないが、工業主義の發達が商業主義と競爭とによつて支配された事實に基くものである。共産主義的工業は、社會の主人ではなく、召使となる。これが資本主義より共産主義を可とする一の根本的理由である。私は此問題については、後段にもつと詳しく述べなければならぬ。とにかく差當つて、私は經濟的改造論者に對して、貨物を以て、人間生活の物質的方面を解放する從屬的必要品と看做す代りに、人間を以て

貨物を生産する道具と看做す、敵の缺點に倣はぬように警告して置きたい。人間の眞の生活は、口腹を滿たし、身體に衣服を纏ふ仕事に在るのでは無く、藝術や思索や戀愛や、美の創造や鑑賞や、世界を科學的に理解することに在るのである。もし世界が改造されるとすれば、總ての人々が額け前に關づからねばならぬのは、單に物質的な貨物ではなくて、實に是等の事物なのである。



階級闘爭當事者としての雇傭所得と資本所得（其二）

福田德三

七

獨逸社會黨革命の大原則は、革命後召集せられた『獨逸國民憲法制定會議』Die verfassunggebende Deutsche Nationalversammlung に於て決議せられ、聯邦委員會の協贊を經て公布された『社會化法』Sozialisierungsgestz によつて定められたのである。超へて半年の後同年九月十一日に公布せられた獨逸國憲法は『社會化法』の條文を其儘に取入れたのである。『社會化法』は僅かに五ケ條から成る約法三章的の簡單な法律であるが、其內容は實に此度の革

のマグナ・カルタとも云ふ可きものである。今試みに左に翻譯並に原文を掲げよう。

第一條　凡ての獨逸人は、其個人的自由を妨げられざる限りに於て、全體の厚生が要求する如くに、其の精神的並に肉體的力を活用す可き道徳的義務を有す。

勞働力は、最高の經濟財として、國の特別なる保護の下に立つ。凡ての獨逸人は、經濟的勞働によつて、其生計を營む可能を與へらる可きものとす。勞働機會が紹介し得られざるときは、其の必要なる生計を保障す。詳細の規定は特別なる國の法律によつて之を定む。

第二條　國は立法により適當なる賠償に對し左の事を爲すことを得。

一、社會化に適せる經濟的企業、殊に地中產物の採掘及自然力の利用に關するものを、共同經濟に移すこと、

二、緊急の必要ある場合に、經濟諸財の生產及分配を、共同經濟的に管理すること

賠償に關する詳細の規定は、將來公布す可き特別の國の法律に保留す。

第三條　國の法律によりて管理せらるゝ共同經濟の任務は、之れを國、聯邦、自治體、自治體聯合又は經濟的自治體に託することを得、自治體は國之れを監督す、國は其監督の行施につき聯邦の官憲を使用することを得。

第四條　第二條に規定したる任務の執行上特別なる國の法律により、石炭、褐炭、壓搾炭、コークス、水力、其他の自然動源及之れより生ずる動力は、之れを共同經濟的見地に從つて監理す可し。差當り石炭經濟の一部區域に對し石炭經濟監理法を本法と同時に實施す

第五條　本法は公布の日より施行す

伯林　一九一九年三月二十三日

大統領 エベルト

經濟大臣 ヴヰッセル

Die verfassunggebende Deutsche Nationalversamlung hat das folgende Gesetz b schlossen, das nach Zustimmung des Staatenausschusses hiermit verkündet wird;

1.

Jeder Deutsche hat unbeschadet seiner persönlichen Freiheit die sittliche Pflicht, seine geistigen und körperlichen Kräfte so zu betätigen, wie es des Wohl dar Gesamtheit erfordert.

Die Arbeitskraft als höchstes wirtschaftliches Gut steht unter dem besonderen Schatze des Reichs. Jedem Deutschen soll die Möglichkeit gegeben werden durch wirtschaftliche Arbeit seinen Unterhalt zu erwerben. Soweit ihm Arbeits gelegenheit nicht nach gewiesen werden kann, wird für seinen notwenligen Unterhalt ges- orgt. Das Nähere wird durch besondere Reichsgesetze bestimmt.

2.

Das Reich ist befugt, im Wege der Gesetzgebung gegen angemessene Entschädigung

1. für eine Vergesellschaftung geeignete wirtschaftliche Unternehmungen, insbesondere solche zur Gewinnuug von Bodenschätzen und zur Ausnutzung von Naturkräften in Gemeinwirtschaft zu überführen;

2. im Falle dringenden Bedürfnisses die Herstellung und Verteilung wirtschaftlicher Güter gemeinwirtschaftlich zu regeln.

Die näheren Vorschriften über die Entschädigung bleiben den zu erlassenden besonderen Reichsgesetzen vorbehalten.

3.

Die Aufgaben der durch Reichsgesetz geregelten Gemeinwirtschaft können dem Reiche, den Gliedstaaten, Gemeinden und Gemeindeverbänden oder wirtschaftlichen Selbstverwaltungskörpern übertragen werden. Die Selbstverwaltungskörper werden vom Reiche beaufsichtigt. Das Reich kann sich bei der Durchführung der Aufsicht der Behörden der Gliedstaaten bedienen.

4.

In Ausübung der im § 2 vorgesehenen Befugnis wird durch besondere Reichsgesetze die Ausnützung von Steinkohle, Braunkohle, Presskohle und Koks, Wasserkäften und sonstigen natürlichen Energiequellen und von der aus ihnen stammenden Energie (Energiewirtschaft) nach gemeinwirtschaftlichen Gesichtspunkten geregelt. Zunächst tritt für das Teilgebiet der Kohlenwirtschaft ein Gesetz über die Regelung der Kohlenwirtschaft gleichzeitig mit diesem in Kraft.

5.

Dieses Gesetz tritt mit dem Tage der Verkündung in Kraft.

Berlin, den 23. März 1919.

Der Reichspräsident.

Ebert.

Der Reichswirtschaftsminister.

Wissell.

右の第一條は後に至つて新憲法の第百五十七條、第百六十三條として、殆んど其儘取入られたのである。其内容は（一）勞働義務（二）勞働保護（三）勞働權（四）無職者生存保障の四より成立つて居る。（一）の勞働義務は（イ）其個人的自由を妨げざる限りとしてある。此一句は原案にはなかつたので、而し、經濟大臣ヴヰツセル氏は、提案說明中に特に從來の自由主義の金科玉條たる『個人の自由』なるものは、向後之を認めない趣旨であると明、した。多數社會黨の代表者は第一同特別委員會に於て、又同じく、個人は唯だ其職業を選擇する自由を有することとす可しと主張した。本會議の第二讀會に於ては、獨立社會黨は一般的なる個人自由の認承は之を全廢す可く、唯だ職業選擇の自由のみを認む可しと主張した。然るに之に反對して社會黨以外の代表者は中央黨を筆頭として、極力個人の自由認承を明記す可しと主張して終に勝を得た爲め、右の一句を挿入することゝなつたのである。即ちブルヂオア主義は先づ此一句を挿入することによつて、其主義を依然として新獨逸に維持するを得たのである。次に、（ロ）個人の自由を妨げざる限りに於て凡ての獨逸人は二個の義務を負ふのである。（a）其精神的、肉體的力を活用する義務、言換へれば遊手徒食せざることの義務（b）其活用を全體の厚生が要求する如くになすの義務、是れである。其力の活用とは經濟的活用を指して云ふので、宗教、學術、藝術、遊戲等に於ける活用は、此法の關知せざる所である。故に此等の範圍に於て如何に活動し如何に社會全體の爲めに奉仕するも、其は右の義務を盡くしたりと認められないのである。即ち宗教家も學者藝術家も必ず國民としては、任意に選擇したる何等かの經濟的勞働を營む可き義務を負ふのである。又た其勞働は社會全體に

奉任する様に營まなければならぬので、從來の如く、自己の利益の爲めのみに勞働する自由は廢されたのである。而して口に社會奉仕を唱へる丈けではいけない、他人が認めて直に社會奉仕たるのでなければならぬ。故にブルジオア主義の代表者は此の『全體の厚生が要求する如くに』の一句を削除す可きことを熱心に主張した。然し其主張は通らなかつた。即ち個人自由の認承を否定せんとして負けた社會主義は『全體の利益』の主張に於て勝つたので是れで五分五分となつたわけであるが、内容的に云へば後者の通過は事甚重大であつて、社會化法の根本精神は其通過によつて貫徹せられたのである。雇傭契約の繼承も、經濟的利己心の發動も、社會全體の厚生要求の命ずる處に從ひ、之に背くものは之を廢すとの制限の下に於てのみ認められるのである。(ハ)全體の厚生の何物なるかは之を具體的に指定することを要する。(二)然し此等勞働義務は道德的と云ふ形容詞が冠らせてある、是れは甚妙な冗句であつたのである、恐らく他日之れが紛議の種となるであらう。法律が道德的義務を規定すると云ふことは、殆んど自殺的と云ふ可きである。果然獨立社會黨は此『道德的』てふ形詞を削除す可きことを主張した。其議否決さるるや第二讀會に於て道德的を改正して『社會的』となす可しと主張した。此の動議も亦否決せられた。(ニ)勞働保護に就ては、(イ)原案には『勞働力は國民の最高經濟財として』としてあつたが、國民の語を削除したのは、重大な訂正である。即ち勞働力は國民全體の最高經濟財としてのみでなく、勞働者各自の最高經濟財として此の保護を要求し得ることになつたので、保護の範圍は著しく擴張せられたのである。(ロ)獨立社會黨は『勞働力の庇護』Schonung der Arbeitskraft と改正す可しと主張したが其議は否決せられた、保護の内容は全く之を將來の法律、規則に讓ることとして『庇護』と限らないことにしたのである。(ハ)保護の方法は必ず特別なる國の法律を以て具體的に指定す可きものとされたのである。是れ『勞働法』の必要、となつた所以である。(三)勞働權に關しては、(イ)其保障に關する國の義務の内容は少しも規定してない、別に法律を

制定す可きこと丈けを定め單に『可能を與ふ可きものとす』とのみしてある。(ロ)義務の主體に就ては議論があつたが、其は『國』であると云ふことに定まつた。但し國は其義務の遂行を他の機關に託することを得るのである。(ハ)國が負ふ勞働紹介義務の内容には三の限定がある。(a)國の與ふ可きものは勞働の『可能』丈けである。勞働の強制は含まれて居らぬ。(b)紹介す可き勞働の種類は、草案に『各人の才能に相應する』と明記してあつた此句は削除されたが其は否認の意味でなく自明なりと認めて削除したのである。(c)其紹介す可き勞働の範圍は生計を營む(エルヴェルベン)可能を以て限りとする、草案には、其生計を維持す可き(エルハルテン)とあつた、其方が意味が廣い。殊に後段の明文によつて、其は『必要なる生計』を限度とするものとせられた。(四)無職者生存保障。(イ)草案には『勞働者が勞働の機會を自ら見出すことを得ざるとき』とあつた、其を改めて『勞働の機會が紹介し得られざるとき』としたのである。前段所揭美濃部博士の譯文は草案の譯としては正しい、憲法成文の譯文としては、折角改正が施されたのを、更に邦譯によつて還元することになる、明かに誤である。(ロ)生計保障の範圍は、必要なる生計に限られて居る。(ハ)生存保障義務の主體の何なるかは、明言を避けてあるが、其は無論國である、但し國は其遂行に方つて其任務を他の機關に託することを得るのである。

右の『社會化法』に現はれた革命の精神は、勞働力の保護を雇傭勞働にのみ限るものでないことは明かである。即ち其『社會化』は廣く一般の勞働保護を精神とするものである。然るに憲法の制定、並に其れに續く各種の勞働法規の制定に於ては、『此社會化』の範圍は、當初の精神より遙かに限局せられたものとなつだ。其れは何故かと云へは、依然として、革命前の雇傭契約の原則と此れに關する私法を以て、勞働關係の基本としたからである。唯革命後の新らしい法律や命令を以て其原則に幾多の修正、變更を加へたのである。乍去、凡ての獨逸人は必ず何等かの精神的勞働を營む義務あ

りとすること、凡ての經濟的勞働は國の特別なる保護の下に立つと云ふ二大原則は、其等の修正を以てしても、終に實際には施行せられないこととなつたのである。換言すれば、雇傭勞働者と資本主との分岐は、依然其儘に存續するので、唯だ此の雇傭勞働のみが主として國の特別なる保護の下に立ち、其失職の場合に、必要なる生計が保障せられることゝなつたのが、變化の要點であるのである。

社會化法の第二條は、共同經濟の一般原則を定めたものである、共同經濟とは、個人經濟に對して云ふのである。個人經濟を大別すれば（一）純粋個人經濟（二）混合個人經濟の二種となる、混合個人經濟は共同經濟への過度と目するも大過ない、共同經濟は之を分つて、共同決定共同經濟 Mitbestimmende Gemeinwirtschaft と、單獨決定共同經濟 alleiubestimmende Gemmeinwirtschaft とする。前者は、社會と個人と共同して經濟の運用を決定するもの、後者は社會のみ單獨に萬事を決定し、個人の決定權を全く廢止するものである。從つて前者を『部分的社會化』Teilsozialisierung ung と云ひ、後者を『完全社會化』Vollsozialisier- と云ふ。右『社會化法』の認める根本原則は、混合個人經濟と共同決定共同經濟との併存である。從つて個人經濟の主張者は成る可く多く個人經濟の主義を認むるものと解釋せんとし、共同經濟の主張者は、右の併存は過渡的のものであつて、他日純粋共同經濟に進むまでの不得已折衷なりと解釋せんとする。ブルヂオア主義の人々が、右『社會化法』發布の際頒布したプロパガンダ文書が筆者の手許に在るが、其一の中に次の如く記されてある。

『社會化法』の實施を恐怖すと公言して、自己が之れに依つて失ふ可き財產を有することを暗に誇示することが、紳士的なりと考へられる如くであるが、之れは誤である。……『社會化法』は、社會化す可く熟して居る產業のみに限るので、主として、鐵、石炭、加里、諸々の動力殊に電力に限られて居るのである。……商業又は小商業

をまで社會化せんとは誰人も考へては居らぬのである。小工業の社會化も亦た全く問題とはなつて居らぬのである。……而して以上社會化せられる産業と雖も、過渡經濟の性質を有するものである、而して其等と雖も、恐らく多くの場合に於ては、將來に於て、再び解散せられて、自由經濟（個人經濟を意味す）に復歸するであらう。（社會化と商工業者『頭を上に而して目を開け』より拔萃）

之れに對して、獨立社會民主黨の宣傳册子は曰く、

獨逸の勞働者は何を爲す可きか、答、彼等は獨逸に於てプロレタリア革命を成就せねばならぬ、彼等は革命行動の一黨を作らざる可からず、其直ちに主張す可きことは（一）生産、商業、交通業の一切を獲得して凡ての利潤經濟を一掃すること（二）白黨の武裝を解除せしめ、プロレタリアのみを武裝すること（三）ブルヂオア的、虛僞民主的國家を止むること（四）政治的勞働參議會を作ること（『獨立社會民主黨プロパガンダ特別號』）

スパルタクス團は主張して云ふ、

吾人は直ちに行ふ可き經濟的施設として次の如く主張す、（一）王室財産、所得を社會の爲め沒收すること、（二）國債其他の公債を帳消とすること（三）一切の農業用地を收用すること、（四）一切の銀行、鑛山、炭山、商工業の大經營を收用すること、（五）一定限度以上の一切の財産を沒收すること、（六）交通機關を一切國有とすること、（七）經營參議會を設立すること（八）中央ストライキ委員會を設くること（『スパルタクス團は何を要求するか』第七頁）

此等に對して、エドワード・ベルンシュタインが頒布したプロパガンダ册子には、曰く、

何故吾人は即時に完全に社會化せざるか、答、（一）此くの如き大事業は數週數月の間に之を爲すことは不可能であ

る。(二) 社會化の眼目は生產、經濟生活を社會の監督の下に置くにある、(三) 社會は法律命令により漸次に其監督の範圍を擴張す可きである、(四) 幾百の個人企業や經營を國有とするよりも、善き工場法は、遙かに多く社會主義の要素を含むものである。(『社會化』とは何ぞや)

カウツキーも亦論じて曰く

社會化の施行は甚だ重要にして其影響大なるものである、故に一朝一夕に其完成を望む可きではない、吾人は步步徐々として周密なる注意を以つて、實際の事情に順應して、新生活の完成を期せなければならぬ。社會化は必ずしも生產要具、所有權の國有を以て唯一の主要手段とするものではない。(『社會主義的實行要綱』七―九頁)

然るにレニンは罵つて云ふ

カウツキー、マルトフ、其他のベルン黄インテルナチョナールの人々の如く、資本主義から社會主義への推移の問題を解決するのに、自由、平等、全デモクラシー、勞働デモクラシーの平等などと云ふ一般的概念から出立するものは、其實彼等は眞正な社會主義者でなく、小ブルヂオアであること、ブルヂオアの思想界に奴隷的に追從するものなることを示して居るのである。……ベルン黄インテルナチョナールの誤謬は、其實彼等は口に階級鬪爭とプロレタリアの指導的任務とを絕たざるに拘らず、其主張を徹底的に思索することを恐れ、其れより生ず可き結論がブルヂオアに取りて特に恐ろしきものであり、絕對的に受け入れ難きものであることを恐れて、之を導き出すことを回避するのである。彼等はプロレタリアの獨裁政治は階級鬪爭の必然的なる一時期たることを認めるを恐るゝのである。然しプロレタリアの獨裁政治は階級の全滅せざる限り不可避的のものである……プロレタリアが政權を掌握しても階級鬪爭は已むものでない、階級の全廢を見るまでは繼續するものである、但し其鬪爭の形態、手段は自

ら變ずるのである。(Die grosse Initiative. Wien. 1920. S. 12 ff.)

九

社會化法に現はれた『社會化』は、元よりレニンの主張するようなものでないは勿論のこと、スパルタクス團や獨立社會民主黨の要求に應ずるものでもなく、右ベルンシュタインやカウツキーの辯明した如き極めて漸進的のものであつて、殊に具體的に法律を以て規定された共同經濟は、未だ石炭（一九一九年三月二十三日公布石炭經濟監理法）、加里（仝年四月二十四日公布加里經濟監理法）、電氣（仝年十二月三十一日公布電氣經濟社會化法）の三種のみに止まつて居るのである。勞働關係の社會化は、社[illegible]法にも、何等の規定なく、而して其後今日に至るまで、其儘になつて居るのである。言換れば、雇傭勞働關係は事實に於ては、少しも社會化せらるゝことなく、依然として賣買取引の流通經濟關係に任されてあり、唯だ社會化法第一條に定めた（一）國の勞働保護（二）國の勞働紹介（三）國の無職者生存保障が實施せられたに止るのである。然れば、雇傭所得と資本所得が兩當事者たる階級鬪爭は、レニンの主張するような根本的變化を被ることなく、依然として革命以前の儘に、言ひ換れば、純個人經濟の時代に於けると全く同一の形態と手段とを以て——元より新憲法の齎らした變更の影響は可なり重大ではあるが——繼續せらるゝの外はないのである。

茲に、獨逸の實例と對照す可く甚だ興味あることは、三角同盟の成立とまでなつて、現經濟組織其ものに根本的變革を要求す可く思はれた英國の炭坑夫ストライキが、其爭議に對する公衆の同情を贏ふ可く用ゐた論法が、出來得る丈け其爭議を雇傭關係に於ける賃銀爭議であるように陳辯しつゝあつたこと是れである。筆者が最近に接手した若干の宣傳用小冊子には次の如き文句が載せてある。

る。(二)社會化の眼目は生產、經濟的生活を社會の監督の下に置くにある、(三)社會は法律命令により漸次に其監督の範圍を擴張す可きである、(四)幾百の個人企業や經營を國有とするよりも、善き工場法は、遙かに多く社會主義の要素を含むものである。(『社會化』とは何ぞや)

カウツキーも亦論して曰く

社會化の施行は甚だ重要にして其影響大なるものである、故に一朝一夕に其完成を望む可きではない、吾人は步步徐々として周密なる注意を以つて、實際の事情に順應して、新生活の完成を期せなければならぬ。社會化は必ずしも生產要具、所有權の國有を以て唯一の主要手段とするものではない。(『社會主義的實行綱領』七－九頁)

然るにレニンは罵つて云ふ

カウツキー、マルトフ、其他のベルン黃インテルナチョナールの人々の如く、資本主義から社會主義への推移の問題を解決するのに、自由、平等、全デモクラシー、勞働デモクラシーの平等などと云ふ一般的概念から出立するものは、其實彼等は眞正な社會主義者でなく、小ブルヂオアであること、ブルヂオアの思想界に奴隷的に追從するものなることを示して居るのである。……ベルン黃インテルナチョナールの誤謬は、其實彼等は口に階級鬪爭とプレタリアの指導的任務とを絕たざるに拘らず、其主張を徹底的に思索することを恐れ、其れより生ず可き結論が、ブルヂオアに取りて特に恐ろしきものであり、絕對的に受け入れ難きものであることを恐れて、之を導き出すことを回避するのである。彼等はプロレタリアの獨裁政治は階級鬪爭の必然的なる一時期たることを認めるを恐るゝのである。然しプロレタリアの獨裁政治は階級の全滅せざる限り不可避的のものである……プロレタリアが政權を掌握しても階級鬪爭は已むものでない、階級の全滅を見るまでは繼續するものである、但し其鬪爭の形態、手段は自

ら發するのである。(Die grosse Initiative. Wien. 1920. S. 12 ff.)

九

社會化法に現はれた『社會化』は、元よりレニンの主張するようなものでないは勿論のこと、スパルタクス團や獨立社會民主黨の要求に應ずるものでもなく、右ベルンシュタインやカウツキーの辯明した如き極めて漸進的のものであつて、殊に具體的に法律を以て規定された共同經濟は、未だ石炭(一九一九年三月二十三日公布石炭經濟監理法)、加里(仝年四月二十四日公布加里經濟監理法)、電氣(仝年十二月三十一日公布電氣經濟社會化法)の三種のみに止まつて居るのである。勞働關係の社會化は、該法にも、何等の規定なく、而して其後今日に至るまで、其儘になつて居るのである。言換れば、雇傭勞働關係は事實に於ては、少しも社會化せらるゝことなく、依然として賣買取引の流通經濟關係に任されてあり、唯だ社會化法第一條に定めた、(一)國の勞働保護　(二)國の勞働紹介　(三)國の無職者生存保障が實施せられたに止るのである。然れば、雇傭所得と資本所得が兩當事者たる階級闘爭は、レニンの主張するような根本的變化を被ることなく、依然として革命以前の儘に、言ひ換れば、純個人經濟の時代に於けると全く同一の形態と手段とを以て──元より新憲法の齎らした變更の影響は可なり重大ではあるが──繼續せらるゝの外はないのである。

玆に、獨逸の實例と對照す可く甚だ興味あることは、三角同盟の成立とまでなつて、現經濟組織其ものに根本的變革を要求す可く思はれた英國の炭坑夫ストライキが、其爭議に對する公衆の同情を購ふ可く用ゐた論法が、出來得る丈け其爭議を雇傭關係に於ける賃銀爭議であるように陳辯しつゝあつたことは是れである。筆者が最近に接手した若干の宣傳用小冊子には次の如き文句が載せてある。

The case for the miners

They are striking because they will starve on the wages proposed; they are striking, that is, on which probably every man in the Movement has gone out at one time or another.

Do not be deceived.

This is the same old struggle—a struggle for food & clothes; for homes and wives; for the children and for the future.

Why are the miners continuing ther struggle?

The miners say that, in many districts, This means starvation.

They say that every miner no matter where he works, is entitled to a living wage.

Until this principle is settled, what is the use of negotiating about the wages to be paid in each district?

It is admitted that, unless ther is a Pool, many districts cannot afford to pay a living Wage.

That is the Sole Reason why the Miners are standing out for a National Pool. They cannot stand by and see their wives and children starve.

右を意譯して見れば、

『鑛夫等の主張』

……彼等は、提供せられたる賃銀では餓ゆるからストライキするのである。即ち彼等がストライキの論據は、古き

慣例的の論據である。此論據は、恐らく此度の運動に與る凡ての人が、何時か一度は、起つて爭つた所のものである。歎かるゝな。

我らの鬪爭は、同一の古き鬪爭である。即ち、食物と衣服とを得んとする鬪爭である、家庭の爲めに、妻達の爲めにする鬪爭である。兒等の爲めに、將來の爲めに戰ふ鬪爭である。

『何故に鑛夫等は、其鬪爭を繼續するか』

……鑛夫等は云ふ、以上の賃銀は、多くの地方に於ては、飢餓を意味する、彼等は云ふ、各鑛夫は、其何處に勞働するを問はず、生活賃銀を受く可き權利あるものであると。

此原則が決定せられざる限り、各地方に於て支拂はる可き賃銀に就て交渉することは、何の役に立つか、然るに、聯合（賃銀支拂を均一にする爲めの）を設くるに非る限り、多くの地方に於ては（鑛山主）は此の生活賃銀を支拂ふことが出來ないことは之れを認める。

是れが、鑛夫等が、全國に亘る聯合の設置を主張する唯一の理由である。彼等は、手を拱いて彼等の妻と子供が餓ゆるを坐視するに忍びざるのである。

『共産宣言』の『獨逸的又は「眞正なる」社會主義』の項に、面白いことが記してある。曰く『獨逸の操觚者流の唯一の仕事は、新らしい佛蘭西思想（社會主義の）を彼等の古き哲學的良心と一致せしむること、否な彼等の哲學的立場から出立してこれに佛蘭西思想を我物として取入れることに存して居た。此の我物化は、我々が凡て外國語を我物とするに用ゆる方法によつて行はれた。翻譯即ち之れである。昔しの修道僧等は古き偶像時代の古典的著作の書き記してあつた原稿の上へ、味の消へ去つたようなカトリック的聖人傳を謄寫したことは、人の普く知る所である。獨逸の操觚者等

は俗界の佛蘭西文學に對して其と反對な方法を取つた。彼等は佛蘭西の原文の紙背へ、彼等の哲學的ノンセンスを書き記した。例へば貨幣關係に關する佛蘭西的批評の後へ『人間性の離脱』を書き、ブルヂオア國家に對する佛蘭西的批評の後へ『絶對普遍の支配の止揚』と書くの類である。佛蘭西的批評の下へ此等の哲學的解説を挿入したものに附するに『行動の哲學』『眞正なる社會主義』『獨逸社會主義の科學』『社會主義の哲學的立證』等の名稱を以てした。かくて佛蘭西の社會主義的、共産主義的文獻は其形の上に於て骨拔とせられた。獨逸人の手に於て其れは最早一の階級の他の階級に對する鬪爭の言表はしたることは已んだ。獨逸人は之れによつて「佛蘭西的偏頗」に打克ち、眞正なる欲望に代ゆるに眞理の欲望を以てし、プロレタリアの利益に代ふるに人間全體、――何の階級にも屬さない否、現實に屬さないで、單に哲學的空想の暗雲裡にのみ屬する人間――人間を代表し得たりとなすのである』(第七公認版四〇―四一頁)と、雇傭勞働の實際を無視し、階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得の流通經濟的特質の實際を抽象し去る所の階級觀、勞働爭議觀、否社會政策觀は、又たマルクスをして評せしむれば、修道僧が美事なる異教の大著述の上に、愚にも付かぬ殉教者傳を書きつけた如きものと云ふであらう。我々は修道僧の眞似を爲す可きではない。血と涙とを以て書き記された階級鬪爭の活きた記錄、雇傭勞働の慘憺たる事實を抹殺して、絶對普遍の理想に立脚する社會政策等と翻譯し直して、古き哲學的良心と一致せしむることを勉めてはならぬ。社會政策の理想、社會政策の哲學は、現成の雇傭勞働の眞相を正しく解釋したる認識を外にしては打建てらる可きでは無い。

十

『共産宣言』の第一節は次の數句を以て始めてある。

「凡ての從來の社會の歷史は、エンゲルス註「精確に云へば、記錄的に傳承せられたる歷史の意なり、一八四七年（共產宣言起草の時）には、社會の前史、記錄せられた歷史以前の社會組織は、殆んど全く知られて居なかつた。然るに其後ハックストハウゼンは、露國における土地共有制度を發見した。マウラーは、此れは又た凡ての獨逸の種族が歷史的に出立した社會的根基なることを證明した。而して之れに續て、學者は土地共有制度を有する村落團體は、印度から愛蘭に至るまでの、凡ての社會の原始形態であることを發見するに至つた。而して終には、此等の原生的共產社會の內部組織の如何なるものなるかは、「氏」及其が種族內に於ける地位の眞相に關するモルガンの光榮ある發見によつて明示された。此の原始的共產體の壞體して後始めて社會は、特立の而して終には相互對抗するに至る階級に分岐するに至つたのである」階級鬪爭の歷史である。自由人と奴隷、パトリチアとプレベーア、バロンと隸僕、ギルド市民とゲゼレ、要するに、被壓迫者と壓迫者とは、相互に不斷の對抗に於て立つて居て、絕ゆる間なく、我は陰に或は陽に鬪爭して居た、其の鬪爭は、每時、全社會の革命的變革を以て終るか、又は鬪爭諸階級共に滅亡するを　て終つたものである。

歷史の初期に於ては、吾人は到る處に、社會が、種々の等族（シュテンデ）に全く分割されて居ること、即ち社會上の地位が多樣に階段付けられて居ることを見る。古羅馬に於ては、パトリチア、騎士、プレベア、奴隷に分岐して居る、中世に於ては、封建領主、陪臣、ギルド市民、ゲゼレ、隸僕に別かれて居り、至して此等各階級內には又た夫々特殊な階段がある。

封建社會の倒壞と共に起つた近世のブルヂオア社會は、此の階級對抗を決して廢しはしなかつた。唯だ新しい階級、壓迫の新しい條件、鬪爭の新しい形を以て、古き其等に代へたのである。

吾人の時代即ちブルヂオアジーの時代の特色は、其が階級對抗を單純化したと云ふことと之れである。全社會は段々に二個の大なる敵對軍、二つの大なる、相互に當面に對抗する階級即ちブルヂオアージーとプロレタリアとに分岐する」

(『共產宣言』第七公認版伯林一九〇六年　一三—一四頁)

『凡ての從來の社會の歴史は、階級闘爭の歴史である』との開卷の大宣言は、エンゲルス自ら右の如く其修正を脚註に於て試みて居る。然しエンゲルスが其脚註中に光榮ある發見なりとしたモルガンの新説、其立場から見たハックストハウゼンの露國土地共產制度論、マウラーの古獨逸村落團體論は、一八四七年のマルクスの社會　經濟史觀を根柢から覆した如く、其後の學問研究によつて自らも亦た覆される運命を免れなかつたのである。エンゲルスはルイス・モルガンの『古代社會論』"Ancient Society" を天啓の福音でもあるかのように崇拜して、其れに基いて『國家、家族、私有財產制起源史論』を著はしたが、時代後れの若干の所謂社會主義學者を除いて、此書を一の歴史的文献以上のものとして取扱ふものは今日の新研究に立脚する學者の間には殆んど一人もないのである。(ラフアルグの『財產起源論』の如きは元より始から問題とはならない凡ての學問的基礎を缺くコムピラチオンであることは、今更云ふ迄もない)モルガンの——從つて其説を祖述するエンゲルスの——所謂原始的共產體なるものは、決して『原始的』なものではなく、與へられた條件の下には、殆んど凡ての時代に存在するものであることは、其發見地たる露國に就て、更らに之を確む可く常に引用せられる印度に就て、又た愛蘭に就て、其後多數の學者に依つて、十分以上に證明せられて居る(大塚金之助教授、商學士津田武二兩氏の國民經濟雜誌に揭げた諸論文並に拙著『經濟學考證』第一篇『シーザー及タチトスに據る古獨逸土地共有制度に關する若干の疑問』を見られたし)從つて此の『原始共產體』の壞體を待つて始めて搾掠者と被搾掠者」との階級の分立と其の闘爭とが始まるとのエンゲルスの修正は、共產宣言の改善でなく改惡である。而して共產體廢れて始めて壓迫起り、勞働結果の絞取り起るとするの甚だしい誤なることは、ミール制度の下に於ける露國に就て十分に證明せられた處である。我邦に於ける一種の共產體として知られて居る『飛騨白川の大家族』に就ては、筆者親しく實見し

た處である。階級の對抗なく、資本家なく、雇傭勞働者なき、白川の大家族に於ては、最も徹底的な勞働産物の絞取りが行はれて居るのである。左は實地踏査者の報告である。

此地習慣の奇なるは多人數合居なり、別家をなすを忌みたるを以て、一家内中壯年の男女幾人あるも相續人の外、嫁を娶り、聟を引受け、正當の結婚をなすを許さず、他は皆私通するのみ（中略）子成長して十七八歳となりて、一人前の野仕事を致すべきまでは其家の子となすも、戸主に於ては食物を與ふる迄にて、其他は更に頓着せず（中略）此地方は米作更に登らず、故に稗をつくりて以て之を常食となせり、然れども戸主一人は日々米飯を食せり（中略）戸主は野に出でず家内にて家務を司るを以て、其年の收入、雜穀、又は繭は何程ありて幾何に賣れたるやを他の者に聞くも更らに知らず、戸主より毎年家族へ夏衣と稱し、麻にて織り之を紺に染めたるもの一枚を仕着するを例とす、又女は之に紋を附けたるものあり、此外衣服各望に任せり因て春は七日目、夏は五日毎に休日と稱して戸主の仕事を爲さず、各自分の目的とする仕事をなし、或は別に切畑を作り、又は山に至り木實を拾ひ、又繩を爲し、休日に得るものを自己の所得となし、之を以て我需要費に充つ、故に節儉にして、能く勞働する者は、衣服、履物、煙草入の類にても、一通りは所持するものあり、又之に反し、或は休日の餘暇を働かず又は酒を呑む樣なる輩は、一家族中にても、唯僅かに戸主より仕着の儘なる者もあり、故に一家族中にても、貧富を異にせり（下略）

——藤森峰三氏『飛驒の風俗其他』明治廿一年東京人類學會雜誌第三卷第二十九號

家長は彼等の家にては專制國の君主なり、其臣從たる家族は、一切彼の命を遵奉し（中略）奴隷の如く凡ての勞役に服し、家長の許可なくしては一事をなす能はざるなり、——高木正義氏明治卅二年『飛驒の白川村』「社會」第一卷九號

家長は之を譬ふれば、專制國の君主の如し、其臣從たるべき家族は唯々として家長の命に服し凡ての勞役に從ふこと、之を換言すれば、奴隷の如し、家長權の强大なる實に言語に絕せり(中略)

一家の財産は凡て家長に屬し、家長專ら之が管理の任に當る。されば其年の收入、雜穀又は繭は何程ありて幾何に賣れたるやを知るものは唯家長のみ、家族は之に關せざるなり(中略)

家族の勞働はすべて、家長又は一家の爲めに之を爲すものにして自己の爲めにするに非ず、家長は彼等に對して、毎年夏衣一着宛を仕着する外、時々之に休暇を與へ、彼等の用を辨せしむ。この休暇は月二三回を以て普通とすと雖も、敢て定日あるに非ず、されば養蠶期其他繁忙なるときは、之を與へず、伸縮與奪共に家長の自由に存する也

——本庄法學士『飛驒白川の大家族』明治四十年(同氏著『經濟史研究』四六一頁以下)

白川大家族の家族は、其殆んど一切の勞働をあげて、戸主に奉仕し、其報酬として食住を供せられる丈けです。マルクスの所謂勞働の掠奪は決して、資本制生産社會に於てのみ、資本家のみによつて、行はれるものでなく、此くの如き幼稚なる生活をして居る大家族中に於ても行はれるのです、否資本の掠奪よりも遙かに徹底的に掠奪するのです、マルクスの掠奪説の誤謬なることの絕好の一例としても白川の大家族は興味の深いものであります、今迄視察された諸君が、此事に論及して居られないは何故ですか、私は不思議に思ふのであります。——拙者『國民經濟講話』改訂版一九二頁

十一

勞働の絞取りと階級の對抗とは決して同時に起つたものではない。勞働の絞取りは、我々の名けて所得と云ふ現象の

殆んど存せない時代に於ても行はれて居たのである。故に共産宣言が『凡ての從來の歴史は階級鬪爭の歴史である』と云つたのは、適當には、『凡ての從來の歴史は、絞取りの歴史である』と云ふ可かりしである。『壓迫者と被壓迫者とは相互に絶へず相對抗し不斷の鬪爭を續ける』とは、決して初からあつた現象ではない、被壓迫者が壓迫者と對抗し、之と鬪爭を開始する迄には、可なり長い期間の經過を要する。況んや被壓迫者が一の階級を形成して、此の鬪爭の當事者となると云ふは、精神的にも物質的にも餘程の發達を爲し遂げた後の事である。被壓迫者等は階級を形成することも出來ず、否階級を作るほどならずとも、或度の對抗を爲し、或度の鬪爭を爲すことすらも全く不可能なる狀態に於て、長き時期の間單に壓迫、絞取りの目的物たるのみで生存して居たのである。即ちエンゲルスが『記錄傳說を有する歴史は』と修正したのは、更らに之を修正して『文化の稍著しく發展したる社會の歴史は』と改めなければならぬのである。

原始文明に於ける鬪爭は、壓迫者と被壓迫者との間に戰はれたものではない、被壓迫者は唯だ壓迫せらるるのみであつて、とても鬪爭する力などを有しては居らなかつた。原始文明に於ける鬪爭は、一の壓迫者と他の壓迫者との間に行はれたものである。如何により能く壓迫し得んがを決する爲め、より能き壓迫對象を獲得せんが爲めに、壓迫者同士が互に絶へざる鬪爭を繼續して居たのである。既に壓迫の對象となり了つたものは、壓迫者に對して殆んど戰鬪の力を失つたものである。被壓迫者とせられざらんが爲めには、即ち未だ壓迫し了られざる前には、對抗もし鬪爭もしたであらう、乍併、此の鬪爭に負けた者は爾後單に絶へざる壓迫の對象となり了するのである。印度のカースト制度は勿論、歐羅巴の奴隷制度は、一度獲得したる壓迫特權の法典化である。其等の社會制度は、被壓迫者をして永久に、鬪爭の當事者たり得る望みを絶たしむ可く、極めて力強く極めて固定的に維持せられ、傳承せられたのである。多くの形に於ける（凡ての形に於けると云ふは不可）私有財產は、此の壓迫、此絞取りの產物である。所謂 Eigentumstheorieen なる

もの、アドルフ・ワグナー以來其數を加ふること益々多くして而して、學問的立證力を有するもの一も之れなきは、如上の事實を回避するからである。發生史的に云へば、殆んど凡ての Eigentum はオッペンハイマーの所謂 Gewalteigentum なることは、一の私心を狹まざる公平客觀の經濟史、社會史の敎ゆる所である。此の現前の事實を回避して、階級の成立を說明せんと試みた學說の中、最も有力にして代表的なるは、グスターフ・シュモラーの階級成立史論である。(其『分業論』シュモラー年報第八卷一〇〇三—一〇七四、第十四卷四五—一〇五及普魯亞年報第六十九卷四六四以下及其『國民經濟原論』第一卷四二二頁以下其『社會問題』一四二頁以下に載せてある)。曰く『カーストや僧侶、武士、商人やの貴族政治、ギルド制度、今日の勞働制度やは、何れも皆、社會の分業と分岐とが鑄出した其時期々々に從つて異る形態に外ならぬ。各個人夫々自己に特有な任務を取るに至つたのは、決して單に個人的熟練と運命とのみに依るのではなく、遺傳的稟性に基因する彼の肉體的及精神的構成、彼の神經、彼の筋骨により、數代に亘る因果連鎖によつて定められるものである。社會的順位の高下や、財產、名譽、所得の差異は、社會的分岐の第二次的結果たるに過ぎないものである』と。此を分り易く言直して見ると、財產、所得の差異は、遺傳に基く人の才能の大小の結果であつて、其の原因ではない、財產多く、所謂多きが爲め、人は社會に於て高き地位を占めるのではなく、人の遺傳に基く稟性勝れて居る結果、財產多く、所得大なるのである。財產の種類、所得の種類が、人の社會的差異を生ずると云ふよりも、人の遺傳による靈肉の稟性の異るが爲めに、財產、所得の種類に差異を生じたのであると云ふ事である。シュモラーの此說位舊獨逸の貴族的、官僚的偏見を露骨に公言したものはないので、此くの如き考を有するシュモラーが歷史派の泰斗たり、社會政策學の權威たると云ふことは、殆んど此以上を想像し能はざるほどの矛盾と云はねばならぬのである。然しコレハ彼が生物進化論を社會現象に生の儘適用することが一代の風を成して居た頃の代表的學者であることを考へれ

ば、必ずしも諒解し難いことではない。否シュモラーの此說ほど有力に生物進化論の濫用が如何に危險であるかを立證するものなしと云ふ可きであらう。

歷史の事實は、シュモラー說の反對である。社會上の分業の結果、財產と所得との量的及質的の差異が生じたのではなく、原則としては財產と所得の量並に質の差異が分業の原因であつたのである。希臘、羅馬に於ては勿論のこと、古獨逸民族、ロマン民族に就ても、財產殊に土地所有の大小及來所有形態の差異が、社會上の分岐を惹起したのである。ゾムバルトが近世資本主義の物的要素たる資本は其基源は『蓄積せられたる地代』にありと云つたのは、其門下ストリーダーの研究によつて打破られたが、然し中世に於ける大地主は、慥かに近世資本主義に其資本を提供した有力の一要素であつたことは、之を否定することは出來ぬ。

十二

社會的分岐、分業、職業の分立の最重要の原因は、財產の量的及質的差異、從て之れより生ずる所得の量的並質的差異にある。然るに財產の量的、質的の差異は、發生史的には、壓迫、絞取りの形態及度合の差異から生じて居る。階級の成立は、斯く財產の量的、質的の差異、從つて所得の量的、質的の差異あつて後の事である。壓迫、絞取りは更らに其前から行はれて居たのである。否、其れが行はれて居たからこそ、財產の量、質的差異が起り、從つて所得の量的、質的差異が起り、而して最後に、階級が成立し、其間に對抗、鬪爭が行はれるようになつたのである。所謂分業の成立は、即ち此の階級成立の道行である。シュモラーが之を原因としたのは、事實に反するも亦甚だしいのである。社會的分業とは(個性分業も多くは、同様であるが)原則として既に存する財產從つて所得の量的、質的差異が生み出したも

のであつて、抑も始めに之を生み出す原因ではなかつたのである。但し一度分業存すれば、其れが原因となつて更らに財産、所得の差異を生ず可きは言ふまでもない。

此經過は永き時期を要した。絞取り、壓迫は幾百年か（或は幾千年か）續いて、被壓迫者の對抗、鬪爭を惹起することなくして、無遠慮に且つ大規模に行はれた。尤も其間に時々突發的の反抗、鬪爭、而して又時には壓迫者の顚覆は起つた。併し其れは、一々の特定の壓迫者と被壓迫者との間の話であつて、壓迫其もの、被壓迫其ものは、社會現象として不斷の經過を見た。誰れが壓迫者たり、誰が被壓迫者たるかは、歷史の經過中に幾千遍、幾萬遍となく、變遷した。然し當事者の更代は、壓迫被壓迫其事の消長とは同一事ではない。

永く繼續した絞取り、壓迫は、漸くにして財産及所得の量及質に於ける著しい差異を呼起した。異れる量及質の財産と所得とは、又漸くにして社會上の分岐を産み出した。然し其分岐は直ちに單純なる財産、所得階級の成立を意味しては居らぬ。永い間財産所得の分岐は、身分上の分岐と錯綜して存續した。否、財産、所得の分岐、明白に財産、所得の分岐としてでなく、先づ社會上に於ける身分の差異に變形せられて社會分岐の基準となつた。中世の等族（シュンタンド）は即ち之れである。此變形は、永く財産、所得による分岐の齒を蔽ひ隱したは勿論、或る點にては、之を緩和し之に逆行し、其働きを支ぎつたこと少からずあつた。此の隱蔽、此緩和は一の消極的とも云ふ可き保障となつて、根抵に於ける、財産、所得の分岐を妨げらるゝことなく進行せしめるに與つて大に有力であつた。絞取り、壓迫が、原始文明に於けるように、露骨でなく、又た進步した社會となても之に對する反抗、鬪爭を容易に起さしめることなくして繼續せられ得たには、身分を基準とする等族制度は、與つて大なる役目を勤めたものである。若しも此の障壁、此の隱蔽機關が存せざりしならば、階級の對抗、鬪爭は、更らに久しき以前に發生したであらう。レニンはマルクスの說なりとして、國家の存在其事は、階級鬪爭の行はるゝことの最有力な證據である。國家の存在は、階級協調が行はれざることの最明白な左券である云々と言つた（拙文『マルキシズムとしてのボルシエヴヰズム』を見よ）。其が果してマルクス說の眞意を傳ふるものなるやの吟味は、追て公けにす可き論稿に於て詳述するに譲るが、レニンの言葉を模して、『社會

の存在は絞取りの存在の最明白な左券である』と斷じても、過去の歴史に就て丈けは、決して誤なきものと言ふ可きである。而して歴史上の事實としては、國家は此經過を容るゝべき容器であつたのである。容器は、此經過の能く進行するに助けとなつたこともあり、又た妨げとなつたこともある。歴史は我々に教ゆるに、過去の人類は、絞取りを行はずしては、文明を起すこと能はざりしものなるを以てするのである。資本主義社會のみに其れが行はるゝものと速斷するのは、驚く可き謬想である。資本主義の特色は、共産宣言に云ふ如く、其形を單純化し、明白に相對立する二箇の階級間のみの事たるが如く見えしむると云ふ一事にある、絞取りの行はるゝと云ふ事は、斷じて資本主義社會の特色ではないのである。此意味に於て Die Geschichte aller bisherigen Gesellschaft ist die Geschichte von Klassenkämpfen を訂正して Die Geschiche aller bisherigen Gesellschaft ist die Geschichte von Ausbeutungen とするも、寧ろ妥當なるを發見せざるを得ざるのである。

今日の階級闘爭は單純化せられたる階級闘爭である。即ち古代より中世を經て近代に亘る間に存在した多樣多趣なる諸々の對抗、闘爭の形態は、全くは消滅し去つては居らぬが、其等は皆二箇の最も鮮明に對抗し合ひ、闘爭し合ふ當事者の出現の爲めに、殆んど全く掩蔽せられ了つたのである。其二箇の當事者とは、即ち雇傭所得と資本所得と是れである。階級と云ひ、闘爭と云ふは斷じて惡化ではない、言ひ表はし難いほど重要な進化を意味するものである。永く永く階級を形成すること能はず、階級として闘爭すること能はざりし被壓迫者——雇傭勞働を特に意味するのではない、一のアブストラクトムとして見たときの其れを云ふのである——は、今や雇傭勞働階級なるものに於て、階級を形成し、階級闘爭を戰ふまでに進んで來たのである。勞働爭議を厚生闘爭——文化闘爭と名けても差支ないが、近來我邦では、「文化」と云ふ語が種々異なつた意味に使用せられるから、姑く避けて置く——なりと云ふには、此意味も含まれてある。共産宣言の樣に『凡ての從來の社會の歴史は、階級闘爭の歴史である』と云つたのでは、此重大な進化を輕視せしむることになる。加之、今日の資本主義社會に於ける階級闘爭は、階級闘爭の最終のものであると主張する社會民主黨並にレニンの見解は、甚だ請取り難いものになる。歴史に現はれた從來の凡ての社會——エンゲルスの修正を取れば、有

史以後の其れ――に於て不斷不易に行はれ來つた階級闘爭が、プロレタリアの勝利と共に一切終熄するものなりとは、一の希望、一のユートピアとしてなら兎に角、社會進化史的斷案としては、學問上何等の根據を有せざるものと云はねばならぬ。之に反し絞取り發展史の永き道程上、今日迄の最終段が即ち階級闘爭の時代でありと見るときは、次に來る可き時代は、階級闘爭なき時代なる可しと豫想することは、必ずしも根據なき空想ではあるまい。斯く云へば、人或は言下に難じて云ふであらう。よし、假りに其の如く考ふるとして、同樣の非難が加へられ得る。即ち歴史の初めより絶へず存在して居つた絞取りは、階級闘爭なき時代に至つて終熄するとは、如何にして言ひ得るかと。此の非難は正しい絞取りの終熄は、決して豫想され得ない。又た其れを豫想もしない。レニンが、又た獨逸の社會黨政府が、事實の上に於て、其を實現して示せば別問題であるが、然らざる以上、少くとも實證主義に立つ限りに於て、其は學問上の問題とはなり得ない。然ればこそ我々は不徹底の誘を甘んで厚生社會政策の立場に立つのである。生存權の保障を學問上の社會政策の出立點とするのである。之に對して共産主義は、レニンもカウツキーも均しく、絞取りの終熄と階級の終熄とをシンクロナイズするのである。而して社會主義なるものは、其處に至る一の道行、一の手段なりと主張するのである即ち社會主義は、早晩其存在の理由を失ふことが、其存在の理由であるのである。之に反し社會政策は絞取りの行はるゝ限り其存在の理由を有するものである。階級の終熄が絞取りの終熄を意味せざる以上、社會政策は、階級の終熄と共に終熄す可く社會主義とは、其存在の理由を全く別に有するものである。――左右田博士『横濱社會館開館式に際して』横濱貿易新聞大正十年六月二十六・七日掲載參照――社會主義を手段とする共産主義は、絞取りの自然必然的終熄を信じ、其れに至る手段として階級闘爭を信ずるものである、社會政策には此くの如き信仰なし、唯だ闘爭の醇化、厚生作の可能を學問上に認識し之を主張するものである。此認識は主として、社會、經濟史、就中其思想史の研究の結果を流通經濟の原理に照らして、考査することによつて得らる可きである。此點に於て筆者は、右左右田博士の社會政策本質論の大部分に裏書するを躊躇せざると同時に、博士の所謂文化主義的ベグュルンドング――同博士著『經濟哲學の諸問題』中の『社會政策の歸趨』――なるものに、同じ難しとするものである。（以下削出）

混亂の英國

在倫敦 本社特派員　室伏高信

一

『不思議なことが倫敦に起つた。永い間日光を暗らくしてゐた大きな灰色の幕がなくなつてしまつた。煙の中に住むできた人々は今は輝ける瑠璃色の空を見ることができる。そして暖かい太陽の光を浴びることができる。』

私は聖靈降臨祭の翌日、倫敦の一新聞からこういふ記事を切りとつて置いた。紐育から初めて倫敦にきた時に、私が最初に私の友人に宛てゝ書いた手紙は、倫敦は汚たない町だといふ私の第一印象であつた。私の眼に映じた倫敦の町は、煤煙馬糞と、そしてその煤煙と馬糞とのうちに葬られつゝある舊世界のそれであつた。『凡てが輝きで、そして煙なき空のうちに光つてゐる』と、何年かの前にウオヅウオスの歌つた倫敦橋に立つてさへも、凡ては煙りであり、凡ては不快なる暗影のうちに包まれて見えた。その倫敦に住んで二ケ月、この倫敦の空を蔽ふてゐた、黒い幕が何れかへ姿を沒したといふ新聞の記事を讀んで、私は初めてこの新らしい倫敦に氣が付いた。何時の間にか、黒い倫敦は光の倫敦となつてゐた。煙なき空氣をとほして、今は七百萬の倫敦の市民は、綠の樹と、瑠璃色の空と、暖かい日光とを思ふ存分に享樂することができるのであつた。そしてそは獨りこの倫敦だけではなかつた。マンチエスタアの一新聞にも同じような記事が現はれた。

　普通の、そして汚たない時にも、大雨が時としてはマンチエスタアを、隅なく包まれた煙の町の代りに、背後の小山とともに美しい夕の町として見せたことがあつた。今この町は、花園の花は美しく、一日の勞働の後に、人々は尙ほ淸潔なカラアを彼等の首に見出だすことができるであらう。

　私は一日サウス・ウエールスの地を訪ふた。カアヂフの町から汽車を北へと轉じて尙ほ數十哩。ロンダ谿谷として知られてゐる山奥へと分け入つた。ボンドリツドからボオスへ、ボオス

から更らに山奥へと、だら〳〵登りの山道を、ロンダ谿谷の中ほどまで車を驅つた。この谿谷は面積十六平方哩といはれてゐる。その十六平方哩は悉く炭坑をもつて埋められてゐるとこである。道に、私は到るところに炭坑場の立つてゐるのを見た。あるものは谷の底にあるものは山の中腹に、何町かづゝを隔てゝ、必ずそこに炭坑場のあるのを見た。そしてこの炭坑場のあるところに、必ずまたその周りに、幾軒となき長屋造りの軒を並べて立つてゐるのを見た。そしてまたこの谿谷に添ふて一條の電車の走るのを見た。黒い家、黒い電車、黒い炭坑場、この地一帶に亘つて、山も川も土も建物もみな闇黒色によつて滿たされてゐるのを見た。だがこの地上の凡ての黒いのに比べて、輝ける空、美しい日光が、今はこの谿谷のうへにもかゝつてゐるのを、私は注意しないではゐられなかつた。

炭坑のストツペーヂが始まつてから今丁度七週間になる。私は今まで炭坑ストツペーヂについて書こうとしてゐるのではない。たゞこの炭坑ストツペーヂが始まつてから七週間になつて、私の目に映じてゐる英國がどういふ世界であるかを故國の友に書き送りたいと思ひつゝ、私の今まの周圍を見廻してゐるだけである。そして私の周圍が、煤煙の國から、煙なき、美しい日光の、新らしい世界へと變つてゐることを思ひ出さないではゐられなかつた。私はまた私が倫敦の一劇場で見たオセロの最後の一幕を思ひ出さないではゐられなかつた。悶えに狂ふた一人のムーア貴族の暴風の後に、美しいデステモナの死の靜けさ！然り、倫敦の煙なき美しさは『死の靜けさ』であつた。倫敦もマンチエスタアも、サウス・ウエールスも、グラスゴウも、永い間悶え狂ふた後に、今ま『死の靜けさ』のうちに包まれてゐる。炭坑ストツペーヂの七週間は、凡ての英國を死の靜けさにと歸してしまつたのである。倫敦に、マンチエスタアにグラスゴウに、煙なき工場、眠りついてゐる機械、石炭のない汽車がだん〳〵と殖えてゆくことが毎朝の新聞紙に傳へられてくる。私はその數がどれだけあるかを知らない、が煙なき空は、如何なる統計よりも雄辯に、英國の眠りを私たちに語りつゝある。私は既に私がサウス・ウエールスの谿谷で見たことの一端を話した。そしてこの炭坑の別世界も、美しい日光の谷間と化したことを話した。だがこの美しい日光のもとに、ロンダの全谿谷が死のどん底に落ちてゐるのであつたことを、私はまだ話してはゐなかつた。全谿谷は、美しい日光のもとにあつて、デスデモナの死の顏のごとくに冷やかであつた。凡ての機械は休むでゐた。凡ての工場はその煙なき煙突とともに空しく

立つてゐた。私はボオスに近く一炭坑場を訪ふた。そこに總支配人のなにがしといへば、全英國炭坑資本家協會の一方の中心人物としてこの方面に重きをなしてゐる人だそうである。私がこの人の室に案内された時に、私はたゞ寂しさを思ふた。この人に導かれて私は坑口を見た。色々の機械を見た。この人の話によれば、この地方で、一番に深い炭坑は、何んでも一哩からの底だそうである。多くの坑夫は、ケーヂといふ葬式の棺のようなものに載せられて、一人々々その手にラムプをもつて、每日この闇いピットの空底へと運ばれてゆくのであつた。私はピツトの口に立つてその中側を覗きこんでみた。中はたゞ靜かな闇黑であつた。坑夫は一人も働いてはゐなかつた。全ロンダ谿谷を通じて、炭坑ストツペーヂが始まつて以來、たゞの一人の坑夫も働いてはゐなかつた。サウス・ウエールスの全體を通じて二十萬の炭坑夫は、全英國の百二十萬の坑夫とともに、一人のごとくに仕事を休むでゐた。凡ての炭坑會社には、唯二、三人の重役やら、書記なりの諸君が、手持ち無沙汰に、仕事なき卓子の前に寂しく腰掛けてゐるほかには、この全谿谷に、一人の坑夫も働いてはゐなかつたのである。私は既にこの谿谷を通じて一條の電車の走つてゐることを話した。がその電車に、たつた一人の客が、片隅に行儀よく腰掛けてゐるのを私は見た。私はある活動寫眞館に行つて見た。そして巨大な建物の中に、七、八人の觀客が、私の顏を、侵入者を見るように、じろ〳〵と見つめてゐるのを見た。凡ての劇場は閉ぢられてゐた。料理店の女給仕はぼんやり新聞の記事に讀み耽つてゐた。私はボンドクツドのあるホテルに一夜を送つた。女中さんの一人が、私たちは今夜あたり暴動の起るが恐らしい！といふたのを私は記憶してゐる。私は夜早く、室に堅く鍵をとざして床についた。暴動はその夜も、その後と同じように、この町に起りはしなかつた。が夜早くから往來をゆく人の跡を絕つて、夜遲く銃劍の音を聽く時に、人々の心に與ひきたるものは不安であつた。この一般市民の不安のうちに、多くの炭坑夫たちは、その妻、その兒、その父母等とともに半ば飢餓の悲しみに頻しつゝ、絕望的な戰ひを戰ひつゝある。

私がバンク街の近くにバスの何號かのくるのを待つてゐたタのことであつた。私は一人の老勞働者が私に近よつてくるのを見た。私はこの老人が口を開く前に、彼れが私に何を求めてゐるのかを知つてゐた。彼れは無論乞食ではなかつた。だが彼れの私に求めたのは、たつた二片（ペンス）の金であつた。私は彼れが何故に二片（ペンス）だけを私に求めたかをこの時に知らなかつた。私は二片（ペンス）の

代りに、この正直な、不幸な、老勞働者に、一志の銀貨を與へた。彼れは心からの感謝を表して何れかへ立ち去つて行つた。倫敦の往來を步るいたものは、昔は多くの伊太利乞食が露店音樂の悲しい曲を奏でつゝ、通りすがりの人たちの憐れに訴へつゝあつたのを見たであらう。今はこの職業的な伊太利乞食の代りに、職業を失つて、半ば飢えかゝつてゐる、力なく、失望の色に包まれた英國勞働者が、往來をゆく人々、就中、私たちのやうな顔色の變つた異國人に、錢を乞ひつゝあるを見るであらう。

私は二片（ペンス）の老人に別れた後に、帶つて一人して倫敦のある酒場を訪ふたことがあつた。私の訪ふたのは『公衆酒場』といふ一番下等な酒場であつた。こゝには一杯のビールが四片（ペンス）で賣られてゐた。ある老勞働者が、古るびた山高帽子を被つて、男女の群がつてゐるこの酒場へと入つてきた。概していへば倫敦の酒場へ入つてくる顧客の三分の一は女である。多くは中年から以上の女、身なりへの執着に餘裕のない。踵のすりきれた靴を穿いた、蝦蟇のように太つた、太つたといふよりは腫れかへつた山の神の群れを、私たちは到るところの倫敦の酒場で見ることができるのであらう。彼等のあるものは一杯四片（ペンス）のビールを傾けただけで、彼等の財布を空しうして、足を引ずつて歸つてゆく。彼等のあるものは四片（ペンス）づゝの報酬を貪つて、一日の勞働から歸つた知り合ひの人たちとともに、何ごとかを語り夜い十時の締め出しの時間のきたのを口惜しそうに歸つてゆく。その人たちの群れのうちに、私は今引き合ひに出した一人の老山高を見た。この老山高は六片（ペンス）の小さい銀貨一つを、多分最後の一つらしく、物惜しそうに出して、四片（ペンス）のビールと、そして二片（ペンス）の麺麭一きれとに代へて、この酒場の一隅にそれを運むでゆくのであつた。然り、二片（ペンス）は、彼れの夕べの空腹を滿たすべき麺麭の一きれの價であつた。私はこの夜初めてバンク街の老勞働者が何故に私に『二片（ペンス）』を乞ふたかを知ることができた。

五月廿日の勞働省の發表によると、英國では失業者として登錄したものが百九十九萬七千人、半失業者が百十二萬九千四百人、それに百二十萬の坑夫の休業者を加へると、失業狀態にゐるものが全英を通じて四百五十萬人に達するわけである。炭夫停業問題は、私のこの一文が日本へとどかないうちに何とか解決されるであらう。が三百萬からの失業者は依然としてそのみじめなまゝに殘るであらう。私たちが倫敦にきて、ボンド街を通り、リジエント街をゆく。こゝが王侯、貴族、富豪の街だとして数へられる。私たちは輝く寶石店の前に、幾臺かの自働車、馬車の連なつてゐるのを見る。私たちは夜早くそれ等の街

を賣笑婦の群が媚を往來に漾はせながら幾組となく往きつもどりつしてゐるのを見る。私は嘗てこの街のある一軒の本屋に立寄つたことがあつた。『私の店には皇后陛下も皇太子もちよい〳〵きます』女店員の一人が高慢らしく私に話してきかせた。が一軒の本屋でさへも、このあたりは王侯、貴族、富豪、賣笑婦の香ひに滿ちてゐるのであつた。そのボンド街、そのリジエント街をゆく時に、私たちは多くの華かな馬車、自働車、小さいスカート、佛蘭西形の踵、鳥の毛、ダイヤモンド、人工寶石、そして香水の間に交つて、失業者の群れが、巡査の一隊に警護されながら、疲れた足を、重い靴に包むで、訴へるような面もちで、幾組となく『失業の旗』に從つてゆくのを見るであらう。人々はかくのごとき世界を名づけて『文明』といふた。

この『文明』が今ま倫敦の空を、『煙なき』透明の空と化した。

グラツドストーンが曾つて英國には貴族的愛好と、自由主義とが並び存すると、いふたことを、私は感心して記憶にとどめてゐたことがあつた。その自由主義は今まグラツドストーンの豫言に裏切つて英國を辭した。だが貴族的愛好の方は、益々盛んになつてゆくもののように見える。何々の伯爵、なにがしの侯爵、どこそこの子爵と、パサアスト夫人の『モオニング・ポスト』の愛讀者の一人としての私は、この國に汗牛充棟の貴族が住むでゐることをよく知つてゐる。この人たちは、一日に何度か着物を着更へること、音樂會、芝居、倶樂部、葬式、結婚式にゆくことが年中行事である。この頃になつて、この人たちの間に新らしい道樂が始められた。それは離婚の訴訟である。亭主に厭き、女房の古るきに物足らずして、新しい亭主、若い灰色の毛の女に憧がれてゐる幸福な紳士淑女が如何にこの國に多いことであらう。私は倫敦の一新聞のうちから次のような記事を切りとつておいた――トウリングトン子爵夫人、有名な競馬馬の持主、以前のユリイノア・スウレイ孃、ゲイテイ及びダリイの女優が、昨日大法官によつてトウリングトン子爵からの離婚を許された。その理由は良夫子爵の不行跡といふことである。といふのは、良夫子爵が戰爭中セルビアから歸つた時に、夫人は良夫と手を携へてブライトンの海岸に遊びにゆくべく手筈をしてヴヰクトリア驛で待つてゐた。が良夫子爵はとう〳〵顏を見せなかつた……良夫子爵はその後夫人からの同棲（コンジュガル）權（ライト）の要求に應じなかつた……白耳義からの目擊者の證言によると、良夫子爵はオステンド觀祭の際にその地に滯在しておつた。この滯在中彼れは、大抵の夜は朝の五時までホテルに歸つ

てこなかつた。彼れは大抵日中寝室に入つてゐた。そしてそこに若い、中脊の、灰色の毛の女が彼れとともにゐたと。一度「櫻草同盟」の會議があり、一度統一黨の背ぞろへがあり、一度音樂會がある、とこうしたやんごとなき人たちが、そして多くは名もないやんごとなき人たちが、どこからとなく失業者の群のように集まつてくる。否、こうした貴い人だけが『貴族的愛好』の持主であるのではない。中等階級だと自分で思つてゐる階級の人たちが英國には澤山に住むでゐる。またこういふ人たちに限つて未亡人や獨身者やらが多い。倫敦のこれ等の未亡人は大抵は下宿屋。それも多くは外國人のための下宿屋をして、板のやうな冷肉を食はせて、そのかすりで生活を支へて、それでゐて貴族的愛好心が馬鹿に發達してゐて、硝子の首飾りをつけながら『モオニング、ポスト』を讀むでゐる。選擧の時は、選擧本部から迎への賄賂の自働車にすまして乗つて、例のとほりのギヤマンの首飾の扮裝で、統一黨の候補者に投票するのは大體こうした未亡人たちである。こうした未亡人は、下宿人の夕餐の肉の厚みをかすつて生活してゐながら、または銀行會社で一週間二磅が三磅しか稼いでゐない癖に、勞働者と一所にされるのを非常に厭がつてゐるように見える。社會主義とかボルシエヴヰキとかいふと、宛かも彼等の首から『ギヤマン』の首飾りでも掠奪する盜賊のように思つてゐる。この「ギヤマン』、の愛好が、グラッドストーンの謂ふところの貴族的愛好であつた。そしてそれが英國の統一黨によつて代表される「櫻草」の精神であつた。

この寶石から『ギヤマン』までの一大示威運動の幾日か前に、英國の勞働者階級は、また彼等自身の一大示威運動、機會をもつた。五月一日、メーデーの示威運動がこれであつた。私は此日の午後をハイドパークで費した。テームス河畔から出發してこの公園へと集まつてくる勞働者の諸君が、今その大半をこゝに集中した頃であつた。公園の一方の入口に近いところから長さ三、四町に亘つて、いろ／＼の衣裝に彩られた自働車が戰線でのタンクの一列を思はせるように、壯烈な並び方をしてゐるのが先づ目についた。この自働車の一團は消費組合の四萬の家族を代表する示威運動のそれであつた。私はそれから公園の中ほどへと入つて行つた。丁度鐵道從業員組合の一團の諸君が數十旒の旗を押したてゝ、こゝの會場へと流れこむでゐる際中であつた。會場の此所彼所に十ケ所ばかりの演壇が設けられてゐた。そのうちの大部分は共產黨の諸君によつての演壇であつた。何萬人か數へきれないほどの大群集、勞働者の波、『デー

リー・ヘラルド』の言葉を借りていへば群衆の『怪物』が、此所彼所の演壇を渦のように取り捲いて、交る／＼現はれてくる演説家の一語々々に喝采を送つてゐる。何れも荒らつぽい演説家ばかりで、チャーチルとロイド・ヂョーヂとがこゝでは散々な目に會つてゐる。（以下五行缺）

下宿屋のおかみさんが彼女の『私有財産』――『ギヤマン』の首飾りを心配する心持ちは、こゝハイド・パークへきて初めて了解することとできると、私は思つた。私はまたそこの一隅に、ウエールスの坑夫の一團が壇に登つて『武裝の同僚』を歌つてゐるのを聽いた。また他の一隅では、七つか八つ位ひからの無邪氣な小供等の五六十人の一團を見出した。彼等は「私の國は世界である」といふトーマス・ペーンの有名な一句を染め出した一條の旗を樹てゝ壇上の辯士からの『社會主義』とか、『勞働者の勝利』とかいふ言葉に、わけもなく小さい手をパチ／＼と鳴らしてゐるのであつた。彼等は各國からの代表者に扮したのであらう。その被つてゐる帽子には、『英國』と書いてあるのもあるし『佛蘭西』と彩つてあるのもあり、『獨逸』あり、『ロシア』あり、『アメリカ』と染め出してあつたのも見えた。日露戰爭の時に、第二インタナショナルの會合で、……としての片山潜君がロシアのプレフアノフと握手したといふ昔話り以來、私はこゝにな端くも無邪氣な……の代表者』をハイド・パークに見ることができたわけである。これ等の小供は『社會主義の日曜學校』の生徒として、毎日曜日に、そのあどけない頭に、『社會主義の怪物』の印象を刻みつけられてゐるのであつた。

私はできるだけ多く英國の勞働者の集まるところに行つて見た。ある時はヘラルド同盟の演奏會に行つた。私はこゝに若い男女の一團がヂョーヂ・ランズベリーに喝采しつゝあるのを見た。私はまたトラフアルガル・スクエアの示威運動にも行つて見た。それは暴雨の降る日曜の午後のことであつた。この大雨の中に、數千の人たちが集まつて、獅子像の脇に立つて、怒號しつゝある辯士のために『ヒヤ／＼』といふ叫びが盛んに沸いてきてゐるのを見た。この集會の指導者もみな共產黨の諸君であつた。私はこの日初めてトム・マン、ロバアト・ウヰリアムス、ニール・マツクリーンなぞの諸君の顏を見た。トム・マンが嘗つて濠洲から歸つて後に、この國におけるサンヂカリズム運動の最大の指導者であつたことは人のよく知つてゐるところである。今ま彼れの演壇の下に立つて、巨大な彼れの體格を見上げてゐると、サンヂカリズムがこの國に衰へて後に久しく公衆の人氣から遠ざかつてゐたこの老名士は、何時の間にか……員と

なつてゐるのであつた。この人の演說が終ると、寄附金が四方からバラ〳〵と投げられる。大抵は一片（ペンス）、二片（ペンス）、三片（ペンス）、多くて六片（ペンス）、一志の銀貨を投げるものは滅多にないが、中には無論『半王冠』を思ひきつて投げるのもあつた。その後にウヰリアムスが立つた。トム・マンに比べると風采の引立たないこと夥しいが、過激な言葉を頻發するの點では遙に上手であつたと思はれた。最後にマツクリーンが立つた。この人はロシアから歸つてきて新らたに共產黨に加はつた下院議員である。聽衆の一人が立つて、何故に……なぞに席を置くか？と疊みかけて詰問するのに、下院議員のマツクリーン君聊か受打双の姿に見えた。こゝはハイド・パークよりも一層荒つぽかつたように思つた。

それからまた私はウヰリアム・ポール君がロシア仕込みの幻燈演說を倫敦のある町はづれで試みてゐるのを聽いたことがあつた。ポール君には『國家論』の立派な著書のあるのを知つてゐるので、一つには群衆を見るために、一つにはポール君その人を見るためにこの會場へと足を運んだ。大きな教會堂は人をもつて塡められてゐた。ポール君は幻燈映畫の一枚ごとに說明を與へた。說明といふよりは彼れの共產主義の宣傳のために、ソヴヰエツト・ロシアの……と英國資本主義の攻擊のために、幾十枚かの彼れの映畫を酷使してゐるのであつた。カール・マルクスの映畫が現はれた時に、人々は大喝采を送つた。ジエフが現はれた時にも喝采があつた。レニンが現はれた時に、マルクスよりも餘計の喝采をうけた。『卷銃』のようなトロツキーの顏が現はれた時に最大の喝采が湧いてきたのを私は見た。就中、若い女たちが長く喝采してゐるのを私は見た。ポール君はこの幻燈演說で全國を巡廻しつゝあつた。この演說中にポール君の說明に屢々妨害を試みてゐる一人の肥つた男があつた。幻燈演說が大人氣のうちに終りを告げると、ポール君はこの勞働者らしい男を演壇に招いた。丸々と肥えた、五來素川君にどことなく似通つた、肥てゐて愛嬌のある、わが英國の五來素川君が演壇に立つた。その肥りかたが尋常でない上に、揉々手をしながら演壇のうへに現はれたので聽衆はくすくすと笑ひ出した。この人のボルジエヴヰキ攻擊は、見掛けよりは條道が立つてゐたかのように思つた。だがこの『五來素川』君の[illegible]をもつてしても、全會場內の空氣を、ボルジエヴヰキの雲行きから『階級爭鬪抜きのソリダリテ』の方へ持つてゆくことはできなかつた。

この共產黨の華々しい活動に面して、サア・ベルシイル・トムソンの活動もまた華々しいものとなつてきた。私はスコツト

ランド・ハウスの二階で一度このサア・ペシイルに會つたことがあつた。この男か惡名の高い現英國の探偵總長だとはどうしても思はれない位ひに朴訥な顔付きをしてゐるが、それでゐて共產黨員に對する彼れの惡辣な眼は既に昨年十一月、シルビア・パンカアスト孃を捕縛して以來間斷もなく光つてゐる。彼れのために牢獄の冷やかさを味はつたものは一寸は數えられないほど澤山にある。パンカアスト孃が六ケ月、マローンが六ケ月、ヴエルチーム、テイラア、スコツト、パタアソンみな六ケ月、ステイール、ハアヴエイ、ウエツヴ、ギヤラチヤア、エメリイの諸君は二ケ月または三ケ月、何れもサア・ペシイルのために牢獄へ投げこまれた犠牲者の諸君である。近くはスチウワート君がサウス・ウエールスから捕えられた。五月七日には倫敦の共產黨本部が襲はれて、この本部の一切の書簡、書物、パンフレツト、繪葉書、または壁張さへも、書記のインクピン君の身體とともにサア・ペシイルの奪ひ去るところとなつた。マンチスタアでも共產黨とショツプ・スチユワートの本部がサア・ペンイルの部下によつて侵入された。プリマウスでは一勞働者が妻とともに牢獄に運ばれた。こうしたことは、もう新聞の種子にはならない位ひに、毎日のように續出しつゝある。サア・ペシイル及びその部下が共產黨の倫敦本部に侵入したことについて、共產黨の一機關紙に次のような記事が掲げられてゐた。——五月七日、土曜日、スコツトランド・ヤードの警吏パアカアがわが同僚インクピンと話すために朝のうちに本部に尋ねてきた。『君はどこに住むか？』『スタプルトン・ホールロー十六番に。』『君の地位は？』『セクレタリイ』『○○と○○と○○といふ書物は君が出版を命じたのか？』『然り、この事務所から。君が？』『如何にも僕がセクレタリイだ。』『幾冊注文したか？』『一萬冊ばかり。』……インクピン『ところで君は如何なる法令によつて僕の取調をしてゐるのか？パアカア『……吾輩はたゞ君にお尋ねしてゐるだけである……インスピン『僕は質問に答へるのにはあまりに多忙だ』……その日の六時にまたパアカアがインクピンを、本部に尋ねてきた。『偖てインクピン、君は吾輩が何ものであるかを知つてゐるかどうか？『知つてゐる。』『吾輩は君を捕縛にきたのである。非常則令の第十九條によつて。偖て……インクピン君、帽子と外套を着て吾輩と一緒にきてくれ。』『君は逮捕狀をもつてゐるか？』『この法令によれば逮捕狀は必要でない』……やがてこの本部は警吏で一杯になつた……書物と小冊とは亂暴な混雜の狀態で、繪も、カートウーンも……破壞は完全に行はれた……警吏の侵入は二時間半に亙つて續けられたと。

外國からきてゐた共産黨員は或は追放され、或は自ら逃れた。日本の皇太子が倫敦に帶在してゐられる間に、日本の一學生さへ共産主義者といふ名のもとにサア・ベシイルのためにこの國から追放されたと聞いた。

英國は外國の亡命客の隱れ場所であるといふことは、私たちが永く聞き及んでゐたところであつた。マルクスは獨逸を追はれて英國博物館のうちに彼れの『資本論』の資料を求めた。クロポトキンは長い間英國の青年に感化を與へてゐた。ベルンシタインもこゝにゐた。マヂニイもこゝにゐた。多くの有名無名の亡命客が倫敦を彼等の唯一の自由の天地としてこゝに流れこむできたことは人のよく知つてゐるところである。その倫敦の傳説は今は既に昔語りとなつた。英國民が永い間誇としてゐた政治上の自由はサア・ベシイルの捕縛狀と代つた。

英國の支配階級は、ホワイト・ホールの蝌蚪の諸君から、下宿屋の『ギヤマン』夫人に至るまで、彼等の反動的な心持ちを、その歴史上に比類なき昂奮の狀態へと導きつゝある。ホワイト・ホールの蝌蚪のうちではチヤーチルがその急先鋒として世界に汎く『雷名』を知られてゐる。バアナアド・ショウは嘗つてチヤーチルとレニンとを兩極の政治家として對照させたことがあつた。『英國のチヤーチル』を『ロシアのレニン』に比べることは、『東の原敬』を『西のニコライ・レニン』に比べることと同じだ。何にしても現代反動史を書かうとするものにとつては、ウヰンストン・チヤーチルの名は、佛蘭西革命史のうへにルイ十四世がなくてはならない人氣の役者であるごとくに、最大人氣役者の一人であつた。今までの英國の集會場では、チヤーチルとロイド・ヂヨーヂさへ攻撃すれば、喝采を博するのは受合ひである。喝采どころではない、チヤーチルの名がでてくると、人々が期せずして笑ひ出すほどに、彼れは反動時人氣役者となつてゐるのである。

このチヤーチルにも増して近頃『モオニング・ポスト』の紙面を飾るべき『新人』が現はれてきた。ノウサムバランド侯爵がこれであつた。この侯爵に從へば、ロシアのボルシェヴヰキは獨逸の『ユンケル』と一所になつて、英國を滅亡させるためにあらゆる働きを働いてゐる。愛蘭のシン・フエーンもそのためだ、炭坑のストツページもそのためだ、英國の共産黨は、モスコウの『黃金』ための奴隷である。英國の勞働黨でさへも、この侯爵閣下に從へば、モスコウと共同して英國を亡ぼすための機關であつた。彼れが嘗つて英國の兩院議員の一團を集めて、この『獨逸のエンケルと、ロシアのボルシエヴヰキと、そして英國の勞働黨までが』英國を亡ぼすための陰謀を企むでゐると

いふ彼れの有名な演說を試みた時には、ソアマセット侯、サリスベリ侯夫人以下、伯爵、子爵、男爵、サア、大佐、代議士と、澤山の人たちが下院の大委員室にと集まつた。そして英國の勞働黨が『勞働黨の支配』といつてゐることは、モスコウの謂ふところの『勞働者階級の獨裁政治』と、全然同一の主張であると、彼れの頭腦の明晰さの程度を證據立てた時に、こゝに集まつた一團の高貴顯要の人たちが、この一句に喝采したといふことが、翌日の『モオニング・ポスト』にそのまゝ報道されてゐたのを私は注意しないではゐられなかつた。然り、この侯爵と、この侯爵に喝采した英國の高貴顯要の諸君の、頭腦の力と、心臓の鼓動との、赤裸々な毎日の記錄として、私はバサアスト夫人の『モオニング・ポスト』と見ることが、倫敦の下宿屋の毎朝の樂しみの一つであつた。

私は一日シドニイ、エンド、ビアトリス・ウエッヴを、彼れのウエストミンスタの家に尋ねた時に、私たちは談偶まこの侯爵のことに及んだ。私はシドニイ・ウエッヴに向つた、あなたは個人的にこの侯爵を知つてゐるかと尋ねた。彼れは知つてゐるといふた。私は更にこの侯爵が常識のある人かといふ、分りきつたことを尋ねて見た。溫厚のウエッヴは私の問ひに微笑を浮べながら、あの男のように無知で、無責任なものを私は知らない、と答へた。

若しこの種の賢明さの人が、チャーチルとノウサンバランド侯爵との二人だけであつたとしたら、問題はたゞこの二人の死後に、彼等の頭腦を解剖するといふ、お醫者様の仕事が殘つてゐるだけであるのであらう。が今や英國の支配階級は、何ほどかの程度において、みな變調を示してきた。傳統の英國から變調の英國へと入つてきた。

私たちが東京の新聞を讀み、東京の町を歩いてゐた時に、惡夢に襲はれるごとくに襲はれたものは、有田ドラッグの忠君愛國主義であつたことを、私は今ま倫敦へきて思ひ出さないではゐられない。若し『忠君愛國』で梅毒藥の賣行きがよかつたとしたら、日本の凡ての遊野郞はみな忠君愛國の志士仁人であつた。だがかくのごとき忠君愛國の士は、今まは日本に充滿してゐるだけではなしに、私は倫敦にきて、わが忠良無比なる有普松君の面影を思ふ。『善良なる市民に告ぐ』或は『善良なる市民に訴ふ』——こういふ看板が倫敦だけではない、今まは英國の到るところ、率土の濱、普天の下こうした看板が、『善良な市民』に訴へてゐないところとてはなくなつた。それは今の大藏尙書サア・ロバアト・ホーンによつて企てられたといはれてゐ

る、サア・ホーンが梅毒の藥を『善良な市民』に賣るべく企てゝゐるといつても、あまり信用してくれるものはないかも知れない。だが試みに倫敦の往來の角に立ち止まつて、一寸ばかり彼れの有名な『善良なる市民に告ぐ』の一節を讀むで見るがいゝ。楠正成、和氣淸麿は、こゝ倫敦の街頭でも、梅毒劑の客引とまで墮落させられずにはゐられなかつた。彼れは炭坑夫と炭坑持主との階級戰において、『善良な市民』に訴へてゐるのである。然り、彼れにおいては資本家の利潤に挑戰するような不心得なものは、みな不忠不臣の輩であつた。『善良な市民』は宜しく立つてこの不心得な坑夫を征伐するために、ストライキ破りの『黑足』とならなくてはならない！といふのが英國の有田音松サー・ホーンの新愛國主義であつたのである。私はまだ内亂といふものを見たことがない、が往來の辻々で、こうした『善良な市民』のための立看板が、『不善良』な他の市民を睥睨してゐるのを目擊してゐると、武裝なき内亂が、今英國に酣だといふことを、感じないではゐられない。然り、それは『善良な市民』が『不善良な市民』に對する。血なき内亂の宣告であつた。そして英國の政府は、この『善良な市民』の代表者として、『不善良な市民』の征伐のための戰ひに、彼れのあらゆる政策の中心點を見出してゐるのである。

私には、も一度ハイド・パークについての話を繰返すことが必要に思はれる。毎日の午後から夜へかけて、ハイド・パークの一隅には、必ず三、四人の宣教師が、『善良』『不善良』の市民に取り捲かれながら、基督教の宣傳のために、何ごとか熱心に話りつゞけてゐるのを見るであらう。この牧師さんの敎壇には、『アングリカン敎會』と書いてあるのもあり、『キヤソリック』と書いてあるのもあり、また『クルウセーダア』の一派もある。私はこの人たちのある一人が、あまり多くない聽衆の前で、切りとエッチ・ヂイ・ウエルスを攻擊してゐるのを聽いたことがあつた。この牧師さんに從へば、ウエルスの『歷史の輪郭』——動物の歷史のうへに人間の歷史を接續したことは、途方もない妄想であつた。矢張りわれわれ人間は神樣から造られたものでなくてはならないのであつた！私は實は倫敦にきてまで、こうした『大演說』を聽くことを豫期してはゐなかつた。だがこうした『大演說』を、錆腐ろの帽子の、老牧師さんから聽かされたにしたところで、加藤高明氏の畫像のうちに、『珍品五』を見出したほどの興味をも、感ずることはできなかつた。だがこうした錆腐の帽子の牧師さんたち——それは既に久しく人々の感謝を失つた牧師さんたちが、如何に現代に復活すべきかを、

痛ましくも煩悶してゐることが、ハイド・パークの一日の說教のうちに、明瞭に人々の心に印象しつゝある。といふのは、彼等の基督教の教理、資本主義に先つて、若しくは中世紀主義にも先つて生れた基督教の教理を、如何にして現代に色揚げすべきかについての、彼等の化學的染色術をいふのである。もつと適切に言ふと、これ等の牧師さんたちは、彼等の基督教を、現代の階級戰爭の現實に、如何にして巧みに結び付けべきかに煩悶してゐるといふのである。あるものは既に基督教こそ社會主義の母であつたといふことを、こゝハイド・パークで說教しつゝある。またあるものは社會主義が、基督教の自由、平等、博愛の教理と兩立しないといふことを說くために、汗みどろになつて叫んでゐる。私にとつては、基督教の教理が社會主義とどういふ關係をもつかの問題はどちらでもいゝ。『私は神を信んじない、若し神がこの世にあつたとしたら、その神を廢止するまでゞある』と、バクーニンのいつたことを私はたゞ記憶する。だがこゝに今に私の閑却することのできない一つの事實がある。それはこれ等の牧師さんたちが、社會主義に反對する人も、贊成する人も、みな等しく階級戰の渦の中に捲きこまれてゐるといふことである。また若しもこれ等の牧師さんたちが、この階級戰の渦中に、何れかの側において捲きこまれてゐないとすれば、彼等が現代において、少くともこのハイド・パークの公共教壇において、彼等のレーゾン・デートルを失ふであらうといふことである。

メーデーの日の週刊『正義』には久しぶりにハインドマンの論文が見えた。彼れの名は最早や英國の勞働運動のうへから抹殺し去られたかのやうに見える。が少くともメーデーの日の『正義』——英國社會主義の機關雜誌として最も歷史的な『正義』の卷頭に載せられた彼れの論文に對しては、左はマシクマナスから右はシドニイ・ウエッヴに到るまで苦情の言ふべき餘地がなかつたかのやうに思はれる。彼れは先づ、彼れ自らこの國だけではなしに、全歐洲を通じて、現存する最古の社會主義者であるといふた。そして次にこの最古の老社會主義者は、既に四十餘年間階級戰爭の原理を一貫して主張してきたことを述べた。そしてまた次に、彼れは英國の勞働者と、公平な者の、智力的なあらゆる方面の人々に訴へていふ、今日のわれれの經濟的及社會的環境を研究せよと。『われ〳〵は[illegible]とたく何人も、また如何なる團體も革命を起すことはできない。そしてまた何人も、如何なる團體も、一度社會の胎內に用意された……阻止することはできないといふてきた。故意に眼を閉ぢて

ゐる人たちでないかぎり、かくのごとき革命が既にこゝ英國に用意され、そして今ま正に生誕しようともしてゐることを見ることができる』と。

マルキシズムの階級戰爭の原理について私はこゝに何ごとをも說明し、または反證を擧げようとしてゐるのではない。たゞ英國への訪問者として、今日の英國の、忠實なる紹介者の一人として、私は今の英國が、階級戰爭の原理を證據立てるために存在してゐるといふことを、故國の友に告げないではゐられないのである。少くとも今の瞬間において、全英國は階級戰爭の英國である。組織的な支配階級と、組織的勞働階級との、明瞭なる輪廓と、その各々の明瞭は不明瞭なる階級意識とにおいて、英國は今ま世界の歷史に比類なき一大階級戰の渦中に進むできた。そのあらゆる社會的、經濟的、政治的の諸要素、諸機關、諸生活の一切を擧げて、階級戰の殺伐なる渦の中へと捲きこまれてしまつてゐるのである。貴族も、富豪も、書記も、敎師も、僧侶も、勞働者も、學生も、著述家も、郵便配達も、新聞記者も、法律家も、醫師も、印刷屋も、會館の持主も、自働車の運轉手も、下宿屋の『ギヤマン』も、殆んどあらゆる男女が、何ほどかの程度において階級意識のもとに、彼等の生活の最大中心を、この階級戰の渦の中へと捲きこまれてしまつてゐるのである。然り、今の英國は、マルキシズムの階級鬪爭の、簡單な公式に要約さるべく、一切の用意を整へてゐるといふことである。マルクスの門下も、マロツクの信仰者も、この英國の公式を見逃してはならぬ。

この一文は、今日の英國の、私の目に映じたまゝの、スケツチである。私はこうしたスケツチを、多分もう二回ほど書き續けさせて頂きます。（一九二一――五――二四、倫敦にて）

團體交渉權獲得運動

—二ケ月間の大阪勞働爭議の顚末—

賀川豊彦

一、勞働祭とストライキ

一昨日も東京からの友人と談したことであつた。今度の大阪の勞働爭議は妙な處から事件が進展したものであつた。電業員組合が五月一日の勞働祭を期して會社に迫らんとした要求條項の中にあつた團體交渉權の要求の如きは、どれだけ組合長佐藤氏が強く突張る心積りで居たかは疑問である。先に足尾銅山の罷業に團體交渉權の文字があるし、東京の友愛會の罷業にはいつもこの文字があるので、察する處、金子忠吉氏などの忠告で入れたものらしいのである。

四月廿七日であつたか、午後四時頃に、私は大阪西野田のあの廣くも無い友愛會聯合會の表の間で私は金子君が明日會社に出すんだと云つて居たその嘆願書なるものをみた。

そして『毎年一回運動會を開くべし』など云ふ要求があるので、みんなで笑つたのであつた。金子君もこんな程度だから困ると云ふて居られた。元來金子君は實に忠實な大阪の組合運動には隱れた恩人で、金にもならぬ組合の用事をいつでもしてくれる豫備海軍少佐で、軍人出としては事のわかつた珍らしい人で、あれだけよくも勞働者の爲めに盡せるものだと考へさせられる程であるから、金子君がやると云へば、みんなのものも敢て反對するものもなかつたのである。

それどころでは無い金子君が大阪鐵工組合に關係し同時に友愛會の會員であり、それが大阪鐵工組合が妙な立場に陷入つたことにあきらめをつけて自ら卒先して組合運動の急先鋒としてメーデーに先立つて、大阪電燈の罷業の尻押しをせられると云ふので我々は金子氏も愈々本舞臺に乘り出されたと思つて慶賀したのであつた。

勿論あの罷業の裏面には大阪電業員組合に心よく思は無い職工諸君が安治川發電所と春日出發電所で二百人近く脫會して友愛會に參加したものだから、始めから佐藤組合長及金子君對友愛會系の人々の間に我等の知らない或種の感性が縺つて居たら

しく考へられるのである。云ふ人に云はせば出來たばかりの組合が茶話會の二三度しか開いて居ら無い中に同盟罷業をするのは早や過ぎると云ふであらう。然し組合としては殆ど凡ての組織に於て會員を千數百人と云ふ多人數まで持つた以上、自分の力を試驗したくなるものである。それで訓練は充分に無かつたが、半分はメーデーの示威の爲めに、半分は自己を充分信じた爲めに、そして此機會こそ組合を公認せしめる好時期だと考へたのであらう。四月廿八日に蒼惶として要求書を提出して回答期を四月卅日とし、メーデーには大阪の電燈を暗くしようと云ふ計劃が出來たのであつた。

　五月六日になつて會社は佐藤組合長に回答を與へたが佐藤君としてはそんなに强く會社に當る氣は始めから無のだから、多少の要求が入れられたので團體交渉權がどうであらうとそんな面倒臭い問題にはあまり深入りしては組合を潰さねばならぬと考へたものらしい、さつさと打切つて勝利を宣言したのであつた。處がそこには組合成立前後からのいきさつのある友愛會と電業員組合であるからすぐ問題が起つたのである。卽ち友愛會としてはそんな打切りようをせられては困ると云ひ出し、途に佐藤組合長並に金子君の辭任となり、西尾君を名譽毀損罪で佐藤君が法廷に訴へることになつたのであつた。

　このあたり佐藤君は實に小供らしい稚氣滿々で、とても勞働運動の世界的大運動を指導するだけの度量の無いことを示して居るが、然し、佐藤君があの場合西尾君に喧嘩を吹きかけたのが、大阪の組合運動に非常な進步を與へたのだと思へば、何が幸になるやら薩張りわからぬことである。

　あれで佐藤君が團體交渉權に少し力を入れ比較的完全に近い勝利を得て居れば大阪の勞働爭議は今日のように紛糾しなかつたのである。それが佐藤君があまり自覺しなくて問題を回避しようとした處に、西尾君が横槍を入れ友愛會が蹶起し問題に關西全部に波及したのであつた。怪我の功名と云へば全くこのことである。

　勿論私としては佐藤君が惡い人だとは思はない。たゞ佐藤君が團體交渉權の進展の內容を知らずに會社と接衝した處に手落ちがあつたのである。勿論金子氏としても勞働組合學者ではないし、それを知つて居られる筈はないのである。それで問題はたゞ紛糾させられる爲めに池中に投石せられたと云ふに止つたのである。然し今から考へると、佐藤君や金子君が池中に投石せられたばかりに、關西の勞働組合運動が著しく進步したと思へば、メーデーの擧は兩氏に深く感謝せねばならぬ。

二、馘首――紛亂――暗黑

再度の交渉委員が出てそれを大電が蹴つた。その爲めに職工は總崩れとなつた。會社はその混雑の眞最中に百余名を馘首した。再度の交渉を促したのは友愛會であつたが、友愛會はまだ矢表には立つて居らぬ。電業員組合がまだ統一も無くやつて居る。その中に一日立ち二日立つた。

最初西尾君は應援を求められたが、不景氣で失業者を出すと困るから今度は延期しろと云つたが聞か無い。五月九日には會社の門前に次のような掲示が出て、西尾君の忠告をきかぬ人々の首が飛んだのであつた。

掲示

從業中機械掛電氣掛所屬助手職工全部に對し不得止
本日限り解雇候條此段告示す（下略）

然しかうなるといくら罷業を止めて居た西尾君だつて友愛會の幹部諸君だつて默つて見て居れ無い。九百の馘首者の爲めに憤然立たねばならぬ覺悟をせねばならなかつた。然し友愛會の名で立つ事は實にまだ早かつた。電業員組合の人々は少しも友愛會に寄りつか無い。安治川支部、春日出支部の人々も本部に寄りつか無い。傳令が來ない。

その中に二日過ぎた。然し遂に友愛會聯合會を罷工本部にしてやらねばとても此罷業に勝てる見込が無いと云ふことに一決して罷工本部を友愛會に移した。

三、妙な事實と妙な結果

ところが實に妙な事が度々起るのである。それは眞夜中に罷工職工の宅へ刑事だと稱するものが二三人やつて來て取調の必要があるから出て來いと云つて有無を云はさず自動車の中にねぢ込んで會社に追ひ込み、工場外には一歩も出さず機械の番をさすと云ふ仕末である。

會社に出勤するものは實に僅かである。馘首せられた罷業團は馘首せられた以上、實に强い、それで罷工破りを警戒し始めた。それが頗る有効である。會社もジレだした。警察も慌て出した。大阪全市の灯が消えると云ふので國粹會も飛び出して來た。會社に内應した職工は三日も四日も籠城させられて、會社内に寢る爲めに病人が出たと云ふ通知まであつた。

然し、私達の不思議で堪え無いのは刑事と稱するものの行動である。それで藤岡文六君と私とは警察本部を訪問して加賀美高等課長にそれを詰問したのであつた。處が加賀美氏から

『君達の云ふ團體交渉權と云ふのはどの程度のものか？』

と尋ねられたので、私は公共事業に或種の團體交渉が無ければ必ず此度のように面倒なことが起ると云ふことを英國の獨占事業特にガス工組合の例とホヰトレー協議會の例をひいて論じ

たのであつた、翌日西尾君と藤岡君と私は田中警察部長と會つた。そして話は團體交渉權の問題のみであつた。田中警察部長は肥つた人で咄々としてものを云ふ人であるが大電の場合にはどうしても或種の團體交渉權を勞働者諸君に與へねばならぬと云ふてゐた。

然し會社は頑固であつた。五月十五日は調度日曜日で私は伸銅工組合と大阪印刷工組合に關係して居る都合上、友愛會の方に顔を出すことが出來なかつたが、夕方號外が出て、安治川發電所前で米を曳いてゐた示威行列の一隊千數百人と警官とが、衝突して死傷者が出たと云ふのであつたから私は自動車で友愛會聯合會に馳けつけたが幾萬人と云ふ人出で、その間を警察と新聞社の自動車が幾十となく走り廻る。私はまるで市街戰を見て居るような氣がした。私は兎に角勞働者側の死傷者と云ふものに就て取調べ無くてはならないので、大急ぎで安治川發電所に飛んで行つた。會社は私を會はしてくれない。それで本社に飛んで行つた。それで漸く怪我人が九名で、負傷の程度はみなそう重くないと云ふことがわかつた。

それから私は近江八幡のヴオリース氏との約束が有つたので八幡へ行つた。それはヴオリース氏が東京に建てる筈であつた勞働會館の設計をして下した約束に聖書講演に出掛けたのであつた。

八幡に居る間に田中警察部長は今井嘉幸博士と大阪砲兵工廠で五千數百人の會員を持つてゐる向上會の會長八木信一氏を仲に這入つて貰つて、會社と友愛會側の協調に努めた。そして會社も友愛會側も次のような覺書で滿足して一先づ罷業をおさめることにした。

覺書（其の一）

一、此際復職を希望する者は全部復職せしむること
但し罷業の關係上人員淘汰を爲すことは已むを得ざるも本爭議に關しては犠牲者を出さざる事

覺書（其二）

一、勞働條件に就ては勞働團體と交渉し組合員各自とは一切交渉を爲さざる事
二、勞働團體とは會社に從業せる勞働者百人以上を以て組織せる團體を云ふ
三、會社内に數個の團體ある場合は各個に交渉を爲す事
四、會社從業員にして勞働團體に加入せざるものへは各個へ交渉を爲す事
五、交渉不調の場合と雖も二週間以内は其爭議に關して解雇をなし又は同盟罷業を爲さざること。

之で發見ながら或種の團體交渉權は獲得されたわけである。

然し一方に於ては會社自體は勞働調査委員會と云ふ變なものを發表した。それは今度の爭議の起る前から勞働者に設立すると發表してゐたものであるが爭議が濟んで五月廿一日になつて發表してゐる。それはたゞ一種の諮問機關であつて團體交渉の形を備へたものでは無い。然し勞働者側は爭議に疲れて今は全く反對する勇氣も無いらしい。

――團體交渉權獲得運動――

勞働調査委員會規定

第一條　本會ハ會社從業員ノ勞働ニ關シ調査研究ヲ爲シ社長ノ諮問ニ應ズルモノトス

第二條　本會ノ委員ハ任命及選擧ニ依リ之ヲ定ム

任命ニ依ル委員ハ社員中ヨリ社長之ヲ任命シ選擧ニ依ル委員ハ別ニ定ムル選擧規則ニ依リ之ヲ選擧ス

第三條　選擧ニ依ル委員ノ任期ハ滿一箇年トス

但場合ニ依リ社長之カ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第四條　本會ハ毎月一回開會ス但必要アルトキハ臨時開會スルコトアルヘシ

第五條　本會ハ會務ヲ處理セシムル爲メ主事、主任各一名及事務員若干名ヲ置キ社長之ヲ任命ス

勞働調査委員會委員選擧規則

第一條　勞働調査委員會規定第二條ノ選擧ニ依ル委員ハ本規則ニ基キ毎年六月之ヲ行フ

第二條　委員ヲ左ノ如ク定メ助手職工各級ヨリ之ヲ選出セシム

助手　二名　　職工　三名

第三條　選擧人ハ選擧名簿調製前滿六箇月以上勤續セル助手職工ニ限ル

被選擧人ハ選擧人タルコトヲ要ス

選擧人名簿ハ毎年五月二十一日現在ニ依リ之ヲ調製ス

第四條　選擧ハ選擧委員ニ依リテ行フ

第五條　選擧委員ハ各所掛ニ於テ其所屬助手職工別ニ依リ一名ヲ單記無記名ヲ以テ選擧スルモノトス但助手職工別總數ノ二十分ノ一以上ヲ有スル所掛ニ於テハ其二十分ノ一ヲ增ス毎ニ一名ヲ選擧スルモノトス

第六條　委員ハ連記無記名ヲ以テ投票ス

第七條　投票所、日時及方法ハ其都度之ヲ定ム

こんな調査委員會でも無いよりましだと云へばましだがこの調査委員會をどんなに運用して、交渉團體と連絡を取るかゞ疑問である。會社も勞働者を馬鹿にしたものである。

四、地方裁判所の控所

七月一日午後一時に私は大阪地方裁判所に證人として出頭を命ぜられた。その日證人として出頭を命ぜられたものは藤永田造船所の支配人格の前野芳造君と藤永田罷工團の第二實行委員長の村田君と私の三人であつた。

朝の九時から前の二人は呼び出されて居るのだがまだ前野氏一人がすんだばかりであつた。それで私は四時に出直すことに

たのであつた、翌日西尾君と藤岡君と私は田中警察部長と會つた。そして話は團體交渉權の問題のみであつた。田中警察部長は肥つた人で咄々としてものを云ふ人であるが大電の場合にはどうしても或種の團體交渉權を勞働者諸君に與へねばならぬと云ふてゐた。

然し會社は頑固であつた。五月十五日は調度日曜日で私は伸銅工組合と大阪印刷工組合に關係して居る都合上、友愛會の方に顏を出すことが出來なかつたが、夕方號外が出て、安治川發電所前で米を曳いてゐた示威行列の一隊千數百人と警官とが、衝突して死傷者が出たと云ふのであつたから私は自動車で友愛會聯合會に馳けつけたが幾萬人と云ふ人出で、その間を警察と新聞社の自動車が幾十となく走り廻る。私はまるで市街戰を見て居るような氣がした。私は兎に角勞働者側の死傷者と云ふものに就て取調べ無くてはならないので、大急ぎで安治川發電所に飛んで行つた。會社は私を會はしてくれない。それで本社に飛んで行つた。それで漸く怪我人が九名で、負傷の程度はみなそう重くないと云ふことがわかつた。

それから私は近江八幡のヴオリース氏との約束が有つたので八幡へ行つた。それはヴオリース氏が東京に建てる筈であつた勞働會館の設計をして下した團體に聖書講演に出掛けたのであつた。

八幡に居る間に田中警察部長は今井嘉幸博士と大阪砲兵工廠で五千數百人の會員を持つてゐる向上會の會長八木信一氏を仲に這入つて貰つて、會社と友愛會側の協調に努めた。そして會社も友愛會側も次のような覺書で滿足して一先づ罷業をおさめることにした。

覺書（其の一）

一、此際復職を希望する者は全部復職せしむること
但し罷業の關係上人員淘汰を爲す ことは已むを得ざるも本爭議に關しては犠牲者を出さざる事

覺書（其二）

一、勞働條件に就ては勞働團體と交渉し組合員各自とは 一切交渉を爲さざる事
二、勞働團體とは會社に從業せる勞働者數百人以上を 以て組織せる團體を云ふ
三、會社内に數個の團體ある場合は各個に交渉を爲す事
四、會社從業員にして勞働團體に加入せざる ものへは各個へ交渉を爲す事
五、交渉不調の場合と雖も二週間以内は其爭議に關して解雇を なし又は同盟罷業を爲さざること。

之で罷業ながら或種の團體交渉權は獲得されたわけである。

然し一方に於ては會社自體は勞働調査委員會と云ふ變なものを發表した。それは今度の爭議の起る前から勞働者に改造すると發表してゐたものであるが爭議が済んで五月廿一日になつて發表してゐる。それはたゞ一種の諮問機關であつて團體交渉の形を備へたものでは無い。然し勞働者側は爭議に疲れて今は全く反對する勇氣も無いらしい。

勞働調査委員會規定

第一條本會ハ會社從業員ノ勞働ニ關シ調査研究ヲ爲シ社長ノ諮問ニ應ズルモノトス

第二條本會ノ委員ハ任命及選擧ニ依リ之ヲ定ム

任命ニ依ル委員ハ社員中ヨリ社長之ヲ任命シ選擧ニ依ル委員ハ別ニ定ムル選擧規則ニ依リ之ヲ選擧ス

第三條選擧ニ依ル委員ノ任期ハ滿一箇年トス

但場合ニ依リ社長之カ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第四條本會ハ毎月一回開會ス但必要アルトキハ臨時開會スルコトアルヘシ

第五條本會ハ會務ヲ處理セシムル爲メ主事、主任各一名及事務員若干名ヲ置キ社長之ヲ任命ス

勞働調査委員會委員選擧規則

第一條勞働調査委員會規定第二條ノ選擧ニ依ル委員ハ本規則ニ基キ毎年六月之ヲ行フ

第二條委員ヲ左ノ如ク定メ助手職工各級ヨリ之ヲ選擧セシム

助手　二名　職工　三名

第三條選擧人ハ選擧名簿調製前滿六箇月以上引續キ勤續セル助手職工ニ限ル

被選擧人ハ選擧人タルコトヲ要ス

選擧人名簿ハ毎年五月二十一日現在ニ依リ之ヲ調製ス

第四條選擧ハ選擧委員ニ依リテ行フ

第五條選擧委員ハ各所掛ニ於テ其所屬助手職工別ニ依リ一名ヲ單記無記名ヲ以テ選擧スルモノトス但助手職工別總數ノ二十分ノ一以上ヲ有スル所掛ニ於テハ其二十分ノ一ヲ増ス毎ニ一名ヲ選擧スルモノトス

第六條委員ハ連記無記名ヲ以テ投票ス

第七條投票所、日時及方法ハ其都度之ヲ定ム

こんな調査委員會でも無いよりましだと云へばましだがこの調査委員會をどんなに運用して、交渉團體と連絡を取るかゞ疑問である。會社も勞働者を馬鹿にしたものである。

四、地方裁判所の控所

七月一日午後一時に私は大阪地方裁判所に證人として出頭を命ぜられた。その日證人として出頭を命ぜられたものは藤永田造船所の支配人格の前野芳造君と藤永田罷工團の第二實行委員長の村田君と私の三人であつた。

朝の九時から前の二人は呼び出されて居るのだがまだ前野氏一人がすんだばかりであつた。それで私は四時に出直すことに

した。

四時に來てみたが、まだ村田君の取調がすまない。それで私は證人控所でうと〳〵居睡して居た。裁判所で待たされることは、新聞紙法違反で前科二犯あるだけに慣れて居るが、白壁に高い天井で、一言云つても天井から强い反響があるのが氣になつて、壁に額でも掛つて居れば待つにも餘程樂なのだがと思つた位であつた。正月からの眼がまだ癒えないで小さい文字が見え無いから本も何にも持たずに來てみると隨分退屈である。然し居睡の工夫だけは知つて居るので、私は居睡禪をやつて居た。

二十分程たつと村田君が出て來て、私は秋山豫審判事の室に這入つた。隨分丁寧に扱つてくれて、宣誓の濟んだ後に、西尾君外七名のものが藤永田造船所事件の際に同情罷工の宣傳ビラをまいたことに就て尋ね始めた。

五、判事の聽取書

『あなたは此事件に何日頃から關係せられたのですか？』

『そうですね、私はハッキリ覺えて居りませぬが五月廿七日であつたと思ひます。西尾末廣君と東忠續君とが、神戸の私の宅に見えられて、大罷業事件で大阪の勞働者はみんな疲れて居るから、賀川さん一つ藤永田の勞働者がストライキをしたいと云つて居るのを止めて下さいませんかと云ふ相談を受けたのでした。それが、この問題に關係し始めた最初でした。』

檢事の室は十二疊位い敷ける無風流な證人控所と同じ作りの室で、書記は我等とは斜の机に座つて居た。秋山檢事は唇をパチ〳〵少し明けたり閉じたりし乍ら聞いてゐた。

『それからあなたはどうしたのですか？』

『その翌日でした。西尾君が賀川さん藤永田の勞働者は六ケ月間解雇しないと云ふ保證と「カシメ？」の部分の請負制度の改良だけを會社に保證をさせさへすればストライキをしないでしようから。その保證を取つて來て下さいませんかと云はれたので、私は晩の九時頃自動車で飛んで行つたのでした。そして永田三四郎氏――敷津分工場の所長ですね――それと武知技師に會つたのでした。然しその時はもう既に遲かつたのでして、嘆願書を持つた實行委員三名が永田三四郎氏の私宅に行つて居りました。』

そこで判事は大きな厚い聽取書の中から藤岡文六君の云つた部分を擴げて、……

『なんですか、藤永田事件が大きくなると考へたので あなたと西尾君とが誰れか善い調停者が無いだらうかとさがして、大阪市助役の關さんがよからうと云ふので電話をかけたが居られなくて、それでは池上市長をと云ふので電話をかけたが、池上

さんも御影とかへ行かれて居て留守であつたと云ふのは？』
『全くそうです。それで私は單身出かけて行つたのでした。』
『それからあなたが二度目に大阪に來られたのは何時でしたか？……藤岡の云ふところによると、二度目にあなたが出て來られたと云ふのは、友愛會から松井某なるものが、幹部全部が檢束せられて大阪の本部が全滅になつたから出て來てくれと云ふので。あなたは、神戸聯合會の主事藤岡文六、堀義一そしてあなたの書生某と、あなたと四人で大阪に來られたと云ふのですが、それはほんとですか？あなたの書生と云ふのは名は何と云ふのですか？』
『岩崎と申します』
『そしてその晩あなたはどうしましたか？藤岡の云ふ所によると官憲が横暴をきわめて、實行委員全部を檢束し、幹部を全部檢束したものだから、一方に於ては官憲に向つて檢束者の釋放を迫り、他方に於ては藤永田造船所の反省を促す爲めに決議文を書きそれをあなたに見てもらつて運動を始めたいと云ふのは違いありませんか？
『その通りです』

六、覺書か覺書案か

『それから談判が不調に了つた前後の事情をきかして下さい。あなたが前野芳造氏と網の共益社の樓上で會見したのは何日でしたか？』
『それはたしか六月六日だと覺えて居ります。その前日私は朝の十時頃藤永田の本工場に行つて永田三四郎氏と武知技師に會つて團體交渉權の內容に關して說明いたしました。そしてその晩遲くか翌朝會社側の人達と會ふ約束をして別れたのでした。
すると六月六日の朝九時頃前野芳造氏が一人で私の泊つて居る共益社に來られて團體交渉權に就て個人的に意見の交換をしたのでした。その場所には大阪聯合會の會長島碩吉君、神戸聯合會主事藤岡文六君、大阪聯合會委員柴二郎君などが同席して居られました。前野氏と私との間に交換されました覺書文句はよく覺えて居りませんが

一、藤永田造船所內に於て從業する勞働者を以つて組織する組合を交涉團體として認むべし
二、共團體の內容、組織、方針交涉の範圍及び方法に關しては工場主側と、勞働者より各四名の委員を選出し即時調査會を開催し審議決定すべし

と云ふようなものだと思つて居ります。』
『それは覺書であつたのですか、覺書案であつたのですか？』
『それは個人的に取りかわされた覺書案であつたのです。然

し勞働者側と資本家側が兩者共に了解することによつて正式の『覺書』となる筈であつたのです。そして私は午前十時頃に敷津から來た第二交渉委員十一名と會つた上、みんなに承諾して貰つたのでした、そして會社側は十二時頃まで相談かゝつて私と前野氏がいよ／＼正式に會見したのは十二時頃でした。こちら側には藤岡、島、柴三氏の立合人向側からは本橋と云ふ理事が立合つて、兩方共にこの案に意義の無いことになつたのです。

然し團體交渉權に意義が無くても他の部分賃銀値上げ、解雇手當の問題に就てはどうも談判が破裂しさうでしたから私は再三前野氏と交渉したのでしたが、先方の希望でそれらを團體交渉權とを離すことになり、正式に四名の調査委員を出すことにしたのでした。それで私はあの取換した覺書案は覺書となつたことと思つて正式の調査委員を出したのでした。』

『然し前野氏の云ふ所によるとあなたの方では約束を破つて、團體交渉權の外の問題まで持ち出したと云ふのはどう云ふわけなんですか？』

『その理由はかうなんです。その調査委員は第二實行委員から全部撰んだのでした。第一實行委員は四日の晩十一名全部檢束せられたので第二實行委員は再び第一實行委員の意志を繼いで出やうと云ふ考があつたので、調査委員であると同時に、第二實行委員として會社當局に向つて要求したい考を持つてゐたのでした。實は第二實行委員が第一實行委員の要求條項と全部同一のものを提出したいと云ふたので、私としては書き直して出した方が善いと云ふたのでしたが、委員は殆ど全部疲れて居て、書き直す勇氣もなく、そのまゝ持つて行つて出したのです。それで覺書だ、覺書案だとの押問答をして居る上ですから、第二回の要求書を見て會社側も怒り、談判は全く不調に了つたのです。

『官憲の壓迫に就てあなたはどうお考へになりますか？』

『それはお話にはなりません。田中警察部長は大分縣の知事となつて赴任せられる。藤沼警察部長はまだ京都から赴任せられない、加賀美高等課長は病氣で寢て居られる丁度その間でしたが、どう云ふ都合ですか、演説會と云ふ演説會は會場を借れ無い、委員は全部檢束する。西尾君始め幹部は凡て引張れると云ふ有樣ですから仕事も何にも出來ないのでした。元來がこの罷工は進んで始めた罷工ではありませんでしたから、幹部が居れば出來るだけ穩かにすませたいと考へて居たのでしたが、官憲の壓迫振りがあまりに亂暴ですから、みな怒り出したのでした。』

『つまりなんだね、演說會は開かれず、委員は檢束される手も足も出ないので、仕方なしに同情罷工の宣傳ビラをまいたわけだね。』

『まアそんなことですね。』

『島を始め西尾、藤岡、東、常石、柴、瀨尾、早川などは平常からストライキを專門にやつて居るものかね？』

『以つての外です。揃ひも揃つておとなしい人々です。初めに申上げました通りに藤永田のストライキを止めたいから私に盡力してくれと云つて來られたような方が、どうしてストライキを專門に商賣として居ると云ふようなことがありますか。殊に島君にしても、常石君にしても、早川君にしてもみな實に柔和なおとなしい人ばかりなんです。早川君は數年間住友伸銅所に精勤をした人でありますし、常石君は住友電線所に二十年間も組長として勤務して居る人なのです。島君でもそうです。實におとなしい穩健な思想を持つた人なのです。これらの人々がどうしてストライキを專門にするなどその考が起るものですか？』

『よろしい、本日は之れで止めておきます。』

それで私は豫審判事の室を出て、雨の中を天王寺公會堂の演說會に向つた。

七、同情罷工と警官

演說會は警官糾彈演說會であつた。出る辯士も、出る辯士も藤永田事件に關係した事件で警察が横暴であつた事實を報告して居た。或者は泉尾署で六十三のゲンコツを喰らつたものもあれば、警察署で竹刀で前脛を血が流れ出る程擲られたものもある。十人も並ばせられて『友愛會がなんだ鈴木文治がなんだ』と頬ぺたを擲られたものもあるので

實際、藤永田事件で警察が取つた方針はたゞもう亂暴と云ふより外に言葉はないので、あれでは人民は少しも警察を威嚴あるものとは考へなくなるだけである。それはゴロツキの上等なものであると云ふ感じを與へたに止る。

前野氏の私宅を襲撃したと云ふのは如何にも大きな事件として報告せられて居るが、前野氏の宅での實際の損害は硝子四五枚を石で破られた位だけである。玉出方面の鈴木氏の私宅でも同樣で掛の板一枚と軒燈をやられて居るだけである。勿論巡査との衝突は甚しかつたらしい。然しそれとても死傷者の出なかつた位だから大抵の想像はつく。

住吉方面で警官と衝突した場合でも、實際は警官が無理であつたようである。もう十分もたてば解散して居るものを無理矢理に群衆の中に突破する警官の一隊は勇氣があると云へば勇氣

があるが、無謀と云へば無謀である。

實際三千人から罷工團をまとめるには運動會でもして大きな處で集會するより道は無いのである。それで一萬人からになるとサボタージユをするより外に方法が無いとせられて居る位である。その邊の事情も知らずにたゞ資本家に味方して、勞働者の集團と見ればすぐ解散を命ずると云ふのは警察官としては非常識にも程があるのである。

六月八日の晩、同情罷工の宣傳ビラが大阪市の各工場にまかれた午後十二時頃、私も拘引せられる所であつた。然し私は拘引狀を見るまでは動かぬと云つて座つたまゝ動かなかつた。私は刑事に同行を求められので檢束される爲めに行くと同志のものに云ふたのだが、そうすると同情罷工が豫想以上に波及して拾收に困難するだらうと忠告するものがあつたので思ひ止ることになつたのであつた。

藤永田の最後の幕は前野氏の宅の前で警官と勞働者との大衝突のあつた後、鈴木君は東に歸り、私は十九日の日曜日一日神戸に歸つて消費組合の總會に費し、月曜日（二十日）に再び出て捲土重來の勢で罷工團の結束の堅くなりつゝあるのを見て色々本部の松岡駒吉君、西尾君の代理をして居られる木村錠吉君などと協力して行商の方法、演說會場の相談などをして居る處へ、大阪市會議長を十年もして居られた大阪市の志士と云はれる日野國明氏が尋ねて來られて、仲に立つてやらうと云はれたので勞働者側は日野氏に一任することになつたのである。日野氏と前野氏との協議は二十日と二十一日の二日間かゝつたが、結果は次の通りである。

覺書

一、勞働者が他の勞働團體に加入するの自由を妨げず

二、去る八日附回答の（ロ）の交涉の範圍は大要左の事項となすの意志なり

（一）一般的賃銀の增減（二）作業時間の伸縮（三）保健、衞生、互助共濟其他職工全般の福利增進の爲にする事項

三、今回に限り任意退職者と雖も六月八日附回答書第五項に準じ手當金を支給す（六箇月未滿三十日、一年未滿四十五日、一年以上の者は一箇月增す每に一日分を加算す）

臨時職工は之に準ず

其他は總て六月八日附回答案を承認す

「備考」八日附回答書の「一の口」は次の通りである

其團體の內容組織方針交涉の範圍及び方法に關しては工場主側委員と全勞働者と隔意なき方法に依り選出せる相當人數の從業員側委員とを以て直ちに調査會を組織し研究の上直に決行す

此覺書の方が先の『大電』のものより進んで居ることは云ふ

までも無い。これであれば横斷組合は認めるし、交渉範圍は確定するし、同じ調査會と云ふのでも大電のような茫然たるものでは無い。然しまだどうも勞働者側には不滿足な點の多いことは隱すことの出來ない事實である。

然し『團體交渉權は一切認めぬ、横斷組合も認めぬ』と頑張つて居たものが、勞働者側の強い壓迫の前に降伏したことは可哀相だと云へば可哀相である。そして藤永田の罷工は六月廿二日の午後九時三十分無事に解決したのであつた。

八、住友の三角同盟

住友の場合は勞働者側も資本家側もその態度に於て堂々たるものが有つた。女工を混えて三千の職工が大阪市内を示威運動をして練り廻つたのは大阪に於ては始めてのことであつた。

最初ののろしをあげたのは常石君が務めて居た住友電線であつた。近因は常石君を會社が宣傳ビラをまいたと云ふ理由で名指して警察に渡したと云ふことにあつたらしい。「電線」が動くと、製鋼も動くと云ふわけで、住友の三角同盟が立つと云はれて居たものが、その中の二つまでは立つたのであつた。

同情罷工のことが問題になつた時に三角同盟は購買組合共濟社の二階に寄つたのであつた。その中伸銅工組合だけは本工場分工場を混ぜて四千人の中に千二三百の組合を持つて居るのであるが、たゞ團體交渉權だけの問題の爲めならば起つが、その外のことで無ければ立た無いと云ふのであつた。ところが「電線」は他の要求條項を入れると云ひ、製鋼もそれには猶考へる必要があると云ふので案が纒ら無くて立ち別れたのであつた。

然し「電線」も「製鋼」も立つた以上「伸銅」も立たねばならないので先づ會社に警告書を發することになり二十四日にそれを住友合資會社の理事に向つてそれを送達した。

するとそこへ小幡公使の兄さんで先の造船總監であつた工學博士小幡文三郎氏が飛び出して來た。同氏は先の伸銅所長であつたが、淨土眞宗の狂熱的な信仰を持つて居る人で、左の腕に珠數をかけて法に囚れて居る人である。

然し眞面目に私に相談を持ちかけられたので、私も團體交渉權のことだけならば電線、製鋼、伸銅の諸工諸君の意見を纒めると云ふことを約束し、小幡氏も住友の理事の意見を纒めるとゝとになつた。

九、住友王國の動搖

六月廿七日、住友の總理事鈴木氏も興津の保養地から腎臟炎を押して出て來る各理事支配人等二十四人のものどもが相談を始めて、朝の九時から翌朝の三時半まで相談して遂に勞働者に對して、團體交渉權を確認することゝなつたのである。

その內容は私が小幡文三郎氏に示した案と少しも違は無いので、たゞ住友の名譽の爲めに自發的に出したように書かれて居るだけである。我慢の強い人々だと心の中では苦笑したが實質を獲得しさへすれば善いのだと思つたから、私等はそれで滿足した。それは次のようなものである。

一、六月十八日付を以つてせる當所回答第一條の趣旨は 其當時說明せる如く當所の職工が從來の通り任意に他の團體に加入する を得るものとす

二、又同回答中にある當所內職工の意見を徵する方法として は、議員の半數は當所指名の社員により、半數は職工の選出による工場協議會を組織し、勞働時間、物價指數の高低に順應する最低賃銀の增減、保健、衞生、危害防止、互助共濟、娛樂、休養、風紀、敎育、其の 他職工幸福增進に關し當所の諮問又は議員の 提案を審議調査し其決議を當所に提出せしむ可し

初め決議と云ふ所を拔いて居たがそれでは諮問機關であつて、今日住友系統にある懇談會と何等撰ぶ所が無いと云ふので蹴つてしまつたのである。すると小幡氏は「決議」と云ふ文字を入れて自動車で朝の四時に大阪驛の共益社に持つて來られたのであつた。

十、常識として團體交涉權

住友が團體交涉權を工場委員制度の形で認め、横斷組合の存在を確認してからは、他の小工場はみな團體交涉權を認めるようになつた。小野造船所も他所の認める程度の團體交涉權は認めると云ひ、相澤造船所すら、國粹會を中に入れて、他所の認める團體交涉權は認めると云ひ出した。

即ち横斷組合の確認と、工場委員制度は大阪に於ては常識となつて來たのである。國粹會は大震の時には團體交涉權は國家を亡ぼすと云ふてゐたが、遂には團體交涉權は横斷組合の確認と工場委員制度の範圍に於ては國家が亡び無いと知つたと見えてもうぐず〳〵云はなくなつた。

勞働者としては大勝利では無い。然し二ケ月に渡る大阪に於ける二十數ケ所の爭議に於て横斷組合を資本家に確認せしめ、工場委員制度を獲得し、組合の勢力次第で工場締付（クルーズド・ショップ）をなし得るまでに進んで來たことは失敗で無いことも事實である。

（七—四）

日本の組合運動史の一頁

――友愛會東京聯合大會所見――

山川均

一

日本勞働總同盟友愛會は、最大の勞働團體として、その大會は、日本の勞働運動の歸向を示す上にも、頗る重要な意義のあるものである。そして大會以前に開かれる東京聯合會の大會は、半ば總同盟大會の形勢を定めるものであるから、この大會が勞働運動界の注意を集めるのは當然のことである。

總同盟東京聯合會は七月五日を以て、第二回目の大會を開催した。この大會には、少數急進派(左黨聯盟)の提出する議案について、多少の波瀾のある可きことは、何人も豫期したところであるが、大會の波瀾は、恐らく何人の豫想にも過ぎてゐた。少數派の退場、議場混亂の結果、司會者は唯だ只管らに議事の終了を急いだと見え、幾多の重要な議案は、提出者の説明もなく、一言の討議もなしに議決された。中には議案が讀み上げられたゞけで、投票又は擧手等による、採決方法をも用ひないで、唯だ議長の『多數』といふ聲とカヴエルの一撃とで、可決されたものや否決されたものさへもあつた。私は組合大會の席上に、議論の多いことを悲むものではない。そして議論の爲に、少數派の退場を見るようなことも、必ずしも珍らしい事ではない。單に珍らしい事でないばかりか、主張と所信とを異にする人々が、各々其主張と所信とに忠實な所以として、寧ろ喜ぶ可き場合が多いのである。私はこの大會が、二つの意見に分れたことを悲しむものではなくて、この重要な大會に於ける重要な議案に就いて、充分な討議――と云ふよりも、少しの討議をも聞き得なかつたことを悲むものである。組合の大會が、樂長の指揮杖につれて歌ふ唱歌隊のように、議長の指先きの動く辿りに、單に豫定の議案に、豫定の贊否を與へるだけのものに過ぎないなら、それは資本家階級の議會制度と、何等の選ぶところがない。

二

大會は急進派の謂ゆる『知識階級的指導の排斥』によつて多少の波瀾を豫期せられてゐた。從來の規定によると、聯合會の主

事は總同盟の大會によつて選出され、當然聯合會の總務委員會に席を占めるものである。總務委員會は、大會閉會中に於ける最高の決定機關であつて、主事はその決議を執行する機關であると同時に、總務委員會の委員長たる實質を有して居る。之に對して急進派の主張は、主事を以て總務委員會の下にある、純粹の有給事務員たらしめようとするものである。そこで急進派の主張は、必ずしも知識階級出身者が、組合運動に協力することを絶對に排斥するものではなく、組合の最高の決定權を完全に勞働者の手に收め、この決定に從つて行動する執行機關のうちには知識階級出身の有給役員を用ひようとするものである。(急進派代議員が新聞記者に與へられた說明に據る)この點に於ては、急進派の謂ゆる『知識階級排斥』の聲は、多くの人々の耳に響くほどに異常な聲ではない。勞働者自身がその組合の實權を握ることは、寧ろ當然のことであつて、之に反した組合運動こそ、變則の形態であると謂はねばならぬ。從つて此點に就いての急進派の主張は、恐らく組合勞働者の間に、一人の異論もないところでなければならぬ。獨り勞働者の間に異論の無いばかりでなく、苟も組合運動に從事する知識階級出身者と雖も、固より之には異論がない筈である。若し組合運動の尙ほ幼稚な時代には、何等かの止むを得ぬ理由の爲に、知識階級出身者の『指導』が必要であるとしたならば、この『指導』は、組合運動をして一日も早く斯ような狀態から脫せしめる爲めの指導でなければならぬ。假りに今日まで、知識階級出身者の有給役員が、組合員に加はつて、組合の行動を決定する實權を握らねばならぬ狀態にあつたとしたならば、是等の知識階級出身者は、この變則の狀態から一日も早く脫却して、組合勞働者自ら其組合の決定權を握るの日を來らすことを、第一の任務とし、第一の熱望とした筈である。斯ように勞働者自ら組合の決定權を握り、知識階級出身の有給役員は、この決定を實行する爲に、各々その專門の知識を以つて勞働階級に奉仕するが如き組合組織を實現することが、急進派の主張であるとしたならば、この主張は、恐らく組合運動者全體の主張であつて、何人にも異論の餘地のないところである。

三

組合運動が斯ような狀態に達したなら、謂ゆる『指導』の問題も、其大半が解決せられるに相違ない。組合運動は人によつて指導せられる可きものではなくて、意見によつて指導されなければならぬ。知識階級出身者が、組合の內に特定の位地を占めて居る爲に、常に是等の知識階級出身者の意志が組合を支配するといふことになれば、初めてこゝに『指導』に對する問

題が起つて來る。そこで組合運動は人によつて指導されず、最も優ぐれた意見によつて指導されなければならぬ。其意見が有給役員から出て來ようが、平組合員から出て來ようが、乃至は知識階級出身者から出て來ようが、固より問ふところでない。否な時としては、組合運動を指導する思想と意見とは、組合以外から出て來ても、若くは外國の勞働者の體驗から生み出されたものであつても、差支はないのである。

そこで知識階級出身者が、純粹な有給事務員の立場に下り、そして其思想と意見とが、他の組合員の思想と意見と平等の立場に置いて自由に比較され、自由に討議され、そして最も優ぐれた思想と意見とが組合の行動を指導するようになつたなら、謂ゆる『指導』の問題は自然に消滅するに相違ない。組合運動は、徹底的に人物中心的の思想を脱却して、意見中心の運動とならねばならぬ。

急進派から提出せられた、總務委員選擧方法改正の議案は、恐らく斯ような立場から立案せられたものであつたらう。但しこの選擧方法の改正が、右の如き主張の實現に、どれだけの實際上の效果があるかは、自づから別問題であつて、大會の席上に於いて、此點が充分に説明し討論せられなかつたことは、甚だ遺憾であつた。

四

斯ような重要な一般原則の問題について、この大會には、多少の波瀾が豫期せられてゐた。ところが此の重大問題の討議に入らぬ前に、意外の問題の爲に、大會が混亂狀態に陷入つたことは、如何にも殘念であつた。

黑色勞働組合(舊城東聯合會龜戸支部)其他の小支部が當然、大會に代議員を選出する權利を有すべきものであるか否かは、局外者には明らかでない。多數派は規約の正文によつて當然その權利が無いと云ひ、急進派は規約によつても、慣例によつても、當然その權利を有すると主張する。この點に就ても、議場に於て充分の討議を見なかつたことは遺憾である。殊に發言權の前後に就いて議長横暴の聲が起り、議場が混亂狀態に陷入つて居る間に、何故か議長はあはたゞしく採決を行つて少數を宣したので、左黨は退場した。之より以後の大會は、左黨に同情する傍聽者の喧騷と妨害との爲に、議長は唯だ閉會を急ぐばかりで、幾多の重要な議案は唯だ議長によつて朗讀され、殆ど議案の説明もなく、討論もなく、時には採決の形式をすらも踏まないで、さつさと片附けられ、殆んど大會の意義をも價値をも失つてゐた。

黑色勞働組合を東京聯合會の一支部と認めるかどうかと云ふ

こと、次ぎには、黒色勞働組合に代議員選出權を與へるかどうかと云ふことは、兼ねてから問題になつてゐたが、大會以前に總務委員と急進派との間には一種の妥協が成立し、急進派からは大會に於て形式的の質問を發し、總務委員は之に對して釋明を與へた上、改めて黒色組合の代議員を列擧させて議事を進める手筈になつてゐたといふことである。(急進派側代議員が新聞記者に與へられた說明に據る。)これを事實とすれば、議長が討議もそこ〳〵にして、急進派の要求を採決に附して否決し去らうとしたのは、如何にも解しがたきことであつて、之が爲に急進派が憤激して退場したのも、成る程と思はれる。いづれにせよ議長の態度には、少數派をして、議場に於て其所信を充分に表明せしめる寛容を缺いでゐたことは、深く事情に通じない傍觀者の目にも、均しく映じたところであつて、如何にも多數によつて、彼等の主張を一蹴し去らんとするかの如く見えたのは、惜む可きことであつた。

　殊に總務委員の一人は、黒色組合に代表權を與へなかつたのは、總務委員會の票決の結果ではなくて、棚橋主事の獨斷であるといふ驚く可き告白をしたにも拘らず、棚橋氏が斯かる疑惑を解く可き親切な說明を與へるの勞を取られなかつたことは、殊に遺憾とすべきことであつた。

五

大會の裏面に若し、斯ように隱れたいきさつがあつたとすれば、急進派の退場は咄嗟の行動とし、無理からぬところがある。けれども議場に於ける策戰には、尙ほ再考の餘地が殘つてゐたと思ふ。

　急進派の退場後、多數派からは、議長が責任を負ふて辭任することを條件にして、復席の交渉をしたと傳へられて居る。そこで若し之を事實とすれば、急進派の爲に計れば、この條件によつて再び議席に就き、總務委員選擧方法の變更、大會の宣言等の如き重大問題に就いて今一度戰ふことが有利であつたと思ふ。殊に幹部提出の議案のうちには、加盟組合が豫め總務委員會の同意を待たずして決行した罷工に對しては、聯合會は援助を與へないといふような、極めて重大な議案がある。この議案は、一般勞働者の罷工權を幹部の手に收めようとするものであつて、昨年の總同盟大會には關西の賀川氏等によつて提議され、主として關東側の反對によつて、否決せられたことがあると記臆する。今同じ議案が東京聯合會に提出せられた譯であつて、この議案の得失は別として、極めて重大な意義のある議案であることは爭はれぬ。急進派の代議員諸君は、議長の辭任といふ妥協の交渉のあつたのを幸ひに、是等の重大議案について

發言する機會を捕へ、今一戰を試みた上、形勢次第では、その時再び退席してもよかつた筈である。

大會に於ける急進派の行動は、多數派（乃至は議長）に對する抗議(プロテスト)としては有効であつたに相違ない。けれども私はそれと同時に、組合の内部に對する宣傳に就いても、今一段の努力を希望するものである。急進派が復席して再び討議に加はつても、或は問題ごとに少數を以つて敗れたかも知れぬ。けれども組合の内部に對する、宣傳の効果は收め得たに相違ない。況んや退場を共にしなかつた電氣鐵工の代議員諸君のうちには、重大問題に就ては、結局急進派と進退を共にせんとした人があつたと云ふことである。

六

大會を通じて最も遺憾としたことは、多數派代議員諸君の無氣力である。急進派の退席が止むを得なかつたとしても、其後に於ける大會を立派に進行させてゆくことは、多數派代議員諸君の任務でなければならぬ。ところが其後の大會には、秩序が無かつたばかりでなく、何等の生命も無かつた。諸君は議長が傍聽席の怒罵と足踏みとのうちに、僅かに朗讀する議案に對して、折々手を擧げる以外、何事をもしなかつた。最後に朗讀せられた宣言文に對しても、諸君は朗讀の終るをも待たないで、手を擧げることに急であつた。けれども諸君のうち一人と雖も議長の朗讀を聽取し得たであらうか。殊に急進派の退席後は、大會は全く傍聽者の爲に蹂躙し去られた觀がある。時には諸君の擁護する棚橋氏が、議長席から引落されようとしたことも再三であつた。そして四十有餘の多數派の代議員諸君は、さも他人の喧嘩を見物するような平氣さを以つて、終始傍觀して居つた。私は之が紳士的の態度であるのか、又は何等の主張と確信とにも動いて居らぬ人々の無氣力さであるかを疑ふものである。唯だ一人の青年代議員が、敢然として起つた。私は思想と意見に於て、多數派と急進派とのいづれに左袒するかといふ問題を別にして、この勇敢な一青年代議員の行動に、非常な尊敬を禁じ得なかつた。

七

最後に私は、傍聽者諸君の態度に對しても、多少の希望がある。固より傍聽席にも、現に組合に屬する人々があつた。が諸君組合員たる限りは、自己の組合の大會に於ける諸君の行動に對しては、局外者たる私は何等の言議を挿まない。けれども傍聽者のうちには、組合以外の人々のあつたことは事實である。そして是等の諸君は大抵、急進派の同情者であつた。從つて諸君が急進派代議員の憤ほりを、自己の憤ほりとせられたことて

も道理がある。從つて諸君が横暴と信じた議長に對して、抗議の意志を表明せられたことも、無理とは云はれない。けれどもそれと同時に、組合大會は組合勞働者の大會であることを忘れてはならぬ。勞働運動は勞働者自身の運動であると叫ばしめるその同じ貴い精神は、やがて組合の大會に於ては、組合勞働者の自治を尊重しなければならぬといふ要求ともなるのである。局外者はどこまでも、勞働者の集合の自治を尊重したいと思ふ。勞働運動は、勞働階級全體の利害に關する階級的の運動である。從つて組合以外の人々と雖も、固より純然たる傍觀者の態度を以つて組合運動を傍觀することは出來ぬ。從つて自分と思想や意見を同くする組合員を局外から支持し、大會に於ける其鬪ひを助けることも當然のことである。私は決して此誠意と熱情を非難するものではない。けれども吾々は出來得る限り、組合勞働者の自治の精神を害はないような方法を選ぶことを忘れてはならぬと思ふ。若し當日の大會に於ける傍聽者の行動が、組合員自身によつて爲されたなら、同一の行動にも、一層の價値があつたに相違ない。

東京聯合會の大會は如何にも悲む可き光景に終つたが、之を以つて組合運動の前途を悲觀する者があるならば、畢竟皮相の

觀察者たることを免れぬ。組合の内部に於いて、異なつた思想や意見の戰ふことは、悲む可きことではなくて、勞働組合の運動が質的に進歩する爲めには避けがたき過程であつて、寧ろ喜ぶ可き傾向である。若し悲む可く憂ふ可きことがあるとしたならば、それは意見の相鬪ふことではなくて、意見の鬪を無暗に恐れることである。異りたる意見が大膽に鬪はされ、自由に討論された上で、最も優ぐれた思想と意見とを、率直に採用する習慣が養はれぬ限りは、組合運動は發達する筈がない。そして此慣習が養はれてこそ、人物中心の運動は意見中心の運動となり、特定の地位に立つ人の指導がやんで、初めて最も優ぐれた思想と意見とが全運動を指導するに至るのである。

人種的偏見の哲學的解釋



ジョン・デユウイ

普通に、人種的偏見は道徳的見地から論ぜられてゐる。即ち、人種的差別を否とするか、又は是とするかを目的として居る。然しそれは先づ科學的に論ず可きものである。吾々は之を道徳的に取扱ふ前に、之を分析して、その原因を發見すべきである。曾て人間は、生理的故障を先づ科學的に理解しようとせずに、いきなりこれを道徳的手段によつて治療しようと試みたこともある。病氣を直すのには、訓誡と祈禱とをすればいゝといふことになつてゐた。これは大した效能もなかつた。精神療法の場合の如く、時には道徳的方法も、治療をする上に有利な心理狀態を誘致するものではあるが、その結果は、その主張せられた方法の關する限りでは、偶然的のものである。人間が病氣の忌まはしき性質を一時

も道理がある。從つて諸君が橫暴と信じた議長に對して、抗議の意志を表明せられたことも、無理とは云はれない。けれどもそれと同時に、組合大會は組合勞働者の大會であることを忘れてはならぬ。勞働運動は勞働者自身の運動であると叫ばしめるその同じ貴い精神は、やがて組合の大會に於ては、組合勞働者の自治を尊重しなければならぬといふ要求ともなるのである。局外者はどこまでも、勞働者の集會の自治を尊重したいと思ふ。勞働運動は、勞働階級全體の利害に關する階級的の運動である。從つて組合以外の人々と雖も、固より純然たる傍觀者の態度を以つて組合運動を傍觀することは出來ぬ。從つて自分と思想や意見を同くする組合員を局外から支持し、大會に於ける其鬪ひを助けることも當然のことである。私は決して此誠意と熱情を非難するものではない。けれども吾々は出來得る限り、組合勞働者の自治の精神を害はないような方法を選ぶことを忘れてはならぬと思ふ。若し當日の大會に於ける傍聽者の行動が、組合員自身によつて爲されたなら、同一の行動にも、一層の價値があつたに相違ない。

東京聯合會の大會は如何にも悲む可き光景に終つたが、之を以つて組合運動の前途を悲觀する者があるならば、畢竟皮相の觀察者たることを免れぬ。組合の內部に於いて、異なつた思想や意見の戰ふことは、悲む可きことではなくて、勞働組合の運動が質的に進步する爲めには避けがたき過程であつて、寧ろ喜ぶ可き傾向である。若し悲む可く憂ふ可きことがあるとしたならば、それは意見の相鬪ふことではなくて、意見の鬪を無暗に恐れることである。異りたる意見が大膽に鬪はされ、自由に討論された上で、最も優ぐれた思想と意見とを、率直に採用する習慣が養はれぬ限りは、組合運動は發達する筈がない。そして此慣習が養はれてこそ、人物中心の運動は意見中心の運動となり、特定の地位に立つ人の指導がやんで、初めて最も優ぐれた思想と意見とが全運動を指導するに至るのである。

人種的偏見の哲學的解釋



ジョン・デユウイ

普通に、人種的偏見は道徳的見地から論ぜられてゐる。即ち、人種的差別を否とするか、又は是とするかを目的として居る。然しそれは先づ科學的に論ず可きものである。吾々は之を道徳的に取扱ふ前に、之を分析して、その原因を發見すべきである。曾て人間は、生理的故障を先づ科學的に理解しようとせずに、いきなりこれを道徳的手段によつて治療しようと試みたこともある。病氣を直すのには、訓誡と祈禱とをすればいゝといふことになつてゐた。これは大した效能もなかつた。精神療法の場合の如く、時には道徳的方法も、治療をする上に有利な心理狀態を誘致するものではあるが、その結果は、その主張せられた方法の關する限りでは、偶然的のものである。人間が病氣の忌まはしき性質を一時

無視して、或る條件の存在する處には必ず之に伴ふ、すべての自然の出來事を研究すると同様に、之を研究するようになつた時、科學は初めて起つたのである。人種的偏見を論ずるにも、之と同一の方法に依らねばならぬ。吾々は道德的迷信から自己を解放せねばならぬ。何故なれば、その弊害を說き、之を抛棄せよと訓誡することによつて、それを除くことが出來ると考へるのは、迷信であるからである。生理的故障と同じく、社會的害惡にもその原因がある。それを取り除くには、その原因を亡くすほかなく、其原因を取除くには、まづ其原因の何たるかを知らなければならぬ。精神は刺戟を受け易いもので、ある程度までは、道德的手段によつて變化さすことも出來るものであるけれども、この方法の效果は、精神療法の如く、間接的である。之に依つて救治せられるものが多い譯ではない。二三人でも治療せられることは結構である。けれども必要なのは物それ自身の撲滅である。そしてこれは、病氣や大雷雨を生ずる他の條件を知ると同じく、之を生ずる所の條件を洞察する力に俟つの外ない。人間の心は變化されなければならないが、然し大衆の心を變化させる最良の方法は、彼等に或る見解を抱かせる所の條件を變化することとである。

人種的偏見は極めて廣く傳播しても居るし根柢も深い病氣であつて、その原因を明かにすることは容易でない。歐羅巴に於ける宗教的迫害、曾て自ら迫害を受けて憤つた信者が、機會を得るや否や、今度はあべこべに他の宗派を迫害したことは、珍しくない。昔壓迫せられてゐて、近頃解放せられた、歐羅巴の民族中のあるものは、今やその新版圖內の少數者たる民族を壓迫してゐる。同じ現象は人種的差別の場合にも目擊することが出來る。日本人は西洋人に對して不平を鳴らすが、自分は自分で朝鮮人や支那人に對して差別を設けてゐる。蒙古人は彼等に對する支那人の偏見に不滿を唱へてゐる。そして、又恐らく何處かに、蒙古人に對して平かならざる人種があるであらう。して見ると、人種的反感の現象は頗る複雜で、廣汎に涉つてゐるから、吾々は直ちに科學的結論に到達することを期し難い。然し何處かに端緒を見つ

けなければならぬ。吾々は精密な、正確な分析に達し得る前に、ざつとした、大掴みの分析をしなければならぬ。そこで吾々は出來るだけ客觀的に現象を研究し、之を生ずる原因中の最も明かなものを算へて見ることにしよう。

斯ように廣く傳播してゐる事實には、必ず根抵に單純な基礎があるに相違ない。私の考へでは、吾々は先づ一般に偏見の心理學的性質を考察しなければならぬと思ふ。偏見については心理學の異なる二學派が、二種の異る説明を下してゐる。主智派は偏見を以て、一つの判斷、卽ち十分に事實を吟味しないであはたゞしく下された、不備、不完全な判斷に過ぎぬと考へる。偏見(prejudice)といふ單語はその形式上、判斷(judgment)と關連してゐる。然しこの單語は又、偏見は不備な判斷ではなくて、判斷の前に働く或る物であることを暗示してゐる。そこで今一つの學派は、偏見は理知といふよりも、寧ろ本能及び情緒の一表現であると説明する。吾々が理知を十分に働かせないで、一躍して結論に達するが故に、吾々は時として不合理に陷ることもある。けれども又吾々は、全然推理せず、衝動や欲望に驅られて、直ちに反應的に行動する爲に、不合理に陷ることもあるのである。この種の不合理はより原始的であり、より根抵の深いものである。それは吾々が事實を探究せず、不十分な證據の上に結論を築く場合に働くものである。さういふ場合には、吾々に、碌に考へもせぬうちに思索を中止して、一躍結論に到達させるような原因がある筈である。この原因とは吾々の願望、希望及び恐怖、卽ち吾々の本能的反作用の影響である。偏見は、丁度吾々が何をしつゝあるか、如何にして又何故さうするのであるかを考へる暇もなく、打擊に對して身を替はしたり、瞬きをしたりするやうに、思慮なしに躍出るものである。吾々が愛する者の缺點又は憎む者の功績を、容易に認めることの出來ぬのは、普通のことである。恐怖や疑惑を養ふような原因は、いつでも澤山ある。故に偏見は思索より以前に現はれる自然の嫌惡であり、且つそれより後に起つて來る思想の方向を轉じて、その偏見と同じ方向に進ませるものである。

さて人種的偏見の廣汎な事實を說明し得るに至るほどの、一般的な本能は何であるかと探して見ると、何でも新しいもの、珍らしいもの、普通でないものに對する一般的の反感が目につく。何でも習慣を外れたもの、又は吾々の見慣れたものと丸きり異つたものに對しては、恐怖と憎惡との、强い自然的反作用が起るものである。吾々は習慣は第二の天性といふことを口にはするが、この諺に含まれてゐる文字通りの眞理を認めることを忘れてゐる。敎養のない心にとつては、習慣を無視したもの、又は一般と異る標準や法則を打立てるものは、不自然に又は超自然にさへも思はれる。その結果、見慣れぬ人、他人、局外者などと云ふのは、地理的な言葉ではなくて、寧ろ心理學的な言葉である。習慣は吾々るのであの觀察、信仰及び鑑賞の標準を作つてゐる。吾々は習慣と一致するものを好み、習慣とかけ離れてゐるものに遇へば、不安を感ずる。習慣の及ぼす影響は、それが意識せられぬために一層大きい。吾々は習慣に從つてゐる時には、自然に從つてゐると考へる。されば外來人、外國人は、單に吾々と地理的產　を異にするばかりでなく、生活振りや考へ方や、感じ方に於ても全く異つてゐるのである。

人類學者は、原始野蠻人は、すべて見馴れぬものに對しては、どれほど深く、憎惡を感じたかを示すために、多くの證據を擧げてゐる。亞弗利加旅行家リヴィングストーンは、多年亞弗利加にゐた後に、歐羅巴に歸つた時には、白人の顏を眺めると不愉快であつたと報じてゐる。白人の身體は病的に見えた。單に生理的に病的なばかりでなく、嫌忌と憎惡を起させるやうな、一種の道德的に病的なところを帶びてゐた。彼は多年黑人に接觸した結果、一定の標準を得て遂に少年時代の習慣は完全に壓倒せられたのであつた。この事件は些細なことに見えもしよう。然し斯ように些細な出來事の方が、議論よりも一層よく、憎惡と愛好とを決定する無意識的習慣の効果を明かにするものである。人間の皮膚の色は外面的なものである。けれども或る一つの色をもつと見慣れると、それだけで他の色を忌むといふやうな著明な

態度を作出したのである。この插話に就いて興味のあるのは。これはリヴィングストーンの意識的な思想や欲望より・深い原因から起つたので、リヴィングストーン自身が、他人と同樣、この自分の態度に驚いた點である。

習慣の効果が、單なる視覺の習慣に於てすらかうまで强いものであるとすれば、生活のあらゆる方面に關聯した習慣に於ては、それがどれ程强いかといふことを、吾々は想像することが出來る。さういふ場合には、外國人との接觸は甚しく奇異の感を與へるであらう。その國語の一語一句、その衣服の一事一物、その振舞の一擧一動は、すべて土着の人の習慣と異つて居る。多くの國語に於て、敵といふ言葉と、外國人といふ言葉とが、同意義をもつてゐるのも不思議はない。屢々外來人に對して示される歡待さへも、多かれ少かれ儀式的のものであり、賓客に對する眞情よりも、寧ろ外來者を宥和しようとする希望から出るものである。人間の想像の中には、不自然なものと、超自然なものとは一緒になつてゐる。未知の力を取扱ふ場合には、異常な、そして或は不思議で有害な力を宥和するのがよい。(外人に對する)儀式的な接待は、異常な力を制禦しようとする傾向を有するものである。

多くの人々は、蒙昧種族から借りて來た例證は、今日の文明人の狀態には適合せぬと考へるであらう。然し人種的偏見は、すべての偏見と同じく、理知に先んじて存在し、人間の本能に就ては、蒙昧人も文明人も大差はないのである。言語、服裝風俗、宗教、道德及び思想上の習慣の差異に對する自然的反感の中には、今日の如く、人種的偏見の原始的な、根本的な基礎があるのである。支那全土に行渡り、義和團事件に於て高潮に達した外人排斥の波は、特に人種問題といふ譯ではなかつた。それは人種意識と混合した、目新しい物に對する反感の例であつた。

然し或る情況の下に於けるこの感情は、容易に人種問題と結びつくものである。亞米利加合衆國に於ても、舊い移住者が新しい移住者に對して同じ感情を表はした。愛蘭人は新參の芬蘭の移住者に對して之を感じた。そして又彼等が定

住すると、彼等はその反感を南歐からの新來者に移した。近代に至つては、歐羅巴の東部及び東南部からの移住者が、怖れられ、疑はれる番になつた。一般に、初めに苦しんだ群團が、後に來る者に對して最も敵意を抱きがちである。そこで合衆國に根を下してから、眞先に立つて支那人を迫害したのは、主として愛蘭人であつた。

排外的感情は、社會的危機に際して最も猛烈に表はされるのが常である。何でも後から起つたことは、その前にあつた出來事のためだといふ觀念は、論理上明白に誤つてゐる。が、それにも拘らず、依然として一般の人はさういふ風な考へ方をする。社會は、暫時の後には、少數の外來者の存在に慣れて來、彼等は恐怖よりも、寧ろ嘲弄又は憐憫の的となる。ところが饑饉、疫病、敗戰、有名な指導者の死亡等の如く、一旦不都合な事件が起ると、忽ち、外國人に對して非難が加へられ、潜んでゐた排外的感性が喚び覺まされる。外國人の來ない間は、厭ふべき事件は起らなかつたのであるから、何でも多少外國人がその原因となつたに相違ない、と考へられる。支那の拳匪事件は、恰も國内の種々の難問題に際して起つた。多くの觀察者は、今日の饑饉に際して、支那では排外的感情が復活してゐることを報告してゐる。合衆國に於いては、大戰のための苦しみが、移民團に對する決然たる敵意を作出した。潜在しゐた猜疑心と嫉妬心とが蘇生つて、國内の外國人は明確な脅威であるといふ感情が燃え上つた。この敵愾心は後に論ずるやうに、政治的原因をも有するものであつて、勿論獨逸系の移民に關する場合に最も顯著である。然し政治的關係から全然獨立して、戰爭の危機とそれに附隨する危險との結果とが、外國人をして斯ような疑惑の的たらしめたのである。

私は珍らしい、新しい、そして變つてゐる物に對する反感を第一に說いたから、私が人種的偏見の本論を除外して居ると思はれる人もあるかも知れぬ。然し私は、考量や熟慮の結果でなく、本能的なものであるこの反感こそ、人種的偏見の根源であると信ずるものである。人種なるものは抽象的の觀念である。現今世界に於ける最も主要な人種の起原は

混成的なものであるから、科學に從へば、人種といふ觀念は、大體に於て神話的な觀念である。人間はそれに對して對應し得るやうな、具體的な、手で觸れ、眼で見得る何物かを求めるものである。そこで科學的意義とは異る通俗の意味での人種とは、吾々自身の習慣と異つてゐるが爲に注意を惹く所の、事實の集積に與へられた名稱である。考へなければならぬ大切なことは、變つたものに對する原始的の反感の事實が、如何にしてその他の要素を壓倒し、現今の人種的軋轢の現象を生ずるに至つたかといふことである。

先づ第一に吾々は、大部分の人間に取つて、確實な人種の符牒である不變的な生理上の相異を擧げる。一般に吾々は目新しいものに慣れて來て、今では最早餘り目新しく思はない。然し亞弗利加人の黑色、歐羅巴人の白色、亞細亞人の茶褐色及黃色等の色の相異は、不變であり、猶太人獨特といふやうな容貌の相異も亦不變である。さて斯ような生理上の相異は、大なる文明上の相異を表はす特徵的徵候となり、明瞭な記憶の材料となる。それは、さうでなかつたら直きに消えてしまふ差別の感じを、いつまでも生かして置くものである。それは無數の結合を破壞する、永久の種子を播くものである。其等は、もしそれが無かつたら氣づかずに濟むやうな相異點に、特に注意を呼び、最初に排外的感情を起させた差別感を強めて、その感情をいつまでも生かして置くものである。

所謂滑稽雜誌や舞臺の上に現はれる、外國人のポンチ繪や、外國人を種子にした、有りふれた安價な洒落を考へて見るがよい。そのコツはいつも、生理的相異を誇張するにある。舞臺に現れる芝居の中の英國人、佛蘭西人、獨逸人、猶太人は、常に一定の慣例的な生理的標型を有してゐる。さういふ固定した標型は、それがなければ多くの個人の間に散在して、個人的相異のために相殺し合ふ種々の聯想を、一個の型の中にまとめてしまふのである。日常生活に於ては、此原則は次のやうにして現れる。卽ち多くの相異點は純粹に個人的で、一人一人によつて違つて居る。若し吾々が或人から

不愉快な經驗を得たとしても、吾々はそれを一般化したり、他の人々にまで及ぼさうとはしない。吾々はその經驗を、その人一個人と結びつけて考へる。けれども若し或人が猶太人から不愉快な經驗を得たとすれば、其人はそれほどにその問題を個人的なことゝ考へない。彼は、その猶太人の現した面白からぬ特徴を、その個人と聯想せずに、その人が他の人々と共通にもつ生理的特徴と聯想して考へる。彼は、望ましからぬ道德的特徴を、同じ顯著な生理的特徴をもつ階級全體にまで嫁する。そこで猶太人全體に對する偏見が成立し、個人的相異は無視せられるのである。

排外的感情が、排人種的感情に變つて行く道程に關する此說明は、些細な要素に餘りに重きを置きすぎるやうにも見えよう。けれども人間は第一に、本能的な、又は非合理的な動物である。概括そのものからして、一つの場合の觀察を他の場合にもあてはめるといふ、非合理的な應用である。吾々が取扱つてゐる事實は、非合理的なもの、卽ち偏見であるであるから、吾々は、馬鹿げた要素が、途方もない勢力を振ふといふようなことを覺悟して掛らなければならない。皮膚の色や顏形の相異が非常な力を持つてゐるといふことは、明白な事實である。此事實は極めて不合理でありながら、極めて一般的であるから、吾々はその原因を人間の天性に共通の、非合理的な特徴の中に見出さなければならないのである。偶然的な聯想の力は、丁度さういふ要素に當つてゐる。

さて其次には、――時には理智で判斷し難いような働き方をする場合もあるにせよ――とにかく理智的な要素を含んでゐる力卽ち反感の原因となる所の文化的相異を論じなければならぬ。其樣いふ相異の一つは宗教、特に禮拜、儀式、寺院、衣裝及び象徵等の、外面的な、目に見える相異點が、宗旨の相異に附加された場合がそれに當る。此事實は疑もなく、西洋人に對する東洋人、東洋人に對する西洋人の一般的態度に影響を及ぼしてゐる。拳匪事件は宗教的相異に依て煽られた。其で親しみ易い、役に立つ宗敎家が眞先に犧牲となつたのである。若し今日、生え拔きの米國人が佛敎に歸依

して寺院を建てたらば、彼等は嘲弄されるであらう。けれども大體に於て、彼等は多く注意されまい。何故ならば、米國人は、謂はゞ風變りの宗教は、非道の專門家に委ねておくからである。けれども一旦支那人が彼等の『神廟』を持ち込んだり、日本人がその稻荷を持つて來たりすれば、米國人は不安に感ずる。それは彼等が、何等かの巧妙な方法で、米國人自身の制度が脅かされ、又は侵害されつゝあるのだと感ずるからである。

第二の文化的要素は政治的なものである。世間で人種的特徴と呼ぶものは、前に國民的相異と共に指摘した肉體的特徴の混合である。國民主義は今や殆ど純然たる政治的事實である。合衆國の黑人奴隸制度と、印度に於ける英國の支配といふことがなかつたなら、皮膚の色を基礎とした人種的偏見といふものは、現在に於ては餘り有力なものではあるまいことを或支那人が私に云つたが、私は甚に酷く感動した。此言葉には、非常な眞理が含まれて居ると私は信ずる。政治的要素は常に經濟的要素と結合してゐるものであるが、此言葉は、さういふ風に經濟的要素と結合した政治的要素の力を明かにして居る。政治的支配は、支配階級の內部に、一方は優越なもの、他方は劣等なものといふ信念を造り上げる。支配者と被支配者とが人種を異にする場合には、それは普通の偏見を、人種的差別に變化させる。一旦確立せられた支配の狀態は、服從的地位におかれてゐる人民は劣等である、といふ信念を是認させるような結果を生ずる。征服せられたる人民は、經濟上非常に不利な地位に在り、これが教育、及び總ての發達の機會の上に反作用を及ぼすのである。被征服國の人民は、官職に就くことを得ず、一切の權威ある地位及び支配階級との協同から除外される。かような事情の下に於て、彼等は自然に進歩を阻まれ、隨つて、先天的に劣等なものといふ信念を裏づけるような結果を伴ふのである。戰爭中、合衆國で應募兵士に對して行はれた心理的試驗に依ると、黑人は全體として一段劣つて居た。若し北米諸洲の黑人は、南米諸洲の黑人より、全體として明白に立ち優つてゐるといふ事實が無かつたなら、此事實は、拔き難き人種的不平等說の主張

者によつて大に利用されたであらう。北米の黒人は、決して公平な取扱は受けてゐないが、南米の黒人よりも、より良き機會をもつてゐる。斯様に、此試驗は、人種其物よりも、精神的發達の機會の有無が力をもつてゐることを示した。

政治的支配は、被征服者と同じく、支配階級の精神的傾向にも影響を及ぼす。それは尊大と輕蔑とを養ふ。のみならず、吾々は、自分が苦しめた人々を嫌つて、自分らの犯した罪を肯定するような口實を求める。合衆國に於ては、黒人は劣等な、奴隷的種族でなければならぬ、さうでなければ彼等は決して奴隷の狀態に置かれた筈がないといふ感情が非常に強い。若し彼等がアングロサキソン族と平等であつたならば、彼等は永久に奴隷とせらるゝことに甘んずるよりも、寧ろ全滅を賭して反抗したであらうといふ說が、常に唱へられる。私は、印度に於ける印度人は、彼等が從順にする程度に隨つて、愈々益々支配者の尊敬をかち得るものであると想像する。東洋人は此事實に餘り氣がついてゐないようであるが、男女による階級的區別と、人種による階級的區別との間には、密接な心理的一致がある。日本人や支那人に對する西洋人の偏見は、日本人や支那人が自國の婦人に對する差別觀とよく一致してゐる。婦人は政治的權利を有せず、十分な經濟上の機會をもたず、眞の教育上の平等をも持たないので、政治的に支配してゐる男子から、天性劣等なものと認められて居る。合衆國に於てさへも、婦人に參政權の無かつた結果は、個人的な關係では、婦人を大切に鄭重に取扱つた多くの男子の心の中に、女性の劣等といふ、潜在的信念を作つたのである。

現在に於ては、政治的要素のために作られた葛藤は、國民主義の急激な普及によつて、一層激しくされて居る。憎惡は、一方の側にのみ留まらず、相互的となりかけて居る。政治的に最も後れて居つた人民が、今や明白な政治的意識を發達させて來た。彼等は、その新しい國民的意識を、人種的意識と合一させようとしてゐる。それから彼等は、自分らがそのお蔭で苦しんで來たと同じ手段を用ひ、同じ思想を抱くようになる。西洋人の偏見に惱まされて來た日本人は、

大和魂の優越無比なことに對する信念を養つて、西洋人の偏見に對抗しようとする。日本人の支配に悩まされたゝゝゝやゝゝゝは、日本人の道德的劣等といふ信念を養つて、復讐する。この信念は、それがどれ位強いものであるかを知つた日本人を驚駭させずにおかぬほど、亞細亞大陸に廣く普及して居るのである。全亞細亞主義の宣傳は、國民的感情を人種と結び付ける政治的意識の覺醒をよく現して居る。今日までの處、此運動は大したものとなつて居ないが、若し支那に於ける日本の進路が現在と異つて居り、支那人との疎隔を來たさなかつたならば、この運動は既に豐富な成果を收めて居たらうと思はれる。

政治的要素は、今一つの方面で人種的軋轢の原因となつてゐる。戰爭のために、外國人に對する恐怖と猜疑といふ米國人の古傷がまたいたみ出したことは、上にも述べておいた。此感情は獨逸が米國に移住した獨逸人を、自國の政治的、軍事的目的のために使用したといふ信念のために、特に強くなつた。かくして一旦起された感情は、他國の出身者にも及ぼされる。これは、西方諸州の現在の排日感情の著しい特徴となつてゐる。日本に於ては、舊い封建的忠義が自然に、一層強くなつて新しい天皇の治世にまで及ぼされた。國民主義的な制度の下に於ては、移民は舊き國に對する忠義心を抱いたまゝ新しい國に渡り、これがその新しい國に、舊き郷土の政治的利益を樹立する結果となるのである。事實上、移民が郷土の利益を圖る譯ではなくとも、多分圖つて居るだらうといふ猜疑心を起させる。例へば在米の日本人は豫備兵であると云はれて居るし、又日本の官憲が高い出生率を奬勵してゐるとも云はれてゐる。領事及び其他の半官的有力者が、日本人の監督と統治とに任じてゐる。日本人側からは、是等に對して極めて淡白な說明が與へられるに相異ない。けれども猜疑の感情が起されたといふ事は、政治的要素がいかに人種的感情を助長するか、そして新しき葛藤の源泉を作るかといふことをよく示してゐるのである。

次には、人種的偏見に對する經濟的要素を論じなければならぬ。ある點から云へば、これは人種的偏見の中の、最も合理的な要素である。尤もかう云へばとて、此要素が常に合理的な方法で働くといふ譯ではなく、たゞそれは單なる本能の分子よりも、意識的な思慮と目的との分子が多いといふだけのことである。近代の移民は、大抵經濟的原因に基いて居る。人は、その狀態改善を期待するのでない限り、經濟的理由のために移住しようとはしない。けれども彼等は、そ、鄉土で慣れてゐる低い生活標準を、一所に持て來るのが常である。その間、彼等は、既に地步を得た人々と職業、土地、及び顧客の奪合ひをする。現に皆な苦しんでゐる傭人、農業勞働者及び小商人等は、其上の競爭を歡迎しない。その競爭が低い生活を營み、長い時間働いて少ししか貰はぬ人々のために起される時は、容易に激しい憎惡が呼び覺まされる。現在に於ては、總ての外國移民を制限しようといふ熱心な運動が合衆國に起つてゐる。此運動には上述のような政治的要素がはいつては來るが、此主なる力は經濟的要素で、勞働組合は、新勞働者の流入を制限するために、最も力を注いでゐる。憎惡の經濟的原因の上に、皮膚の色、言語、宗教、及び生活上の習慣や樣式の相異が附加せられた時人種的葛藤は容易に極めて激烈なものとなる。此經濟的事實に當面しない限り、偏見を不公正として憤り、人種的差別を嘆くことは無益である。勞働者の高い生活標準は、非常な努力の結果得られたもので、それを輕々しく脅かされるには忍びない。此場合、今日殆ど總ての國民が、他國民との間に差別を設ける保護關稅以上に、何等の人種的感情も必然には存在しないのである。けれども實際、此經濟的要素は、感情的、本能的偏見と混合して、二者は分離することが出來ないまでになつてゐるのである。かようにして發展した葛藤は、政治家によつて、彼等自身の目的のために利用せられ、双方共に憎惡を募らされるのである。斯樣にして日本人は、合衆國に於ける排日感情は、米國の政治家によつて一つの論點とし、投票を得るために利用されるのだと疑つて居る。又米國に於ては、日本の政治家が軍事費を支出させる

ため、且つ例へば支那又は西比利亞の如き、他の方面で讓步を餘儀なくさせる外交的掛引に利用すべき不平を募らすために、人種的反感を煽つて居るのだと信ぜられて居る。その國民もたゞ自分の方の事しか見ず、人種的感情は、轉がつて行く雪達磨のやうに、見る〳〵大きくなつて行くのである。

吾々の結論は要するにかうである。即ち、人種的偏見の基礎は、本能的嫌惡と、見慣れざるものに對する恐怖である。此反感は、言語、風俗、宗教の如き文化的相異、及び皮膚の色の如き、偶然の肉體的相異と相伴ふ政治的經濟的競爭によつて永久的偏見に變へられるのである。其結果は、何等の科學的證言も無くして、民衆が漠然と抱いてゐるやうな現在の人種觀、及び固定的な人種的相異の觀念となるものである。そしてその果ては、現に存在するやうな人種的葛藤となつたのである。

以上の分析に止どめたなら、それは恐らく、多かれ少かれ卑怯にも、主たる論爭點──即ち、それをどうしたら善いかといふ道德上の問題、殊に人種的優越を主張し、自己の經濟上政治上の有利な立場を擁護し是認する爲に、人種の劣等といふ觀念を利用して居る人々が、之に對してどうしたら善からうかと云ふ、道德上の問題──を回避するかの如く見えるだらう。此點について、殊勝らしいお座なりを云つておくことは、苟も公平な心をもつた人々に取つては、容易なことだらう。そして此問題の複雜な性質は、此種の無益な事以上に出でることを困難とする。たつた一つの事で、能くこの形勢の必要に應ずるといふやうなものは無い。敎化の增進や、一層人道的な敎育の方法などは、異りたる文化を一層よく理解せしめることにより、勿論幾らかの効果があるだらう。そして社交の發達につれて、吾々が特に隔意と名づけたところのものを生ずる相異は、緩和せられるだらう。種々なる文明は、互ひに接近すれば、相互に何物かを同化するだらう。けれども是等の要素は、根本的性質を有する經濟上政治上の變化を俟たないでは、人種的軋轢を根絶する

種の効果は奏せぬであらう。切迫した國家主義が、何等かの形に於ける國際主義に所を譲るやうになつて、初めて國内及び國外の外國人が、猜疑と嫌惡の目で見られぬやうになるだらう。そして今日、最も多く偏見を以て遇せられてゐる國々に於ける、生活標準の高まることも必要であらう。何故ならば、生活の標準が高まれば、出生率は減少し、斯くて移住の必要を減ずる作用をする二重の勢力が生ずるからである。そうなれば經濟上の競爭は、外國人に對して左程の敵意を生じないし、また人口の過剩が、今日の如く、半帝國主義的形態を取る膨脹政策の理由として用ひられもせぬだらう。現に二十年前の、太平洋海岸に於ける支那人に對する偏見が、其數が減じて經濟上の恐怖の去ると共に、消滅したことは、興味あることである。之と類似した原因は、有ゆる場合に、人種上の軋轢を減少するだらう。尤も之は、人種的偏見の犠牲となつた個人々々に對して、大した慰めとはなるまいが、それにも拘らず、私は是等の政治上經濟上の形勢の變化せぬ限りは、民衆間に於ける人種上の敵意の緩和せられることに大なる希望を見ぬのである。

要するに事實は簡單であつて、世界は今日、大に異つた文化を有する人民（勿論、教養ある少數者に就て云ふのではなく、民衆に就いて云ふのである）の密接な接觸を許すほど、充分に文化が發達してゐないのである。斯ような文化の不充分は、單に個人的の缺陷に止まらないで、それは社會的構造に於ける、有機的の缺陷である。そして其れは、個々の場合に就いても打克つことが出來るし、また多くの教養ある人々の間では、現に打克たれて居る。けれども言語の相異や、生活方法其他の相異を變じて、軋轢の原因となるところの、政治上經濟上の諸原因が變更せられてこそ、初めて人種的反感なる一般現象は消滅するであらう。個々の人々と人民とを、物質的に接觸せしめる機關の發達は、彼等を精神的、道徳的に結合せしめる要素の發達に比して、遙かに進んで居る。この抽象的の言葉を具體的に云つて見ると、汽關車や、汽船や、工場は、是等の外面的の變化に對する、智力上政治上の消化と比較にならぬほど、物質上の接觸を齎

らしたと云ふことになる。この結果として、新たに生じた接觸と交通とは、接觸點の增加しただけ、それだけ多くの新しい誤解と軋轢との泉源を伴つたのである。種々なる異つた文化は、旅行により、商業により、戰爭によつて、適當な精神上の準備もなく、また新しい交通の形態を相互に有益ならしめる爲に必要な、產業上政治上の變化もなく、遽かに一緒にされたのである。

斯くて人々は、密接な接觸の行はれる新しい形勢のうちに、世界が殆んど越えがたき距離の障壁で引離されてゐた時分に生じた、その儘の習慣を携へて這入つて來た。吾々は今や、快適な旅行や運輸の機關に慣れたので、斯ような狀態は、僅かに百年以內のことだと云ふことを忘れてゐる。そして今尙ほ生存してゐる人々の記憶のうちにも、今日入り交じつて生活してゐる人民も、偶々道を失つた旅行者以外には、全く相互に隔離されてゐたことをも忘れてゐる。そこで事物の新狀態に適應した社會組織の新形態を打ち建て、之に適合した心的習慣を作り上げるには、相當の時間を必要とするだらう。個々の人々には、間々偏見を脫して、本能的の嫌惡を合理的に制御し得るの域に達した人々もある。けれども國際間と人種間との集合的の精神は、教育と政治上產業上の組織との双方に變化の生ずるまでは、斯ような域に達することは出來ぬ。そして此事業を完成するには、相當の時間が必要である。

人種的の差別は惡るい事である。けれども之に對する、盲目的にして早計な反動も、また惡い事である。何故ならばこの問題は複雜した問題であるからである。卽ちそれは、全然人種の問題ではなくて、種々なる文化を、相互に調和する問題である。是等の文化の相異のうちには、言葉の相異、傳統の相異、智力上の見解の相異、理想の相異、宗教の相異、日常生活に於ける習慣の相異を含んでゐる。そして是等の各々は、いづれも其裡に、誤解の原因を藏してゐる。けれども是等の相異は、唯だそれだけならば、單に個人と個人との間に、對人的の誤解と軋轢とを生ずるに過ぎないであ

らう。そこで重要なことは、是等の相異が、今日の世界の國家主義的組織の結果たる政治的勢力により、經濟上の競爭と産業上の野心とによつて、結合して集合的の相異となり、團體と團體との軋轢となることである。人種的偏見は、現在の軋轢の原因たるよりも、寧ろ政治的産業的の勢力によつて生じた嫉妬と敵視との、結果たり兆候たるものである。然るに他の社會的の影響と同じく、この結果も亦、一轉して原因となつて働らき、斯くて他の相異の原因を助長し激發する惡感情を誘導するのである。教養ある人が、若し他人が自分と同じく、偏見を脱した狀態にさへなれば、それで全問題が解決されると思ふなら、其人は實際に形勢を誤つて居る。斯ような教養ある精神狀態は、一般的の改造を促進するのであるから、固より望ましいことである。けれども根本的の考へが變化せぬ限り、それは危機にある事件の進路を變化する力の無いものである。

今日では、人種は一個の事實と云ふも、寧ろ一個の象徴物である。この象徴物と、この象徴物によつて代表せられてゐる政治上經濟上の勢力との關係は、國民の生活に對する、國旗の關係の如きものである。

それは欲求と感情とを凝集し、是等のものを糾合すべき、具體的の對象物を與へる。今一度、政治的要素の影響を例に取つて見ると、ウヰルソン大統領は、戰爭の目的は、世界をデモクラシーの爲に安全にすることであると述べた。實際上の結果を考へると、斯くの如き信仰の表白に對しては、冷笑の態度を取りたくなる。けれどもそれにも拘らず、此言葉には重要な眞理が含まれて居る。事實上、今日世界のうちには、種々なる政府の類型が存在する。卽ち或者は、比較的專制的であるし、或者は比較的民主的である。そして是等の政府の類型には、異りたる目的と理想と共に、異りたる思想と感情の仕方が伴つて居る。彼等は互に異つて居るばかりでなく、互に扞格して居る。ところが今日の世界は、この双方に取つて、充分なほど廣くない。汽船や鐵道以前の時代には、彼等は世界のうちに、相並んで存在することが出

來た。何故ならば彼等はお互に、多く接觸しなかつたからである。ところが今日では、事情は根本的に一變した。リンコーンは、合衆國は半奴隷半自由の狀態を、忍ぶことが出來ぬと云つた。今や世界の異つた部分は、緊密に結合して、一つの物理的全體を形成するに至つたので、世界は最早や、其內に、相反對した政治上の政策と目的とがあつては、安定の狀態を保つことが出來ぬ。そこで一般的の軍備撤廢は、個人々々の敎化が大に進んだ以上に、人種的偏見を一掃する、より大なる力となるだらう。然るに一方には、諸國民の間の、協同的、國際的の共同生活は、人種的偏見の消滅に導く、條件を打ち建てるだらう。

國際的の組織は、經濟的の組織であると共に、政治的の組織でなければならぬ。若し市場に對する競爭と、原料の支配に對する競爭が存續し、低い賃銀と長い勞働時間と、吝嗇な金遣ひと、低い生活標準に慣れた勞働階級が、より高い生活標準の國に自由に移住することが行はれるならば、人種的の軋轢は、依然として存續するだらう。一八四八年の宣言この方、社會主義は理論上では、常に國際主義の敎義であつたといふ事は、最も重大な意義がある。社會主義者は實行の上に、この敎義に副つて居るか、それとも大戰の危機に際して失敗したように失敗するか、これは何づれにしても其敎義の重大な意義には大した影響はない。この敎義の存在と普及とは、國際的の嫉妬と恐怖と衝突とを生ずる上に、經濟的要素の重要なことに、斷えず想到せしめるものである。私には各國の勞働者が、同じ國家のうちの市民と結束せられて居る以上に、緊密に結束せられて居るとは思はれぬ。社會主義者が、戰時に當つて、其國際主義の理論に從つて行動することに失敗したのは、彼等の信仰の誤りを立證するものである。けれども勞働者の利害が優勢を占めるような國際的組織は、其全勢力を以て戰爭に反對し、友愛的な關係を助け、人種的偏見に反對するといふことは事實である。是等の記述の目的は、人種的偏見と軋轢との問題の解決を試みることではなくて、問題の何たるかを示し、其解決を

求む可き方向を示すことである。異りたる文化を互ひに調和せしめる問題は、容易の問題でない。それは氣短かな遣り方や、又は性急な方法で近づく可き問題でない。殊にこの問題は、現今に於いて特に困難な問題である。何故ならば戰爭は、有ゆる人類の情熱を攪き拌ぜて、表面に浮き上らせてゐるからである。國民的感情と人種的感情とは、激動の狀態に達して居る。之が治癒に取掛るには、猶豫を與へる必要がある。一般的改造は、仕事と忍耐とを要求する。この一般的な社會的改造が、一定の速度に達するまでは、移住にせよ、其他苟も軋轢の機會を作り、政治家や帝國主義者に口實を與へるような接觸は、全ての關係者の利益の爲に之を制限す可きである。世界は休息と回復とを必要とする。若し西方が、支那の忍耐と根氣と、喜んで待つことゝの代りに、休みなき活力の過剩を輸出することが出來たなら、この道德的商品の交換は、双方に取つて有利であるだらう。

週制度創設の提唱

商店週休及營業時間問題

法學博士　上田貞次郎

一

商店週休は小問題でない。工業勞働問題の如く花々しきものではないが、日本の社會生活上重大の問題たることは疑ない。試みに毎日曜日に銀座の商店が戸を閉めて往來の足音が靜かになつた狀態を想像して見よ。是は商店主及商店員のみの問題でないことが分るであらう。實に此問題は勝手口週休であり、同樣週休である。商業勞働問題と共に大都會の文化問題である。七日目に一度づゝ來る所の日曜といふ日を國民が何に使ふかといふことは經濟問題や能率問題を超越した國民的大問題ではないか。明治初年の改革者が西洋の習慣を容れて官廳、學校、銀行、會社等の週休を斷行したのは賢明なる英斷であつたと思ふ。爾來五十餘年を經たる今日に至り、國際勞働會議の議題となつた商店週休論に促されて急に彼是と騒ぐのは可笑な話だ。

二

商店勞働問題が工業勞働問題の如く喧ましいことにならない理由は第一に勞働者が工場の如く多數同一所に雇傭されないこと、第二には此場合に店主と店員の利害の衝突がないからだ。第一は説明を要せずとして、第二に就いて申せば、元來工業にありては一日休めば一日分だけ生産高が減ずるけれども商店にあつては左樣の心配はない、一の町、一の都會に於ける住民の需要は商店が日曜に休むと否とに依つて異ふものではない。日曜に休めば其他の日に營業が忙しくなるだけのことであつて、一月又は一年の商賣高が減ずることはない。勿論同種類の商業に從事する商店にして甲は休み、乙は休まぬとなれば甲の得意が乙に行くことはいふまでもないが、總ての同業者が同時に休むならば、其區域内の商賣の盛衰の差が生ずる筈はない。是が

即ち法律又は同業組合の約束を以つて一齊に週休を勵行せしむる所以である。

現に今でも毎月二回の定休を實行して居るが其爲めに商賣が減じては居らぬ。店員も店主も共に休暇を得て店の費用も節約されて居るではないか。蓋し此問題は工業にありては勞働者對雇主の關係になるが、商店にありては勞働者及雇主が一團となつて公衆消費者に對する關係である。即ち商店が休んで異議を言ふべきものは店主にあらずして消費者であらねばならぬ。然るに消費者は商店の休業に依つて實際不利を受けるかといへば決してさうでない。勿論日曜の遊樂に缺くべからざる興業の樣なもの、又日曜でも平日でも必要缺くべからざる藥屋牛乳屋の樣なものは例外として、之は寧ろ法律が週休を禁ずる必要さへあるだらうけれども、普通の日用品で買置きの出來るものは總べて平日仕入れて差支がないのである。唯今では家庭生活がだらしなく出來て居るから、だらしない店を開かせて置かぬと不便になるのだ。一軒の家の內でも主人がだらしなければ女中は終日終夜休むことが出來ないと同樣に、社會の公衆消費者がだらしない生活法を取つて居れば商店も週休が出來ない。是は逆に商店週休を勵行して一般の生活改善を促すべきであらう。金持の奥樣が日曜の朝思立つて呉服屋と貴金屬店へ出かけたが休業で目的を達しなかつたとしても心配は入るまい、「生活改善」は當時貴婦人間の流行ではないか。

三

商店勞働の制限法に對して店主側の苦情の內には店員の規律を破るといふことがある。休日を設ければ中店員小店員が一日を興遊に暮して體身を害し、翌日の營業に差支へるといふのだ。是は從來の經驗に基いた苦情であつて一應尤もの樣だが、決して深く考へた議論ではない。蓋し昔の丁稚小僧の樣に一年中盆と正月の二回だけ地獄の釜の開く日に解放されるといふ狀態であれば食過ぎ、飲過ぎ、遊び過ぎになるのは當然だが、每日曜日の休を悉く同樣に遊び暮すと見るのは極端であらう。現に店主の子女等は學校へ行くが日曜日は休んで居る。其爲めに特に墮落するといふ話は聞かない。さすれば店主の子女よりも小遣錢を少しゝか持たない小僧諸がより以上に墮落するといふ理由はあるまい。併し今の日本で健全なる遊樂の機關が整つて居ないのは確かな事實であつて、是は社會的大缺陷である。休業の一日を海に山に運動場、水泳場、公園、博物館、圖書館、公會堂等に愉快に活潑に暮すことの出來る工夫をしなければなるまい。併し此樣な設備の整ふのを待つては百年河淸を待つの類である。寧ろ週休利が出來れば營利的にでも相當の娯樂場が

發達するであらう。

四

店員から見れば日曜の休業も必要だが、營業時間の制限が一層必要である。特に夜間の仕事を早く切り上げることは非常に必要である、昔は燈火が不充分であり、又要心が悪いといふ理由で夜は早くから店を閉めて、小僧達は手習、珠算の稽古をして居た。然るに電燈といふ便利なものが出來た爲めに夜は何時でも店を開けて置き、客の方も夕食を濟ましてからゆる〳〵散歩がてら買物に出るといふ風になつた。之が爲めに店員は勞働時間が實際長くなつたのみならず、補習教育を受けることが出來なくなつた。政府では頻りに補習教育の必要を感じて學校を設けるといふけれども、如何に學校が出來ても兒童が營業に使はれて居ては何もなるまい。英國の新教育法には毎週何時間から補習教育を義務教育の延長として課し、其時間丈けは十八歳未滿の雇人に暇を與へ且賃錢を與へることに規定されて居るといふが、是が當然の事である。勞働時間に手を觸れずして教育を進めることは出來ないに極まつて居る。英國では十八歳まで義務教育を延長し、日本は昔よりも以上に小店員の教育を短縮するとは甚だ不面目な對照ではないか。

五

商店問題に就いて最も悪性の反對者は所謂延期論者である。論者曰く、商店週休結構、營業時間短縮結構、併しまだ早い、相當の猶豫期間を置いて徐ろに法律の勵行を計りましようと。然らば相當の猶豫期間とは幾年であるか。答へて曰く、十年！冗談ではない。凡そ法律の實施期限に十年杯といふのは恐らく日本の工場法以外に類のない事例であらう。日本の資本家代表は此樣な奇想天外より來た樣な案を提げて國際會議に行けると思つて居るのだらうか。

兎に角此問題は決して小問題でない。生活改善論者にも、補習教育論者にも、社會局にも、文部省にも、而して婦人にも大に考へて貰はなければならぬ。

店員の勞働組合

慶大教授　加田哲二

自分自身の享樂のためにする勞働ならば、吾々は休養を要することが最も少なくて濟む。休養時の益々短かいことすらを望むことがある。けれども他人のための勞働か、または勞働それ自體を目的としない場合には吾々は休養の時を最も多く欲する。現在の商業的勞働者の場合について考へて見ると、それは疑ひもなく後者の場合である。現在の商業主義の下にあつて商業的勞働者は工業的勞働者と同じやうに、その大部分は終生勞働者として生活しなければならぬ。勞働者たることは、中世紀のギルド制度の下におけるが如く、企業家への道ではない。企業家と勞働者との間には明瞭なる區別がある、こゝにおいて現在の資本主義下において勞働者としての境遇改善の運動が、資本主義破壞の運動とともに、發生することは極めて自然のことでなくてはならない。今歐洲諸國における商業的勞働者がその勞働條件改善の目的を以ての運動は、次の要求事項を持つてゐる。勞働時間、營業執務室の設備、賜暇の時機及休憩時間、徒弟使用の規則並に疾病、廢疾並に老年の場合における救護の確保に關する公法的規定の制定である。是等の諸要求中實際的施設として行はれたものは勞働時間に關するものである。この方面における要求は三個の要件から成つてゐる。(一)三十六時間の日曜休暇を確保すること、(二)公開の賣店を有する商店に對し法律を以て日々の閉店時間を確定することと並に(三)日々の勞働時間を限定すること、この三個條である。

所謂日本の識者がこの點までの要求を是認してゐるかどうかは甚だ疑問である。然し、是等の歐洲における運動の內容が必然的に日本の運動の內容になるべきである。もし此位の要求が出來ぬやうな識者ならば、彼はこの運動に關係する資格のないものである。さうしてもし彼等が日本特有の事情と云ふやうなことを主張するならば、彼は資本主義的經濟組織の本質を知らないものと云はなければならない。尚ほこの種の週休論勞働時間の限定に對して生產能率と云ふ點から反對するゝのがあるかも

知れない。けれどもそれは人間が物より尊いものであることを知るならば、そんな反對論は出ないであらう。人々はあまりに疲れてゐる。一週間に一度位は休みにして氣樂に遊んだからと云つて別に天罰も當るまい。理論的根據なども必要でない程の明々白々たる事柄である。たゞこの明々白々たる事柄が滿足されたからと云つて、それで問題のすべてが解決されるのではない。資本主義と云ふ巨大なる建築が存在する間は、週休などはその一少問題に過ぎない。

乍然、週休問題にしても、その遂行は商業勞働者自身の運動によつて得られなければならぬ。彼方は決して商業家の古手だの、官僚學者などをその指導者とすることがあつてはならぬ。所が商業勞働者の間には、勞働組合の組織を妨げる種々な事情がある。この一は將來獨立の店主となるの希望ある商業的使用人の一部分並に高級の商業勞働者は組合に加入することを拒むであらう。その二は多數の徒弟の他の方面より侵入し來る狀態にあるので、使用人を虐使し易い小商店をして非組合使用人に使役するであらう。その三は商業勞働者として婦人の雇傭されるもの年々その數を增加したこと、この三つの理由によつて商業勞働者の組合組織には甚だしい困難が存する。乍然、商業的勞働者は一考しなければならない。彼等は資本主義下における無產階級の一員であると云ふことに眼覺めなければならない。週休問題は資本主義下における階級戰爭の一表現である。彼等は斯くの如き事態を自覺することによつて勞働者階級のソリダリテを形成しなければならない。この意味において有產階級よりの恩惠的週休制度を受けてはならぬ。それは飽迄も勞働者の自力的所產でなければならない。

現在の週休問題として論議されてゐる日曜休日のみでは甚だ不完全のものと云はなくてはならない。日曜を休日とする代りに他の日を虐使すると云ふのではなんにもならない。だから之に附隨して日曜日の賃銀支拂は勿論のこと、勞働時間の限定と云ふことが伴はなくてはならない。まして三年後實施と云ふやうな不徹底のことならば、寧ろそんな燒附刄はやめた方がよからうと思ふ。要は勞働者のソリダリテにある。彼等は現代の資本主義との鬪爭と共に。來るべき新社會の新秩序の組織者として訓練するところがなくてはならぬ。それは彼等が橫斷的組合組織にある。この勞働者團體の得た週休勞働時間の限定であつてこそ始めて勞働者にとつて意義あることである。それは資本主義打破の一手段としてでなければならない。

營業時間短縮と週休問題

法學博士　河津　暹

私は近頃波多野代議士の提議に賛成して、我國商店員の勞働時間制限、日曜日定休の制度の實施に就いて、兩三回意見を發表したが。再び玆に同問題に對する私の所見を簡單に述べて、世間の批判を仰ぎたいと思ふ。

私は、此の週休制度と、勞働時間の制限とは、後者の方が最も急務であつて、前者は之れに較ぶれば自から第二次的の問題とも考ふる、然し乍らその性質は略ぼ同じものであるから、玆に併せて論じて見る。私の商店員の勞働時間の制限と、週休制度實施とに賛成する理由は畢竟次ぎの三點にある。

第一は、商業の性質上店主と店員とはその頭と手足の如く共同一致して活動しなければならぬと云ふ點である。勿論工業に於ても工場主と、工場勞働者とが協力して事に從事すべくであることは疑ひを入れない。然るに工業は比較的に機械的の勞働であるが、商業の方は精神的の勞働が多いから、店員はよく店主の意を體して活動しなければならぬ、又事實上我國に於ては店主と店員との關係は、工業のそれに於けるよりも遙かに密接である。それは店員の數が原則として少ないことにもよるが、商業の性質が然らしむるものであり、又店員の地位が工場勞働者よりも稍々優つて居ることに基因する。然し前に述べたるが如く、店主と店員とは共同して恰も一身同體の如くに活動すべきものであるから、店主は店員の健康と修養とに力を致し以つて店員の能率を増加せしむるとに充分の力を盡すべきである。これは獨り店員の利益幸福の問題のみに非ずして店主それ自身の利益となるのである。然るに今日の店員の健康修養と云ふ事とは甚だしく等閑視されて居る。健康に就いて考ふるに。

玆に充分な統計をあげて證明することは困難であるが、例へば徴兵合格者の比例の如き、都會は田舍に比して遙かに劣つて居るといふことは、暗に店員の健康の宜しくないことを證明する一材料である。之れ畢竟商店員の勞働時間が餘りに長く、又一定の時間に食事をとり、又一定の時間に運動を爲す事も出

來ない爲めである。然も彼等は都會の黄塵萬丈裡にあつて、比較的狹隘なる店舖の中に座り込んで居るのであるから、その健康は宜しからべき筈がない。只だ世人が此の點を看過して居るのは、店員の勞働が工場勞働者のそれの如く、激しくなく又規則的でなく、客を俟つて遊んで居るかの如く見えるからそれほど苦痛でないと思ふからである。然し之れは皮相の觀察であつて、店員は決して遊んで居るのではなく之れは商業の性質が規則的でない事により誤解である。とにかく店員の健康がよろしくない事實は何人も否むことは出來ない。

一方店員の修養と云ふ點に就いて考ふるに、之れ又甚だしく不充分であり。昔時は商賣往來や算盤か出來れば、商業が出來たのであるが今回の商店は昔時の商店員に比して甚しく多くの知識を要する、殊に我國も益々世界的になりつゝある今日痛切に商店の修養の必要を感ずる。然も今日の國民の義務教育丈では商業教育の最少限度にも達しない。勢い補習教育の必要が湧いて來る。今現に文部省でも補習教育に重きをおきその制度を改め、補習學校の設立方を奬勵して居る有樣である。然るに今日の如く商店員が早朝より深夜まで勞働執務を强要されて居る樣では到底その教育を施すことは不可能である。

要するに店員の健康を增進し、修養を充分ならしめ以つて勞働能率を發揮せしむる爲めにには、商店員の營業時間を短縮し週休制度を實施することが何よりも急務である。

第二は店員の勞働時間短縮週休制實施が決して店主の利益を害するものでないと云ふ點である。營業勞働問題を工業勞働問題と同一視して、營業時間の短縮週休制度の實施は甚しく店主の利益を害するものとなし、然も多數店員の利益幸福の爲めには店主の利益を犧牲にせよと主張するものと思つて居るものもあるかも知れない。これは全く誤解であつて、かくの如く考へる人は此の問題の性質を知らざるものである。此の問題は寧ろ吾人の文化生活に關する問題であつて、吾々消費者の習慣に若干の改變をくわえることが益いかと云ふ問題で。主店員との私利衝突の問題ではない。即ち此の制度の實施するも商店の商賣力には增減を來たすものではない。吾々は必要品は之れを店舖について求めなければならぬ。若し早く店を締まればその前に之れを求むるのであり。今日は深更まで店を開けて只だダラダラに賣りダラ〱に買つて居る有樣であるが、若し營業時間間を短縮すれば、需用者は營業時間中に之れを求むることになる然も一部の店舖に於てのみ此の制度を實施するのではなく一切の店舖が之れを實施するのであるから各商店の賣上げ高を減少する危險は決してはない倘此の制度の實施に賣買時間を規

則的にならしむる點に於て吾々消費者の文化生活の上に大いなる効果を齎らすものである。又店主の側に於いて見るも此の制度の實施は寧ろ店主の利益を增大することになる。即ち深更まで店を閉ざさず、點燈の他の費用を費し、客なきに尙ほ客をまつと云ふが如き不經濟な狀態は全々一掃されることになる。然のみならず、今日の商店經營の狀態では、商店の商賣と店主の交際とが全く混同されて居り、店主は營業時間中に常に營業以外の事柄に時間を費して居り、從つて店員も上述するが如く休養時間なきが故に、營業時間中專心業務に當るの誠意を欠ぐことになり。例へば番頭は店の用に口實を求めて自己の用を足し、或は怠ける。小僧も又使に行けば必ず道草を食つて平氣で居る。然も店主之れを怪まず店員又之れを怪まないことは商業經營の立場から見て、拙劣なることゝ謂ねばならぬ。營業時間中は店主と店員とは協力して專心商賣のことに當らねばならぬ。商店の營業時間を短縮し週休制度を實施すれば營業時間と店員の私用及び休養修養等の時間とは全々分離して。營業時間中は銳意これに當ることになる

今此の制度が賣買力に減少を來たすことなく寧ろ店主の爲めに好結果を來たすことでありとすれば、之が實施は愈々急務であらねばならぬ

第三に、勞働時間を制限し日曜日休日の制度を設けると店員は却つて遊蕩放逸となて能率の減少を來たし又その一身をあやまることにはなりはしないか。適當な娛樂機關又娛樂の場所又その方法等が完備した後之れを許すも遲くはあるまいと云ふものがあるが此の考へは余りに人間を緊く見た觀察である。多くの店員中には斯くの如き機會を濫用するものもあることは否定が出來ぬ。然し今日の如き勞働狀態に於てもかくの如きものあるのであつて、あながち勞働時間を制限したからといつて之れを多くすることはあるまい、第一遊蕩放逸の生活をしようと思つても彼等の經濟狀態がそれを許さない。之れを營業時間を制限し週制度を實施せる官廳、會社、銀行等に此の弊なきに徵し商店員のみにかゝる危險ありと爲すは寧ろ了解に苦しむ處である勿論私は娛樂機關の改良、完成の時機の一日も早からんことを希望するものである。然し乍ら之が完成を俟つてはじめて勞働時間を制限すべしとなすとは本末をあやまつて居る。勞働時間は種々の點に於て制限する必要があり。之れに關連して娛樂機關も改良する必要があるのであるから、兩者は並行すべきものであることは疑ひのない處である

今秋開かる可き國際勞働會議には週休制度が議にのぼると云ふことである本問題の性質が上述する如きものである以上、工

業の勞働制限と違つて之れに對する理由甚だ薄弱であるから必ず萬國國際勞働會議に於ては可決せられることであらう。從つて我國も否が應でも之が實施せらるゝ機會が近いことであらうし、若し實施するに至らなければ店員はしきりにそれを要求し從つて店主と店員との間に面白しくない結果を生ずることになる。反對すべき何等の理由もないのであるから、寧ろ求められざるに先づ與ゆることによつて商業、働問題を圓滿に解決することが必要でもあり得策でもあると信ずる。

上述せる三つの點は、私が此の問題に贊成する重なる理由である。勿論之れを實行するには他の小さな點に種々考慮しなければならぬと思ふが茲には小さな點は省畧することにする。

週制の社會價

杉森孝次郎

日曜をば、公休日と確定する方がよい。勿論これは、いはゆる文明諸國の、今はすでに習慣とまで熟した制度であつて、事新らしく論議すべき題目ではない。しかし、わが國に於いては、週制の發達は、殆んどその緒に就いてゐない。

六日の作業日に、一日の休息日を配合することは、決して怠惰ではない。敢て休息日として窮屈に無爲を守るには及ばないが、日曜をば自由日として、公定するがよい。日曜には、生産と分配とを停止するのだ。前日までの購買を、日曜には專ら消費するのだ。生産の停止は、工場、役所、學校等の閉鎖だ。分配の停止は、商店の閉鎖だ。

生産者としては、及び分配者としても、現代人は種々にわかれてゐる。職業別、專門別、業務別は、巨細にわたつてそれだ。醫者は治療を生産し、職工は布を生産し、左官は壁を生産する。また、分配者としても、八百屋と魚屋とは別だ。六日間の作業日には、われらは分業的生活を送るのだ。差別的生活だ。休日には、人はすべて消費者として生きるのだから、一色だ。社會を雑色に染める日が六日間で、それを一色に返す日が、次ぎの一日だ。日曜は、作業日が分裂日であるに對していへば、歸一

日であるべきだ。

消費者としての各人は、大同小異だ。衣食住及び娯樂だ。消費者としての各人間の關係は、取引でなく交際だ。用談でなく、清談で鬪爭でなく、競技だ。實務でなく、遊戯だ。否な、消費者としての各人は、生産者及び分配者としての萬人だ。各人は衣食住の消費者であるが如くに、他の百、千、萬種の富及び文化の消費者だ。休日は、各人に、その共通的一面の經驗と自覺とを與ふる一機會だ。週に一日の休業は、この興味から考へても、過多でない。

英國などでは、日曜には、勞働者は、郊外に一色の生活を織り、ブルジワは、教會に一色の生活を織る。現存の階級別は、内容が、本質的でないから、文化の普及發達に隨うて釋減すべきだ。休日に、階級別を意味する二色が、鮮明に、その一は教會に、他は郊外に織りいだされる現實の背景は、社會的瑞兆でなく、兇兆だ。日曜を一機會として、社會心が養成されるやうにしたい。

おしつめて考察すれば、六日間を生産日と解し、その翌日を消費日と解すべきだ。消費者道德、消費者常識が現代に缺乏してをる、そして必要な一大事だ。日曜にも働らく制度下には人心の融和は一層困難だ。學者や藝術家が、私居に於いて、研究に潜心する如きは、工場や商店の營業とは、事情がちがふ。日曜にも否定すべきでない。要するに日曜は業務的に他人を[illegible]すべき日でないのだ。一人店の主人が、自發的興味で營業する場合を例として考へるに、同業者の利益を妨げ、日曜無商店の秩序をみだす無責任行爲だから、それはいけないと斷定される。讀書創作をも嫌斥すべきではないが、主觀生活内の事件として認めらる限りに於いて、許すのだ。日曜は、あらゆる意味に於いて休養日であるべきだ。

日刊新聞は、無論日曜には休刊して、その代はりに週刊の新聞雜誌が發達すべきだ。週刊の新聞雜誌は日曜刊行には限らない。しかし、日曜新聞の發達も必要だ。英國に於いて、ガーヴイン氏の執筆する『日曜觀察者』の如きは、顯著なる成功を示した。その他、日曜に限らない週刊誌の發達は、英國の社會だけを見ても、注目に値ひする現象だ。しかし、それらの現象も、週制の發達しない社會には、望まれない。

週制の發達の一要點は、日曜を公休日として制定することだ。公とはいつても、私營生産場、私營分配場の休業を無論含む。週制の發達のなほひとつの要點は、週會計の確立だ。週單位の仕拂、俸給の如きは、それに屬する。英國の下宿の契約、勞働者の收入の週制については、考究、批判、改造の餘地があらう。しかし、週制に、經濟的、理財的一面を帶ばせることは、それの適用される場合と程度とを條件とすれば有價なる一原則だ。

勞働運動の左傾と其將來

勞働運動の現狀についての所感

山川菊榮

一

『大正七年中、私が同志山川均と共に發行してゐた小雜誌「青服」の二號から四號に亘つて、ツレエド・ユニオニズムを皷吹したといふ廉で、同年の十月、私と山川とは共に禁錮四ケ月の刑に處せられた。

『大正八年の二月、私達は牢から出て來た。世の中は實に變つてゐた。勞働組合と同盟罷工とは所在に勃興した。勞働問題、勞働運動といふ言葉は、誰れの口からも語り合はされた。天下の新聞雜誌にして、苟くも勞働問題とか、勞働運動とかいふ記事を揭げてゐないものは無かつた。ツイ四ケ月ばかり以前、單に穩和なるツレエド・ユニオニズムを皷吹せるが爲めに牢にぶち込まれたなんて、何だか餘まり馬鹿々々しすぎ、間拔じみてゐて、自分でも嘘のような氣がした。』（ロイド著、荒畑勝三氏譯、『勞働組合論』序文）

から荒畑氏もいはれてゐるように、實際大正七、八年の交、即ち露國革命の跡をついで、獨逸帝國の顚覆した一冬の間に、日本の勞働者は、過去數十年間の進步の總計にも優る、目ざましい思想的覺醒を遂げたのであつた。大戰による日本の資本主義化はいふまでもなく、その重大なる原因であつた。かくて財界の好況に乘じて勃興した勞働運動は、追手に帆を上げるような勢ひで勞働界を風靡し、一時は讀書界の人氣も此問題に吸收されて、所謂『勞働もの』が、出版物中の主要地位を占めてゐた有樣であつた。斯樣に勞働問題が流行問題となつた結果は、一面、怪しげな組合や勞働ブローカーの徒を簇出せしめ、一面

また勞働者の中にも、多少お祭り氣分の醉心地を生ぜしめた傾向も無いではなかつたらしい。

然るに大正九年三四月以降、俄然として來襲した不景氣と、それに伴ふ失業問題は、好況時代に築かれた勞働運動の地盤を、あはや一朝にして崩壞せしめようとするかの如くに見えた。流行問題として、知識階級の好奇心の的としての勞働問題は、噂を鎖めた。出版界の人氣は忽ちに『勞働もの』若くは社會科學を去つて、知識階級者の逃避者の思想的避難所である宗教、哲學の、高尚な安全地帶へ集中された。

好況時代の勞働運動が追風に帆を上げて走るに似るとしたならば、不況時代の勞働運動は、正しく逆流に棹すといふ形容に價すべきであらう。不況の影響を受けて多くの組合は名實共に失はれ、或は有名無實となり、又は其地盤を持ちこたへてゐる相當に基礎の堅固な大組合とても、組合員數は半減、四半減したといふのが眞相であるらしい。

幾多の犧牲と、幾多の慘苦とを以て築かれた勞働運動の牙城が、不景氣の颱風一度び起つて以來、日每に切崩されてゆく孤城落日の光景は、眞に悼ましさの限りである。けれどもこの冬枯の時代を經て始めて、好況時代に普く播かはれた團結と自覺の種子の活力如何は知られるのである。

そして最近の勞働爭議に於て、日本の勞働者はこの試煉の結果を示しつゝあるものだと見ることが出來る。

二

不景氣の襲來と共に、多くの勞働組合は潰滅し、多くの勞働者は組合運動の落伍者となつた。けれどもこの逆境時代に踏みこたへてあらゆる迫害と戰ひつゝ、なほ勞働運動の陣營を死守し、殊にその前線にあつて戰を續けて居るのは、實に勞働階級の先覺者、精選せられたる一騎當千の人々である。卽ち昨今の不景氣は、勞働運動者を篩にかけて、運動の實勢力であり中核であつた最も戰鬪的な優良分子のみを留めた觀がある。

されば流行問題として、有閑階級の遊戲的討論の對象としての勞働問題は、さして社會の注意を惹かぬ程度に影を潛めた間に、勞働者の階級的自覺は益々發達し、その戰鬪的意思は愈々熾烈となつて、社會の表皮下に、深刻にして執拗な燃燒を續けて來たのであつた。

最近關西に頻發せる勞働爭議は、斯の如き過程を事實の上に證明したものである。好況時代の勞働爭議は、發作的、衝動的で、運動に統一なく、罷工者の間に明白なる階級的意識も、他團體との聯絡もなく、孤立的に行はれ、且つ持久力が薄弱であつて、突發當時の元氣に似もやらず、僅々二三日にして忽ち結

束を切崩され、そこにブローカーなどの活動する餘地も多かつたのである。所が最近の爭議は全然面目を異にし、數の少い代りには大仕掛に亙り、結束が強固で持久的に富んでゐる、のみならず、他の勞働團體及び直接その業務に關係なき他工場及び他の會社の職工までが、あらゆる迫害や犧牲を意とせず、飽まで勇敢に、有形無形の援助を與へることは、兩三年前までは見られぬ光景であつた。畢竟是等の事實は、勞働者の階級的自覺が短時日の間に意外に深刻に發達を遂げ、且つ團體的運動の訓練が著しく生長したことを證明するものである。

殊に最近の爭議が、不景氣に依て同じく、或はより以上の打擊を蒙つてゐる纖維工業に起らず、殆ど悉く機械鐵工の間に限られてゐるのも、其等の爭議をして戰鬪的ならしめてゐる一因であらうと思はれる。

とにかく、好況時代に比して遙かに深刻にして眞劍な趣を添へた最近の諸大爭議は、組合の勢力は微弱で基金もない日本の勞働者の間に、意外によく階級的自覺と戰鬪的とが發達し、同時に歐米に比して遙かに後れて起つた我勞働者が、新社會建設の要素として、無產者解放てふ歷史的使命の分擔者として、決して先進國の兄弟に劣らぬ可能性を有することを示した、光輝ある記錄であると信ぜられる。

三

關西の大爭議に對する、東京の勞働運動の著明な問題は、所謂指導者の排斥である。吾々から見れば、その壁の最も高い方面とても、外國の組合の如く、數十年の歷史と幾十萬の會員を擁する、極めて組織の復雜な大團體と異つて、僅に數千名を包括せる團體にすぎず、その組織も簡單で、幹部と平會員との間は、甚しい地位の懸隔がない。隨つて實質に於て運動を左右するものは平會員で、外國の大組合に於けるが如き官僚乃至專制主義は存在することが困難である、今日に於ける指導者排斥は、むしろ將來に對する豫防的意義を帶びてゐるものと思はれる。實際關西に於ても、かの大爭議を開始し維持して行くのは、無名の大衆であつて、所謂指導者の地位にある高山、賀川氏等は、たゞ勞働者の手足として、その欲する所に隨ひ、その赴く所について行くより仕方がない。東京聯合會の棚橋氏も、大會の議場に於ては高壓的態度に出でて少數急進派勞働者を壓退しながら、遂に横車を推し切れずに脫會を聲明されたと聞く棚橋氏があれまでにして少數派を高壓し、羊の如き多數派を率きゐて議場を支配することに終始されたかには、必ずや自己の主張の正しきを信じ、そのために倒れて後已むまで戰はれる覺悟のあることゝ期せられたが、不思議にも氏は何日にして、

少數急進派と共に自己を支持した聯合會の多數派及び友愛會共のものをさへ見捨てゝしまはれた。今にして脫會されるならば、議場における奮鬪は意味をなさず、殊に大會前の突然の脫會は、聯合會に對する責任の點に於て、遺憾が多いように思はれる。

然しながら、ともあれ少數活動分子の實力は、多數を制する棚橋氏を叩き落すに十分であつた。此事實は、數に於いてはいかに多數を制するとも、羊の如き戰意なき勞働者が、いかに恃み甲斐なき戰友であるかを證據立てると共に、日本に於ける勞働運動は、事實上無名の平組合員たる勞働者の、自覺と戰意とに依つて進んでいつてゐることを示した一例證である。

とにかく過去數年間における我國勞働運動は、多大の犧牲を拂ひながら、大部分は悲慘なる敗戰に終り、隨つて物質的に得られた結果は少かつたが、勞働者の階級的自覺と自治的能力の增進といふ、無上に貴重な精神的の効果の點に於ては、殆ど意想外の成功を收めてゐる。勿論一般的に云へば、眞に階級的に目覺めた勞働者は少數にすぎないが、然し僅に兩三年の間に見られたこの急激な進步から推し、不景氣の試練の中に擧げ得た彼等の美事な成績に照して、かの少數者の自覺が、次第に勞働階級の大衆の間に普及せらるべきことに疑を容れない。私は今日の逆境にあつて、一身の利害を省みず、自己階級のために生死を賭して戰ひつゝある勞働者諸君に滿腔の敬意と同情とを寄すると共に、光明あるその前途を、衷心から祝福せざるを得ない者である。

勞働者の改造欲求と資本家心理

鈴木文治

一

最近我國に頻發する勞働爭議は、其形式に於ても內容に於ても、我國勞働史上に於ける一大記錄たるべきものである。是れ果して如何なる原因に基くか。私を以て之を觀ればこれには二

大理由がある。曰く失業の不安――經濟的理由、曰く階級意識の發達――精神的理由、則ちこれである。

昨春以來の不景氣の結果、我國産業界の打擊を受けたることの重大なるは、今更敍述の必要を見ない。産業界の打擊は則ち勞働者の打擊で、今や失業の不安はヒシ／＼と勞働者を襲ひつゝあるのである。夫れも最初の間は、徒らに勞働者を萎縮させたに過ぎなかつた。資本家側も亦、その不景氣の影響の深酷ならざる間は、寧ろ戰時中急劇に膨脹を告げたる事業整理の好機會となし、對勞働者の關係に於ても、却つてこれを以て所謂不良分子の驅逐、利用せんとするの有樣であつた。從つて勞働者は一に資本家の命維れ從ひ、言動を愼み職務に勵精し、ひたすら業主の忌憚に觸れざるやうに勉むることを以て保身最上の途なりとするの有樣であつた。其結果は忽ち勞働運動の上にも劇甚にして且つ的面ある影響を與へ、組合員の退會は踵を接し、組合は其維持に多大の苦痛を感ぜざるを得ざるに至つた。これは昨年々末頃より乃至一二月頃の狀態である。然るに、反對の時代は來た。不景氣はいやが上にも其範圍を擴大し、其程度を深酷にし來るや、資本家の狼狽は其極に達し、事業の整理どころか、利益の減少どころか、やがては倒産の悲哀、一身の破滅を感ぜざるを得ざるに至りては、勞働者從業員の極端なる憐憫をなし、其失職者の運命の如きは、殆んど一顧だもせざるの有樣を呈するに至つた。

是に於てか勞働者も考へざるを得ない。忠實、格勤、おとなしくさへして居れば、資本家の忌憚にも觸れず、馘首の運命も免れて居た間は、組合運動等に參加して、徒らに資本家の反感を買ふ等の不利なる事を思うたが、事玆に至れば最早遠慮して居る時期ではないと考へ直さゞるを得ざるに至つた。戰時好景氣の間こそ、種々の口實を設けて多少の優遇法を講じもした。それも實は資本家が生産獎勵の手段に過ぎなかつた。好景氣時代のボロイ儲けは一體誰れのお蔭であるか。今更不景氣だからと言つて、出て行けとは何事である。おとなしくして居るのみが能ではない。今日は他人の事でも、明日は我身の上の事である。恐悩々々として居る時ではない。今は遠慮も斟酌も無用である。寧しろ如かんや、強固たる組合に加入し、其團結の威力を以て資本家に對抗し、以て保身の途を全うせんにはと。これ實に本春二三月頃よりの勞働者心理變轉の狀態であつて、則ち不景氣の漸くドン底に迫らんとする時であつた。是に於て各組合は忽劇に其會員數を增加するに至つた。而しこれは各組中、比較的歴史もあり、有力らしくも思はるゝものに於て殊に然るの有樣である。最近に於ける爭議の頻發、而して其猛烈なる爭鬪の

芽生えは、斯くの如くして、實に不景氣の慘況甚しく、世上所謂勞働運動閉塞の觀測をなしつゝあるの時に既に業にはぐゝまれつゝあるものである。然れども最近に於ける爭議頻發の理由は、決して單に右の失業の不安なる一般的、經濟的原因にのみ基くのではない。これをして斯くあらしむべき他の大なる理由がある。則ち右の第二に擧げたる精神的理由――階級意識の發達が油の薪に於けるが如く、大にこれを助長したのである。

二

日本勞働者の階級意識の著しい勞最――これは最近の爭議に於て見逃すべからざる一大要素である。其主張の堂々たることを見よ、其要求の合理的なることを見よ。不景氣に際し、失業の不安に脅かされつゝも、彼等は決して數年前の如く、單に賃銀の增加や、手當の增額をのみ要求してゐるのではない。彼等は遙かに產業の民主化、產業の自治を理想として憧憬して居る。所謂團體交渉權の要求なるものは、實際勞働者として何等の幸福を齎らすものでないとして嗤ふ人もあるであらう。併しながら最近の爭議に於ける交渉權の要求は決して、團體交渉權の獲得そのものが行止まりの目的であるのではない。彼等はこれを以て產業民主の第一步なりと信じて居る。資本主義打破の前提なりと信じて居る。徒らに大言壯語することを以て快事とし、然も何等の結果を招來し得ざる運動を以て、寧ろ勞働運動の發達に害あるものとなし、先づ卑近なる足下の第一步より踏み出さんとして居るのである。而してこれ最も明瞭なる階級意識の所產なりと言つて可なりである。

『階級意識』なる言語は、我國に於ては一種の用語として比較的新しき用語なりと言つていゝ。長い間、封建政治と家族制度の下に養はれて來た日本の勞働者の間には、從來その明瞭なるものがなかつた。偶々にその芽生えなるものはあつても、それは所謂『忠君愛國』の美名の下に踏み躙られて來たのである。否、現に今日に於ても、一味固陋の徒は此意識を以て『過激思想』として芟除せんと努めてゐる。夫れにも拘らず、今、日本の勞働者の間に此意識が成熟し、發達し、普及しつゝあるは、否み難き事である。これは日本の產業が資本主義化しつゝある當然の結果であつて、而して最近に於ては、不景氣が急劇にもたらしたところの結果である。加之、世界大戰の影響としてそのこれあるべきは怪むに足らざる處で、所謂民主思潮の刺戟、而して思想界並に勞働、社會運動の指導者の宣傳の效果に歸せなければならない。

實際、從來我國の勞働者は、資本家の甘手段に籠絡せられて來た。而して、彼等の血と汗との勞働は、殆んど資本家が私腹を肥すの料に供されて來た。彼等その文化的發達を阻止され、

其健康を害され、その生命を縮められ、その一切の人間的欲求は拒絶されて來た。彼等の勞力は長い間、一種の機械として、商品として單に資本家の利用するところとなつたに過ぎなかつた。其實例は鑛山に、生絲工場に、造船所に、到るところに見出される。たゞ彼等の心胸は長年月の壓迫に脅え且つ萎えて居た。彼等の宿命觀は、それを慘ましき當然の運命として諦めを與へて居た。併し乍ら世界戰爭の影響としてこの假面が剝がれた。其幔幕が引き下された。一切の秘密は白日の下に曝された。現實が暴露した。一度禁制の果實を喰つた勞働者は、玆に初めて自己の醜狀を覺知して、驚き且つ悲んだ。而してその憤怒の情は腹のドン底より込み上げて來らざるを得ざるに至つた。彼等は畢竟長い間資本家より欺かれて居たことを知つた。彼等は此憤怒の情しそれは單に自己を愚弄せる者に對する復讐的の感情のみではない、人類の文化的發達を阻止し、勞働の人格を無視せる者に對する人道的義憤である——を合理化し、組織化して以て資本家に當るの外なきことを覺つた。資本家階級の現存する限り勞働者の幸福と自由とは拒まざるを得ざるものなることを自覺した。勞働者は横に階級的に團結せよ、而してその人間的要求を貫徹せよと、これは決して西洋思想の輸入の結果でもなければ、直譯でもない。又煽動者の煽動のためでもない。生活の不安に當面し、血と涙との體驗の結果に外ならない。從來の勞働者にも勿論虐げらるゝ者の悲哀と憤恨とはあつた。併し彼等は其由つて來る所を確かめ得なかつた。そこで彼の不平と憤怒とは發して仲間の喧嘩となり、妻子の虐待となり、若しくは自暴的墮落となつた。今や彼等はこの原因を發見した、標的を見出した。その運動の猛烈にして且つ執着力に富むは當然である。徒らに今日の勞働組合に罷業基金なきを見て、線香花火的結果に終るを豫想するが如き唯物的觀測を試むる勿れ、罷業基金の如きは物かは、借金質に置いても、砂に噛りついても、行くところまで行かうといふのが、今日の勞働者の意氣地である、負けじ魂である。

三

然るにこれに對する資本家の心理は、驚くべき程時代後れである。少數の例外は私と雖も承認するが、大多數の資本家の頭腦を支配するものは、依然として純然たる封建思想である。彼等は尙主從關係の道德を夢見て居る。勞働者を附屬物と考へて居る。彼等は自己の營利の目的のために、勞力を商品として買入れつゝある關係にあるに拘らず、尙勞働者に職を與へ、生活を保障し、これに恩恵を施しつゝあると考へるのである。彼等は雇主なると共に、否雇主たることは同時に恩人なり、慈善家

なりと考ふるのである。從つて彼等の思想に從へば、從者は主人に忠實ならざるべからず、施しを受くる者は恩人に對して從順ならざるべかずと考へるのである。更に主人と家來、與ふる者と受くる者との間に差別あるべきは當然で、勞働者を差別視し特殊扱せんとするのである。從つて勞働者として其業主に對して反抗的態度を取らんとするが如きは、實に大それた、分に背いた行爲で、よしんば假りに物いふ場合に於ても、恭謙の態度に出でなければならぬ。從來日本の勞働者が雇主に對する要求は、所謂『嘆願書』として提出されたに徴しても這間の消息は窺知することが出來る。大抵の入職志願書、若くは誓約書と稱するものには『御社の御規則堅く相守るべきは勿論、御社の御都合に依り何時御解傭相成候共一切苦情申間敷』といふ一項目が入れてある。いはゞ資本家に對し生殺與奪の權利を認めて居るものである。而して斯くの如き狀態の下に、沈香も焚かず屁も放らずで、十年、二十年、三十年勤續したものは模範職工として表彰されたのである。皆勤賞など得んがためには、親戚知己の義理も人情も欠かねばならぬ。模範職工とならんがためには『人間』の生活を放棄せねばならぬ。斯くの如くして長年月を勤め上げた結果は、老朽淘汰の運命に接して波荒い世上に放たれるのである。此の際多年の勤勞に酬ゆるものは僅少なる涙金一封である。その後の運命については業主の關係する所ではない。これ宛然老馬を屠獸商の手に渡す態度ではないか。たま〳〵多少の不平を訴ふる者はあつた。けれども多くの場合に、それは泣寢入に終るの外はない。

凡そ營利の前に正義も人道もなきは資本主義の當然の結論である。溫情主義の假面を被むつて、その醜狀を蔽はんとするは、恰も甲冑の上に法衣を纏ふの類に過ぎない。勞働者も多年の經驗上此點に氣づいて來た。それに勞働者の知識のレベルも一般に高くなつた。日々の新聞紙は勿論、無數の出版物は彼等の自覺を促して止まない。『團結は力なり』これ彼等の確信となつた。『萬國の勞働者團結せよ』これ必ずマルクスを俟つて知るべきでない。個人たる勞働者が資本主義の前に立つは恰も羊の狼に對するが如し、金力なきものは、『數』を以て對抗すべし、これ實に日本勞働者が慘澹たる體驗の後發見せる體驗哲學である。

日本の勞働者の意識がこゝまで進んで來たことは、今尚多數資本家の氣づかざるところである。彼等は勞働爭議の頻發は、外部の煽動のために過ぎない、一時煽動に乘りもするが、少し熱が冷めければ、又溫順猫の如くなるのであると考へて居る。殊に今の勞働者に生計の餘裕のあらう筈はないから——それは自己の責任たることを忘れて——早晩困つて詫つて來るものと

信じて居る。而して勞働者が生意氣になつて困る、外來思想のために惡化して來る、政府の取締が手緩いといふやうに攻擊して來る。彼等を以て見れば政府の役人の如きはその財產の番人、營業用の心棒の如く心得て居るのである。その租稅は番人への心付けである。斯くの如く尊大、倨傲、何等反省する所なき資本家は、更に一部の軍閥、官僚、御用學者、御用記者、御用宗敎家、御用敎育家の擁護を受けて居る。而して所謂道德的敎化に次ぐに種々の宣傳を以てし、聽かざる者は警察と軍隊とを取締らうと考へて居る。『富める者の天國に入るは駱駝の針の穴をくゞるよりも難し』との古聖の嘆、千載の下尙眞理として嚴存するを憾まざるを得ない。

四

勞働者は自の己主張の正義に合し人道に則る所以を確信して居る。要求も亦實に文化的意義に徹底して居る。それも現狀の下に容れるべき最も限度の要求に過ぎない。此要求を斥け、此欲求を抑壓するものは人道の敵なりと觀念するに至る。此敵を憎惡する殘忍なる復讐的手段に想到せば如何。正々堂々の戰は力を以て抑壓し得るでもあらう。若し誤まつて彼等は憤激の極、手段を擇ばずと覺悟するに至らば如何。今の資本家の態度は、正しく道理を以て進退せず、力を以て進退せんとするものである。劍を以て起てるものは劍を以て滅ぶべし。道理と道理との接觸を離れて、力と力とのみが相搏つの狀態に至らば、所謂『日本固有の美風』も恐らくは反故紙同樣と成るであらう。然れども今日の狀勢を以てせば誰か日本の明日を卜知し得るものぞ。況んや問題は都市のみにはあらず、地方には小作人の不平漸く猛烈に擡頭せんとしつゝあるをや。岌々として危い哉。

さりとても現政府當局の無能無識さよ。彼等は國際勞働會議にて議決されたる『勞働者團體の自由』さへも確認し得ないではないか。勞働保險は調査又調査に曠日彌久しつゝある間に、失業の怒濤は澎湃として襲來しつゝあるではないか。一片の職業紹介所法の如きは畢竟、赤手を以て頽瀾を翻さんとするものである。大規模の爭議の頻發に遭逢しては、警察當局の狼狽的干涉沙汰の外、何等策の施すべきものなきにあらずや。工場法、鑛夫扶助規則の如き又要するに二階から眼藥の類に過ぎない。斯の如く徒らに遷延しつゝある間に大事は實に決するのである。吾人は何等政黨的感情を以て言ふのではない。時代の活ける問題の處理に對して何等の對策なし理論なき政府の下に、不安の時を過さゞるを得ざる國民の不幸を悲むものである。

綱紀肅正の聲を聞かずや。よしや運動それ自身が政界策士の手に仕組まるゝにせよ、叫そのものは國民の叫である。又幾多の大官名瀆職の獄に珠數つなぎを見よ、迷信の流行を見よ、卑猥なる性慾問題の流行を見よ、更に幾多の慘酷なる犯罪の流行を見よ、何れか之時代の休徵ならざる。山雨將に來らんとして風樓に滿つるの慨あるもの、之正に日本の現狀ではないか。

part of life: we ought to be able to use it without having to think of it all day long. The bodily needs of all could be supplied, as a matter of course, by means of a few hours of daily labour on the part of every man and woman in the community. But it should be the remaining hours that would be regarded as inportant-hours which could be devoted to enjoyment or art or study, to affection and woodlands and sunshine in green fields. The mechanistic Utopian is unable to value these things: he sees in his dream a world where goods are produced more and more easily, and distributed with impartial justice to workers too tired and bored to know how to enjoy them. What men are to do with leisure he neither knows nor cares; presumably they are to sleep till the time for work comes round again.

This utilitarianizing of men's outlook is, I believe, not inseparable from industrialism, but due to the fact that its growth has been dominated by commercialism and competition. A communis ic industry could be the servant, not the master, of the community; this is one fundamenetal reason for preferring communism to capitalism. I shall have more to say on this subject at a later stage. For the present, I wish only to warn the advocates of economic reconstruction against the danger of adopting the vices of their opponents, by regarding man as a tool for producing goods, rather than goods as a subordinate necessity for liberating the non-material side of human life. Man's true life does not consist in the business of filling his belly and clothing his body, but in art and thought and love, in the creation and contemplation of beauty and in the scientific understanding of the world. If the world is to be regenerated, it is these things, not only in material goods, that all must be enabled to participate.

in industaialism, but which, I believe, might cease to characterize industry under communism; I mean, the tendency to value things for their uses rather than for their intrinsic value. The essence of industrialism, as we saw, is an extension of the practice of making tools. In an indurtrial community, the great majority of the population are not making consumable commodities, but only machines and appliances by means of which others can make consumable commodities. This leads men to become utilitarian rather than artistic, since their product has not in itself any direct human value. The man who makes a railway is regarded as more important than the man who travels on it, although the purpose of the railway is to be travelled on. The man who reads a book is thought to be wasting his time, whereas the man who makes the paper, the man who sets the type, the man who does the binding, and the librarian who catalogues it, are all regarded as performing valuable functions. The journey from means to end is so long, and the distinctive merits of industrialism are so exclusively concerned with means, that people lose sights of the end altogether, and come to think mere production the only thing that is of importance. Quantity is valued more than quality, and mechanism more than its uses.

This reason, as well as the one previously mentioned, accounts for the decay of art and romance under industrialism. But the utilitarian tendency of industrialized thought goes deeper than the decay of art and romance; it upsets men's dreams of a better world, and their whole conception of the springs of action. It has come to be thought that the important part of a man's life is the economic part, because this is the part concerned with production and utilities. It is true that, at present, the economic part needs our thought, because it is diseased; just as, when a man's leg is broken, it is temporarily the most important part of his body. But when it is healed and he can walk on it, he forgets about it. So it ought to be with the economic

the spirit of vegetation, the religion invented in the infancy of agriculture to insure the fertility of the soil. Harvest Thanksgiving, prayers for rain or fair weather, and so on, illustrate what has been really vital in religion. To the peasant, fertility and famine are sent by God, and religious rites exist to secure the one and avert the other.

The industrial worker is not dependent upon the weather or the seasons, except in a very minor degree. The causes which make his prosperity or misfortune seem to him, in the main, to be purely human and easily ascertainable. It is true that natural causes affect him, but they are not such as we are accustomed to attribute to supernatural agency. God may send rain in answer to prayer, because the need of rain was felt while religion was still young and creative. But although a population may be ruined by the exhaustion of its coal-fields, no one supposes that God would create new seams, however earnestly the miners were to pray. Petroleum may bring prosperity, but if Moses had brought petroleum out of the rock instead of water, we should have regarded the occurrence as a fact of geology, not as a miracle. The fact is that reigion is no longer sufficiently vital to take hold of anything new; it was formed long ago to suit certain ancient needs, and has subsisted by the force of tradition, but is no longer able to assimilate anything that cannot be viewed traditionally. Hence the alteration of daily habits and interests resulting from industrialism has proved fatal to the religious outlook, which has grown dim even among those who have not explicitly rejected it. This is, I believe, the fundamental reason for the decay of religion in modern communities. The lessened vitality of religon is in the main attributable to science. It remains to be seen whether science will prove strong enough to prevent the growth of a wholly new religion, such as Marxism, adapted to the habits and aspirations of industrial communities.

There is one other tendency which has hitherto been very strong

therefore take the side of the rich, and represent religion itself as being on this side. But this cannot be the sole reason, since, if it were, wage-earners would invent democratic variants of the traditional religion, as was done by the English Independents in the 17th century, or by the peasants who revolted against agrarian oppression in the Middle Ages and in the time of Luther. It is singularly easy to adapt Christianity to the needs of the poor, since it is only necessary to revert to the teachings of Christ. Yet that is not the course which industrial populations take; on the contrary, they tend everywhere to atheism and materialism. Their rebellion against traditional religion must, therefore, have some deeper cause than the mere accidents of present day politics.

The chief reason is, I believe, that the welfare of industrial wage-earners is more dependent upon human agency, and less upon natural causes, than is the case with people whose manner of life is more primitive. People who depend upon the weather are always apt to be religious, because the weather is capricious and non-human, and is therefore regarded as of divine origin. On the rock-bound coast of Brittany, where Atlantic storms make sea-faring a constant and imminent peril, the fishermen are more religious than any other population of Europe: churches crowd the coast, particularly its most dangerous portions, while every headland has its Calvary, with the lofty Crucifix so placed as to be visible from many miles out to sea. While the fisherman is at sea, he and his wife pray for his safe return; as soon as he lands, his relief finds expression in drunkenness. A life of this kind, exposed constantly to non-human dangers, is the kind most favourable to traditional religion. Indeed the whole of traditional religion may be regarded as an attempt to mitigate the terror inspired by destructive natural forces. Sir J. C. Grazer, in his "Golden Bough", has shown that most of the elements in Christianity are derived from worship of

will cease more and more. Under these circumstances, marriage, as it has existed since men took to agriculture, is likely to come to an end. Women will prefer to preserve their independence, and not rely upon the precarious bounty of individual man. They will share their children with the State rather than with a husband, not invariably, but in a continually increasing proportion of instances. I am not concerned to argue whether this change is desirable or undesirable; I say only that it belongs to the inherent tendencies of industrialism, and must be brought about by the continuance of industrialism unless counteracted by some very potent force. It has, of course, the effect, always characteristic of large-scale industry, of increasing the pressure of the community upon the individual. The family has been hitherto a refuge of privacy, where it was possible to escape from the State, and even, to a certain extent, from public opinion. A man with unusual tastes or opinions could bring up his children with a view to their sharing his peculiarities; but this must cease when the State takes over the education of children and (as it must ultimately do) the whole economic burden of their maintenance. Thus the break-up of the family must increse the tendency to uniformity throughout the population, and weaken all those individual traits which cannot grow or flourish in a life lived wholly in public.

Religion, in its traditional forms, appears to be difficult to combine with industrialism, although it is by no means obvious why this should be the case. Of course the successful capitalists remain religious, partly because they have every reason to thank God for their blessings, and partly because religion is a conservative force, tending to repress the rebelliousness of wage-earners. But industrial wage-earners everywhere tend to lose their religious beliefs. I think this is partly for the merely accidental reason that the teachers of religion derive their incomes either from endowments or from the bounty of the rich, and

ment of women has two effects: on the one hand it makes them economically independent of men, so that they cease to be subject to husbands; on the other hand it makes it difficult for them to bring up their children themselves. The tradition of the monogamic family is so strong in all the chief industrial countries that the effect of industrialism on the family has taken a long time to show itself. Even now, it has hardly begun in America, where Christianity is still not uncommon; but throughout Europe the process of disintegration, which had already begun, has been enormously accelerated by the war, owing to the ease with which women found employment, in government offices, in munitions works, or on the land. Experience has shown that the average woman will not submit to the restraints of the old-fashioned marriage, or remain faithful to one man, when she can be economically independent. For the moment, the restraints and concealments imposed by the upholders of traditional morality have somewhat obscured the extent of the change thus brought about. But the change will grow greater with time, since it belongs to the inherent tendencies of industrialism. In a pre-industrial community, rich men hold their wives as property, while poor men made them co-operators in their work. Peasant women do much of the hard work of agriculture, and working-class women have in the past had their time fully taken up with household work and the rearing of children. In this way, whether in town or country, the family formed an economic unit.

But when the woman goes out to industrial work like her husband, and the children spend most of their day at school, the economic tie between husband and wife is enormously weakened. It is probable that, with the growth of industrialism, the practice of eating in public eating-houses will increase, and house-work be reduced to a minimum. The children will have first their midday meal, and then all meals, at school; thus the peculiar work which has hitherto been done by wives

producing men and women wholesale with the very latest machinery warranted to make each specimen up to sample.

In such an atmosphere, art and romance and individual affection cannot flourish, since they involve preservation of individuality in oneself and recognition of it in others. There are other reasons also why such things decay under industrialism as it has been practiced hitherto, and I will return to this topic when I come to these other reasons. But there is one point connected with the decay of romance which belongs to our present topic. The instinct for romance, when it is denied an outlet in one's own life, seeks, as instincts will, a vicarious satisfaction in imagination. Hence the passion for sensational stories, melodramas, and murder cases. A lunatic who kills his wife with every circumstance of horror is a public benefactor: into a thoussand tame and listless lives, he introduces the imaginative satisfaction of fierce passion. Every detail in the newspapers is eagerly devoured by men who dare not in their own conduct, depart a hair's breadth from respectable rectitude, for fear of losing their job. At the outbreak of war, the universal delight of those who expect to be noncombatants has the same source: the gladiatorial show relieves the deadly monotony of the office or the factory even better then a football match or a horse race. And in spite of all knowledge to the contrary, non-combatants persist in imagining modern war on the Homeric pattern, as an affair of individual bravery and initiative, because the dreary mechanistic mass-action that constitutes the actual operations affords no outlet to the starved instinct for individuall romance. This same boredom and desire for excitement does much to increase the fierceness of revolutionary movements, and to produce the preference for revolution as against more gradual and less sensational methods.

One of the most important effects of industrialism is the break up of the family resulting from the employment of women. The employ-

quite compatible with democracy. What I mean by democracy is a system under which all ordinary men and women participate equally in fundamental political power, though exceptional people may be excluded for special reasons, such as endeavouring to upset by force the government desired by the majority. Interpreted in this wide sense, political democracy seems to be the system of government natural to an advanced industrial community, except in times of special stress such as revolution or war.

Industrialism, as we have seen, diminishes the freedom of the individual in relation to the community, but increases the freedom of the community in relation to nature. That is to say, the actions of the individual, at any rate in the economic part of his life, become increasingly controlled by the actions of the community, or by some large organization such as a Trust; but the actions of the community become less and less controlled by the primitive necessity of keeping alive. Hence individual passions, such as those which produce art and romance, tend to die out, while collective passions, such as those which produce war, sanitation and elementary education, are liberated and strengthened. Each of these deserves separate consideration.

The decay of individual passions brings with it, first of all, a diminution of individuality. In a thoroughly industrialized community, such as the United States, there is no appreciable difference between one person and another; eccentricity is hated, and every man and woman endeavours to be as like his or her neighbours as possible. Their clothes, their houses, their household utensils, are all produced to pattern by the million, without any of those individual differences that characterize the products of handicrafts. And it seems that the men and women wish to assimilate themselves to the articles they use by forcing upon themselves the sameness of manufactured articles, as though the Creator Himself had adopted industrial methods, and were

possible for every man and woman to have as great a share of them as he or she might desire. If every man and woman worked for four hours a day at necessary work, we could all have enough; and the leisure remaining after four hours' work is amply sufficient for even the most intensive cultivations of science or art. This fact has destroyed the only strong argument that ever existed for an oligarchic organization of society, whether economic or political, and has made it almost inevitable that, if industrialism continues without disaster, its ultimate form must be communism, which alone avoids inequalities for which the former reason no longer exists.

The desire to diffuse civilization has, it is true, played only a very small part hitherto in the development of industrialism, and it is perhaps hardly to be hoped that it will play a great part until after the establishment of communism. There has, however, been a very considerable diffusion of civilization in industrial countries, owing to the operation of motives which were mainly economic. A man who has some education is a more efficient worker than one who can neither read nor write; hence all industrial countries have adopted universal compulsory education. This would scarcely have been possible without industrialism, since the time of teachers and pupils could not easily have been spared from more immediately necessary work. With the coming of industrialism and the complicated processes that it introduces, universal education becomes both more possible and more obviously necessary; increase of education may therefore be taken as one of the inherent tendencies of industrialism.

With universal education come other things of great importance. The first of these is political democracy, which is scarcely possible where the working class is uneducated, and scarcely avoidable where it is educated. By democracy I do not necessarily mean a parliamentary regime; the Soviet system, as originally conceived, would have been

level of the animals is his mental capacity, which has brought with it desires that are not merely material. When men are liberated from the pressure of the struggle to obtain food they do not all sink into sloth and idleness; some remain active, but in the pursuit of knowledge or art or some other purely mental object. It is the work of these men that sheds lustre on mankind as a whole. To have lived a certain number of years, consumed a certain amount of food, begotten a certain number of children similar to oneself, and then died, is not the utmost of which men are capable; yet, owing to the scant productivity of labour, it was, until lately, all that most men could hope to achieve. Now, so far as physical conditions are concerned, better possibilities exist: education and sufficient leisure could, if we chose, exist throughout the whole community, and the business of keeping alive could become an easy and unimportant part of our daily occupation.

What is called civilization may be defined as the pursuit of objects not biologically necessary for survival. It first arose through the introduction of agriculture in the fertile deltas of great rivers, more particularly in Egypt and Babylonia. Everywhere else primitive agriculture exhausts the soil and compels frequent migrations, but this was not the case in the deltas. Here the surplus food produced by one man's labour above one man's needs was sufficient to make possible the creation of a small leisure class, and it was this small leisure class which invented writing, architecture, mathematics, astronomy, and other arts essential to all subsequent civilization. Although the class that could share in civilized pursuits increased with the improvement of agriculture and the growth of commerce, it remained unavoidably small, because labour was still not sufficiently productive to create the necessaries of life except by the whole work of most of the community. Now, though the arts and sciences remain a prerogative of the few, there is no good reason why this should be the case; it would be

conditions are primarily those involved in warding off death. Most animals, owing to lack of foresight, die by starvation. Most human beings, owing to their possession of some slight degree of foresight, succeed in avoiding this form of death. But in a pre-industrial society they only succeed, unless they belong to the rich minority, by working hard almost all their lives in the production of food and other necessaries. This work is in itself often irksome from its excessive amount, and is a complete obstacle to the realization of all desires for knowledge, beauty or enjoyment. Such desires, where industry is undeveloped, can only be indulged by the fortunate few kings, priests and nobles. But under industrialism the production of necessaries requires only a small part of the energies of the community, all the rest being set free for the production of either leisure or luxuries—including among luxuries education, science, literature, art, and warfare. Thus Man is rendered freer by industrialism, since his bondage to Nature is diminished; but each separate man may not be freer, since there is an increase in the pressure of the community upon the individual.

This, also, is exacty paralleled by the difference between the cells of the human body and a collection of protozoa. The separate cells of the human body have far less freedom than a protozoon, since they are compelled to co-operate with the rest of the body or perish. But the body as a whole has more freedom than a protozoon, since it has more control over its environment, more delicate senses, and more elaborate habits by which to utilize the knowledge brought by the senses.

By diminishing man's bondage to Nature, industrialism has rendered physically possible many things of great value which were only very partially possible in earlier stages. The mere business of keeping alive is shared by man with the lower animals, and does not raise him above their level in any important respect. What raises him above the

ture, as it becomes more scientific, shares, though to a lesser degree in the tendencies of industry it requires manures and machines which cannot be produced on the spot, but are often brought from great distances. Thus the whole community becomes knit together, so that the life of each depends upon the life of all.

Like the human body, an industrial society has its vital organs, the destruction of which paralyses the whole organism. This becomes increasingly true as industry becomes more advanced and scientific. The destruction of a power station may cause all the factories, trams, lights and electric trains of a district to cease working. This is merely an example of the universal law that what is more highly organized is more sensitive. It follows that lawlessness and destructiveness can do far more harm in an industrial community than they can where the methods of production are more primitive.

As society grows more organic, it is inevitable that government acquires more importance. The acts of individuals have more and more far-reaching effects upon others, and therefore requires to be more and more controlled in the interests of the community. Hence a diminution of individual liberty and of what may be called the anarchic side of life, i. e. the side in which a man merely follows his own whims. If this side of life is to be in any degree preserved under industrialism, special measures will have to be taken to that end. But this is a topic to be discussed again at a later stage.

Against the loss of liberty due to increase of government and organization, there is to be set a gain of liberty owing to the fact that the necessaries of life can be produced with less labour than in a pre-industrial society. The desires of an individual are subject to two kinds of restraint, namely those due to the community and those due to material conditions. Industrialism, while it tends to increase the former, greatly diminishes the latter. The restraints imposed by material

alive, as the protozoa can. In this sacrifice of independence to co-operation there is both loss and gain. There is loss in the fact that the whole assemblage of cells can be killed by one vital wound, and that therefore a human body has a more precarious life than a crowd of protozoa. But there is gain in the fact that, by specializing, the several organs become capable of doing work which no number of protozoa could do, and that the life of a human body is thus enriched and its responsiveness to its environment enormously enhanced. Exactly parallel differences exist between an industrial and an unindustrial society.

In a primitive pastoral or agricultural community, each family produces all that is needed for its own subsistence. The happiness of such a family has been depicted by Pope in the poem beginning:

"Happy the man whose wish or care
A few paternal acres bound."

But it may be doubted whether Pope would really have liked this state of affairs, since it would not have enabled a man to live by the sale of his verses. A society which allows of such specialization is already on the road to industrialism.

In an industrial community, no man is self-subsistent; each man takes part in a process which produces a great deal of some commodity, or of some machine for making commodities, but no man produces the whole variety of commodities necessary for preserving life. Hence trading, or at any rate some form of exchange of products, is absolutely necessary to survival wherever industry exists. The man engaged in a factory has to be fed and clothed by the labour of others, and cannot even produce what is made in the factory without the machinery and the co-operation of the other workers. He has ceased altogether to be an economically independent unit. The capitalist is at least equally dependent: if man would not work for him, he would starve. Agricul-

trialism is the employment of elaborate machinery, and other means (such as railways) of diminishing the total labour of production. All the characteristics of industrialism are exemplified by the substitution of a bridge for a ferry, in spite of the fact that bridges existed before the industrial era. If a small number of men wish to cross a river, less labour is involved in taking them across in a boat than in building a bridge. But when very many wish to cross, the bridge involves an economy of labour, in spite of the fact that it is a much more serious matter to make a bridge than to make a boat. It is obvious also that the building of a bridge, except for military purposes, depends upon the expected preservation of some degree of law and order, both because a bridge is easily destroyed, and because, in very unsettled times, no one can spare energy or thought for objects of which the advantage is in a more or less distant future.

The essence of industrialism is the expenditure of much joint labour upon things which are not themselves consumable commodities, but merely means to the production of other things which are consumable. From this fundamental quality all the other characteristics of industrialism follow.

The first thing to notice is that industrialism makes a society more organic, in the same sense in which the human body, which is a collection of cells, is more organic than a crowd of protozoa each consisting of a single cell. Each of the protozoa is capable of all the functions required for keeping alive; it does not need help from the other: or die because they die. The cells composing the human body have no such independence; they have different functions, all necessary or at least useful for the life of the whole; and when any of the organs that perform vital functions are destroyed, the rest perish. The eyes can only see, the ears can only hear, and so on; an eye or an ear severed from the rest of the body cannot do what is necessary to keep

II. INHERENT TENDENCIES OF INDUSTRIALISM.

By Prof. Bertrand Russell.

In order to understand the operation of political and economic forces, it is useful to imitate the practice of the physicist, and study each separate force in an artificial isolation. What actually happens is not, of course, what would happen if only one force were acting, but is a resultant of the effects of them all. The problem of calculating this resultant is, however, greatly simplified by the previous investigation of the tendencies of the various single forces. The effects of nationalism in isolation are too obvious to need study, but the effects of industrialism, in so far as its action is not thwarted or complicated by other factors, are less obvious, though certainly not less important if we wish to understand the modern world. Something has already been said on this subject in dealing with the causes of the present chaos, but then our discussion was merely incidental, and now it must be taken up on its own account.

As indispensable conditions for the existence of industrialism in a community we enumerated: large organizations of workers engaged upon a common task; willingness in the directors of industry to forego present goods for future profit; an orderly and stable government; skilled workers; and scientific knowledge. Assuming that the conditions for the growth of industrialism exist, we have to inquire what effects its growth is likely to have, if it is not counterbalanced by other tendencies.

Industrialism does not consist merely in large undertakings requiring a great number of workmen. The building of the pyramids was a vast undertaking, but was not industrial. The essence of indus-



殺しの名人

＝ファブルの『昆虫記』から＝

大杉榮

一

地中に玉蟲をいけて置いて、それを自分の幼蟲の食料にするセルセリス（一種の土蜂）の話しを書いた。レオン・デュフウル大先生の論文に感心して、私も此のセルセリスの仕事に立ち會ふ機會を狙つてゐた。そしてうまくそれを狙つて見つけあてた。尤も、それは玉蟲の狩人の普通のセルセリスではなく、もつと大きな體の、昆蟲學者にはセルセリス・テユベルキユラタ又はセルセリス・マジオルと云ふ名で知られてゐる蜂である。

九月の下半は、此の土蜂が其の巣を掘つて、其の幼蟲の爲めの餌食を底深く埋める時期である。此の巣の場所は、必ず念入りに撰擇されてゐて、或る種と他の種とには違ふが同じ種には不變だと云ふ、あの不思議な法則に從つてゐる。レオン・デユフウルの土蜂には、雨が降ると直ぐに其の穴を壞して了ふ土崩れなぞの出來ないように、たとへば往來の土のやうな、水平な、踏みかためられた、目のつまつた土でないといけない。が、私の土蜂には、それと反對に、垂直になつてゐる土でないといけない。

斯うした建築術上のちよつとして修正でもつて、此土蜂は其の穴を嚇かす事の出來る危險の大半を避けてゐる。そして土の性質の撰擇には餘り嚴しくない。少々粘土のまじつた動き易い砂の中にでも、又沙岩の細く碎け易い砂の中にでも、所構はずに穴を掘る。それで其の穴掘りの仕事も大變やさしくなる。たゞ一つの必須條件は、日中の大部分日にさらされてゐる、乾いた土である事らしい。從つて此の土蜂が其の家を造るのに選ぶらしいのは、道の垂直になつた斜面か、青沙岩の沙の中に雨で掘

れた窪地の側面かである。

斯うした條件は、謂はゆる『窪んだ道』の、カルペントラス(フランス南部の一地方)の附近に多い。そして私がセルセリス・テユペルキユラタを最も多く見、又其の生涯に就いての事實の大部分を集めたのも、やはり其處である。

垂直な場所を選ぶと云ふだけでは十分でない。既にもう大ぶ進んで來た季節の、どうしても避ける事の出來ない雨を防ぐ爲めに、猶他の用心が要る。堅い砂岩の板が蛇腹の格構をして突き出てゐるか、又は拳のはいるやうな穴が自然に堀れてでもゐれば、それを自然の玄關にして、其の庇の下か穴の奥かに坑道をつくる。此の土蜂には共同生活らしいものは少しもないのだが、それでも好んで少數のものが相集まつてゐる。私が其の巣を見たのは、いつも少なくとも十ばかりづゝ塊まつてゐるのだつた。そして其の穴は、多くは大ぶ離れてゐたが、時には相接觸する程にひつついていた。

天氣のいゝ日に、此の勉强な穴掘り共のいろんな仕事を見てゐると、實に面白い。或者は、其の口でもつて、穴の奥の方から根氣よく砂利を嚙み取つて來て、其の重い塊りを外へ押し出してゐる。或者は又、其の關節の鋭い熊手で廊下の壁をひつ掻きながら、除土を積み重ねて、それを遠くの方へ掃いてやる。長い埃の流れのやうにそれを斜面の上へ流してやる。建築中の廊下の外へ時を置いては投げ出す。此の砂の波が、私の第一番に發見したセルセリスを裏切つて、私に其の巣を見つけ出さしたのであつた。更に又、或者は、疲れたのか、それとも其の烈しい勤めを終つたのか、休んで、其の家を繕つてゐる自然の庇の下で其の觸角や翅を光らしてゐる。或は又、其の穴の口のところにぢつとしてゐて、僅かに其の四角な、黄色と黑とのだんだらになつた、大きな顏だけを見せてゐる。

更に又最後の或者は、ぶん〳〵と重々しい唸り聲をたてて、樫の木の近くの籔の上を飛んでゐる。すると、建築中の穴の近所で絶えず待ち伏せしてゐる雄が、直ぐにそれを追ふて行く。いくつかの番ひが出來る。そして此の番ひが、其の仕合せな所有者に取つて代らうとする外の雄が來て、屢々邪魔される。ぶんぶん云ふ唸り聲が脅迫的になる。喧嘩が始まる。往々二匹の雄が、其の何れかゞ相手の優越を認めるまで、埃の中で轉げ合ふ。そして其處から遠くはないところで、雌が無頓着な顏をして其の鬪ひの終局を待つてゐる。遂に雌は其の鬪ひの運が彼女に與へた雄を受け容れる。そして其の番ひが、見えなくなるまで飛んで行つて、遠い何處かの草叢の上へ安靜を求めに行く。

雄の役目はたゞそれだけの事だ。雌の半分程小さくて、雄と

殆んど同じ位に數多くゐる。巣の近所をあちこちとうろついてゐるが、決して其處にはいる事はない。又、恐らくはもつとつらい。巣に食物を貯へる狩りや、穴掘りの精の出る仕事には、決して加はらない。

二三日で穴の準備が出來る。去年の穴を修繕して又使ふのだと、もつと早くも出來る。

二

セルセリスが其の幼蟲の餌食として選ぶ犧牲は、クレオン・オフタルシック（一種の象鼻虫）と云ふ、大きなからだの甲虫である。此の掠奪者が其の犧牲を足の間にかゝへて、腹と腹と頭と頭とを向ひ合はせて、重さうにしてやつて來る。そして翼の助けを借りずに其の殘りの行程を終らうとして、穴から少し隔つたところへどしんと落ちる。セルセリスは口で其の獲物をくはへながら、垂直の或は少なくとも極く急な傾配の地面の上を引きずつて行く。其の爲めに屢々もんど返りをやつて、掠奪者も犧牲もごつちやに窪地の底まで轉がつて行く。が、此の倦む事を知らない母を思ひ斷たせる事は出來ない。埃まみれになつて、一時も離した事のない分捕物を持つて、とう／＼其の巣の中へもぐり込む。

こんな荷物を持つて、しかもこんな地面の上を歩くのは、セルセリスにとつて決して容易な事ではあるまい。しかしそれを持つて飛ぶのも、更に又大ていの事ではあるまい。其の飛ぶ力は實に驚く程だ。此の頑丈な土蜂は、自分と同じ位の大きさのそして自分よりも重い獲物を持つて飛んで行くのだ。私はセルセリスと其の獲物とを比較して量つて見る好奇心を持つた。前者は百五十ミリグラムで、後者は平均二百五十ミリグラム、即ち約二倍であつた。

此の數字は、可なり雄辯に、此の倔強な狩人の爲めに語つてゐる。そして私は、彼れが私の無遠慮な好奇心の爲めに餘りにそば近く押寄せられて、其の貴重な分捕物を救はうとして逃げようと決心した時、如何にすばしこく、如何にやすく／＼と、其の獲物を足の間にかゝえて、見えないやうな高いところへ飛んで行つて了つたかを讃嘆措く事が出來なかつた。しかし彼れはいつもさうして逃げたのではなかつた。時々には、其の狩人は傷づけないように顎でもつて引つくり返して、ぢり／＼さしそして遂に其の獲物を見棄てさして、それを捕へた。斯うして其の餌食を取られた狩人は、あちこちを探し歩いて、ちよつと巣の中にはいつたが、直ぐに又出て來て新しい狩りに飛んで行つた。十分足らずの間に、此の巧妙な搜索者は新しい犧牲が見つけて、それを殺してかどわかして來る。そして屢々私はそれ

を利用して捕へた。八度も、同じ蜂から、次ぎから次ぎへと掠つぱらつた。そして八度とも彼れは、撓ます屈せずに、其の無駄な遠征をやり返した。其の忍耐は私の忍耐を疲らした。そしてとう／＼九度目の獲物は彼れのものとなつて了つた。

此の方法で、或は既にもう仕入れの濟んだ巣を侵して、百疋ばかりの象鼻虫を手に入れた。レオン・デュフウルがセルセリス・ビュプレスティシド（玉虫狩りの土蜂）の習慣に就いて語つたところに據つて、私は或る期待をする權利があつたのだが自分のやつた奇妙な採集を見て、驚かない譯に行かなかつた。玉虫の狩人は、同じ一屬の範圍で、どの種のものでも構はない然るに此の蜂は、もつと排他的で、いつでも同じ種のクレオン・オフタルミクにだけ向ふ。私の分捕りの調査では、たゞ一つの例外しか認める事が出來なかつた。しかもそれは同じ種類のクレオン・アルテルナンと云ふのであつたが、私の頻繁なセルセリス訪問の間に二度とそれを見る事はなかつた。

斯うしてたゞ一つの種を偏愛すると云ふのは、それが一番汁氣が多くてうまい餌食だからと云ふのだらうか。それともセルセリスの幼虫が、此の餌食にだけ、一番好きな汁を見出して、ほかには見出さないと云ふのだらうか。私はさうは思はない。レオン・デュフウルのセルセリスが有らゆる種類の玉虫を構はずに狩るのは、勿論それは、有らゆる玉虫が同じ營養分を持つてゐるからである。しかし象鼻虫だつて矢張り一般には同じ事である筈だ。其の營養分は同じである筈だ。すると此の思ひがけない選擇は、量の問題、従つて又疲勞や時間の經濟の問題になつて來る。其の同類中でも大きなからだの此の土蜂は、クレオン・オフタルミクが吾々の地方での一番大きなそして恐らくは又一番澤山ゐる象鼻虫であるところから、殊にそれを襲ふのだ。しかし若し此の選り好みの餌食がなかつたら、もつと小さい、ほかの種のものを襲はなくちやなるまい。

要するに、此の土蜂は象鼻虫を餌食にする唯一のものではない。猶多くの他のセルセリスも、其の大きさや、力や、狩の事情に應じて、屬も、種も、形も、大きさもいろ／＼と違ふ象鼻虫を捕へるのだ。

甲虫を食べる八種のセルセリスの中で、七種は象鼻虫の御馳走に耽り、一種は玉虫の御馳走に限る。どんな奇妙な理由から此の土蜂の掠奪が斯うした狭い範圍に限られるのだらうか。何にが此の排他的な選擇の動機であらうか。外面的にはちつとも似てゐない此の玉虫と象鼻虫とが、等しく同じ種類の肉食幼虫の餌食になると云ふのは、其の間にどんな内的の類似があるのだらうか。甲の種と乙の種との犠牲の間には、勿論、何等かの

味の差、營養の差があつて、幼虫はよくそれを見分ける事が出來るに違ひない。けれどもそれとは違ふ或る重大な理由が、此等一切の美食的考察を支配して、此の奇妙な選り好みを起させるのに違ひない。

三

肉食幼虫にあてがはれた甲虫の長い間の不思議な保存に就いて、レオン・デュフウルがあれ程立派に話して了つたあとではこんな事を附け加へて云ふ必要もあるまいが、とにかく私が見つけた限りの、又私があの掠奪者の足の間から取つて來た限りの象鼻虫は、永遠に動く事は出來なくされてゐるが、皆な完全な狀態で保存されてゐた。色のあざやかな事、手足や其の細かい關節のしなやかな事、內臟の尋常な事などは、今眼の前にある此の動かないからだが本當の死骸だとは思はせない。殊に、擴大鏡で見てもちよつとした傷も見つけ出す事が出來ないので縱々さうとは思へない。そして、そんな事がある筈だとは思へないながらも、今にもそれが動いて步き出しさうな氣がする。

そればかりではない。普通の死で死んだ虫なら二三時間のうちに乾いて粉になつて了ふだらう程の熱にあはしたり、又やはり同じやうに直ぐ腐つて黴になつて了ふだらう程の濕つぽい天氣にさらしたりして、ガラスの管や漏斗のやうに卷いた紙の中に入れて、一ケ月あまりも置いて見た。そして不思議な事にはこんなに長い間たつたあとでも、其の內臟は少しも其の溌溂さを失つてゐなかつた。又其の解剖も生きた虫をやるのと同じやうにやさしく出來た。

斯うした事實を前にしては、どうしても、防腐劑の作用だと云ふ事も出來なければ、又本當に死んだんだと信ずる事も出來ない。そこにはまだ、生命（いのち）が、潛在的受働的な生命が、植物のそれのやうな生命があるんだ。生命だけが、猶暫くの間いろんな化學的力の破壞的侵入と戰ひつゝ、斯うして有機體を解體させずに置く事が出來るのだ。そこにはまだ、運動はないが、生命があるのだ。クロロホルムやエテルが起すやうな不思議、神經系統の不可思議な法則に基く不思議を、眼の前に見るのだ。

此の植物的生命の作用は勿論鈍い弱いものである。しかし其には幽かながらも働く。其の證據には、もう決して眼のさめないしかしまだ死んだのではない此の深い眠りの最初の一週間には、此の象鼻虫に時々尋常に便通がある。

此の便通は、解剖して見て腸に何んにもなくなつてゐるまでは、やまない。

此の虫がまだ現はす生命の弱い光りは其處にとゞまらない。

刺戟感應性はもう全くなくなつて了つたやうに見えるが、それでも私はまだいくばくかの形跡を眼ざめさす事が出來た。

幾滴かの氣發油で濕した鋸屑をいれた小壜の中に、まだ堀り出したばかりの絕對的睡眠に陷つてゐる象鼻虫を入れると、十五分ばかりして其の觸角や手足を動かし出したのを見て、私は大して驚きもしなかつた。そして一時私はそれを生き返らす事が出來ると思つた。が、それは空な望みであつた。消えて行かうとする感應性の最後の形跡であつた。此の運動は、すぐにとまつて、二度と呼び起す事は出來なかつた。虫が殺されてから數時間乃至三四日の間に幾度も此の實驗をやつて見たが、いつも同じやうに成功した。が、其の運動は、殺されてから時間が經つてゐればゐる程、其の現はれるのが遲かつた。そして其の運動はいつも前から後へ及んで行く。即ち先づ觸角が鈍い振動を起す。次ぎに一番前の一對の足が横へ出して此の振動狀態の仲間入りをする。最後に第二對の足、それから第三對の足と云ふ順序に、同じやうにやる。一とたび此の振動が與へられるとこれらのいろんなつき物が順序もなしに動き出して、やがて總てが再びもとの不動に歸る。尤も其の殺されたのが極く近くない限りは、指先き（蹠節）の振動は遠くに移らずに、足は其儘じつとしてゐる。

殺されてから十日目には、此の同じ方法で、何等感應性のあとかたをも見る事が出來なかつた。そこでこんどは電流の助けを借りて見た。此の方法は前のよりも激しいので、氣發油が何んの効果をも齎らさなかつたところに、筋肉の收縮や運動を起させた。一本の針の尖きを腹の一番終りの環節へつつこみ、もう一本の針の尖きを頸の下につつこんで、それに電流を通ずると、指先きの振動のほかに、腹の上にたたんである手足が烈く屈曲する。そして其の電流が絕たれると伸びる。此の運動は、始めの數日の間は隨分激しいが、だんだんに其の强さを減じて或る時日を經過すればもう現はれない。十日目には、まだはつきりした運動があつた。十五日目には、まだ手足もしなやかで内臟も生々してゐるのだが、電氣ではもう運動を起さす事が出來なかつた。

そこで私は氣發油や硫黃で窒息さした、實際死んだいろんな甲虫を、電氣の作用にかけて見た。が、其の恐ろしい賊が陷れた生と死との中間の奇妙な狀態にもう幾日もゐる象鼻虫には、あれ程たやすく得られた運動が、これらの本當に死んだ虫にはどうしても起す事が出來なかつた。

これらの一切の事實は、全く死んだ動物だと云ふ假定や、防腐劑で腐らぬようにした本當の死體だと云ふ假定とは矛盾する

そしてこれは、其の動物が運動のもとをやられてゐるんだと見るほかに、說明のしようがない。斯くして其の感應性は不意に麻痺させられて、だん／＼に消えて行くが、成長機能はもつと頑丈なので、それよりも遲く消えるのだ。そして幼虫に必要な時間の間、其の內臟が生きてゐると云ふやうな事になるのだ。

四

そこで最も檢證の必要があるのは、其の殺しかたである。それには此の土蜂の毒針が第一の役目をしてゐる事は勿論だ。しかし此の土蜂は、どこもかもしつかりと整つた堅い甲冑をつけた象鼻虫の、何處をどうして刺すのだらうか。此の針で刺された虫には、何んにも擴大鏡で見てすらも其の殺害を裏切るものがない。そこで此の土蜂の殺害行爲を直接に檢證して見なければならない。そして此の問題は、其の困難の爲めに既にレオン・デュフウルを退けさせ、そして一時は私にも其の解決は不可能だと思へたのであつた。それでも私はやつて見た。そして盲探しではあつたが、とにかく其處に到達する事が出來た。

セルセリス共は、其の狩りをする爲めに穴の中から出て、所構はず飛んで行つた。そして四方八方から其の獲物を拵つて歸つて來た。すると、其の近所は何處もかもお構ひなしに搜されたのだ。が、其の狩人共が往復に十分以上かゝらなかつたのを見ると、斯うして搜索された土地の範圍は大して廣くはなささうだ。殊に其の獲物を見つけて其を襲ふて、そしてそれを死んだ地の樣にするのに必要な時間までも數ると猶更さうだ。

で私は、狩りをしてゐるセルセリスを見つけるつもりで、出來るだけ注意して其の近所を步き廻つて見た。が、午後の半日を報ひのない此の仕事にさゝげて、斯うして探す無駄な事がわかつた。僅かの狩人共が、あちこちに散らばつてゐて、直ぐに又急いで飛んで行つて見えなくなる。それを其の仕事の際中に見つけようと云ふのだ。しかも葡萄や、オリイヴの一面に植つた厄介な地の上にだ。そんな機會が滅多にあるものでない。で私はこんな方法はよして了まつた。

生きた玉虫を巢の近所に置いて、世話なく獲物を見つけさして、それでセルセリスをおびき寄せて、其の活劇を見る事は出來ないだらうか。これはいゝ思ひつきだと思つた。そして其の翌朝から、生きた象鼻虫を捕へに走りまはつた。葡萄の木も、い、い、いうまごやしの畑も、麥畑も、垣根も、小づみになつた石の上も道傍も、どこもかも訪ねて見た。探して見た。そして此の綿密な探索に厭々した二日間の後に、お恥かしい事ながら、漸く三疋の象鼻虫を手に入れた。いづれも皆な毛の脫けた、埃まみれ

になつた、觸角や指先きのなくなつた、恐らくはもうセルセリスが欲しがりさうもないびつこの老兵だ。

一定の象鼻虫の爲めに汗みどりになつた駈け廻つた、此狂氣じみた搜索の時から、もう幾年か過ぎた。そして殆んど毎日虫さがしをやつてゐながら、私はいまだにまだ、時々道ばたにうろついゐてるのに出會ふ此の有名な象鼻虫が、どんな具合に生活してゐるのか知らない。驚くべき本能の力よ。同じ場所で、僅かな時間に、吾々の土蜂は人間には見つからない此の虫を幾百と見つけて來るのだ。しかも確かに蛹の殼から出たばかりの新しいぴかぴかしたのを見つけて來るのだ。

しかしまあ、そんな事はどうでもいゝとして、私の情けない獲物で試みて見よう。一定のセルセリスがいつもの獲物を持つて穴の中にはいつた。其の土蜂がまた捕へに出て行く前に、私は穴から二三寸のところに象鼻虫を置いた。象鼻虫はあちこちと歩く。あんまり遠くに行くと、又穴のそばへやつた。遂にセルセリスが其の大きな顏を現はして、穴から出て來た。私の心臟はどきどきと鳴つた。土蜂は暫く自分の家のまはりを歩いてゐた。やがて象鼻虫も見つけた、その傍を通つた。戻つて來た。斯うして幾度も其の背中の上を超えて行つた。そして遂に私があれ程苦心して捕へた獲物に、一口の光榮も與へないで飛んで行つて了つた。私はがつかりして呆然とした。ほかの穴で又新しい試みをやつた。が、それも又新しい當てはづれな獵したに過ぎなかつた。確かに此の敏感な狩人は私が當てがつてやつた餌食を望まないのだ。恐らくはそれを餘りに年老つてゐると思つたのか。それとも又、私が指でそれを捕へて彼等の嫌ひな何にかの香をつけたのか。更に亦此洗煉された感覺の土蜂には、誰れかゞそれに觸つたと云ふ事が厭になつたもとなのだ。

それでは、自己防衛の爲めに其の短劍を使ふように、セルセリスを餘儀なくさせて、うまく行くだらうか。私は土蜂を象鼻虫とを同じ瓶の中におしこんだ。そしてそれを振つて怒らして見た。細いからだの土蜂は、厚ぼつたいからだの象鼻虫よりも、敏感だ。そして飛びかゝらうとはせずに、却つて逃げようとする。まるで逆になつて了つた。象鼻虫が攻勢をとつて、嘴のさきで其の不倶戴天の敵の足を突つつく。土蜂はただもう恐がつて、自分を防がらうともしない。私はもう方法が盡きて了つた。そして何んとかして其の大團圓（カタストロフ）を見たいと云ふ望は、其の困難な事が分れば分る程たゞ强まつて行くばかりであつた。仕方がない。ほかの方法をさがして見よう。

いゝ考へが浮んだ。そしてこれならばきつとよからうと云ふ

望みが伴つて來た。それ程此の思ひつきは自然に問題の要點に觸れてゐたのだ。さうだ。これならばいゝ。これならきつと成功する。それは狩りの熱心の一番强い土蜂に私の馬鹿にされた象鼻虫を當てがつて見るのだ。さうすれば、其の一生懸命になつてゐる熱心に驅られて、此の象鼻虫の缺點などには氣がつかないだらう。

前にも云つたやうに、セルセリスは其の狩りから歸つて來ると、穴から少し離れた、斜面の下に落ちる。そして其處から穴骨折りで其の獲物を引きずつて行く。其の時に、ピンセツトで其の足を引つぱつて、此の獲物をとつて了ふのだ。そして直ぐに、其の代りに生きてゐる象鼻虫を投つてやるのだ。此の方法は立派に成功した。其の獲物が腹の下から脫けて逃げて行つた事を知ると、セルセリスは其の足でじだんだを踏んで戾つて來る。そして代りにやつた象鼻虫を見つけると、飛びかゝつて足で引つかかへて持つて行かうとする。が、直ぐに彼れは其獲物の生きてゐる事に氣がつく。そして其時に、非常な早さで終る其の活劇が始まるのだ。土蜂が其の犧牲と面と向ふ。其の强い口で象鼻虫の嘴を啣へる。そしてしつかりとそれを押へる。象鼻虫は足をつつぱつてからだを曲げようとする。が土蜂は、其の前足でもつて、腹節の環節を開かせるようにして、背中の上をしつかりと押へる。そして其時に、土蜂の腹が象鼻虫の腹の下へはいつて行つて、まがつて、そして第一對の足を第二對の足との間の前胸環の合せ目を二三度其の毒深い短劍でぐさりと突く。それだけの事が一瞬間に行はれるのだ。死苦に伴ふ手足のもがきもなく、又痙攣的の何んの運動もなしに、雷にでも打たれたやうに、ちつとも動く事が出來なくなつて倒れて了ふ。其の早い事は、恐ろしいと共に、又實に目ざましいものだ。それから土蜂は此の死骸を仰向けに引つくり返して、腹と腹と、手足と手足とを向ひ合せて、抱きかゝへて飛んで行く。私は三疋の象鼻虫で、三度此の試驗を繰返して見た。が、其のやりかたには少しも變つた事がなかつた。

勿論私は、其のたんびにセルセリスに其の最初の獲物を返してやつて、あとでゆつくり試驗して見る爲めに、私の象鼻虫を取り返した。そして此の試驗は、私がセルセリスの恐ろしい才能に就いて持つてゐた感嘆をたしかめさせるばかりであつた。刺された場所には、ちよつとした傷のあとも、汁の流れ出たあとも見えない。しかし、其の殊に驚くべき事は、一切の運動がこんなに早くそしてこんなに完全に無くされて了つた事だ。殺された直ぐあとで、私の目の前でやられた其の三疋の象鼻虫を調べて見たが、もう刺戟感應性のあとかたもなかつた。此の虫

になつた、觸角や指先きのなくなつた、恐らくはもうセルセリスが欲しがりさうもないびつこの老兵だ。

一定の象鼻虫の爲めに汗みどりになつた駈け廻つた、此狂氣じみた捜索の時から、もう幾年か過ぎた。そして殆んど毎日虫さがしをやつてゐながら、私はいまだにまだ、時々道ばたにうろついゐてるのに出會ふ此の有名な象鼻虫が、どんな具合に生活してゐるのか知らない。驚くべき本能の力よ。同じ場所で、僅かな時間に、吾々の土蜂は人間には見つからない此の虫を幾百と見つけて來るのだ。しかも確かに蛹の殼から出たばかりの新しいぴか〱したのを見つけて來るのだ。

しかしまあ、そんな事はどうでもいゝとして、私の情けない獲物で試みて見よう。一定のセルセリスがいつもの獲物を持つて穴の中にはいつた。其の土蜂がまた捕へに出て行く前に、私は穴から二三寸のところに象鼻虫を置いた。象鼻虫はあちこちと歩く。あんまり遠くに行くと、又穴のそばへやつた。遂にセルセリスが其の大きな顔を現はして、穴から出て來た。私の心臓はどき〱と鳴つた。土蜂は暫く自分の家のまはりを歩いてゐた。やがて象鼻虫も見つけた、その傍を通つた。戻つて來た。斯うして幾度も其の背中の上を超えて行つた。そして遂に私があれ程苦心して捕へた獲物に、一口の光榮も與へないで飛んで行つて了つた。私はがつかりして呆然とした。ほかの穴で又新しい試みをやつた。が、それも又新しい當てはづれを齎したに過ぎなかつた。確かに此の敏感な狩人は私が當てがつてやつた餌食を望まないのだ。恐らくはそれを餘りに年老つてゐると思つたのか。それとも又、私が指でそれを捕へて彼等の嫌ひな何にかの香をつけたのか。兎に角此洗煉された感覺の土蜂には、誰れかゞそれに觸つたと云ふ事が厭になつたもとなのだ。

それでは、自己防衛の爲めに其の短劍を使ふように、セルセリスを餘儀なくさせて、うまく行くだらうか。私は土蜂を象鼻虫とを同じ瓶の中におしこんだ。そしてそれを振つて怒らして見た。細いからだの土蜂は、厚ぼつたいからだの象鼻虫よりも、敏感だ。そして飛びかゝらうとはせずに、却つて逃げようとする。まるで逆になつて了つた。象鼻虫が攻勢をとつて、嘴のさきで其の不倶戴天の敵の足を突つつく。土蜂はただもう恐がつて、自分を防がらうともしない。私はもう方法が盡きて了つた。そして何んとかして其の大團圓（カタストロフ）を見たいと云ふ望は、其の困難な事が分れば分る程たゞ強まつて行くばかりであつた。仕方がない。ほかの方法をさがして見よう。

いゝ考へが浮んだ。そしてこれならばきつとよからうと云ふ

望みが伴つて來た。それ程此の思ひつきは自然に問題の要點に觸れてゐたのだ。さうだ。これならばいゝ。これならきつと成功する。それは狩りの熱心の一番強い土蜂に私の馬鹿にされた象鼻虫を當てがつて見るのだ。さうすれば、其の一生懸命になつてゐる熱心に驅られて、此の象鼻虫の缺點なぞには氣がつかないだらう。

——殺しの名人——

前にも云つたやうに、セルセリスは其の狩りから歸つて來ると、穴から少し離れた、斜面の下に落ちる。そして其處から大骨折りで其の獲物を引きずつて行く。其の時に、ピンセットで其の足を引つぱつて、此の獲物をとつて了ふのだ。そして直ぐに、其の代りに生きてゐる象鼻虫を投つてやるのだ。此の方法は立派に成功した。其の獲物が腹の下から脫けて逃げて行つた事を知ると、セルセリスは其の足でじだんだを踏んで戻つて來る。そして代りにやつた象鼻虫を見つけると、飛びかゝつて足で引つかかへて持つて行かうとする。が、直ぐに彼れは其獲物の生きてゐる事に氣がつく。そして其時に、非常な早さで終る其の活劇が始まるのだ。土蜂が其の犧牲と面と向ふ。其の強い口で象鼻虫の嘴を啣へる。そしてしつかりとそれを押へる。象鼻虫は足をつつばつてからだを曲げようとする。が土蜂は、其の前足でもつて、腹節の環節を開かせるようにして、背中の上をしつかりと押へる。そして其等に、[illegible]下へはいつて行つて、[illegible]きかつて、そして第一對の足を[illegible]足との間の前輪環の合せ目を二三度其の毒深い短劍でぐさりと突く。それだけの事が一瞬間に行はれるのだ。死苦に伴ふ手足のもがきもなく、又、痙攣的の何んの運動もなしに、雷にでも打たれたやうに、ちつとも動く事が出來なくなつて倒れて了ふ。其の早い事は、恐ろしいと共に、又實に目ざましいものだ。それから土蜂は此の死骸を仰向けに引つくり返して、腹と腹と、手足と手足とを向ひ合せて、抱きかゝへて飛んで行く。私は三疋の象鼻虫で、三度此の試驗を繰返して見た。が、其のやりかたには少しも變つた事がなかつた。

勿論私は、其のたんびにセルセリスに其の最初の獲物を返してやつて、あとでゆつくり試驗して見る爲めに、私の象鼻虫を取り返した。そして此の試驗は、私がセルセリスの恐ろしい才能に就いて持つてゐた感嘆をたしかめさせるばかりであつた。刺された場所には、ちよつとした傷のあとも、汁の流れ出たあとも見えない。しかし、其の殊に驚くべき事は、一切の運動がこんなに早くそしてこんなに完全に無くされて了つた事だ。殺された直ぐあとで、私の目の前でやられた其の三疋の象鼻虫[illegible]調べて見たが、[illegible]もう刺戟感應[illegible]

をはさんだり、突いたりしたのでは、其の感應性は少しも現はれなかつた。そしてそれを引起させるには先きに云つた人工的の方法によらなければならなかつた。

斯くして此の頑丈な象鼻虫は、生きながら針にさゝれて昆虫採取者のコルク板の上に突つ通されると、幾日間も幾週間もどうかすると、幾月間もぢたばた暴れるのが、目に見えないほんの一と滴の毒を注射する一と刺でもつて、忽ち其の一切の運動を失つて了ふ。しかし化學はこんなに少しの分量でこんなによくきく毒は知らない。青酸でもこんな効目はない。すると、此の電光石火のやうな死の源因を捕へるには、毒物學によらないで、生理學と解剖學とによらなければならないのではあるまいか。

此の不思議な事實を説明する爲めに考へて見なければならないのは、注射された毒物の強い効能でなく、冒された器官の重要さである。

然らば其の短劍の刺す場所には、何にがあるだらうか。

五

セルセリスは其の針を刺す場所を吾々に敎へて、其の秘密を一部分明かした。しかし問題はそれで解決されたか、と云ふにまだだ。まだいろんな事が分らない。そこで前に立ち歸つて、土蜂が今吾々に敎へた事を一時忘れて、此の問題を考へて見る。其の問題と云ふのはかうだ。其處に生んだ卵から出る幼蟲を養ふのに十分な程の或る數の獲物を地中の巣の中に埋めて置く、と云ふ事だ。

最初は極く單純な事のやうに思はれる。しかし考へて見ると、直ぐに其の非常に困難な事が分つて來る。吾々人間の獲物は、たとへば鐵砲で打たれたりして、大きな創をつけられて殺される。然るに土蜂は吾々人間の知らない微妙な感覺を打つてゐる。生きたまゝの形ぢや色の、ちつとも手をつけてない獲物を望むのだ。手足が折れてゐてもいけない。口の開いた傷があつてもいけない。目もあてられないやうに腸が割けてゐてもいけない。土蜂の獲物は生きた虫ぞつくりの新しさを持つてゐる指でちよつと觸つてもけがれる、あの綺麗な色の粉を、一粒もなくさずに保存してゐる。死んだのだらうか、本當に死骸なんだらうか、と疑はれる位だ。これと同じやうな結果を得なければならないとなつたら、吾々にはどんなに難しい事だらう。虫を足で踏みつぶして殺すのは誰れでも出來る。しかし、殺したと見えないように手際よくそれを殺すのは、誰れでも出來る容易しい事ではない。頭を引きぬいてさへもまだ長い間じたばたする頑強な生命を持つてゐる虫を、壓しつぶさずに即座に殺し

て見ろと云はれたら、大がいの人は如何んともする事が出來ないだらう。

窒息されればいゝなどと云ふ事は實際に馴れた昆虫學者でなければ考へつかない。しかし其の方法でやるのでも、揮發油や硫黄の蒸氣にかける古いしかたでは、其の成功は疑はしい。さうした毒氣の中でも、隨分長い間あばれて、そして其のからだの飾りを色あせさせて了ふ。で、もつと猛烈な方法、たとへば紙細にシオン加里を染まして、そこから出る恐ろしい青酸のエマナティオンにかけるか。或は又、これは危險がないものでもつといゝ方法だが、硫化炭素の激しい蒸氣にかければいゝ。だから、昆虫を手際よく殺すと云ふ事は、即ちセルセリスが其の巧妙なしかたであんなに早くやつてのけたやうな事をするのは、全くの技術なのだ。化學の恐ろしい武器の助けをかりた技術なんだ。しかもそれは、セルセリスの獲物が本當に死骸になつたのだと云ふ大ざつぱな假定をした上の事だ。

死骸！そんなものは決してセルセリスの幼虫の食物にはならない。生きた肉を大好物の此の小さな人食ひ鬼は、其の餌がちよつとでも腐つてゐれば、もう堪らなく厭やになるのだ。腐つた第一の兆候である、香ひなぞのちつともない、新しい肉でなければならない。

しかし其の餌食は、吾々人間が[illegible]に牛や豚を[illegible]つて置いて船員や旅客に新しい肉を供給するやうに、穴の中に生きたまゝ貯へて置く事は出來ない。實際、かよはい卵が生きた食物の中に産みつけられてどうなるだらうか。ちよつとどうかすれば直ぐに傷のつく蛆のやうなあの弱い幼虫が、針で刺されてもまだ柏車のついたやうな長い足を幾週間もの間動かしてゐるあの強い虫の間にゐて、どうなるだらうか。そこで、始末のつきさうにない矛盾。即ち死んだやうに動かないと云ふ事と、生きてゐるやうに内臓がぴくぴくしてゐると云ふ事が必要なんだ。斯う云つた食物の問題には、極く廣い知識を持つた食道樂の人でも、如何んともしかたがあるまい。實際に馴れた昆虫學者ですらも實は出來ないのだ。

今、解剖學者と生理學者とのアカデミイがあるとする。そして、フルウランヤマジヤンディやクロオド・ベルナアルのやうな、大學者達が此の問題を論ずる大會が開かれるとする。全く動かないやうにすると云ふ事と、腐敗させずに長く置くと云ふ事とを、同時に得ようとするには、先づ第一に起つて來るそして最も自然で最も單純な考へは、肉の保存と云ふ事だらう。ランドの有名な學者（レオン・デュワウル）が[illegible]前にしてやつたやうに、[illegible]

をはさんだり、突いたりしたのでは、其の感應性は少しも現はれなかつた。そしてそれを引起させるには先きに云つた人工的の方法によらなければならなかつた。

斯くして此の頑丈な象鼻虫は、生きながら針にさゝれて昆虫採取者のコルク板の上に突つ通されると、幾日間も幾週間もどうかすると、幾月間もぢたばた躁れるのが、目に見えないほんの一と滴の毒を注射する一と刺でもつて、忽ち其の一切の運動を失つて了ふ。しかし化學はこんなに少しの分量でこんなによくきく毒は知らない。靑酸でもこんな効目はない。すると、此の電光石火のやうな死の原因を捕へるには、毒物學によらないで、生理學と解剖學とによらなければならないのではあるまいか。

此の不思議な事實を說明する爲めに考へて見なければならないのは、注射された毒物の强い効能でなく、冒された器官の重要さである。

五

然らば其の短劒の刺す場所には、何にがあるだらうか。

セルセリスは其の針を刺す場所を吾々に敎へて、其の秘密を一部分明かした。しかし問題はそれで解決されたか、とゞふにまだた。まだいろんな事が分らない。そこで前に立ち歸つて、土蜂が今吾々に敎へた事を一時忘れて、此の問題を考へて見る。其の問題と云ふのはかうだ。其の生んだ卵から出る幼蟲を養ふのに十分な程の或る數の獲物を地中の巢の中に埋めて置く、と云ふ事だ。

最初は極く單純な事のやうに思はれる。しかし考へて見ると、直ぐに其の非常に困難な事が分つて來る。吾々人間の獲物は、たとへば鐵砲で打たれたりして、大きな創をつけられて殺される。然るに土蜂は吾々人間の知らない微妙な感覺を打つてゐる。生きたまゝの形ぢや色の、ちつとも手をつけてない獲物を望むのだ。手足が折れてゐてもいけない。口の開いた傷があつてもいけない。目もあてられないやうに膚が剝けてゐてもいけない。土蜂の獲物は生きた虫ぞつくりの新しさを持つてゐる指でちよつと觸つてもけがれる、あの綺麗な色の粉を、一粒もなくさずに保存してゐる。死んだのだらうか、本當に死骸なんだらうか、と疑はれる位だ。これと同じやうな結果を得なければならないとなつたら、吾々にはどんなに難しい事だらう。虫を足で踏みつぶして殺すのは誰れでも出來る。しかし、殺したと見えないやうに手際よくそれを殺すのは、誰れでも出來る容易しい事ではない。頭を引きぬいてさへもまだ長い間じたばたする頑强な生命を持つてゐる虫を、壓しつぶさずに卽座に殺し

て見ろと云はれたら、大がいの人は如何んともする事が出來ないだらう。

窒息されればいゝなどと云ふ事は實際に馴れた昆虫學者でなければ考へつかない。しかし其の方法でやるのでも、揮發油や硫黄の蒸氣にかける古いしかたでは、其の成功は疑はしい。さうした毒氣の中でも、隨分長い間あばれて、そして其のからだの飾りを色あせさせて了ふ。で、もつと猛烈な方法、たとへば濾紙にシオン加里を浸まして、そこから出る恐ろしい青酸のエマナテイオンにかけるか。或は又、これは危險がないものでもつといゝ方法だが、硫化炭素の激しい蒸氣にかければいゝ。だから、昆虫を手際よく殺すと云ふ事は、即ちセルセリスが其の巧妙なしかたであんなに早くやつてのけたやうな事をするのは、全くの技術なのだ。化學の恐ろしい武器の助けをかりた技術なんだ。しかもそれは、セルセリスの獲物が本當に死骸になつたのだと云ふ大ざつぱな假定をした上の事だ。

死骸！そんなものは決してセルセリスの幼虫の食物にはならない。生きた肉を大好物の此の小さな人食ひ鬼は、其の餌がちよつとでも腐つてゐれば、もう堪らなく厭やになるのだ。腐つた第一の兆候である、香ひなぞのちつともない、新しい肉でなければならない。

しかし其の餌食は、吾々人間が船の中に牛や豚を飼つて置いて船員や船客に新しい肉を供給するやうに、穴の中に生きたまゝ貯へて置く事は出來ない。實際、かよはい卵が生きた食物の中に産みつけられてどうなるだらうか。ちよつとどうかすれば、直ぐに傷のつく蛆のやうなあの弱い幼虫が、針で刺されてもまだ柏車のついたやうな長い足を幾週間もの間動かしてゐるあの強い虫の間にゐて、どうなるだらうか。そこで、始末のつきさうにない矛盾、即ち死んだやうに動かないと云ふ事と、生きてゐるやうに内臓がびくびくしてゐると云ふ事が必要なんだ。斯う云つた食物の問題には、極く廣い知識を持つた食通樂の人でも、如何んともしかたがあるまい。實際に馴れた昆虫學者ですらも實は出來ないのだ。

今、解剖學者と生理學者とのアカデミイがあるとする。そして、フルウランヤマジヤンデイやクロオド・ベルナアルのやうな、大學者等が此の問題を論ずる大會が開かれるとする。

全く動かないやうにすると云ふ事と、腐敗させずに長く置くと云ふ事とを、同時に得ようとするには、先づ第一に起つて來るそして最も自然で最も單純な考へは、肉の保存と云ふ事だらう。ランドの有名な學者（レオン・デュフウル）が其の玉虫を前にしてやつたやうに、何等かの附腐劑のせいにして了ふだら

う。土蜂の毒汁の中に何にかの強い殺菌力が含まれてゐるんだと思ふだらう。しかし、さうしたところで、こんどは其のきたいな力と云ふのが何にか、それが證明されなければならんだらう。そして此の、肉の保存と云ふ未知數に移つただけの、何んの根據もない假定が、ランドの博物學者の最後の言葉であつたやうに、恐らくはやはり此の學者の大會の最後の言葉であらう。

が、若し誰れかゞそれに反對して、セルセリスの幼虫が要るのは保護した肉ではない。そんなものでは、どうしたつて、まだぴくぴく動いてゐる肉の性質は持てない。少しも動かない、しかし生きてゐる肉が要るのだ。と說明でもすれば、此の學者の會議は、こんどは、痲痺と云ふ事に考へつくだらう。

——さうだ。こゝだ。虫を痲痺させればいゝんだ。生命は取らずに、たゞ運動だけ出來ないやうにすればいゝんだ。

——そして此の結果を得るには、方法はたゞ一つだ。即ち、其の虫の神經機關を、どこか一ケ所か或は數ケ所うまく選んで傷つけるか、切るか、毀すかするんだ。

が、此の問題は、微妙な解剖學の秘密なぞには通じてゐない人々の間に、こんな風にして放つて置かれると、決してそれ以上に進まない。其の虫を殺さずに痲痺させると云ふ、其の神經機關は、實際どんな風に排置されてゐるのか。第一には先づ、それが何處にあるのか。勿論それは、高等動物の腦や脊髓のやうに、頭の中に背に沿ふことである。

——いや、それが重大な間違ひなんだ。と大會は云ふだらう昆虫は背中に歩くひつくり返つた動物のやうなものだ。もつと詳しく云ふと、其の脊髓は上の方でなくて、下の方の、胸や腹に沿ふてあるのだ。だから、痲痺させようと云ふ虫に手術をする場所は、下の方、しかも此の下の方だけでなくちやならないのだ。

六

此の異議が出ると、もう一つの、やはり同じやうに重大な異議が出て來る。

解剖學者は其のメスを持つて、自分の刺さうと思ふところへ其のさきを持つて行く事が出來る。障害があつてもそれを取りのける事が出來る。しかし土蜂にはそんな融通はきかない。相手は堅く甲冑をつけた甲虫だ。其のメスは、どうしても頭の甲を通す事の出來ない、極くしなやかな細い針だ。こんな弱い道具で刺す事の出來るのは、抵抗力のない膜だけで。保護されてゐる關節のところだけだ。しかも其の手足の關節は、いくら弱くても、少しも所要の條件に當てはまらない。なぜなら、そんな場所を傷づけたところで、せいぜい一部分の痲痺を起させる

だけで、運動機關の全體に亘る總麻痺を起させる事は出來ない。

長い間鬪つてゐては自分の生命があぶない。幾度も幾度も刺しては、それがあんまり多すぎると、相手の生命をなくする。從つてそんな事はなしに、若し出來ればたゞの一撃で、一切の運動をとめて了はなければならない。そこからいろんな運動器官に分れて行く神經が出る、運動の中心、神經の中心、其の針を持つて行かなければならない。しかも此の運動の中心、神經の中心と云ふのは、いくつかの神經球から出來てゐて、其の數は幼虫には多くて成虫には少ない。此の中心は、からだの下の方の眞中の線の上に、珠數のやうになつて置かれてある。そして其の珠數の玉は多少離れ離れになつてゐて、筋質の二重になつた紐で結びつけられてゐる。成虫になつたどの昆虫にでも、胸部神經球、即ち羽や手足に神經を送つて其の運動を支配してゐる神經球が、三つある。刺すならそこだ。其の作用がどうかして止められゝば、同時に動く可能性が止められて了ふんだ。

土蜂の持つてゐるやうな弱い針で、此の運動中心を刺すには、二つ方法がある。其の一つは頸と胸との間の關節だ。もう一つは、前胸と中胸との間、即ち第一對の足と第二對の足との間の關節だ。しかし此の頸の關節を刺す方法はあまりよくない。それは手足に近いところにある神經球から、あまりに遠すぎる。そこでもう一つの方、しかもたゞそこだけを刺す事にしなければならない。――クロオド・ベルナアルのやうな大解剖學者が、其の深い科學の光りで、此の問題を説明して、大會はかうきめて了ふだらう。

そして土蜂が其の短劍を刺すのは、實際こゝなんだ。正確に此の第一對の足と第二對の足との間、股面の眞中の線の上だ。彼れはまあ、何んと云ふ博學な知識の教へを受けたのだらう。

しかしまだ、昆虫の解剖學的構造に通じた生理學者だけが豫め指定する事の出來る、此の最も弱いところを選んで、そこに針を刺すと云ふだけでは駄目だ。土蜂はもつと大きな困難に打ち克たなければならない。そして彼れは吾々を啞然たらしめる程巧みにそれに打ち克つのである。

成虫になつた昆虫の運動器官を動かす神經中樞は、前にも云つた通り、三つある。それがお互に多少離れてゐる。尤も、時には引つついてゐるのもあるが、そんな事は滅多にない。そして其の中心は各々多少獨立した作用をする。從つて其の一つが傷づけられても、少なくとも直ぐには、其の中心に屬する部分の麻痺しか起らない。ほかの神經球及び其の支配する部分には及ばない。だんだん弱くなつて行く此の三つの運動中心の一つ

一つを、しかも第一對の足と第二對の足との間と云ふたゞ一つのところから刺すのは、實際上いゝ方法ではないやうだ。其の針は極く短くてさう云ふ風にはやりにくい。

尤も或る甲虫では、其の三つの胸神經球が極く接近してゐて、殆んど連續してゐるのもある。又、あとの二つが全く一緒になつて、くつついて了つたのもある。そして、斯うしていろんな神經中樞が益々一緒になり益々集中されるに從つて、其の機能が益々完全になり、そして又情ない事だが、同時に益々脆くなるものだ。さう云ふのが土蜂の餌食には本當に持つてこいなのだ。其の運動中心が相觸れるまでに接近してゐて、一つの同じ塊りのやうに集まつてゐる甲虫なら、たゞ一撃の下に、即座に痲痺されるだらう。或は又、幾度も刺さなければならないとしても、其の刺すべき神經球が皆んなそこに塊まつてゐるんだから、同じところを刺しさえすればいゝんだ。

痲痺さすのに非常に容易い獲物である此の甲虫は何虫だらうか。

問題はそこにあるんだ。機制や生命の根本的總則と云ふやうな高いところにばかり飛んでゐる、クロオド・ベルナアルのやうな學者の高尚な學問は、こゝに來るともう駄目だ。こんな選擇に就ては吾々に教へる事は出來なければ、又吾々を導く事も出來ない。私は此の行を讀むだらう總ての生理學者に尋ねる。文庫の中の記録によらないで、斯うした神經中樞のある甲虫を名指す事が出來るか。又、文庫によつてもいゝから、何處に斯う云つた事が書いてあるか、直ぐ云へるか。

これに必要な文書を、私は甲蟲の神經系統に就いてのエ・ブランシヤル氏の立派な論文の中に見出した。

それに據ると、神經機關の此の集中は先づ金龜子科の甲蟲の特性だ。しかし此の甲蟲は大てい餘りに大きすぎる。セルセリスには恐らくは攻撃も出來まいし、又それを抱きかゝえて行く事も出來まい。それに、其の多くは糞の中に暮らしてゐる。綺麗好きな土蜂はそんなところへそれを探がしには行くまい。猶此の運動中心が極く接近してゐるのでは、閻魔蟲科の甲蟲がある。しかし此の蟲も死體なぞの臭氣ふんぷんたる中に腐敗物で生きてゐるんだから、やはりこゝでは駄目だ。又、小蠹虫科の甲虫もあるが、これは其のからだが餘りに少さすぎる。そして最後に、玉虫と象鼻虫とが來るのだ。

眞暗がりの此の問題の中へ、これは又、何んと云ふ思ひがけない光りだらう。セルセリスの掠奪を受けさうに思はれる無數の甲虫の中で、玉虫と象鼻虫とのたゞ二つの群だけが、其の必

須條件に當てはまるのだ。彼等は、恐らくは此の鋭感な狩人のとても堪へられない厭やなものだらうと思はれる、腐つた死骸だの糞だのには近づかない。いろんな種類の掠奪者のからだに相應した、いろ〳〵と違つた大きさの澤山の種類がある。ほかの有らゆる甲虫よりも、土蜂の針がそこを刺せばうまく成功するに違ひない、たゞ一ケ所の弱い場所を持つてゐる。其の一ケ所に、手足や羽の運動中心が皆な集つて、皆んなが世話なく刺されるやうになつてゐる。

象鼻蟲では、此の一ケ所に、三つの胸神經球が極く接近してゐて、しかも其の後の二つは續いてゐる。又玉蟲では、此の同じ一ケ所に、第二と第三の神經球が第一の球の直ぐそばに一つの大きな塊りになつてゐる。そして甲蟲を貯へて置く事が實驗された人種のセルセリスは、ほかの獲物は絶對に斥けて、たゞ象鼻蟲と玉蟲とだけを狩りするのだ。されば、いろんなセルセリスの巣の中に外見のちつとも似てゐない犧牲が貯へられてゐるのは、必ず何にか內的に似てゐるものがあるからだらう。卽ち神經機關の集中があるからだらう。

七

かく土蜂は、餘程の學者でもこれ程目がきくまいと思はれる位に、實にうまく其の刺す場所を撰擇して、いろんな困難を實に手際よく解決してゐる。が、それがあんまりうますぎるのでつい疑ひが出て來る。これは知らず〳〵の間に何にかの錯覺に引つかゝつたのぢやあるまいかとか。何にかの理論上の臆測が本當の事實をくらまして了つたのぢやあるまいかとか。或は又想像の上の不思議を書いたのぢやあるまいかなどと。

科學上の結果は、其の實驗が有らゆる方法で繰返されて見て、いつでも證明されたあとでなければ確定されない。そこで、此のセルセリス・テユベルキユラタが吾々に敎へた手術を、實驗的試驗にかけて見よう。

土蜂が其の針でやつた事、卽ち被術者の一切の運動をとめて長い間全く新鮮な狀態に保存すると云ふ事が、人工でゝもやれゝば。此の不思議な事が、土蜂の狩りする甲虫に、或は又それと同じやうな神經集中を持つてゐるほかの甲虫にやれゝば。そして神經球の離れてゐるほかの甲虫には出來なければ。土蜂は其の本能の無意識的靈感の中に至上の科學的方法を持つてゐるのだ、と云ふ事が認められなければならないのだ。で、其の實驗の結果を見て見よう。

其の方法は極く單純だ。針でもつて、或はもつと便利なのは、ペンのよく尖つたさきでもつて、昆虫の第一對の足の後ろの胸の關節をちよつと刺して、其の運動中樞に何にかの腐蝕劑を一

と滴たらしこんで見るのだ。私は此の腐蝕劑にアンモニアを使つて見た。しかしこれは、それと同じやうに激しい作用をする液であれば、ほかのものでも同じ結果を生ずるだらう事は勿論だ。丁度ペンにほんの少しインキの滴をつけたやうに、アンモニアとよくまぜて、刺して見た。

斯くして得た結果は、胸神經球の接近してゐる種々行つた實驗と、其の離れてゐる種に行つた實驗とによつて、非常に違つてゐた。其の前者では、私は金龜子科のスカラベ・サクレや長頸のスカラベや、玉虫科の青銅色の玉虫や、又はいろんな象鼻虫殊に此の土蜂が狩りするクレオンを實驗して見た。後者では歩行虫科や長屋虫科の甲虫にやつて見た。

金龜子科や玉虫科や象鼻虫科の甲虫には、其の効果が直ぐに現はれた。アンモニアの滴が神經中樞に觸れると、ふいに、痙攣も起さずにすべての運動がとまつて了ふ。セルセリスが刺してもこれより早くは行かない。あの丈夫なスカラベ・サクレが、ふいと動かないやうになつて了つたのは、實に驚く程であつた。

しかし、土蜂の針でやつたのと、アンモニアをつけたペンのさきでやつたのとの、其の効果の似てゐるのはこれだけぢやない。金龜子科や玉虫科や象鼻虫科のいづれの甲虫も、人工的に刺されると、全く動かないやうになつて了ふのだが、其の一切の關節の全くしなやかな事や内臓のふだん通り生々してゐる事は、三週間も一ケ月も二ケ月すらも續く。便通も最初の數日間はふだん通りにある。そして電流にかけて運動を起こす事が出來る。一言で云へば、セルセリスにやられた甲虫と全く同じだ。即ち、土蜂が其の犧牲を陷れる狀態と、人間が故意にアンモニアで胸神經球を冒して生じさせる狀態と、全く同じだ。

注射したアンモニア液がこんなに長い間虫を完全に保存する事は出來る筈がないのだから、それを防腐劑のせいだとする考へは全く棄てなければならない。そして此の虫は、動かずにぢつとはしてゐるが、本當に死んだのぢやない。そこにはまた幽かな生命が殘つてゐるんだ。猶暫くの間其のいろんな器官を生じてゐるふだんの通りに維持しつゝ、だん／＼それを見棄てゝ行つて、遂にはそれを腐らして了ふのだ。と認めなければならない。

尤も、或る場合には、斯うしてアンモニアを注射しても、手足のほかには完全に運動をなくしない。そして其時には、勿論此の液の惡作用は十分遠くにまで擴がらないので、觸角はまた其の運動性の名殘りを保存してゐる。で、注射をしてから一ケ

月あまりも經つた後に、ちよつとでも觸ると急にそれを引つこませる。觸角の此の運動は、セルセリスに傷づけられた象鼻蟲にでも、珍らしい事ではない。

アンモニアの注射はいつでも金龜子科や玉虫科や象鼻虫科の虫の運動を直ぐさま止めて了ふ。しかし、いやでも今私が云つたやうな狀態にはならない。若し其の傷が深すぎるか、注射液が強すぎるとすれば、其の蟲は本當に死んで了ふ。そして二三日後には、臭い死骸になつて了ふ。又、それと反對に、刺すのが弱すぎると、其の蟲は暫く深い眠りに陷つた後に、目が覺めて、少なくとも部分的に其の運動を恢復する。

然るに第二類の甲蟲、即ち其の胸神經球が離れてゐる甲虫では、アンモニアを注射して見た結果が、それとは全く違つてゐた。殊に最も強いのは步行虫科の甲虫であつた。あの大きなスカラベ・サクレでは直ぐに運動を止めて了ふやうな注射が、步行虫の中の小さなからだのものですらも、激しい無茶苦茶な痙攣を起させるに過ぎなかつた。そして其の虫は、だんだん靜まつて、幾時間か休んだ後には、何んにもなかつたやうにふだんの運動をする。同じ虫に二度も三度も四度も此の試驗を繰返して見たが、其の結果はやはり同じであつた。そして遂に傷があまりに大きくなつて、其の虫は本當に死んで了つた。即ち、幾時もたゝない後に、ひからびて腐つて了つた。

長角虫科の甲虫は、アンモニアの作用にもつとよく感じた。此の毒液を注射すると、それらの虫は可なり直ぐに動かなくなつて、そしてちよつと痙攣を起して死んだやうになる。しかし此の麻痺狀態は、金龜子や玉虫や象鼻蟲では長い間續くのだが、こゝでは何んの一時的で、翌日はもう前と同じやうに激しい運動が現はれて來る。尤も、アンモニア液が可なり強いと、其の運動が現はれて來ない。しかし此の場合には、其の蟲は死んだんだ。本當に死んだんだ。なぜなら直ぐにそれは腐つて了ふ。

されば、神經球の接近してゐる甲蟲にはあれ程有効であつた此の方法も、神經球の相隔たつてゐる甲蟲には完全なそして永續きのする麻痺を起さす事が出來ない。翌日にはもう消えて了ふ一時的の麻痺しか起す事が出來ない。



自傳 (3)

片山潜

母の最後の聲

予が、植月の觀音寺に行つたのは、前に述べたやうな理由であつたので、其月給も僅か二圓位であつた。觀音寺に居て食つて居るのであるから、別に費用は要らない。僕は此植月小學校長大土井誠之助氏に就いて學問をしたのである。先生はなか／＼の勉強家でそして親切に教へて呉れた。

當時小學生徒に河村銀三郎と云ふ子供があつて、よく寺に來て遊び、又屢々泊つて居た。僕は此少年と極懇意になつて、後年僕が岡山の師範學校に入學した時は、彼は岡山中學校に入つて居たのであつた。

小學校で僕は下の方の一二級を受持つて教へたが、上級の生徒中には仲々僕よりもズツトよく出來る生徒が澤山に在つたので、僕は心秘かに耻づかしう思つた、其でも田舍の當時の子供等は質朴であつたから、敢て僕を非難したり、何かするやうなことはなかつた。之は一に大土井先生の親切を蒙つて居たお蔭であつたと思ふ。

しかし僕は決して教授を蔑にする譯ではなかつたが、生徒に徹底的に立派な教へ方をすることは終りまで出來なかつた。當時の希望は其れでも小學校教員になる目的であつた。

山寺生活は頗る單純であつた。納所（めしたき）は老人で、可もなし不可もなしの田舍者で、餘り馳走もしなかつたが、それとて不味い物でもなかつた。老僧は若返つたやうな勢で以つてなか／＼盛んに活動した。月に一度觀音樣の緣日には澤山の男女、子供等を集めて、客殿で說法をした。

この客殿に一つの戒言的の額が掛つて在つたのを今でも、覺へて居る。それは產婦が其の生れ子を殺して居る所で、其後方に鏡があつて、之に映つて居る、額には二本の角が生へて居る。恐ろしい顔になつてゐる額であつた。

當時小僧に俊城と云ふのがあつたいくら教へてやつても少しも覺へない、されど此の小僧は後年德僧と呼ばれるやうになつて、遂々印度錫蘭にまで遊び佛教の蘊奥を極めて歸朝し、今では神奈川在の山寺の立派な和尚になつておるそうだ。

僕は當時大の頑固屋であつた。牛肉の副食

に反對して論文まで書いて見たことを從えてゐる。此の論文を書く動機は嘗て郷關に在つた時、山の上の村に石倉十三を訪ひたる時、讀野理介、志元久次郎など諸友人が集つて宴を開き牛肉を食ふ、僕は之を拒んで食はぬと言ひ張る、强制的に食はせんとしたことを如何にも遺憾としたからである。僕は農家に生れて自ら農業に從事した、彼は耕作上唯一の必要物で農家は其飼養する牛を家族の一部として愛護するのである、僕は牛の尻を追ふて仕事もなし、且つ金儲けをしたものであるから。此記憶がありありと念頭に浮んでくるから、とても其を食ふ氣にはなれなかつた。

× × × × ×

或る時大土井先生の家を訪問し御馳走になつた事を覺へてる。先生は植月を去る北方に一里ばかりの村に住んで居た。此の先生の兄と云ふのは多年の冊行商をやつて僕郷里にも毎年來おつた。

植月觀音は小高い丘の上にあつて、眺望は此地方では一番と云はるゝ絶景である。日が東天に昇れば田非村の田圃を隔て、一大明光を仰ぐときそこにいひ知れぬ快感が浮んだ、そして其の春夏秋冬共に一種の雅味を添へる好個の地であつた。

× × × × ×

僕は此處にある間に當郡の郡長安達清風といふ人の事を屢々耳にした。此人は鳥取藩の人で維新の際に國事に奔走して當時の志士と行動を共にした人で學堂出身の漢學者であつた。從つて一人の勤王家であつた。此人が此處の郡長となつて來たのは大望があつたので、此郡には俗に日本原野と稱する廣い、原野が荒茫々と生茂つて居た。即ち之を開墾するのは國家の利益になると云つてこの郡長となるが早いか、此の原野の開墾に從事した。先づ郡役所を此原野に設置して自分の住宅をその近所に構へてゐる。又漢學塾を開いて津山藩の儒者中村と云ふ先生を聘して生徒を集めて薰陶した。後には此處に寺などを建立し、又牛馬市場などを開いて熱心に此土地の繁榮を計つたもので僕等も、或る日大土井先生と此の開墾事業を見に行つたことがあつた。見渡す限り廣い原野であつた。僕が先生や老僧の勸めに依つて安達郡長の經營する塾に入つたのは植月に來てから一年程も立つてからである。即ち明治十二年の秋口であつた。當時塾生は僅々三十名ばかりであつた。僕は此時始めて純學生の生涯に入つたのである。塾生中には鳥取の者、東京の者等があつた。東京から來た塾生は鈴木錄三郎と云つた。大抵は士族の子弟であつた。僕は百姓の子供であつたから始めは多少馬鹿にされる氣味がないではなかつたが、先生の前で入學試驗をされて第二級に編入されたので一齊に其の第三級塾生は馬鹿にするのを止めた。

塾生は皆勉强してゐた。然れども誰れも僕のやうに何かの目的を以つて入塾して勉强してゐる者は一人も無かつた。僕は來る師範學校の入學試驗を受くる準備の爲めに入學したのであつた。

此塾で始めて僕は輪講を爲る事を學んだ。又實際に先生の前で講義し、漢書の評釋を讀んで其意味を解することを學んだ。僕は意外に漢學なる者の趣味を解し始めた。殊に十八史略は面白く研究した。此十八史略を獨りで研究する時に始めて往年子供の時分に本山寺の本坊で大村綾雄先生に講議を聞いたのが爲めになつてますます學問に理解が出來た。

そこの原野は郷里に比べると餘程寒い、冬は深山の雪が降つて冬季の塾中生活も面白きものの一であつた。

安達氏は學生が好きで、四五の少年を其家に置いて居た。彼等は皆この塾へ來て勉强して居た。又郡長は書が自慢で自作の詩なども

書いて塾生に與れたもので、よく我々塾生は大きな硯に大きな墨をすらせられたつけ、僕も一枚書いて貰つて夏休みの時に持ち歸り僕の叔父が所望するままに與へたことを記憶してゐる。

安達郡長は仲々にハイカラの生活をして常に出る時は洋服を着て靴をはき、馬に乘つて諸所を視察した。只他人の家に行つても決して靴をぬがず靴の儘で疊の上を歩き廻つた。僕が觀音寺に居た頃一度小學校を視察に來て寺で休息した折に客殿へ上つたが靴の儘であつた。僕は如何に郡長でも土足の儘で座敷の上に昇るなどは無禮千萬と云ふ感じを持つた

×　×　×　×

僕は明治十三年の夏、郷里日出木に歸つた。久しぶりに阿母のすこやかな體を見、又郷友等に逢つて心臟の鼓動の切なるものがあつた、盆の或る夕、氏神に宮詣でをする禮があつて、僕は此時家本氏と横部氏と計つて種々氏神樣の堂の周圍に飾り附けを爲して村民を樂しましめたことがあつた。蓋し之が村民の子弟に伍して盆踊りに興した最後の幕であつた。盆踊りは今の樣に取り締りがなかつたから隨分怪しかる事も行はれたらうが、しかし純朴なる村民は此日位愉快な日はなかつたのである。

僕は舊友と一夏の間屢々會合して愉快を覺えたが、しかし僕は舊友等が多少舊時の如く僕に對して親密でなかつたことを意識した。

僕は夏休中家に在つて母と昔がたりや異郷の變つた話をすることを以つて無上の樂しみとした。母も色々僕の過去二ケ年間の經驗話をして聞くのを樂しみとした。

×　×　×　×

夏季休暇が終つて僕は再び日本原野の漢學塾に歸つた。然るに間もなく岡山師範の學生募集があつたから、之に應じて見た。

我々の飯炊爺は安達氏と同郷の鳥取のものであつた、この爺仲々の頑固者で我々塾生にお飯を宛がひぶちにしてゐた。塾生中でも子供等は仲々に爺の與れるご飯丈けでは滿足しない常に喧嘩をするやうにしてご飯を貰つて食べたつけ。實に食事時になると爺は塾生等に對して食過ぎの害を說いて容易に我々の要求に應じなかつた。併し此以外爺はいゝ人間であつた。仲々に旨い副食物を拵へて與れたものだ。

今に僕の忘れない一事は冬中雪を茶碗に集めて、之に白砂糖を交ぜて食べることを發見して僕等は盛んに之を遣つたものだ。火鉢に足を入れて讀書しながら少し喉が渇くと砂糖を入れて食べると一種云ふべからざる風味があつた。師範の方は十七名しか受驗者がない、そのうち及第したものが十五名だ。落第した者は僅々二名で、僕は三番目で入學した。三番目になつたと云ふことは僕にとつて意外であつた。僕は實に學問に志してから僅かに三年、此の二ケ年間小學校の助敎として傍ら勉强したので、云はゞ不規則なる行程を履んだもので其最近の一年間も漢學塾に入つて漢籍を研究したのみで算術も作文、地理、歷史等を研究したこともなかつた。

×　×　×　×

當時の師範學校はあまり程度が高くなかつたことは事實であるが、しかも尙ほ當時の學則は單純であつたから學生重に漢數學で鍛つたものであつた。

無事及第の悅びを荷つて僕は歸郷した、それを喜んでくれた者は、兄と母とであつた。僕は此處に至る準備の出來たのは全く兄の御蔭である。之が爲めに僕は兄が其の資產の幾分を割いて犧牲に供して居る事を私かに知つてゐる。されど兄は自分で家產を種々な事の爲めに浪費して居るから、僕の爲めに費用して居ることは村の人々は知らない。僕は常に

此兄が犠牲を僕の爲めに拂つて異れて居ることを感謝する者である。

師範校は官立であつて、僕等は貸費生として費用を出さずに入學したのである。從つて規則は仲々嚴重であつた。今まで自由な、寧ろ不規則な生活を送つた者には非常に窮窟に感じた。寢るにも、起るにも、食事にも、遊ぶにも、勉强するにも規則でキチ〳〵と時間を守つて起居動作を律せねばならないので、最初は仲々容易なことではなかつた。未だ電氣などはなかつたから皆、石油ランプで勉强するので、一番に不自由を感じたのは夜八時からは發聲を全く禁ぜられたことであつた。で十時には就眠するのである。

今までの習慣として勉强は讀書であつた。讀書は發聲して讀むのであつた。默讀などと云ふことは殆んどしたことがない。然るに八時後は一音をも發音することが出來ない。爲ると罰せらるゝのである。殊に一室に二人の學生を同居せしめておいて、八時後は朝まで言語を發するを禁じ、話をするなと禁ずると云ふことは隨分無法な註文である。其れから十時後點燈して勉强することは犯則であつた。中には押入で勉强する者もあつたが之も餘り酷だと思つた。併し他日米國に在つて研究する時に就眠を十時とし、朝起を五時として十年間一日の如き習慣を續けて見れば十時の睡眠時は決して不當でないことを發見した。

其から外出しても時間内に歸つて來ないと罰を喰ふ。次の外出を禁ぜられるので遊びに出ても氣が氣ではない。當時學生で時計などを持つて居る者は稀であるから外出するとそこに心配の種を一づつ背荷して歩くやうなものだつた。

× × × × ×

其れでも仲にもよく時間を間違へたり、發聲して犯則の罰を喰つたりする者が澤山に一期間にはあつた。僕も行く早々八時後に發聲讀書して舍監に呼び附けられてしたたか叱言を頂戴した事がある。但し之が最初の一度であつた爲めに此時には罰せられなかつた。

久保田譲と云ふ先生が動物學を教へて居たが、試驗の時に生徒がズルクしたと云ふので其後出し拔けに試驗して困らせたことがある。平生親切な先生であつたが、溫和なものゝ嗅い屁をひるの例で試驗で强く我々を責めたことがあつた。

藤田先生と云ふのが漢籍を教へて居たが、仲々親切で評判のいゝ先生であつた。後この先生は靜谷に轉校して了つた。森といふ數學の若い先生があつたが實に熱心な先生であつた。仲々六ケ敷い問題斗り出して生徒を困らしたつけ。平野と云ふ流の先生は無口な人であつた。

學科は何方かと云へばむづかしい方ではなかつた。忠實に勉强すれば誰にでも出來る程度のものであつた。師範校の寄宿舍には、色々な歴史話がある。少し酷な舍監は深夜侵入して布團責めにしたとか、賄が不味い物ばかし出すとストライキをやるとか、仲々面白い歴史がある、それが段々と口傳さるるので何の時代にも一つ何か遣らねば其級の肩身が狹いやうに思つて何か一致の行爲に出ることを企てたものである。

× × × × ×

賄に對するストライキは仲々振つてゐる。僕等の居る時代にも一度やつた。或る日の晩飯の時にストライキの號令が上級生徒の方から掛つた。すると、生徒はユル〳〵大食する。賄は飯の有りつたけを持て來る、併し何樣二百八九十人からの生徒（中學生をも含む）が一杯づゝ餘分に食つても大したものだから、飯の不足を告げる、其處で賄は炊く迄待つて呉れと哀願する、生徒等は飯が足らねば勉强は出來ないと云つて運動場に出て一時間位運

節して腹を減す、而して又新に炊いた御飯を食べる、斯くして殆んど半日の休暇を取る。時には二度も炊かしたことがあつたと云ふが僕等の時は只一度であつた。之が爲めに賄は御馳走をするやうになつた。監督の地位にある教師等も余力には敵せないものとして何も云はず生徒のなす儘に放任して置いて別に罰も與へなかつた。

僕等の同級生の一人が非常にキザであつた。そして此の男チョコ／＼盗みをするので種々探偵の結果退校せしめたことがあつたが、僕等も之が排斥には少なからず盡力した。之はお互に疑ひを掛けらるゝのが嫌であつたから極力探査して泥坊根性のある者々排斥するに努めたのである。

僕は在學中なか／＼勉强家であつた。あまり勉强した結果かして一度僕は鳥目になつたことがある。又ある夏、湯殿で卒倒したこともあつた。其れから人造蜜柑水を拵へて飲んだために激烈なる下痢をしたことがある。此の時は長州萩の城下の舊藩士吉見茂舟と云ふ友人が看護して與れた、今に其人の親切を忘れない。其の吉見は大阪の川口商船學校に入つて機關士となつた。米國に僕が行つてから一度文通をしたが其後彼の生死のほどは分らない、當に其れを尋ねたいと思つて居るが、今に至るも分らない。當時の友人で僕に先だつて出京した者は渡邊統見といふ廣島縣の人であつた。僕は此外にも懇意の友人はあつたが其後何うしたか音信は不通となつた。

明治十四年の夏季休暇は僕が郷里に在つた最後の年であつて、僕は在校一ケ年で級頭になつて歸つた。併し僕は此の時小學校教師では滿足が出來ない。是非共東京に出たいと決心して歸つたのであつた。

× × × ×

僕は友人の渡邊統見が當時東京に出たので、是非とも東京に出たくなつて歸省後直ちに阿兄に計つて先づ師範校に支拂ふ三十餘圓の金と出京の旅費とを得んことを求めた。兄は心よく之を承諾して與れた。此事が定ると僕は横月觀音寺に老師及び大土井先生を訪ひ離別を告げ本山在の多聞寺に其老僧を訪ひ金を請求した。頗るつきの澁りだつたが、後金十三圓を與へられて再び鄕里に歸り、行李を整へて愈々東京行を企つ。當時阿母は病床にありて身意の如くならず、母は兄の身持の惡るきには常に心身を苦しめて居たけれども僕に對しては心配しなかつた。併し東京に行けば最う逢ふことは出來ないと云つて別れを惜んだ。で、色々と苦心をして出來るだけ澤山の着物を拵へて與れた。そして少しばかりの金も與れた。僕は脆弱なる母を平生から身持の惡るい兄に托して行くことは心配であつた。されども當時の僕は學問に熱心であつた。是非とも相當な者になつて見たかつた。過去一兩年の勉强は僕をして學問に希望を持たしめた。人の爲ることは決して出來ないことはないとの確信を起さしめた。故に此の矢の如き希望、そしてその熱心は幾分母を想ふことを第二にした。又ヨシ思ふた所が僕は次男であつて立身の道はなかつた　師範校を卒業して小學校の教員となつた丈けでは當時の僕の心を慰することが出來なかつた。

× × × ×

しかし然うは思ふても母命を携へて出京するのではない、所謂苦學して勉强せうと決心しての事である。多少心配はある、固より十分母を安心せしむることは出來なかつた。去ればとて母は僕を信じて居たから別に僕の前途に關して心配になさなかつた。

僕等兄弟は何うしても少し毛色が變つて居た故に僕等は村内でも村民に伍して一生を終ることは出來ない運命を持つて居たのだ。幼時より父がなかつた爲めに村内でも鐵子扱ひ

を受けて居たのだ。此の一事は慥かに僕をして遠く他郷に生活を求めしめたる一原因であつた。母もこのことはよく承知して居たから僕の出京は多少淋しくは感じたに違ひないが、しかし大に贊成したのである。

× × × × ×

愈々出立する朝になつて母はつとめて早く起き病を押して僕の旅立の世話をして呉れた。そして出門の時、母は我家の門先きまで見送つて出て『最う此處で別れる再び逢ふことは出來まいと思ふから、隨分身體を大切にして勉強し出世せい、私の事は決して心配することはないから』と涙ながらに言つた。其言葉は母より受けた最後の聲で、又最後の見納めであつた。後十六年振りで郷里に歸つた時は母は一片の石碑の下に在つた。しかし出る時はまだ血氣盛りの青年で固より確たる目的はなかつたが、大いにやる、大いに勉强する考へで出立するので故郷を去るのは餘り悲しくはなかつたが、それでも兄に母を任かして去るのは母に對して氣の毒で又不憫でたまらなかつた。

× × × × ×

兄は弓削と云ふ一里ばかりある町外れまで送つて呉れた。僕は兄に向つて『兄さん今何も云はないがお母さんを大事にして兄さんも少し辛棒して下さい』と云つて泣いた、兄も泣いて然うすると云つた。實に今を去る三十二年前の夏の事であつた。

× × × × ×

岡山迄は十三里もある。僕は甲の部と云ふ古い親類に寄つて暇乞を告げた。その時、もう年取つてゐた叔母は「母さんも若い時から難儀をして、おまへ等を育てたのだから、然う遠方へ行かずに近くで辛棒してたらいゝでないか」と詰問的に忠告されたが、僕は上京するに熱心で都べてを捨てゝ奮進する時であつたから此のシンプルな忠言に對しては何とも答へる理由を見出さなかつた。

岡山に出て、岡山師範に立寄り半季の食料を支拂ひ退校を許されて、友人等に別れを告げて去つた。岡山より船に乘つて兒島灣に出で、神戸門司通ひの汽船に乘つて神戸に向つて出帆した。まだ山陽線は跡形もない時分である。只神戸に出て阪神間の鐵道を見た位いであつた。

僕は岡山に在つて一つの經驗を咄すことを忘れたから玆に記す。其れは前期末に友人と岡山の町中を散歩して居ると云ふに云はれない奇妙な音を聞いた。其れは一軒の横町に在る平家から聞へたのであつた。僕等は立止つて聞いた、すると入れと呼ぶ者があつた。好奇心に驅られて内に入つて見るゝ驚く可し二三人の西洋人が熱心に話して居た。之は今日の岡山教會の前身であつた。あとで聞けば西洋人はペチー夫妻とケリー博士とであつた。僕等が此處に入つて彼等の云ふが儘に上つたのは、師範學校の森先生が熱心にペチー氏の下に聖書の研究をして居たからであつた。當日說教をなした牧師は金森通倫と云ふ人にて聞いた。なか〳〵熱心な說教をしてあつたので、僕は非常に感動した。

其後二三人の校生とペチー氏の家を城山に訪ふたことがあつた。お茶と麵麭、菓子を出してもてなしたがお茶は飮んだが、パン、カシは持ち歸りがけに臭味が異つて居るので捨てゝ仕舞つた。僕は此處でオルガンの音を聞いた時には一種異樣の感じを起した。併し僕は郷里に歸つても耶蘇の教會に行つたことや、西洋人を訪問して饗應になつたことは曾はなかつた。

若しも僕が岡山に永く居たならば必ず耶蘇信徒に早くなつたであらう、而して僕の運命は今日とは大いに違つた徑路を通つて來たであらう。岡山を去る其日何も別にすること

ないし晩まで船出を待つのが退窟に感じたから中島の芝居を見に行つた、大阪から中村福助が來た宮本左門の家出の場で彼が敵打ちをすると云ふ堅い決心をして出る所を見て僕も今故郷を去つて知らない經驗のない友人のない遠い都へ出るのだから、此の芝居は非常に僕の心を刺戟した、僕も彼が如き堅固不拔の決心をして如何なる困難にも耐へ忍んで其の目的を達せねばならないと思つた。

× × × ×

神戸では船宿に泊つて一日船待をした。一日の暇を得たので市中を歩き廻り、湊川の正成の古跡にも行つた。始めて貨物を見て驚いた物は汽車である、汽船に乘るのも昨日が始めてあつたが、ガタ〳〵と音がして油臭い丈の違ひで帆船と格別相違した點もないが、汽車だけは繪で見たより違つて僕は驚いた。

出帆はお定り夜中で僕は船宿の丁稚に連れられて乘船した。船室は無論下等で荷物を積み重ねた上にリユーキユーを敷いて其の上に寢ころんでるので固より立つことなどは出來ない。初めての長い航海で紀州沖になつてから船が搖つて僕も他の人々と船に醉つて閉口した。遠州灘を過ぐる時に富士山が見へるからと云ふのでやつと甲板に出て一寸富士山の莊嚴なる狀態を見たが、フラ〳〵するので直ぐに下りて寢轉んで仕舞つた。

下等船客中にて懇意になつた客は對馬から救導團に入團すると云つて居た一青年であつた。此の男は天主敎の男で常に聖書を持つて話をして居たが、僕は出たは出たものゝ東京で何うなることかと氣が氣でなかつたから餘り彼の話に耳を傾けなかつた。其後東京へ來て散歩する時、只一度此の男に逢つて挨拶したきりで彼が何うなつたか知らない。

× × × ×

船は無事に横濱の埠頭に着いた、僕は例の對馬の男と一所に船宿に着いて晝飯をした。此男が云ふに、前後第一に豆腐を食ふと其地方で脚氣を病まないと母が云つたから食はうと云ふので僕も大贊成した。何でも湯豆腐を拵へて來た。扨勘定する段になつてから對馬の男は救導團に報告するのであるからと云ふて非常に面倒な勘定をした事を覺えて居る。

印刷職工時代

宿屋の番頭に導れて横濱停車場に行つた。僕は無論三等の切符を番頭から買つて貰つた。が對馬の青年は中等に乘る切符を買つた。彼は軍人待遇で汽車賃の割引をして貰つたから中等の切符を買つたのである。扨愈々乘車する時になつて乘込場所が違ふ、其處で、僕は對馬の青年と丁寧に挨拶して分れた。

此の横濱から東京行きが僕の抑も始めての汽車旅行であつた。何分にも始めてゞあるから何となく愉快であつたが、又頗る乘り心地もよかつた。車窓から覗いて時に海岸の方を見たり、又は山手の方を見て、其の餘りに早く東京新橋驛に着いたのに驚いた。停車場に着いたのは十二時過ぎであつた。建物は今のと同一であつたが僕は始めてゞあつたから非常に立派なものと思つた。これは實に明治十四年の夏であつた。(記者曰く今の新橋驛とは別である)

僕の荷物は大きな古るい鞄一つであつた。着物五六枚と羽織その他五六枚も入る大きな鞄であつた。しかし僕はこれを肩に掛けて出た。車夫が澤山に居たから頼んだが誰も僕を相手にしない。そこで少し停車場前の廣場を歩いて行くと一人の老車夫が、乘車をすすめる。僕は芝新錢座の攻玉社まで行けと命じた、所がいくら行つても攻玉社には來ない。後で考へると銀座通りを通つて蠣殼町米穀取引所の近所に連れて行つて、此處が新錢座だから下りろと無理に下ろしてしまつた、そし

て車賃を二十五錢呉れと云つたから、高いではないかと云つたら、車夫は怒つて交番所へ行かうと云つた、僕は辟易して云ふだけ拂つてやつた。さて攻玉社はと聞いたら、ツイ其處だと云つて去つてしまつた。車夫が去つてから、少し行つて人に聞いたらば、まるで方角違ひの所へ連れて來られたことが始めて分つた。僕はもう車などには乘らないと決心して、例の重い鞄を肩に掛けて、市中を徒歩して尋ね〳〵て、とう〳〵新錢座まで來た。攻玉社に達して門番に此處が攻玉社かと聞いたら、そうだと云つた。心配だから間違はないかと云つて折り返して聞いたら、看板を指して僕の愚を笑つた。そこで門番に頼んで渡邊益見に逢つた。渡邊は頗る困つた樣子であつた。彼は攻玉社の一先生を便つて來た所、その先生は間もなく九州へ轉任したので思ふやうにゆかず塾僕を勸めて勉强をして居つた。しかし岡山以來の友人ではあるし又約束ごともあることとて、兎も角も僕を芝口の一宿屋に紹介して呉れた。僕は此處に泊つて其の晩彼と種々相談をする考へで、渡邊は塾に一まづ歸つた。

× × × ×

食後僕は宿屋の二階の縁側にもたれて、渡邊の來るのを今か今かと待つた僕は氣が氣ではなかつた。國を出る時は仲々意氣は盛んであつて如何なる困難をしても勉强して歸ると友人知己に誓つて出た。固より決心は持つて居る、然れども東京に出て見ると國で思ふたやうな譯けには行かない。何方を見ても知らぬ人ばかりでその上、僕の懷中にはもう只の七圓五六十錢しかない、若しも渡邊が來て何とか生活の方法をつけて呉れぬと駄目だがと此の數時間の煩悶は田舍出しの百姓の靑年には非常なる苦痛であつた。其れといふのも今日渡邊に逢つた時、彼の顏色は土の如く、困つたなの一句が彼の全面に書かれてあつた。然れども無經驗の僕は後れながらに渡邊がやつて來た、時は如何にも重い荷物を下ろしたやうな心持がした。渡邊が來ての噺しは皆、僕を失望せしむることばかり、彼の今日は人を扶助する餘裕のない地位であつた。由來攻玉社は海軍兵學校の豫備校を以て任じ、鹿兒島縣人が大多數を占めて居た。五六人の塾僕が居つた。渡邊はその一人で、師範生から塾僕になつたのであるからなか〳〵骨の折れる事ばかりであつた。可愛い子の旅で渡邊は更に苦學をしたとのない男で、彼が一番苦痛に感じたのは、早起であつた。攻玉社は海上生活を眞似て各生徒は早起を强ひられた。毎日學生等の起る時間は違ふて居た。卽ち日出時間が起床時間であつた。此の一事は寢坊の彼が一番苦痛に感じたのであつた。此の晩は渡邊から其の困難な事ばかりを聞かされた。然れども僕は彼の現狀を聞いて私かに決心した。此後は何でも自分でやらねばならないと、渡邊が去つてから僕は種々考へた。殆んど前途が心配でそして心細く寢られなかつた。

× × × ×

翌日僕は芝區宇田川町、宇田川橋際の宿屋錢下宿屋に引き越した、何んでも一日二三十錢であつた。數日間は此の宿屋の客となり、離れ座敷の二階に居つた、九州の商人が同宿であつたがその男が不得要領漢で僕には更に話し相手にならなかつた、固より數圓の錢の盡きるまでに職業を求めねばならないので、宿の主人に話をした所が、主人は極氣サクな性で且つ同情のある男であつた。ではあなたは宿屋扱ひでなく下宿屋の方になさい。一ケ月の下宿料は四圓五十錢です。その内には何かよい口がありませう。心配することは要ッませぬ私も心掛けて置きますと宿屋の主人としては親切な男であつた。僕はその日より本宅の二階に移つた。

二三日すると宿の主人が食客の口を探さうと云つて、或る小兒科醫師の食客を求むと云ふ家に行つた。宿の妻君は此の口を探したことを餘程恩にきせて、あなたが食客に行けば私の方は一人の下宿人を失ふことになるが、あなたの爲めだからお世話をするのですと云ふ、僕は喜び且つお禮を厚くのべた。所が最う一人の青年が先約があつて、僕はもう入用でないと斷られた。

當地の青年苦學生の理想は善良なる家の食客の口に有り附くことであつた。どうも食客などは幕末當時から一種の流行物であつた。又當時の政治家、學者及名士、豪族等は食客を置くを以つて一種の名譽とした。又食客その者も之を以つて恥とせず却つて大政治家、大學者の門に食客たるを以つて寧ろ榮譽としたと僕は在京の學生よりよく聞いたものだ、誰某は何々博士の食客で終に當代の名士となつたとか、何々は何政治家の食客となり研究十年今日の大學者となつたとか。當時の金權及權力階級は食客を蓄くことを恰かも大名諸侯が家來を養ふと同じやうに其食客の數多きを以つて誇りとしたものだ。

僕は一度は食客になつて勉強しやうと思つて漸く小兒醫の家に行つたがものにならなかつた。

此の宿屋には平川某及び野口某と云ふのが居つて共に書生であつたが僕は山川しの朴訥者で餘り話などなさなかつた。色々と口を探してもらひ、其内に野口と懇意になつたので野口は岸川吟香は美作人であり、學生の世話をよくすると云ふから行つて見たらよからうと云ふので同鄕人の好みを便り、一つの出京文の理由を文章に作つて行つたが、立派な二階に通して書生が會つて見ずに斷られた。

× × × ×

食客に失敗した僕はなかなか心配である、懷中は餘す所は僅かに數圓、今月の食料を支拂へば、來月からは下宿屋にも居れない、此事實は宿屋の夫婦が承知の事である。數日して或る日下宿屋の主婦が仲々苦しい仕事との事ですが遊んで居てもつまらないから、今活版屋に口があるから行つて働いて見ませんか、と云つたので僕は早速承諾して翌朝は早くこれまで働いて居た男が僕を連れて行つて呉れた。僕は此の日から活版所の勞働者となつた。僕の働いた活版所は銀座鍋町に在る績文社と言ふのでつあた。で仕事は八面掛けと十六面がけの印刷機械の車を廻はすのであつた。固より鬪で百性仕事や、樵夫となり、炭燒きをし、駄賃持ちをやつた僕は印刷機の車を廻す位いは何でもなかつたのである。一日十時間働いて十五錢の賃銀であつた。日曜日は休日であつたから、當り前へ働いたのでは下宿料には足りなかつた。が度々夜業があつたので、どうやらこうやら下宿料だけはとれたのであつた。

績文社の工場は煉瓦造りの西洋館二階建で仲々大きな建築であつた。この工場は房州から來た年寄夫婦の經營であつた。七八名の文探をする小供を房州から連れて來て、皆寄宿さして妻君が面倒を見て、一人の下女を置いてやつて居つた。主人は校正をやる。これに植字工が二人居る。印刷工場は下の一部で二臺の手摺機と二臺の手摺とがあつて二人の子供印刷工と二人の紙取り兼インキつけが居る。職工長が鈴木さんと云ふ正直な熱心な老職工であつて、それに一人の渡り職工が助手として居つた。餘り仕事もよく出來ない何ちらかと云へばお人よしの方であつた。二人の紙取りは純神田兒の腕白者であつたが、仲々よく仕事をしてゐた。彼等の退屈話は毎日、酉の市その他寄席の話で每日々々日を送つたものだ。僕は田舎者として殆んど相手にならなかつたが皆親切であつた。僕は印刷機の車

を廻はすので力さへあれば、よいやうであるがなか〱そうは行かない、餘り早くても又おそくてもいけない、丁度よく廻はさないとインキの着きが惡るい。

× × × × ×

車廻はし人足として數ヶ月間働いた。かうした生活は極めて呑氣なものであつた。一ヶ月の月給が四圓五十錢で僕の下宿料が一ヶ月四圓五十錢で差引き勘定一文なし、これで小使錢は鐚一文もないのだが、それで一日、十五日の休日が來ても一文なしだから何等の樂しみも取れない譯だが茲に時々居殘りの仕事がある、居殘りは大抵二時間だから其れで三錢になる。居殘で夜業をやる時は下宿屋の夕飯は食へない。辨當飯を食ふと一錢五厘かゝるから、大枚一錢持つて走つて燒き芋を買つて來る。一錢で食ひ切れぬ程澤山にある。之で夕飯をすまして夜業をやつたものである。其でも夜業が二時間もある時、其の晝間は一日何もせずに只待つて居るのである。製版を植字の方から下さないのは彼等が惡いのである、我々印刷部の者は晝間は遊んで晩から居殘り夜業をやつて餘分の賃銀を貰ふので至極都合はいいやうでもあるが、之も時々ならばいゝが度々だと嫌になる、先づ斯樣な風で三四ヶ月車廻はしの生活を經つた。

× × × × ×

活版印刷機の車廻はしの生涯は不足はなかつたが、積文社の主幹は僕に親切をする考へで僕を文撰工場の方に上げて呉れた。僕は始めて嬉しかつた。由來、文撰の小僧共は印刷の小僧を馬鹿にする風がある。僕は田舍者ではあるが、暇の時は何時でも書物を讀んで居るから工場主の妻君は、僕を文撰の方へ廻はして呉れたのだ。所が炭燒、木樵夫、鍬鎌を持ち馴れた僕の手には活字を取り扱ふにはなか〱困難であつた。其れに活字の在り場所が容易に覺へられない。論語、孟子、文章軌範位讀んだ智識では知らない字が澤山に在る。殊に其の知らない文字が父ケースの何處に在るかが分らない。僅々十か十二の小供が僕より遙か早く字を拾ふ。僕は活字拾ひとなつて異常なる苦心をした。

勞働運動に携はる主因

印刷部の方はインキを使用するので何時も機械の下には火鉢が入れてあるから此處は暖かいが、文撰工場の方は寒い、火鉢に寄つて暖まることは出來ない。其れに窓硝子が破れて寒いこがらしが用捨なく僕等の顔を撲つ、僕は之が爲めに病氣になつた。

× × × × ×

僕はこの無理な生活で一生苦む所の持病を起した、年をとるに從つて此の徵症は僕を段々苦しめた。暫くの間の活版屋の生活は僕にとつて多大の經驗で後年勞働運動をするやうになつた時、此の經驗は少なからず僕に職工氣風を覺悟する資格を與へた。僕は寧ろ印刷機で印刷機の車廻はしを代る方が遙かにいいと思つたが、車を廻はす者は既に雇つてある。僕も亦元の仕事を求むるだけの勇氣も出ず毎日々々寒いしかも板の間で活字を探すに一生懸命であつた。活版所に働いて居つて一番樂しみなのは辨當飯である。之を待つのも樂しみだが、下宿屋の妻君が入れて呉れた辨當箱を想像するのも頗る興味があつた。今日はどんなお肴を入れてあるであらうか、五時間もブツヅケに働いてお腹の減つてる時に辨當箱を開けて、旨い物を見出す位い愉快なことはなかつた。其に辨當箱はなか〱大きい、それに一杯盛られてゐるから滿腹することが出來た。文撰工となつてからは印刷所に居るやうに暖氣がないので生活上一寸困つた。僕は思つた、此儘では長く續けることは出來ないと。

× × × × ×

僕の居た下宿屋に一人の學生が居た。何で

も房州の青年で野口といふ苗字であつたやうに記憶して居る。此の青年は漢學を勉強して居た。彼の行く所は仙臺屋敷の中に在る岡塾であつた。其の當時は彼と懇意になつて居たものだから自然僕の生活問題も話すやうになつた。野口が云ふに其れは一番いゝのは岡塾に入ると經費が安い。一ケ月僅か三圓の食料で月謝は五十錢位だと云つたと記憶して居る。其處で僕は早速岡塾へ移轉することにした。野口が入塾保證人であつた。之で先づ生活には困らないと安心したが寒氣吹きしきる冬の眞最中入塾した所が、其の室と云ふのは入り口の左りが十二疊敷の大廣間である、その疊は破れて、而も何處も彼處も凸凹になつて居つた。此の室に二三人時には四五人も寢た。僕は夜具を持たない。併し國を出る時に母が拵へて呉れた著物が五六枚と三四枚の羽織と一着の袴があつたから、これ等の衣類を以て寒夜を凌いだ。忘れもしない。此の時の飯炊き男は仙臺在の百姓で二十貫目もあるやうな大兵で、彼は毎朝五時前から起き臺所に行く其の行く時にボロ〳〵になつた蒲團を僕の上にかけて呉れた。饑へた時に不味い物なく、寒い時には汚れて居ても、少しは臭くとも我慢する。僕は飯炊の親切に幾度となく感謝してそしてよく暖まることが出來た。

× × × × ×

岡塾は岡鹿門、千仞と號する漢學者で維新の前後薩摩の重野安繹や肥前の松林飯山及び三州の松本奎堂などと國事に奔走したものだ。仙臺藩では大槻磐溪と爭つて負けを取り、四斗樽に入れられて城を逃げたと云ふ奇談もある。聖堂時代には學生中の秀才で侃々諤々の議論をなし其の意思、氣慨一世を壓する風ありて、當時の學生間に尊敬されたとのことだ。維新の革新政府成り、彼は帝國圖書館長となりたるも、其の意志頑强で云はゞ融通のきかぬ男であつたのと、一は仙臺藩に屬すると云ふので薩長土諸藩の人々に壓迫され、圖書館長を止めさせられ、北海道廳に格を下げて轉任を命ぜられた。此の虐待に憤慨して官を退き此の仙臺屋敷の長屋二三軒を借り受けて漢學塾を開いて居たのである。

× × × × ×

僕は此處に入塾したとは云ふものゝ毎日活版所へ通ふて十時間も勵むる事ゆゑ、岡先生の講義などを聽くとは出來ない。夜分は八代家の輪講があつて塾長の菅野猶吉が擔任して居たが、少し歸りが晩いと之れにも間に合はぬことが屢々であつた。無論塾則たるものは漢三昧的で別に塾生を束縛するやうなものはない。元來この塾は當時の教育の補充を以つて目的とすることゝなつて居た。固より斯樣な目的で開塾したものでもなからうが、此の時代の要求が然らしめたのであつた。即ち當時の教育はすべてが西洋風で英語が最も盛んであつた。然るに官學校——陸海軍兵學校、法律學校——へ入學するには漢學の必要があつた。故に學生が慶應義塾の卒業生でも舊幕時代の教育を受けて居らぬものは、西洋的教育丈けでは間に合はないので、慶應の卒業生などか岡塾に漢學を學びに來たものだ。彼の後世營利的私塾で名高い磯邊彌一郎なども暫らく子曰くをやつたものだ。

× × × × ×

されど漢學は當時は衰れた學問であつた、漢學專門で飯は殆んど食へなかつた、それでも岡塾は僕の入つた當時はなか〳〵盛んであつた。此處を安下宿屋と心得へて新聞社や會社其他の學校に通學して居る者が澤山あつた。僕は其の最下等の一人で活版所に通勤する一職工であつた。塾生の休日は日曜日で、僕の休日は一日、十五日であつたから時々先生の講義を聽いたこともある。一ケ月三圓の經費は安いやうだが、塾の賄と云ふのは米飯

と味噌及醤油を供するのみである。味噌は必らず仙臺製產品で米も上等であつた。各塾生は自分々々で適宜に好きな野菜を料理して食ふのである。僕は味噌醤油のみを副菜として飯ばかり食つて居たので胃病になつた。

その當時怨み骨髄に徹した一事がある、それは今から五十年も昔の事だ。實に半世紀前の事だ。僕も工場が休みで（十五日であつたか一日であつたか覺へない）炊飯を他の塾生と一所に食することゝなつた。皆煮肴、照り燒、マグロの刺身など調理して食ふので忙がはしい。僕は五厘を投じて三河島といふ菜漬けを買つて藁で束つて手に下げて來た。すると松本鐵次と云ふ青年塾生が僕の菜が漬けを見て『やあ、片山君大變な御馳走を買つて來たなア』と云つた。松本鐵次は下野の人で、その父は維新革新政府で判事を勤め、例の大阪事件の裁判をやつたものだ。小形で、偏盲の男、なかなかの才物であつて維新當時の志士の一人であつた。此の當時は官を退いて東京米穀取引所理事とし蠣殼町では飛ぶ鳥も落す勢ひであつた。其の一人息子鐵次の贅澤は無論、塾生間でもなかなか幅をきかして居つた。その時一人の塾生をして鮪の刺身を作らして居た。僕は彼の顔を見たが一言も挨拶しなかつた。然れども僕は頗る憤慨した、彼は富豪の子で如何でも贅澤は出來るが、僕今日の境遇は五厘の菜葉漬けも大きな御馳走の食事である。松本は慥かに一つ冷かし、ジョークの考へで云つたに違ひない。餘り考へて僕を輕蔑する意味でかく云つたのではない。然れども彼の鮪の刺身と此の菜葉漬けと對照して考へる時は僕に取つては非常なる侮辱である。少くとも當時の僕はさう感ぜざるを得なかつた。後僕は松本と懇意になり、彼は岡塾に七年も居る先輩者ではあるが、僕は屢々彼の漢書に關して字句の意味の質問を受けた。一度も菜葉漬の一件を口にしたことはない。併しこの五十年間忘れ得ざる底の印象を刻まれたことは、自分ながら驚かざるを得ない。人は決して目下の者に對してウカとジョークを云ふ者ではないと思ふ。

岡塾に入つてから二三ヶ月すると今迄塾僕を勤めて居た青年が國元に歸る事になつた。其れで僕は愈々塾僕となることとなり活版所の方を止めた。僕が東京に出たのは漢學の研究ではなかつた。僕は西洋の學問、文明の教育を受ける希望を以つて出京したのであつた。然ども生活に困つた僕は何でも勉强が出來ればいゝと思つた。塾僕となれば金は一文もいらずに毎日勉强が出來る。塾僕の義務は先生の講義の時間を知らすることゝ其の終りを知らするので、其の外は講堂の掃除をするのと受附をすればよい。時に入塾を望む人に規則を示して說明をするのと、偶には先生の使に行く位の事で、別に面倒も困難もない。一人でやるのだから外出したからと云つて誰も咎むる者もない。然るに塾僕は一文の給金もない。ただ飯と味噌醤油を供給されて入口の所の、僅か二疊の室に城郭を構へて居るばかりである。それでも僕は喜んで、東京に出た甲斐があつたと此れからは熱心に勉强した。四書、五經（書經、詩經及び左氏傳）の講義を聞いた。『國語』も習つた。明治十五年より十六年にかけては熱心に勉强した。

左傳よりの感化

殊に左氏傳の研究は最も趣味があつた。僕は始めから終りまで、一回も缺かさず聽講した。此の左傳の講義が終つた時、何物かを得たやうな心持がした。其の雄辯的論法は僕の心膽を鍛練した。後年ロヂックや哲學を研究する時に僕のコンストラクテイーヴの知識を助けたものは、慥かに左傳であつた。僕は漢學を解し、又漢文を作ることを學んだ。漢文を綴ることは容易であつた。少くとも自分の

思ふことを云ひ、現はすことは、些の困難はないやうになつた。然れども當事岡塾で得た漢學思想は日本現時（其當時）の社會狀態とは接觸して居なかつた。思想は空虛で全く枯渇して居た。僕は岡先生の維新革命史編輯を助けたから、血氣旺盛なる青年として、維新の革新に參與した人々の歷史を喜んで讀んだ。又私淑した。從つて時勢外れの悲憤慷慨の士を氣取るやうになつた。維新當時の志士等が、德川の壓制政治を怒つた如く無暗に憤慨する癖が詩や文章に現れて度々人に笑はれたことがある。加之、僕は熱心なる勤王家になつた。殊に先生の『尊攘記事』編輯に關して數多の材料を讀まされて、色々なる事を學んだ。維新當時、德川幕府を倒して天皇親政の政府建設を企んだ人々は決して今日の官僚の首領連や元老輩の如き下劣なる心事のものではなかつた。皆堂々たる國家と人民に對する思想を持て居つた。彼の勝海舟の日記を讀まされた時には、かやうな考を持た人が、幕府に居て何故に德川幕府は倒れたかと思ふた。時勢に抗することに不可能であると思ふた。

× × × ×

當時の岡塾には餘り優い塾生は居なかつた。今日東京市を喰物にして威張てゐる井上敬次郎の如きは僕が塾に入るや否や政治に頭を突込んで、過激雜誌を發行して政府に反對して入獄したし菅野彌吉は間もなく去つて何處かの教師となり、只濱洗吉は司法省の法律學校に通學し　高草木重烈は陸軍士官學校に入學すると熱心に勉強して居つた。此の時分に來た青年で、頗る氣發な青年が土佐から來た。濱田源之助と云つて詩文の一寸よく出來る男であつた。矢張り漢學書生肌丸出しで悲憤慷慨を氣取つて居た。僕と始めは頗る親密であつたが僕が二三の學友と詩文の小冊子を發行することにしてから、彼は隱然たる僕の敵として頻りに僕を攻擊した。併し公然爭つたことはない。彼は塾長となつて威張り、僕は塾僕で或る勢力を持つた。當時の漢學生は迂の學生で時事に疎遠であつた。新聞などを讀む青年も少なかつた。自由民權の運動に加つた學生は塾生中には、殆んどなかつた。彼等は實に時勢後れの青年の集りであつた。然れども國會開設公約の詔勅が發布されて二十三年には國會が開かれる。帝國憲法も發布されることになつた時は、塾生等も一躍政治に參與せらるゝ事となつたやうな氣持になつて、政治を論ずる稽古をする必要があるとなし、急に民心が勃興して塾生等も演說會を開き演說の稽古をするなど、一時はなかなか面白い民主的空氣が流入したが、もとより日本當時の政治思想に觸れて居ない塾生共だから忽ち消散して仕舞つた。

× × × ×

德川時代には漢學は武士階級にはなかなかよく行き渡つて居つたが、小民間には餘り讀まれて居なかつた。四書五經の如き漢籍も百姓家に貯藏して居る家は稀であつた。然るに維新の大革新と共に教育は自由となつた。そして從來木版刷であつた漢籍が活版で安くして且つ幾何でも出來るやうになつたので、急に漢籍の需要が殖えた。岡先生は『史記』に訓點を附することを依賴された。此の大部の史記に訓點を附するのは容易の仕事でない。誰かが全史記に訓點を施したものを岡先生の許に校正に持つて來たのであつた。我々塾生共は先生の代理を務めて讀んだ譯だ。此の活版刷の漢書發行で一時名を成した書肆は銀座街にあつた博文社であつた。此の書肆が始めて史記の活版刷りを發行して大儲けをした。岡先生の明治革命史も此の男が發行したのであつた。然るに僕が十三四年後米國から歸つた時には、此の史記を發行して金儲けをした博文社はなくなつて博文館が出來て、盛大を極

めて居つた。今も然うである。此の二書蹟の研究は趣味ある問題であると誰かゞ云つた。

× × × ×

僕は生來の酒好きであつた。或る夕べ一人の塾生が歸省すると云ふので、送別會を土橋の牛肉屋の二階でやつたことがある、僕は其の時二十六人の塾生を一人々々を相手に一杯づつそれも茶碗大の大きな盃で飲んだことを覺えて居る。何んでも此の晩は空腹へ四十杯からの酒を飲んだのであつたから非常な愉快を感じた。此の時ぐらいはしやいだことは前後今までにない。歸途、新井やその他の友人と蕎麥屋に這入つて又蕎麥を食ひ、酒を飲んで歸塾した時には醉つて前後を辨へなかつた。夜十二時過ぎに寒さを感じ目を覺まして見ると明間に這入り込んで寢て居たのであつた。此様な事は僕がたつた一度經驗したゞけでその後今に至るまで二度とない。

× × × ×

明治十六年の春、まだ寒き時であつた。僕は岡先生に連れられて武州川越地方を遊説に出掛けた。一日朝早く萬世橋際、今の郵便局の在つた近所で圓太郎馬車に乘つて出發したのは、もう八時過ぎであつた。川越まで圓太郎馬車で乘り續けたのはなかなか苦痛であつた。馬車の中は滿員で柱か何かをシッカリ握つて居なければ振り落さるゝ危險がある、これなら歩いた方が遙かに樂だと思はせた。三四十丁も走ると茶屋の前で馬を休ます。すると女がお茶を汲んで來る、之を飲んで二三錢の茶代を置く、又三四十丁も走ると今度は馬を取り替へるために十分間位ひ休む、又茶を飲むと云ふ風で川越に着いたのは午後五時頃であつた。

或る宿屋に投宿して三四日間、飲み且つ談じ、先生は諸人の求めに應じて揮毫して一日の如きは當町の名士が相集つて宴會を開いた。此の時種々の書畫を持參して、岡先生の鑑定を求めた。厚き歡待を受けた其の主人公より、兼て多額の資を投じ求めたる昔時の名士大學者の筆跡である、その書畫の鑑定を求めて、之が證明を與へられんことを請ふのに對して、先生が其の大概は贋物なることを宣告するは如何にも先生に取つて苦痛であつたやうである。其の所持者は何れも皆金に依つて其の價値を決定して自慢して持つて來て居るので、夫を贋物だと宣告するのは實に困難な仕事であるが、先生は一々親切に鑑定してやつた。此處から松山を經て兜山根岸遊山を訪れた。此處に滯在すること數日、生先は書をかいた。遊山は德川幕府よりも一層の舊家にして地方豪族である。彼は維新當時京都に行つてなかなか活動したとの事であるが、當時は好個の老人にして既に昔日の元氣は見へなかつた。遊山の家は維新の志士のドル箱であつた。食ひ詰めた浪人共は茲に來て其の資を得て活動した。凡ゆる維新當時の志士は此處に來て厄介になつた。此れは凡ゆる明治維新の功臣又は志士が筆跡を此の家に殘して居るのを見ても分る。此家には石器時代の道具などもなかなか澤山に集めてある。兎にかく珍しい家だと思つた。

此處から先生と共に秩父の大宮に峠越しに行つた。老先生も草鞋がけで大に勇を鼓していつたので其の夕景やつと大宮に着いた。無論用事と云ふのは、地方、有志家たちが先生を饗應して、其の揮毫をなさせるのである。僕等は翌日大宮から狐を祭つてある山（名は忘れた）に登り、一泊して歸つた。此の地方は古代の風がまだ殘つて居て面白いと思つた。其れから埼玉に出て鴻の巣と云ふ昔の宿に泊つた。此の家は舊藩時代の大名諸侯が江戸へ上り下りの際泊る家でなんとなく、シーンとした家であつた。此の家で僕は生れて始めて總絹蒲團に包まれて寢て見た。（つゞく）

北郊雜記

阿部次郎

15

凡ての人は死ななければならぬ——吾々は往々にしてこの牢乎として拔くべからざる事實を忘れようとする。併し心を鎭めてしみじみとこの事實を想ひ起すとき、吾々はどれほどの凉しさと寂しさと人なつかしさとを感ずることだらう。貴族も平民も、學者も無學者も、資本家も勞働者も、凡ての人はいつかは燒かれて灰になるか、埋められて腐るかしなければならぬ肉身を持つてゐるのである。吾々の心が憎みに燃え爭ひに熱するとき、吾々は振返つてこの事實を考へて見なければならぬ。同じやうに死すべき運命を持つてゐるといふ自覺は、爭ひの唯中に於いても、吾々に愛と和ぎとのこゝろを教へるであらう。

一昨年の秋たゞ一人の男の子を失つてから、私は漸くこの事實の意味を悟ることが出來たやうに思ふ。併し日を經るに從つてこの意識も次第に日常生活の騷がしさに溺らされて行く。あの當時のつきつめた寂しさと人なつかしさとを忘れがちな近頃の私は、決していい狀態にゐるとは云ひ難い。併し心持の騷がしさに堪へ難くなる每に、私は振返つてあの當時のことを想起する。さうして凡ての人は死ななければならぬといふ眞理の反芻を試みる。かう云ふ心持になるのも亦、死んだ兒があの世から俗念の多い父を警醒するのだと、思へば思へないこともないのである。

16

靜寂は何の物音もしないといふことではない。それは音響の缺乏といふやうな消極的なものでなくて、積極的に人に迫る力を持つ或物である。それだからこそ、沁みつくやうに靜かな周圍の中に木の葉一ひらの散る音さへ一層その靜寂を深くし、眞夜中になく犬の遠吠が寂しい片田舍の丑滿時を更に寂しくするのである。ニイチエのツアラツストラに「犬も幽靈を信ずる

「眞夜中」といふ句があるが、東北の辟陬に育つた私のやうなものには、この句が文字通りに自分の體驗にあてはまることを感ぜずにはゐられない。幼い頃の自分にとつては、靜寂はなつかしいよりも寧ろこはかつた。それほどまでに自分は靜寂にとり卷かれてゐた。併し成人して都會の中にまじるに従つて、あの恐ろしかつた靜寂がいつの間にか自分のあこがれの國となるまでに遠かつてしまつた。眞夜中に不圖眼をさまして見ても、子供の時分に感じたやうなしみ〴〵した靜寂を感ずることはもう出來ないことを覺える。併しそれは「境」が惡いのか、自分の「心」が靜寂と緣がなくなるほどに騷がしくなつてしまつたのか、この間にはまだ疑問の餘地があるやうに思ふ。昔、叡山にのぼつて根本中堂の傍にある宿坊にとまつた夜、自分は明かに復靜寂にとり卷かれてゐることを感じた。さうして翌る朝曉に起きて雨戸を繰り、青葉を埋めて深くこめた霧を通して啼鳥の囀音をききながら、私はまだ靜寂に對する感覺を失はぬ自分を祝福した。その後又十餘年の月日は流れたが、私はこの間に心ゆくほどの靜寂の體驗を想起し得ぬことを遺憾に思ふ。それは依然として境が惡いのであるか、それとも今度はもう靜寂緣がきれてしまふほどに心が騷がしくなつたのであるか、この夏山中に入つたら一つそれを試して見たい。

17

月見草は私の好きな花の一つである。とり放して云へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの淸彩な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草のほのかな黄色を云ひ難くなつかしいものに思はせるのである。

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗いうちに狹苦しく滿員になつてゐる停車場前の旅亭を出て、同宿のＩ君やＭ君と新宿兩方街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかかつて限りもなく咲き續いてゐる上を、山の霧が靡く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも云へず親しい氣持になつて又旅舍に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開くをきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしやがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。拔荊に花瓣をつゝんでゐる萼が

後退を始める。蕚が開くと巻かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持は何とも云はれない。明日の朝になればしぼんでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟りは開けない。併し悟りが開けなくとも、新しく咲く花を見まもる靜かな愛のこゝろは、本當に嬉しくありがたいものであつた。

18

六月の新聞を賑はした濱田某女の死は、その家の位置が自分の家に近いらしいので先づ私の心をひいた。その後友達が來ての話によれば、彼は私の家をたづねての歸るさに、彼女と同じ電車に乘りあはしたことがあるさうだが、本當に花が咲いてゐるのを見るやうな少女だつたと云つてゐた。その花のやうな少女が、二度目の子供を腹に持ちながら毒を仰いで死んだことを思へば、理由は孰れにせよ本當に氣の毒である。さういふいゝ子を失つた母親も、さういふ美しい妻を失つた夫も、善惡の穿鑿なしに氣の毒に思ふ。

併し事件の眞相を明かにしようとすれば、他人の内事を是非することが容易でないことを思はずにはゐられない。この事件は、單に第三者としての新聞の報道だけではなくて、當事者雙方の辯明が出てゐるのだから、事の眞相を明かにする手がかりは割合に多く與へられてゐる譯なのに、その當事者の辯明がまるで矛盾するのだから仕方がない。事情を知らぬ者は、その辯明の孰れかに——若くは兩者を通じて幾分かづゝ——ためする ところの曲庇があるに違ひないと思はされるのみである。最初濱田家側の人達の話によれば(東京朝日新聞所載某々博士談)、今になつては兩人の戀仲を割かうとする意志がなかつたといふことであつたが、あとで公式に同家から發表されたところによれば、未亡人が絶對にこの結婚に反對だつたといふのだから、割かうとはしなくても、二人の仲を割くか娘を棄てるかの二筋道に立つてゐたので、かうなつたら仕方がないから適當な方法を講じて添ひ遂げさせようとする意志がなかつたことだけは——從つて少し積極的に働きかけて來れば「戀仲を割かうとする意志」に直にも變形しかねない心持を、最後まで持續けてゐたことだけは先づ先づ疑ひがないと見られなければなるまい。さうしてかういふ意志の根據は、どうも野口といふ人の人格に對する疑ひ——とりわけ財産横領の意志に對する疑ひであるら

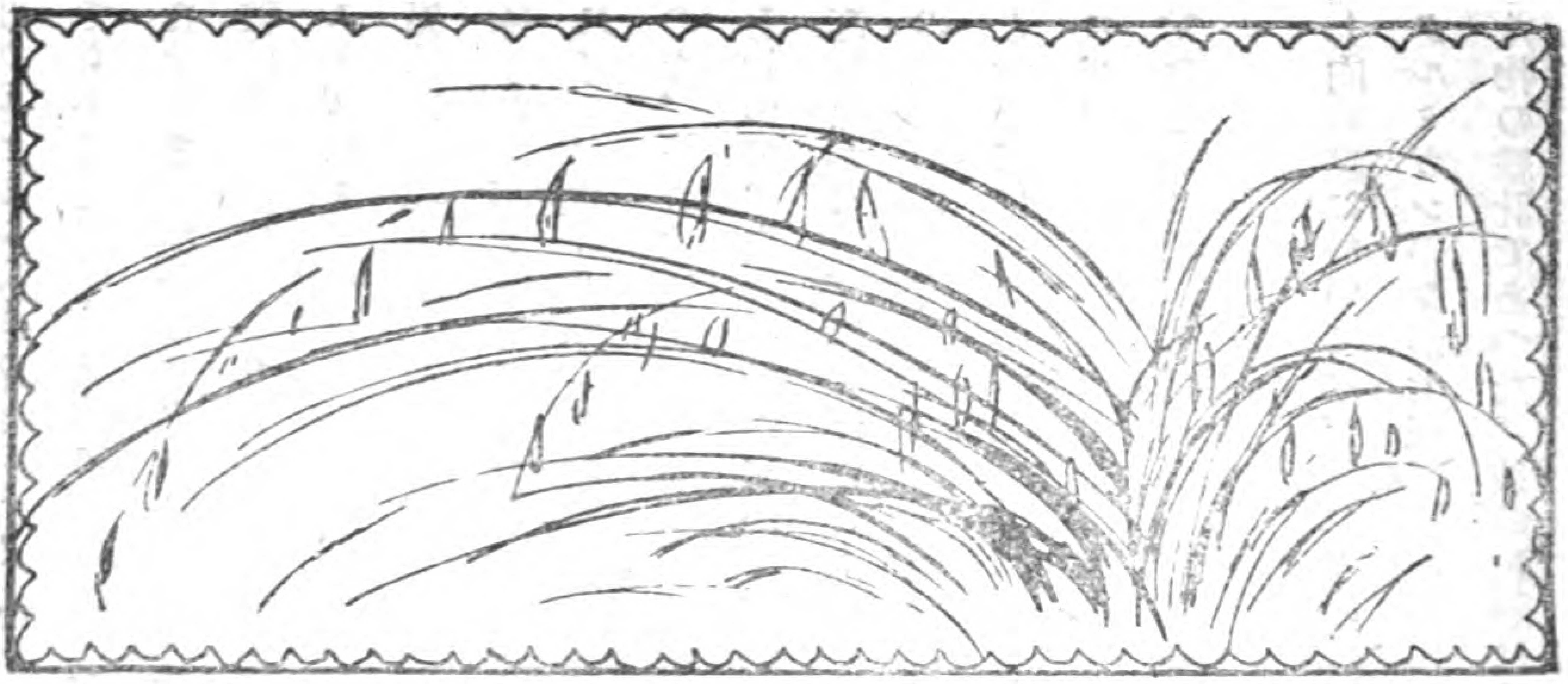
しく見える。濱田家側の言分によれば、彼女の最後の談判の用件には財産の事がはいつて居たらしく、野口といふ人の辯明によれば、「九州男子」にそんな事があるものかといふ云ひ分であつて、此點について眞相を明かにすることは、吾々には出來ない仕事であるが、兎に角濱田家の側に於いて、この點に關する疑念を持つてゐたことは亞米利加にゐる兄といふ人の手紙を見ても明かである。從つてこの問題は、濱田家の側から見れば、財産の問題と繋がつてゐることが極めて多かつたことは爭へないやうに思ふ。

私はこれ以上この事件に對して立入つた推測を下すことを好まない。たゞ明かにして置きたいのは、彼女にとつて「金が仇」であつたといふ事實である。若し濱田家側の推定に從つて、野口といふ人が財産を目的とする誘惑者であつたと假定すれば、彼女に附屬する財産が彼女の誘惑者をひき寄せる機縁となつたのである。若し又野口といふ人が自ら辯明する如く、彼はそんなものに眼もくれないやうな清廉潔白の士であるとすれば、濱田家をしてこの清廉潔白の士を見るに疑惑の眼を以てするやうにさせたものは、同じく彼女名義の財産であるといはなければならない。孰れにしても彼女にとつては金が仇であつた。金がないから困るといふ意味でなくて、無用の金が災となるといふ意味に於いて、金が仇であつた。私は金が仇となつてまだ廿歳の命を捨てた彼の女を誠に氣の毒に思ふ。

金は人のためにあるので、人が金のためにあるのではない。無用の金はこれを積んで置くよりも寧ろどぶに捨てた方が人生の幸福である――この平凡な眞理が、濱田か野口かの孰れか一方に徹底してゐたならば、彼女は非業の死を遂げるにも及ばなかつたらう。彼女に對する最良の追善は彼女の死の誘因となつた金といふ惡魔を投げ出すことである。私は濱田家の人達からこの「發心」を見せて貰ひたい。さうして一般に、現に鉅萬の富を持つてゐる人や、將來鉅萬の富を積まうとしてあくせくしてゐる人達に、金を生かすものは金ではなくて人であることを熟考して貰ひたい。とりわけ贅澤と享樂との準備としての金が、どんなにその子女を不幸にするかを、この一例によつても悟つて貰ひたい。

19

ニイチエの言葉をもじれば、富とは超克せらるべき或物である、享樂慾も亦超克せらるべき或物である。この立場は富と享樂の權利とは、他人から分捕り來るべき或物であるといふ資本主義とは固より一致しない。併しそれは又、富と享樂の權利とは奪還して自己の神となすべき或物であるといふ物質的社會主義とも亦一致しない。大觀すれば第二と第三との立場は、第一の立場と對立する意味に於いて孿生兒である。第一の立場は後の二者を併せて征服するところに新社會の基礎を置くことを要求する。この精神を徹底させることは固より非常な難事であるが、それだけに益々この要求を支持することが必要である。第三の立場を深めて第一の立場の上に築きなほすこと――これは男子の一生に價する事業である。



ホワイト・ファング（白牙）

Jack London 著
堺利彦 譯

第二篇

第五章 肉の法則

子狼の發育は速かであつた。彼は二日間やすんで、それから又た洞穴を出だした。其の冒險の途上で、彼は先達ての子鼬を見つけだした。それの親は彼が母と一緒に食つたのだが。今度も又、其の子を親と同じ道に送つてやつた。そして此の旅行では、彼はモウ道に迷はなかつた。疲れを覺えると、難なく洞穴へ戻つて來て、そして寢た。それから彼は、毎日外出して、一層廣い範圍を歩きまはつた。

彼は漸く、自分の强さと弱さとの、精密な度合を知り、大膽であるべき場合と、用心すべき場合とを知りはじめた。然し彼は、あらゆる時、用心する方が得だといふ事を悟り、只だ稀に自分の勇敢を確信した場合、多少の亂暴狼籍に耽るのであつた。

彼はタルミガン（松鷄）のとまどひをしたのに出くわすと、いつでも小さな悪魔のように荒れ狂つた。又初めて風折松の上で見た事のある栗鼠が、クチュ〳〵クチュ〳〵と鳴くのを聞くと、彼は必ず猛烈な唸りを以てそれに應ずるのであつた。更に又、ムーズ鳥を見つけた時には、彼は殆んど極まつたように、最も兇暴な荒れ方をした。彼は初めて此の鳥に出あつた時、鼻先を啄かれた事を決して忘れないのであつた。

けれども、其ムーズ鳥すらも彼に何等の影響を與へない場合があつた。それは彼が、或る他の肉獵者がうろつきまはつてゐる事を知つて、自分の危險を感じた場合であつた。彼は決して鷹を忘れなかつた。鷹の影がさして來ると、彼はいつでも直ぐそばの藪の中にもぐりこむのであつた。彼はもうノソ〳〵ウロ〳〵と歩いてはゐなかつた。彼は既に母親ゆづりの身振を出して、コツソリと忍び足に歩き、少しも動くとは見せないで、而も非常な速かさを以て滑りつゝ、巧みに人目を掠めるのであつた。

然し肉の點に於いては、彼れの幸運は其の最初だけであつた。タルミガンの雛が七疋、鼬の赤ん坊が一疋、それが彼れの殺した物の總計であつた。彼の殺慾は日と共に増進した。そして彼はアノ、いつもクチュ〳〵と喋べりちらして、狼の子が來たといふ事を有らゆる動物に知らせるアノ栗鼠を、是非とも取つちめてやりたいといふ野心を持つた。けれども、鳥が空中に飛ぶと同じように、栗鼠は木に登るのだから、彼はそれが地上に居る時、ソツト忍び寄るより外はなかつた。

彼は母に對して大なる敬意を抱いた。彼女は肉を得る道を知つてゐた。彼女はいつでも必ず、彼れの分として肉を持つて歸つて來た。彼女は又、物を恐れなかつた。此の恐れを知らぬ事が、經驗と知識から來るのだとは、まだ彼に分らなかつた。彼は只それを力として印象されてゐた。母は力の表現であつた。彼は成長するに從つて、今までよりも一層嚴しい懲戒を自分に與へる、母の前足の中に其の力を感じた。そして又、今までは母の鼻でこづきまわされたのが、牙で嚙まれる事になつた。彼は之に對しても亦、母を尊敬した。彼女は彼れの服從を餘儀なくした。そして彼が成長するだけ、それだけ母は氣短かになつた。

飢餓が又やつて來た。そして子狼は一層明瞭な自覺を以て、再び饑ゑの苦しみを知つた。雌す狼は肉の追求の爲に瘦せほそつた。彼女はもう稀にしか洞穴の中に眠らなかつた。時の大部分は肉の跡に費された。而もそれが無益に費された。此の飢餓は永くはなかつたが、その續いた間は烈しかつた。子狼はも

う母の胸に乳を見出す事も出來ず、自分で一口の肉を取つて來る事も出來なかつた。

前には、彼は戯むれに獵をした。只だ面白さの爲にやつてゐた。然るに今は、必死になつて獵をした。そして何んにも得られなかつた。けれども其の失敗は彼れの發育を促進した。彼はヨリ大なる注意を以て栗鼠の習慣を研究し、ヨリ大なるタクミを以てそれに忍び當り、そして不意打をくわせる事に努力した。彼は木鼠を研究して、奴等を其の穴から堀りだす事を試みた。彼は又、ムーズ鳥や啄木鳥の遣り口について多くを學んだ。それから又、鷹の影がさしても彼が藪の中にもぐりこまない時節が來た。彼は既にヨリ強くなり、ヨリ賢こくなり、そしてヨリ多く自信を生じてゐた。それに彼は今、一生懸命であつた。そこで彼は堂々として廣場の中に尻を据ゑ、空中に向つて其の鷹に挑戰した。彼は其青空の中に浮かんだ肉のある事、——彼れ胃の腑がしつこくあこがれてゐる其の肉のある事を知つてゐたのである。けれども鷹は降りて來て戰はうとしなかつた。子狼は藪の中に這ひこんで、其の失望と餓ゑとにうめいた。

飢饉が解けた。雌す狼が肉を持つて歸つて來た。それは不思議な肉で、今まで持つて歸つたドノ肉とも違つてゐた。それは山猫の子で、子狼ほど大きくはないが、それと同じくらゐに成長してゐた。そしてそれが皆な子狼に與へられた。彼れの母は既に外で餓ゑを充たしてゐた。尤も、母が其の餓えを充たしたのは、其の山猫の子の兄弟であつたとは、子狼は知らなかつた。彼は又、母が絶體絶命で其の擧に出でた事も知らなかつた。彼は只、其のビロード毛の子猫が肉である事を知り、そしてそれを食ひつゝ、其の一口毎に段々の幸福を感じてゐた。

腹がふくれると氣が重くなる。子狼は洞穴の中で、母の脇腹にもれて寢た。彼は急ちにして、母の唸り聲で目がさめた。母がそれほど恐ろしく唸つてゐるのを、彼はまだ聞いた事がなかつた。恐らくそれは、彼女が一生涯の中に發した、最も恐ろしい唸りであつただらう。それには譯があつた。其の譯は彼女が最も善く知つてゐた。山猫の巣を荒す者は必ず其の報いを受けるのであつた。午後の日光の照りさかつてゐる間に、洞穴の入口に這ひはたがつて、山猫の母親が其の姿を現はした。それを一目見ると、仔狼の背筋に毛が逆立つた。恐ろしい者がやつて來た。其の恐ろしさは本能の力を借るまでもなく分つてゐた。若し又、姿だけでそれが足りないとしても、其の侵入者の忿怒の叫び、——唸り聲から始まつて、急に張りあげた皺枯れのイガミ聲になる其の叫びが、恐怖を與へるに十分であつた。

子狼は體内の生命が湧きあがるのを感じて、母のそばに立ちあがつて勇ましげに唸つた。けれども母は、滅茶苦茶に彼を追ひのけて自分のうしろに構つた。入口の屋根が低いので、山猫は飛びこむ事が出來なかつた。そしてそれが這ひながら突進して來る所を、雌す狼は其の上に飛びかゝつて引きずり仆した。子狼には其の戰鬪が幾許も見えなかつた。只、凄まじい唸り聲と、イガミ聲と、叫び聲とが聞えた。二つの動物は組みついてしまつた。山猫は其の爪で引つかき、引き裂き、更に其の齒をも用ゐてゐたが、雌す狼は只だ其の齒ばかりを用ゐて戰つてゐた。

一度、子狼は飛びこんで山猫の後ろ足に食ひついた。彼は猛烈に唸りながら其のまゝ食ひすがつてゐた。彼は自分で知らなかつたけれども、彼れの體の重みの爲に敵の足の行動を妨げ、それに依つて母の大害を救つた。戰鬪の變化が生じて彼は兩體の下敷となり、遂に其の食ひさがりをネジ放された。其の次の瞬間には、二つの母親は引分れてゐた。そして彼等が再び組みつく前に、山猫は其の巨大な前足で子狼を襲撃した。彼は肩の肉を骨まで引裂かれて、横ざまに後ろの壁にほうりつけられた。苦痛と恐怖とで彼がキヤン／＼と啼き叫ぶ其の聲が、更に戰鬪の騷ぎを增大した。然し戰鬪は猶ほ永く續いた。彼は啼くだけ啼いて、更に勇氣の漲るを覺えた。そして戰鬪の終つた時には、彼は再び一本の後足に食ひさがつて、其の齒の間から恐ろしい唸りを發してゐた。

山猫は死んでゐた。けれども雌す狼も弱りきつてゐた。初め彼女は子狼をいたわり、其の肩の傷を甞めてやつてゐたが、多量に失つた血と共に氣力が拔けて、丸一晝一夜の間、動きもせず、殆んど息もせずに、死んだ敵の傍らに横たはつてゐた。それから、一週間、彼女は水を飲みに行くより外、決して洞穴を出なかつた。そして其の水飲の時、彼女の運動は遲くて困難であつた。そうしてゐる中に、山猫は食い盡され、雌す狼の傷は相當に回復し、彼女は再び肉の跡を追ふ事が出來るようになつた。

子狼の肩は硬ばつて痛んでゐた。そして彼はあのとき受けた恐ろしい打撃の爲に、暫くの間、ビツコを引いてゐた。然し今では、世界が變つて見えた。彼はヨリ大なる自信を以て、――山猫との戰鬪以前の時代にはまだ所有してゐなかつた、武勇の感じを以て、世界を歩きまはつてゐた。彼は生に對して一層猙猛な相を看取してゐた。彼は既に戰つたのである。既に其の齒を敵の肉に埋めたのである。そして生殘つてゐるのである。總てこれらの故を以て、彼はヨリ大膽にふるまい。新たに得た敵

慎の氣を示してゐるのであつた。彼はもう些小な事物を恐れなかつた。そして彼れの臆病心の大部は消えてしまつた。但し、不可思議力は矢張り、其の解き難き、神秘と、其の永久不斷の脅威とを以て、彼れの上に迫る事をやめなかつた。

彼は母と一緒に肉の跡を追ひはじめた。そして多くの肉の殺し方を見て、自分もそれに加はりはじめた。そして彼は、例の漠然とした考へ方で、肉の法則を學んだ。生命に二種類がある。我が種類と、他の種類と。我が種類には、母と自分とが含まれてゐる。他の種類には、有らゆる生きた物、動く者が含まれてゐる。然し他の種類の中に區別がある。一部分は、我が種類が殺して食ふ者である。其の部分は、非殺戮者と小さな殺戮者とから成り立つてゐる。他の部分は、我が種類を殺して食ふか、或は我が種類に殺されて食はれるかする者である。そして此の類別の間から法則が生ずる。生命の目的は肉である。生命自身が肉である。生命は生命を食つて生きて居る。食ふ者と食はれる者とがある。そこで『食ふか、食はれるか』といふ法則が起る。彼は明瞭なキチンとした言葉で法則を形成したのではなかつた。そしてそれを道徳化したのでなかつた。彼は其の法則を考へもしなかつた。彼は只、何んの考へもなしに其の法則を體現した。

彼は自分のまわりに、どこでも其の法則が行はれてゐるのを見た。彼はタルミガンの雛を食つた。鷹はタルミガンの母親を食つた。鷹は又彼をも食はうとした。後に彼がヨリ強くなつた時には、彼は鷹を食はうと思つた。彼は山猫の子を食つた。山猫の母親は、若し自分が殺されて食はれなかつたなら、彼を食つたに相違ない。總てが其の通りである。此の法則は總ての生き物になつて彼れのまわりに體現されてある。そして彼自身が此の法則の要部を成してゐる。彼は殺戮者である。彼れの唯一の食物は肉である。彼を見て速かに走り去るか、或は空中に飛ぶか、或は木に登るか、或は地の中に隠れるか、或は彼と向ひあつて戰ふか、或は逆捩を食はせて彼を追ひかけるかする所の、生きた肉である。

若し子狼が人間流に物を考へるのであつたならば、彼は生命を約言して貪婪なる食慾と云ひ、世界を約言して、食慾の大群集が、追ひつ追はれつ、獵りつ獵られつ、食ひつ食はれつ、總てが盲目と混亂との中に、只だ無殘な、無計畫な、無終な偶然に支配されて、暴行と無秩序とを現出し、貪婪と殺戮との渾沌狀態を現出した處だと云つたかも知れない。

けれども子狼は人間流に考へなかつた。彼は廣い限界を以て事物を眺めなかつた。彼の目的は單純で、一時に只だ一つの思

ひ、或は慾望しか持つてゐなかつた。肉の法則以外、彼れの學べき、之従ふべき、他の無數な小法則があつた。世界は驚異を以て充たれてゐた。彼れの體内にある生命の揺めき、彼れの筋肉の働きが、無限無終の幸福であつた。敵の肉を仆す事は、即ち痛感と得意とを經驗するのであつた。彼れの荒れ狂ひと戰鬪とは即ち快樂であつた。恐怖その者、及び不可思議物の神秘も、矢張り彼れの生活する所以であつた。

次に安易と滿足とがあつた。腹のふくれてゐる事、トロトロと日向に眠る事、——それらの事が彼れの熱情と勞苦とに對する十分の報酬であつた。尤も、其の熱情と勞苦その者が、既に自己報酬的であつた。熱情も勞苦も皆な生命の表現であり、そして生命は常に自己を表現する時、幸福である。故に子狼は其の敵意ある環境に對して、何等の苦情も持つてゐなかつた。彼は甚だしく活潑であり、甚だしく幸福であり、又甚だしく自分を誇つてゐた。

川崎造船所の「工場占領」

山川均

一

昨年の今時分、大阪の日本勞働新聞社の集會で、私は同年の二月、伊太利のミラン市に起つたマゾニス織物工場占領の顚末を話したが、此講演の大意を掲げた新聞が禁止となつた。しかし此の禁止命令は、本國の伊太利までは屆かなかつたものと見へ、それとも禁止されたのは事實の報導であつて、事實そのものでなかつた爲めか、兎も角、其年の八九月頃になると、皮肉にも本國の伊太利では、鐵工業中心地の勞働者は殆んど工場の全部を占領し、其報導は續々新聞紙上に現はれた。しかし特殊國の日本では、工場占領の談が禁止してあるから大丈夫で、何人も一年後に、日本の勞働者の本物の工場占領に當面しようとは、恐らく豫想しなかつたらう。

二

今朝の新聞によると、數日前に工場占領を傳へられた川崎造船所の罷工勞働者は、各部聯合して再度の要求書を提出し、再び却下せられた場合は、工場委員の管理の下に、作業を開始することに決定し、十二日夜を以て工場管理の宣言、並びに其組織を發表したといふことである。

日本の勞働者によつて工場の占領が叫ばれたのは、過般の園池工場の爭議が恐らく初めてゞあるが、實現はしなかつた。工場の建物の一部分が、一時的に罷工勞働者によつて事實上占領せられた事實は或は、其他にもあつたかも知れぬ。けれども此場合に云ふ工場占領の意義は、單に一時、工場の建築物が勞働者の占領に委せられることではなくて、工場の内部に於ける生産作業が、勞働者の支配に歸することである。問題は工場そのものではなくて、工場内に於ける有機的組織が勞働者の意志と計畫とによつて成立つことである。そこで勞働者が工場の建物を占領したゞけでは、まだ眞の工場占領とは云はれない。勞

働者が其占領した工場のうちに、自分自身の秩序を立て、自分自身の勞働規律を作り、資本家の組織に代はる可き、勞働者自身の組織を立てた時、工場のことには勞働者の權力が確立したものであつて、初めて眞の工場占領が行れたといふことが出來る。そして勞働者自身の秩序と勞働規律と生産の能力――一言にすれば、勞働者自身の生産の組織が、資本家の生産の組織に優ぐれて居る時に、工場の占領は完全に[redacted]を占めたものである。

『そこで伊太利の勞働者が工場を占領すると、第一に着手したことは、嚴格な勞働規律を立てることゝ、生産能率を增進することであつた。ブルジョア自由主義に茶毒せられた改革者等は、動々もすれば勞農露國の嚴格な勞働規律を以て、勞働者の自由を奪ふものとして非難する。ところが勞働者自身が、勞働者自身の生産組織を打建ると、彼等は先づ第一着手に、勞働の規律を立てる。この點に於ても、近代的勞働者の智力は、遙かにブルジョア的改革者の智力に優さつて居る。

吾人は川崎造船所の工場占領に於ても、同じ事實を見る。工場管理の宣言と共に發表せられた管理の方法には、次の如く規定せられて居る。

(一) 産業委員會はすべての仕事を管理します。

(二) 各掛員附屬員役附は、産業委員の指示により、從來の通り仕事に就かねばなりませぬ、但し必要により作業に適當なる者は隨時委員會に參加して貰ひます。

(三) 賃金は今までの通り、會社に支出させます。

(四) 勞働時間は當分の間六時として、今までの八時間の能率を舉げることにします。但し産業委員會が適當と認めた時には、伸縮することもあります。

(五) 工場一般の平安を害し、能率を傷ける者は、懲罰委員會より懲罰に附します。

三

伊太利の工場占領と川崎造船所のそれとは、當面の目的に於ても、規模に於ても同一でない。後者が爭議の解決を見るまでの一時的の、計畫であるのに對して、前者は殆んど永久的の性質を帶び其規模に於ても爭議者は單に金屬工場の内部ばかりでなく

他に産業との間にも、勞働者自身の組織を立てようとした。

殊に今度の計畫が、果して事實となるかどうかは疑問である。工場の占領と勞働者による管理――この資本家と私有財産權とに對する神聖の冒瀆――が、資本階級と其有力な擁護者によつて寛容せられるかどうかは疑問である。此宣言は或は、爭議の解決を促進するだけの効果に終るかも知れぬ。或は警察權や司法權の發動を見るかも知れぬ。そして日本の勞働者は、其組織的能力を充分に立證する機會を與へられぬかも知れぬ。けれども一度び日本の勞働階級に芽ざした此[redacted]思想は、旱天にも嚴冬にも、決して枯死せぬに相違ない。

四

伊太利の場合にも、資本家によつて閉鎖せられた工場が、占領勞働者の管理の下に生産を續けてゆくことは、明かに[redacted]であつた。けれども之は明かに資本制度と私有財産主義との否認であつて、其上に立つ法律上からは不合法の行爲であつた。即ち工場占領の事實によつて、社會全體の利害と、私有財産主義とが、鮮明に對立したのである。

川崎造船所の勞働者も、工場管理の宣言のうちに、此行動は、罷業の繼續は『日本の産業を萎靡させ社會的不安を起す』からである――即ち社會全體の利益の爲にこの行動に出でるものであることを聲明して居る。若し軍事當局者が憲兵隊出動の理由を辯明して居るように、川崎造船所の爭議が日本の國防に影響を及ぼすものとすれば、少くともこの一點からだけでも、右の聲明には根據が無いとは云はれない。そこで若し社會全體の利害が私有財産主義と對立した場合には、今日の國家の權力は如何に發動するものであるかといふことを、吾々は此機會に知ることが出來るかも知らぬ。

勞働者の工場管理は、原則としては多くの人の[redacted]するところであるが、如何にして此原則が實現せられるにか就ては、是等の人々の間にも異論がある。マルクス派社會主義者が、此原則は階級鬪爭の結果として實現されると主張するに對して、階級鬪爭を否認する人々の見解は、明かでない。けれども少くとも日本の勞働運動丈の史では、この思想――否な此思想を事實の

上に現はそうとした最初の試み――が、明らかに白熱した階級闘爭の結果として生まれたことだけは、何人も否認することが出來ぬ。學說の上では階級闘爭說を極力否認せられる賀川豐彥氏が、此運動の先登に立れて居ることは、興味あることである。私は賀川氏の學說と行動との、矛盾を指摘しようとするものではない。私は此一事によつて、理論の爲の理論、爲學說の爲の學說――思想的遊戯――が現實の事實の前に、如何に力の無いものであるかを痛感すると同時に、大膽にこの事實に從つて行動せられる賀川氏の勇氣を、衷心から尊敬し賞賛する。

工場管理の計畫は、周圍の勢力の爲に、其實現すらも危まれて居る。けれども之が實現されると否とに拘らず、日本の勞働運動史の上に、不朽の[redacted]を放つことは疑ひながい。日本の勞動者は、此闘爭のうちから偉大な經驗を以つて出て來るに相違ない。(七月十三日)

□AとBの話　谷崎潤一郎

□或る男　武者小路實篤

□暗夜行路　志賀直哉



AとBの話

谷崎潤一郎

1

AとBと云ふのは二人の青年の名であるが、同時に又この二人が持つてゐた全く異つた二つの「魂」の名でもある。だから「AとBの話」は「二つの魂の歴史」と云つても差支へない。

全く異つた魂を持ちながら、AとBとは從兄弟同士であつた。さうして幼い頃から或る時期になるまで、十五六年の間一つ家に育てられた。と云ふのは、BはAの母方の伯父の子であつて、その家が貧しい爲めに早くからAの家へ引き取られて居たのである。AとBとは一緒に中學へ通ひ、一緒に中學を卒業し、一緒に高等學校の文科へ這入つた。そこまでは二人は同じ道を辿つて來た。だがそこへ來て、二人とも文學をやり出すやうになつてから、二人の心は次第に全く反對の方向へ進み始めた。此のことは彼等の「魂の歴史」に於いて可なり重要な事實である。「文學」が彼等を近づける媒介とならないで、却つて彼等を遠ざける因子となつたと云ふ一事は。

それはちよつと考へると不思議なやうでもあるが、よく考へれば不思議でも何でもない。なぜなら、人は誰でも眞面目に文學をやり出すと、自然と自己の問題に行きあたる。今更のやうに自分の心を取り出して見て、それを出來るだけ深く堀り下げ、細かに解剖し、自己と云ふものゝ本質を突き止めずには居られなくなる。さう云ふ過程に於いて、AとBとはお互に相異れる「自己」を發見するに至つた。云ひ換へれば彼等はお互ひに違つた「心」を持つて居たことを、その時になつて始めて明瞭に悟つたのである。そして二人が文壇へ打つて出て、各々その創作を發表するやうになつてからは、いよいよ彼等の距離は遠くなるばかりだつた。

Bは、自分をエライ人間だとは考へて居なかつたが、しかし一種不思議な人間、――兎に角あまり類のない素質と天分とを持つた人間であると解釋して居た。彼は生れつき愛と云ふものを持たない男だつた。人を愛し、動物を愛し、自然を愛し、器物を愛する、――普通の人間なら誰でも持つて居べき筈のその愛である。それをBは未だ嘗て經驗したことがなかつたのである。Bにしたつて「何が欲しい」とか「彼が欲しい」とか思つたことはあるけれども、それは欲しいであつて可愛いではなかつた。又「あゝ綺麗だな」とか「あゝ可愛いな」とか云つたことはあるけれども、それも官能的快感をさう云ふ言葉で表白したに過ぎないので、精神的の愛ではなかつた。尤も此れだけならばBに限つた譯ではなく、多くの犯罪性の人間は皆さうである。彼等は愛を知らない爲めに孤獨に陷る、さうしてその孤獨を慰めようとしてますます惡を働く。Bはその點に於いて彼等普通の惡人と同じであつたが、たゞ彼等と違ふのは、Bには惡を行ふのに一つの立派な、――少し妙な言ひ方だが、――天地神明に耻ぢないところの信念があつた。Bに云はせればそれは普通の惡人には許さるべきものではなく、彼のやうな特異な地位に立つ藝術家のみが、それに據つて生きて行かなければならないところの信念なのである。世の中の善人どもの作つた諺では「凡べての藝術は愛から生れる」と云はれて居る。

然るに天が彼のやうな「愛のない藝術家」を生んだ所以は何處にあるか？と云ふと、惡の中にある眞を永久に立證せんが爲めである。Bの考へに依れば人間の中には善人も多いが惡人も澤山居る。だから元來なら、善人の「社會」があると同樣に惡人の「社會」もあつていゝ譯だのに、前にも云つたやうに惡人どもは互ひに相愛することを知らない、みんなバラバラに孤立して居る結果として、「人間社會」全體を善人どもに占領されてしまつたのである。恰も白人が黑人を征服したやうに、善人は惡人を征服した。そして彼等は惡人を呼ぶに道德的不具者の名を以てする。けれども白人のみが人間でないと同じく、善人のみが人間ではない。善人の方が惡人より幸福だとは云へるにしても、より人間的だとか、より正しいとか云ふことは出來ない。正とか不正とかは善人の道德を標準にしたもので、惡人には全く通用しないところの規則だからである。此の事は惡人どもは皆内々は氣が付いて居る、自分たちには善人どもにはとても分らない不思議な心の作用があること、善人が自分たちを一概に「惡い」と云ふのは本當に自分たちの苦しみを理解して居ない結果であること、善人が善をしないでは居られないやうに自分たちは惡をしないでは居られないものであること、のみならず善人が善を行ふのは愉快であらうが惡人は惡を行つてもそんなに愉快なことはなく、たゞ先天的の惡性に由つてさうさせられて居るのであること、善人にはどんな苦しい場合にでも善人の爲めの宗教があり哲學があり藝術があつて、彼を救つてくれるのに惡人にはさう云ふ道も塞がれて居ること、――そして此の惡人の不平は、それを誰にも訴へることの出來ない孤獨の地位に由つて更に倍加されて居る。Bは自分の性質から推して見て、惡人と云ふものをさう解釋した。善人は彼の持つて居る愛の力で惡人を救へると思ふかも知れないが、生れつき愛のない者が愛で救はれる譯はない。惡人の心にも多少の愛があると思ふのは善人の僻見に過ぎない。全體惡人は救はるべきものでなく、永劫にその苦しい淋しい生活を續けるより外生きる道はないのであつて、そこに惡人の不幸なる運命がある。云はゞ惡人は「呪ふべき存在」

その物である。けれども善人の「幸福な存在」に對して、さう云ふ「呪ふべき存在」があることを人間全體に認めさせるのは、人間の一人としての惡人の權利でもあり義務でもある。若し惡人が何等か義務と云ふやうなものを考へることが出來るとすれば、たゞ一つそれがあるばかりである。惡の藝術家たるBの使命はその義務を正當に勇敢に果たすことにあつた。彼はその意味に於いて、善人の社會へ派遣された唯一の惡人の代表者であつた。

そこで、Bの爲すべきことは藝術を通じて自分の惡を生かし切ることであつた。どんなに苦しくとも、どんなに淋しくとも、好い加減で妥協したり、自己を欺いたりすることなく、惡の魂を成長するだけ成長させることであつた。つまり彼は最も自己に忠實なる惡人、――惡人の中の正義派とでも呼ばるべき者であつた。が、玆にBに取つて一つの矛盾が起つて來る。それは何かと云ふと、彼は藝術に依つて惡の眞理を善人に認めさせようとする、さうして自ら善人の社會へ這入つて來、善人を相手に仕事をする以上は、或る程度までは善人の規則に從ふことが必要である。藝術の上では惡を主張してもいゝとして實行の上では善人らしくしなければならない。此の事はBには二重の苦みであつた、なぜかと云へば善人らしくせねばならないとは云ふものゝ、惡人の立場から見ればねばならないことは一つもないのであつて、唯さうした方が便宜だと云ふに止まるのみならずさう云ふ便宜に從ふ事は、果して惡人として正義を貫く所以かどうか、藝術と實行とが離す可からざるものだとすればそれも疑問である。それから又、そんな面倒な理窟をヌキにして、假りに便宜な道を取りたいと思つても、悲しいかな生れつきの惡人たるBには惡の實行を喰ひ止めるだけの自制心がなかつた。ちよつとでも氣を緩めると彼は直ぐわるい事をする。そしてその後で「しまつた」と思ふこともあるが、「此れもどうも仕方がない」とあきらめる場合が多かつた。結局彼は實行の方面では成るべく善人と衝突しないやうにと思ふだけで、行きあたりバツタリに委せるより外はなかつた。彼の此の行きあたりバツタリ主義が大したボロを出さずに

濟んで行つたのは、彼に藝術家と云ふ保護色があつたからである。「あの男は時々妙な事をやるが、しかし彼は眞面目な藝術家だ、腹からの惡人ぢやない。」と、善人どもは善人一流の僻見を以ていつもさう云ふ風にコヂツケる。Bに云はせれば、「眞面目な藝術家だから惡人ぢやない」と云ふのが抑も飛んだ間違ひなのだが、いくら彼が躍起になつて辯解しても善人どもは決してそれを信じようとしない。それは都合の好い事だと同時に口惜しくもある。で、Bが若し、口惜しいと云ふ方の感情を募らせて行くと、どうしても惡人たるところを實行で見せつけてやりたくなるので、その誘惑を避ける爲めに彼は成るたけ、已むを得ない用事の外は社會と接觸しないやうに、善人の友達を持たないやうにしなければならなかつた。それでも向うから交際を求めて來た場合には、何か思ひ切つた惡事をして早く愛想を盡かされてしまふか、でなければズルズルに好い加減に附き合つて、相手がいくら胸襟を開いて來ても此方は奥歯に物の挾まつたやうな生返辭をしてあしらつて置く。Bの態度は自然とさう云ふ風になつた。そして必然の結果として、曖昧な陰鬱な人間にさせられて行つた。彼は腹の底から大きな聲で笑ふことも出來ず、思ひ切り涙を流して泣く氣にもなれず、次第に元氣を失つて行つた。寒帶の動物が熱帶へ連れて來られゝばだんだん勢がなくなつて半病人になつてしまふ。惡人の代表者として善人の國へ送られた彼は、彼に適しない氣候風土の爲めにその動物と同じやうになつた譯である。

Aは、Bと兄弟のやうにして育つた幼な友達であるにも拘らず、Bの此の氣持ちを理解し得なかつた。然しながらそれは無理もないのである、なぜならAはBと全く種族を異にする善人どもの一人であつたから。――さうして殊に彼等のうちでも情の細やかな方であり、何物に對しても深い愛を感ずる方のたちだつたから。Aはさう云ふ男であるが故に、自分とBとの間柄がだんだん疎くなつて行くのを悲しまずには居られなかつた。

「B君、君はもつと素直になり給へ、さうしてせめて僕にだけはほんとうの友情で附き合つてくれ給へ、藝術上のイズ

みは違つてもお互ひにそれは出來る事だ。」

と、Aは云つた。

「いや、それは出來ない事だ。」

と、Bは答へた。

「僕にはほんたうの友情なんて物はないんだよ、若しそんなものがあつたとしたら、僕の藝術はにせ物になつてしまふぢやないか。君と僕とが附き合つてるのは子供の時分の惰勢に過ぎない。それともう一つは君が時々金を貸してくれるもんだから、その爲めに僕は附き合つても居る。それ以外には君に對して僕は何の愛着もない。何卒こんな事を云つたからつて皮肉だと思はないでくれ給へ。僕が此れだけ正直に告白するのは、君に對するせめてもの友情だと思つてくれ給へ。」

Aは感心な男だつたから、さう云はれてもBを憎みはしなかつた。たゞ心の底から彼を憫れんだ。「向うが友達でない積りでも、自分はいつ迄もあの氣の毒な從弟を捨てないで居てやらう。常に變らぬ愛を持つて附き合つてやらう。さうすればあの男の胸に隱れて居る愛が、いつかは眼醒める時が來る。」——Aは固くそれを信じた。

Aの考へでは、Bの主張するやうな惡の藝術は決して長く生命を保てるものではないのである。Bは口癖のやうに、「ボオやボオドレエルは甘いものだ、己こそほんたうの惡魔派だ。」と云ふ。「彼奴等は惡に浸りながら其の實神を恐れたり自分の罪に戰いたりして居る。そして何かと云ふと『永遠』を口にする。だが眞の惡人には神も罪も永遠もありはしない。そんなものを信ぜられない所に彼の苦しみがある。彼には現在の惡があるばかりだ。」と云ふ。けれどもAに云はせればそれはBの迷ひである、智慧が曇つてゐる爲めである。Bがその迷ひを捨てゝ神に祈りを捧げ、己れの惡を責め

る心を起した時、彼は始めて眞の藝術を作り得るだらう。彼の傑れた素質はほんたうの光を發するだらう。――AはBの天分を信じて居たので、文壇の爲めにも、B自身の爲めにも、その時が來るのを願つてゐた。そして彼は創作や評論で常にBと反對の旗幟を飜し、Bの改宗を促さうとした。個人としてはBを愛し憐んだけれども、藝術の上では一歩も假借しなかつた。彼はBと云ふ人間には友情を感じたが、Bの中にある「惡」を憎んだ。のみならず其の「惡」の文學に喝采する輕薄な文壇を憎んだ。「さう云ふ文學や文壇があるのはよくない事だ。Bの作物の中にあるものは間違つた哲理、淺はかな詭辯、不自然な構想、ちよつと目新しい色彩、――たゞそれだけである。そして作者も批評家もそれで有頂天になつて居る。さう云ふ時代は早く過ぎ去らねばならない。」Aは自分の中にある「善」で、Bの中にある「惡」を滅ぼさねばならないと思つた。それはBに對する一種の戰ひであると同時に、Bをほんとうに救ふことでもある。最も高い意味での友情の發露である。もはや文壇がBの作物に欺されないやうになり、B自身も一度スッカリ行き詰まつてしまつたら、その時Bに喜ばしい一轉機が來るであらう。――Aは自分の藝術の力で、時代をそこへ導いて行けると思つた。さうするのが藝術家としての自分の天職であるのを感じた。

AとBとは、斯う云ふ風にして、半ば意識的に、半ば無意識に戰ひを始めたのである。

2

戰ひはそれから五六年つゞいた。

その間にAは次第にBを凌駕して行つた、――創作の上に於いても、文壇の名聲に於いても。

「Bの時代は去つて、Aの時代が來た。」と、

そんなことがポツ〳〵云はれるやうになつた。Aが豫期した如くBの藝術はだん〳〵行き詰まつて、その作物には以前

のやうな生彩がなく、たまに發表するものも批評家の注意を惹かなくなつた。Bの才能は既に涸渇したらしく思へたのである。

「僕は藝術の上で君に破れた、僕はもう駄目になつた。」

と、或る時BがAに云つた。

「君が僕に破れたのはいゝ事だ、僕は君がさうなるのを待つて居たんだよ。」

と、Aが云つた。

「――だが、君は決して駄目になつた譯ぢやない。たゞ一轉機に立たされたゞけなんだ。君には立派な素質もあるし豐かな天分もあるぢやないか、君はさう云ふいゝものを持ちながら、間違つた道を進んだのが惡かつたのだ。惡の藝術は結局行き詰まるに極まつてゐるさ。」

「惡の藝術は行き詰まる。――そりやさうかも知れない。けれどもそれは惡が藝術の形に於いて行き詰まつたと云ふだけで、惡その物は行き詰まらない。僕の心の中にある惡は儼然として存在する。僕はやつぱり惡の眞理を信じて居る。」

AはBの負け惜しみの強いのに呆れた、さうして笑ひながら云つた、

「それぢやどうして、君はその眞理をもつと盛んに主張しないのだ。君が行き詰まつたのはそれが眞理に背いてゐる證據ぢやないかね?」

「いや、そんな證據にはならない、それはたゞ惡と云ふものは、本來の性質として藝術で現はすには不適當だと云ふ事になるだけだ。つまり僕は惡の眞理を主張するのに誤まつた手段を取つたのだ。――」

Bは、眞青な傷ましい顔つきをして言葉を續けた。

「此の事を僕はもつと精しく説明しよう。――――一體君たちの考へで云へば、僕は自己を欺いてゐるから、僕の根性がヒネクレて居て自分の本心を眞面目に披瀝しようとしないから、それで行き詰つたと思ふのだらう。成る程僕はヒネクレてもゐるだらうさ、だが此のヒネクレた根性が僕のほんたうのものなのだ、僕の心を何處まで解剖し何處までほじくつても結局それはヒネクレてゐるのだ。だから僕は決して自己を欺いちや居ない、ヒネクレたところを丸出しにして見せてゐる。すると君たちはそれが間違つて居る、そこにウソがあると云ふ。君たちのやうな善人はいつもさう云ふ風に云ふ。あの男もあんなウソをつく間は善人になれない、そして善人になれないのは間違つた事だと、君たちは勝手に取り極めて居る。僕にはそれが口惜しいのだ、僕が藝術家になつた動機はそこにあるのだ、君等から見れば惡その物かウソの塊かも知れないが、僕等に取つてはそれ以外に眞理はないのだ。僕は僕の藝術でそれを君たち善人に知らせたかつたのだ、解せられざる悲しみを訴へたかつたのだ。ところが君たちはどうしても僕の本心を理解してくれない。僕の作物が讀者や批評家にやんやと云はれた事はあるけれど、その實僕は嬉しくも何ともなかつた。僕は彼等から「病的な美の發見者」だの「官能的快樂の讃美者」だの「皮肉なる心理解剖家」だのと云はれたが、そんなものは僕の本心ぢやない、僕は皮肉なんぞ云つた積りは一度もないのだ、いつも本氣で眞正面から打つかつて居たのに、誰も僕の本心を見てくれない。たゞ善人の中の僞惡家どもが、僕のほんの上つ面のものだけを見て喜んだのだ。彼奴等が若し僕の本心を知つたら、きつと竦毛を顫つて逃げ出しただらう。」

さう云つて、Bは泣きさうな顏をして「はゝゝ」と笑つた。

Aは全く不思議な氣がした。子供の時から附き合つて居るBと云ふ人間が、此の時ほど彼に不思議に見えたことはなかつたのである。「此の男の云ふ事は間違つて居る、しかし何處かウソでないところがある。一體此の男の心はどんた風

になつてるのか知ら?」Aの頭は一種の混亂を感じた。彼は此のBと云ふ男を憫んでいゝのか尊敬していゝのか見當がつかなかつた。

「斯うして僕の書く物はいつも世間から誤解されて居た、――」

と、Bは續けた。

「――甚しい批評家は僕を人道主義者にして、『B氏の作物には惡人に對する深い同情、博大な愛が滲み透つて居る』と云ふ奴さへあつた。その連中は僕を何處までも善人だと思つて居るんだ、そして善人が善人の立ち場から、惡人を見てゐるんだと解釋してるんだ。僕に取つてこんな忌ま忌ましいことがあるもんぢやない、僕は明かに『自分は惡人だ』と云つて居るんだ、『自分のやうな惡人には愛と云ふものは微塵もない、だから苦しくつて仕様がない、此の事實をどうしてくれる?』と云つて居るんだ。それを世間の奴等は眞正面から取らないで、その言葉の裏に愛が潜んでゐると云ふ。そんな冗談は云つて貰ひたくない。僕は君たちに『善人』だなんて褒められたつて有難くも何ともないんだ。それよりか僕の云ふ事實を認めて貰ひたかつたんだ。」

Bはそこまでしやべつて來て、ガツカリしたやうに息をついた。陰鬱で無口な彼がそんなにしやべつたのはそれが始めてだつたのである。コチコチに痩せた青黑い彼の頰には、珍しくも生き生きした血の色が上つて居た。

「――そこで僕はいろいろ考へて見た。僕の書く物はなぜ正當に鑑賞されないんだらう?僕の書き方が惡いのだらうか、讀者の方が惡いのだらうか?――僕はさう考へて見て、結局それは藝術その物の罪だと云ふ事に氣が付いたのだ。なぜかと云へば、此の世の中に藝術と云ふものがあつて以來、未だ嘗てほんたうの惡の藝術が作られたことはない。藝術の中の偉大なものや莊嚴なものはみんな善良なものばかりだ。つまり藝術は『善』を表現する一つの樣式で、『惡』を

表現するには適しないと云ふ事になる。――だから此の意味で、僕は君に降參した譯だ。君の云ふ通り『惡の藝術は有り得ない』のだ。――云ふ迄もなく藝術は社會を離れては存在しない、ところが一體その社會と云ふものは善人で成り立つてゐるので、惡人には社會がないのだから從つて惡の藝術なんかある譯はない。一と口に云ふと我々の所謂藝術なるものは悉く善人の爲めの藝術だ。それは神や道德と同じく善人が發明したもので、善の進歩の爲めにしかならない。善人どもは藝術と云ふと、みんな自分たちの爲めになるものと思ひ込んでゐる。さうしてそれは惡人どもが彼等獨特の社會を作り、彼等獨特の藝術を新たに發明しない限りは事實なのだ、僕が此の事に氣が付かなかつたのはほんたうに迂濶だつた。僕は惡人の癖に善人の社會へやつて來て、自分のものでない藝術で自分を主張しようとしたのだ。もつと適切に云へば自分の言葉でない言葉で、自分たちの標準とは全く反對な標準にある名詞や形容詞を使つて、自分の歌を唄はうとしたのだ。そこで僕の書く物は善人に都合の好い口實を與へ、果ては僕自身までも無理やりに善人の仲間へ入れられさうになつたのだ。僕は負け惜しみを云ふのぢやないが、僕が駄目になつた理由は此處にあると云ひたい。そりや批評家に云はせたら僕の天分が貧弱だから、僕の才能が乏しいからだと云ふのだらう。だがまあ考へて見てくれ給へ。誰でも自分の體質に全く適しない國へやつて來て、その國の空氣を呼吸し、その國の食物を攝取し、その國の規則に從ふことを餘儀なくされつゝ、さうして而もまるで自分とは違つた心を持つ人々に圍繞されつゝ、自分の天分を發揮させようと努めたら、大概な人間は參つてしまふだらう。その人はその國に窮屈な思ひをしつゝ生きて行くだけがヤツとなのだ、もうそれだけでも好い加減體質が衰へてしまふのだ。假りにどんなに才能があるにしたところが、自分の國へ戻つて來なければそれは芽を吹く筈はないのだ。だから僕は自分の才能が衰へたからと云つて、決して恥辱だとは思つて居ない。僕は今まで自分の才能が壓迫されるやうに、自分の天分が涸渇するやうにと、自分で仕向けて居たやう

なものだ。僕に天分がないと云ふことは、善人としての天分がないので、僕がいよいよ善人ではないと云ふ證據になるだけだ。」

Bはさう云つて昂然とした、が、その實彼の腹の中は可なり悲しかつたのである。なぜなら彼は藝術に失望し、藝術は彼を見捨てた。彼が持つて居たところの、――惡人の中で獨り彼のみが持つことを許されて居ると信じたところの、惡の藝術家としての使命、それが結局彼の幻影に過ぎないことを悟つたからである惡人たる彼は、孤獨な彼はその幻影をさへ自分の友とすることが出來ない。もはや彼は善人に向つても惡人に向つても誇るべき何物をも持たない。彼は惡人の代表者ではなく、要するにたゞの惡人だつたのである。

「すると君は、此れからどうしようと云ふのだね。君の云ふ事が正しいかどうかは分らないけれど、假りにそれが本當だとして、君は何處に君の立ち場を求めるのだね。」

Aはいたはるやうな調子で云つた。彼の頭の中にある不思議な氣持ちはまだ去らなかつたが、しかし兎に角、Bの態度が眞劍であることは認めない譯に行かなかつた。

「僕の立ち場？――そりや僕にもどうしていゝか分らないが、たゞ此れだけの事は云へる。君は今迄僕を相手に戰つて來た。僕と云ふものを目標に置いて、始終僕を負かさうとして居た。さうして僕は君の豫期の如く負かされたには違ひないが、しかしそれは先も云ふ通り藝術の上での話だ。僕の中にある『惡』は君の『善』に負けた譯ぢやない。孰方が勝つたつて負けたつてそんな事は構はないけれど、僕はたゞ此のまま僕の『惡の魂』が、君たち善人に理解されずにしまふのが口惜しい。僕はどうかしてそれを君に知らせてやりたい。君たちは何かと云ふと、愛で救つて見せると云ふ。どんな惡人も愛には勝てないと云ふ。若しほんたうにさう思ふなら、此の僕を救つて貰ひたいものだ。僕に云はせれば

どんな善人も惡には勝てない。正直を云ふと僕は此の後の僕自身が、何處まで惡くなるか分らないやうな氣がするんだ。君はまだ僕の惡いところをよく知らないんだけれど、今までの僕では藝術と云ふ吐け口があつたので、心の惡を成るべく直接には人に見せないやうにして居た。だがもう僕は何もそんなものを持たない。僕をいくらかでも抑へてゐた自制心は、もうバラ〳〵にほぐれてしまつたんだ。僕は坂の頂邊から放り出された石ころのやうなものだ、放つて置けば何處までも落ちる。自分で自分がどうなるのだか方途が知れない。君は僕がそんな人間になつても、やつぱり僕を愛せると思ふかね？僕を救へると云ふのかね？」

「まあ、待つてくれ給へ」

とAが云つた。

「僕は君がどうならうとも、君を愛するに變りはない。さうしていつかは君を救ふ時があると思ふ。けれどもたゞ斯う云ふ事は必要だ、――それは君自身も、ほんたうに救はれたいと云ふ意思を持つことだ。君は現に苦しんでゐる、さうして君の所謂辯せられざる悲しみを僕に訴へようとしてゐる。それは君の友情ではないにしても然し何かの現はれぢやないか。僕に云はせれば君にさう云ふ煩悶があるのは、結局君が救はれることの前提なのだ。君が一轉機にあると云つたのはそれを云ふのだ。」

「いや、もう度び度び一つ事は繰り返すまい、――僕は救はれないから苦しいと云ふ、君は苦んで居るから救はれると云ふ、お互ひにいつまで云ひ合つても同じ事だ。君が僕を愛してくれるのは有り難いが、僕のやうな人間は愛されれば愛されるほど墮落するかも知れないんだ。何卒それだけは承知して置いてくれ給へ。」

Bは口に出しては云はなかつたが、しかし心の中で、「戰ひは此れで濟んだのではない、此れからまだいくらでも續

く。」と思つた。「藝術の上では負けたけれども、何かで勝つてやる。何かで己と云ふものをハッキリ見せてやる。」と思つた。彼にはAと云ふ人間が『善』その物の化身と見えた。さうしてそれに何かの方法で飽く迄突ツかゝつて行くことは、矢張り悪人としての正義を貫く所以であると考へられた。Aがさうであつたやうに、Bも亦、Aの中にある『善』を敵視した。それと戦つて若し負けたらば――――Aの愛が自分の『悪』に打ち克つたらば、自分は潔くAの足下に跪いて救ひを求めよう。だがさうでない限り己はあの男を己の足下に這はしてやる。「成る程君の悪はほんたうだ、善が偉大なやうに悪も偉大だ、僕が僕の愛で君を救ふなどゝ云つたのは全く生意氣な沙汰だつた、勘忍してくれ給へ、」と云はしてやる。そこまで行つて始めて戦ひは終るのだ。――――

それからのBは彼の豫言通り次第に堕落して行くばかりであつた。彼はもう何處を押しても藝術家ではなく、酒と女と金の外には自分を慰めるものゝない、一箇の無頼漢となり浮浪人となつたのである。

3

Aの家庭は、Aと、Aの妻のS子と、Aの母と、三人から成る美しいつゝましやかな家庭だつた。

AとS子とがどんなに深くお互ひを愛し合つて居たかは、凡そさう云ふ藝術家の夫婦關係の最も美しいものを考へてくれればいゝ。Aの藝術はS子のあらゆるものを糧として生れ、S子のあらゆるものはAの藝術に依つて養はれた。なほその上にAの母はAの氣質そのまゝの優しい母であつた。

Aの母は始終Bを「可哀さうな男だ」と云つてゐた。彼女の實の甥ではあるし、子供の時分にはAと一緒に育つたのであるから、それがそんなに堕落するBのを見て居るのは、彼女には辛かつたのである。「兄弟のやうに思つておやりなさい」とは彼女がいつもA夫婦に云ふ言葉だつた。彼女は込み入つた藝術の問題は分らなかつたので、Bのさうなつた

原因の一半がAにあるものと思ひもした。

「お前があれの書く物を攻撃するなんてことはありません。あれの人氣がなくなつたのはお前があれを、にせ物だとか何とか云つて、ひどくケナシたからださうぢやないか。」

Aはそれに就いて自分に少しも疚しい點がないことをいろいろ辯解したけれども母はやゝもするとそれを云ひ出すのであつた。

生活に窮して居たBは伯母の同情を幸ひにして屢々Aの家へ金を借りに來た。

「當く物が書けさへすれば、僕はお金なんぞ借りたくはないんですよ、伯母さん、」

と、Bは云つた。

「僕がこんなになつたのはA君のお蔭です。A君にあゝ云はれたので、僕はすつかり自信をなくしてしまつたんです。A君は始終僕を敵視して居たんですからね。」

Bはさう云ふ風にして、親子の間を割くことに興味を感じた。彼は全く惡人の本領に復つたのである。彼に取つては、ウソをつくことが自己を欺かないことになり、ウソで生きるのがほんとうの生き方になつたのである。

「B君、金が欲しいなら僕にさう云つてくれ給へ、――母が僕を誤解するやうなことは云はないで貰ひたい。」

Aにさう云れると、Bはニヤニヤ笑ひながら答へた。

「さうかね、そんなことを云つた覺えはないんだけれど、云つたとしたら勘忍してくれ給へ。此の頃の僕は一層ヒガンでゐるんだからね、どうせ同情してくれるなら其處まで同情してくれ給へ。」

しかし、Bを傷けるやうなことを母に告げようとは思はなかつた。自分がいくらか誤解されても、Bを憫れむ母の感

情を、そつとそのまゝにして置きたかつた。彼はたゞ妻のS子が自分の氣持ちを知つて居てくれれば、それで心から慰められた。

Aのさう云ふ幸福は、Bの心をますます僻ませるばかりであつた。「若し兄弟のやうにして育つた二人が、順當に各々の道を進んで來たとしたら、平等に幸福を分配されていゝ筈である。Aと自分とはめいめいの天性に從つて生きて來た。Aは自分より少しでも多く努力した譯でもないのに、あんな幸福を授かつて而もそれを正しい報酬のやうに思ひ、借越にも自分を憫れまうとする。自分はたしかに不公平な地位に置かれて居る」。Bには常に此の考へがあつた。自分の不幸を轉ずることは出來ないにしても、Aの幸福を出來るだけ掩り取つてやらう。自分が氣の毒な人間であるやうに、Aをも氣の毒な人間にする、それで差引き勘定がつくのだと、彼は思つた。

BはAとAの母から代る代る金を借りた。而もそのやり方は、Aに一度でも快よく金を出させるやうにはしなかつた。母が出す時でも、自分が出す時でも、Aはいつも馬鹿にされて居るやうな感じを抱かせられた。Bのは借りると云ふよりも撳して取るのだつた。Aから借りて置いて直ぐ又母へ借りに行つたり、餘所へ負債を作つて置いてノツピキならぬヘメにしてから泣き付いたり、それも實はさうでないのをさう見せかけたり、本や着物を「ちよつと貸してくれ」と云つて其れきり賣り飛ばしてしまつたり、二度と閾を跨げないやうな不義理をしながら、何度でも平氣でやつて來るのである。

「なぜそんな眞似をしてくれるのだ。母にしろ僕にしろ君を他人とは思つて居ないのに、僅かな金のことで欺さなくつてもいゝだらうに。」

から云つてAが淚を流すと、

「濟まない、濟まない、——僕も君たちを欺すのはほんとに苦しい、僕はどうしてこんな人間になつたのか自分で自分が恨めしくなる。もう此れつきり迷惑はかけないから免してくれ給へ。」

と、Bもさう云つて泣くのであつた。けれどもそれから一と月と立たないうちに、彼は又同じ事を繰り返すのであつた。

二人の斯う云ふ關係は一二年つゞいた。Aの平和な家庭はBに由つて少しづゝ亂されはしたが、それでもAは決して幸福でないことはなかつた。なぜなら彼はその爲めにS子との愛をいよいよ深め、自分の母に仕へる心がどんなに強いかを確かめ、墮落した甥を救はうとする母の美しい人情を知り、要するにたまに不愉快な事はあつても、その不愉快は結局良心の喜びを齎らすに過ぎなかつたからである。

しかし、Aの家庭にも遂に或る時大きな不幸がやつて來た。Aは圖らずも自己の過失からBを一層不幸に陷れ、Bは期せずして、自分が傷くと共にAを苦しめる事に成功した。

Aの母が常に大切にして居るものに、父の形見の瑞西製の時計があつた。それは父が存生中始終持つて居たもので、彼が洋行した時に買つて來た精巧な時計だつた。その鎖に附いてゐるプラチナの小筥の中には、父と母との肖像のミニエチュアが這入つて居た。その時計は、母の居間にある佛壇の下の抽き出しへしまつてあつたのだが、或る時それが紛失してゐる事をS子が發見したのである。いつ、どうして取られたのか無くなつたのかは、誰も知つて居る者がなかつた。ちやうど其の時分、母はインフルエンザに罹つて半月ばかり臥せつて居たので、彼女は部屋を明けた覺えはなし、いつもA夫婦と看護婦とが代る代る枕許へ附き添つて居たのであつた。親戚の者が二三度見舞ひに來たけれども、さう云ふ人に疑をかけるべきではなし、Bは母の病中に一度もやつて來たことはなかつた。母は「此の間暇を取つた看護婦の仕業ではなからうか」と云つた。Aにも、S子にも、此の疑ひには尤もな節があると思はれたのである。と云ふのは、つひ四

五日前に、その看護婦は大へん母の氣に入つて居たにも拘らず、何か理由を云ひ立てゝ、代りの者を呼んでさつさと暇を取つて行つた。彼女は晝も夜も病室に居たことではあり、部屋の掃除などもしたのであるから、何かの場合に佛壇の抽き出しを明けたこともあつたか知れない。兎に角誰かに盜まれたものだとすれば、此の女より外に疑ひの懸るものはなかつたのである。

Aは品物が品物であるから、その女には氣の毒だけれども一應看護婦會の方へそれとなく問ひ合はせて調べて貰つた。すると會からの返事には、「當方では出來るだけ嚴重に調べて見たが、本人は絕對に否認して居る。それに今迄そんな不都合のあつた女ではなし、此れと云ふ證據も見出だされないから、どうも彼女の所爲とは信じられない。しかしさう云ふ貴重な物品をおなくしになつては御迷惑の事と思ふから、此の際警察へお屆けになつてはどうか。此れは會の責任としても是非さう願ひたいし、彼女自身もそれを望んで居る。」と云ふのであつた。で、Aはその時計を取り返したい一心もあつたが、一つには看護會との行き掛りもあつて、寧ろ會の當事者に慫慂された結果として訴へなければならなくなつた。Aがそれを實行したのは決して彼の過失とは云へなかつたけれども、抑も看護婦會との交涉から警察へ屆けるまでの一切の手段を、母に無斷でやつた事は少くとも彼の手ぬかりであつた。當時、母の病狀は重くなる一方で、毎日高い熱が續いて「惡くすると肺炎になる」と云はれて居たので、彼は成るべく母に心配を掛けない積りでさうしたのだが、後になつて思ひがけなくもBが犯人として擧げられた時、母は淚を流してAの不注意を責めたのであつた。

「私は警察へ屆けろなんて云つた覺えはありません。そりやもとはと云へばBが惡いんだけれど、あれを繩着きにしたのは何と云つてもお前が惡いんです。どんな事があつてもあれをもう一度眞人間にしてやらなけりや、私は冥途へ行つてあれのお父樣に合はす顏がありません。」

と、彼女はさう云つて泣くのであつた。

Aは Bが放逐されるやうに出來るだけ骨を折つたが、それは遂に許されなかつた。彼が家の時計を盗んだのはもう一と月も前の事で、その外にもいろいろの餘罪が發覺した爲めに起訴されたのである。警察署へ時計を受け取りに行つたAは、Bに會つて一と言でも詫びを云ひ、母の意志を告げたいと思つたけれども、Bは何故か「會ひたくないから」と云つて拒絕した。その後彼がいよいよ監獄へ入れられるやうになつてからも、AとS子とは絕えず面會を求めに行つたが、Bはいつも會はなかつた。

Aの不幸はそれだけならばまだよかつたが、更にほんたうの大きな不幸が續いて彼を見舞つたのである。Bの事件があつてから半月ほど過ぎて、Aの母は肺炎で死んだ。――Bのことを明け暮れ苦に病みながら、死ぬ時も殊にそれを口にして死んだ。その死は必ずしもBの事件が原因であるとは云へない、Bが彼女を殺したのだとは決して云へない、孰れにせよさうなる運命だつたかも知れないのだが、少くもBに就いての心配が病勢を募らせ、死を早めたやうに、――A夫婦には思へるのだつた。AとS子とは其の後永く、此の二つの事件を切り放して考へることは出來なかつた。母の臨終の枕もとでAが堅く誓つた言葉、「お母さん、御安心なすつて下さい、私たちはきつとBを愛してやります、きつとあの人間を救つてやります。」と、さう云つた言葉は、獄中にあるBの身の上を想ふ毎に想ひ出されるのであつた。

Aには、此の二つの事件の深く結び着いて居ることが悲しくも思はれ、又どうかした折には忌ま忌ましくもなつたりした。Bの入獄、――それはAが導いた結果には違ひないが、嚴密に云へば彼はそれに就いて責任を感じなくともよいのである。成る程不注意であつたとは云へる、けれどもそこまでBを疑ひ得なかつたことは寧ろ彼の美點だとも云へる。たゞ母の心持ちを尊重すれば、彼女に無斷で處置したのが手落ちではあるやうなもの丶、假りに母がその相談にあ

づかつたとしても、恐らくさうなるより外はなかつたであらう。母にしたつてBの所爲とは夢にも知らなかつたのだから、最初からの行き掛り上、矢張りAと同じ手段に出たであらう。さうして見れば、「私に一と言云つてくれたら」と思ふのは母の愚痴で、Aの手落ちはほんの形式だけのものである。手落ちの有無に拘らずBの窃盗は事實であり、たまたまそれが餘罪を發覺させ、縄着きの憂き目を與へる機會を作つたに過ぎない。Aの良心には寸毫も疚しい所がある譯はない。だが、母の病床の涙を想ひ、臨終の樣子を想ふ時に、「済まない事をした」と云ふ感じが理窟以上の力として胸に迫るのを、Aは奈何ともする事が出來なかつた。母の言葉は愚痴ではあるが何かしら純眞なものを持つて居た。Bの罪を何處までも自分等の過ちに歸して其の責めを負はうとする神の如き彼女の愛は、それを考へる時にAの心をも高く貴い所へ引き上げなければ措かなかつた。母の心になつて自分を見る時、Aには自分と云ふものがBと同じやうに哀れに醜く感ぜられた。「Bを救へ」と云ふ母の言葉は、「Bを救ふ事に依つてお前を偉くしろ」と云ふ意味に取れた。母の大きな愛の手が自分たち二人の友情を保證し、行くべき路を指し示して居るやうに思へた。

「矢張りお母樣の仰つしやつた通り、私たちが足りなかつたのね。Bさんが出ていらつしつたら、どうしても救つて上げなけりやなりませんわ。」

と、S子も彼を勵まして云つた。

「Bにしたつて今度は少しは考へたらうと思ふけれど、お前が心からその氣になつてくれゝばいゝんだ、人一人を救ふと云ふ事はなかなか僕獨りで出來ることぢやないんだから。」

「いゝわ、あたし、あなたを偉くする事なら、どんなことでも、……」

夫婦がそんな會話をする時は、自分たちはまだ幸福だと思ふことが出來た。それは最後に、そして永久に二人に許さ

と、彼女はさう云つて泣くのであつた。

Aは B が放免されるやうに出來るだけ骨を折つたが、それは遂に許されなかつた。彼が家の時計を盗んだのはもう一と月も前の事で、その外にもいろいろの餘罪が發覺した爲めに起訴されたのである。警察署へ時計を受け取りに行つたAは、Bに會つて一と言でも詫びを云ひ、母の意志を告げたいと思つたけれども、Bは何故か「會ひたくないから」と云つて拒絶した。その後彼がいよいよ監獄へ入れられるやうになつてからも、AとS子とは絶えず面會を求めに行つたが、Bはいつも會はなかつた。

Aの不幸はそれだけならばまだよかつたが、更にほんたうの大きな不幸が續いて彼を見舞つたのである。Bの事件があつてから半月ほど過ぎて、Aの母は肺炎で死んだ、――Bのことを明け暮れ苦に病みながら、死ぬ時も殊にそれを口にして死んだ。その死は必ずしもBの事件が原因であるとは云へない、Bが彼女を殺したのだとは決して云へない、孰れにせよさうなる運命だつたかも知れないのだが、少くもBに就いての心配が病勢を募らせ、死を早めたやうに、――A夫婦には思へるのだつた。AとS子とは其の後永く、此の二つの事件を切り放して考へることは出來なかつた。母の臨終の枕もとでAが堅く誓つた言葉、「お母さん、御安心なすつて下さい、私たちはきつとBを愛してやります、きつとあの人間を救つてやります。」と、さう云つた言葉は、獄中にあるBの身の上を想ふ毎に想ひ出されるのであつた。

Aには、此の二つの事件の深く結び着いて居ることが悲しくも思はれ、又どうかした折には忌ま忌ましくもなつたりした。Bの入獄、――それはAが導いた結果には違ひないが、嚴密に云へば彼はそれに就いて責任を感じなくともよいのである。成る程不注意であつたとは云へる、けれどもそこまでBを疑ひ得なかつたことは寧ろ彼の美點だとも云へる。たゞ母の心持ちを尊重すれば、彼女に無斷で處置したのが手落ちではあるやうなものゝ、假りに母がその相談にあ

づかつたとしても、恐らくさうなるより外はなかつたであらう。母にしたつてBの所爲とは夢にも知らなかつたのだから、最初からの行き掛り上、矢張りAと同じ手段に出たであらう。さうして見れば、「私に一と言云つてくれたら」と思ふのは母の愚痴で、Aの手落ちはほんの形式だけのものである。手落ちの有無に拘らずBの窃盗は事實であり、たまたまそれが餘罪を發覺させ、縄着きの憂き目を與へる機會を作つたに過ぎない。Aの良心には寸毫も疚しい所がある譯はない。だが、母の病床の涙を想ひ、臨終の様子を想ふ時に、「済まない事をした」と云ふ感じが理窟以上の力として胸に迫るのを、Aは奈何ともする事が出來なかつた。母の言葉は愚痴ではあるが何かしら純眞なものを持つて居た。Bの罪を何處までも自分等の過ちに歸して其の責めを負はうとする神の如き彼女の愛は、それを考へる時にAの心をも高く貴い所へ引き上げなければ措かなかつた。母の心になつて自分を見る時、Aには自分と云ふものがBと同じやうに哀れに醜く感ぜられた。「Bを救へ」と云ふ母の言葉は、「Bを救ふ事に依つてお前を偉くしろ」と云ふ意味に取れた。母の大きな愛の手が自分たち二人の友情を保證し、行くべき路を指し示して居るやうに思へた。

「矢張りお母様の仰つしやつた通り、私たちが足りなかつたのね。Bさんが出ていらつしつたら、どうしても救つて上げなけりやなりませんわ。」

と、S子も彼を励まして云つた。

「Bにしたつて今度は少しは考へたらうと思ふけれど、お前が心からその氣になつてくれゝばいゝんだ、人一人を救ふと云ふ事はなかなか僕獨りで出來ることぢやないんだから。」

「いゝわ、あたし、あなたを偉くする事なら、どんなことでも、……」

夫婦がそんな會話をする時は、自分たちはまだ幸福だと思ふことが出來た。それは最後に、そ

れた幸福でそれ一つが殘つた爲めに一層高調され、今迄の不幸を補つて餘りあるものであつた。

だが、Bはどうしてゐるか?、たつた獨りで獄屋に繋がれてゐる彼は、どう考へてゐるだらうか?——此の事は夫婦に取つて始終危惧の種であつた。Bが若し眞人間になれる人なら、今こそ眞に其の時機である。今を措いて再びその時は來ないかも知れない。AはBの爲めにも彼自身の爲めにも亦亡くなつた母の爲めにも、自分の偶然の過失が却つて意義のあるものとなるのを祈つた。「B君、……僕は今にして思ふが、君をほんたうに愛して居たのは此だけだつた。」と、彼は母が死んでからの手紙に書いてやつた。「僕なぞは母の半分も君を愛しては居なかつたんだよ。君がどんなに淋しいだらうとか、苦しいだらうとか云ふ事を、ちつとも考へてゐなかつたのだよ。君はよく理解してくれないと云つて怒つたけが、全くその通りだつた。今迄の僕は君の心持ちをまるで酌み取つて居なかつたんだからね、……ほんたうに僕は詫るよ、嚥腹が立つたらうが勘忍してくれ給へ。今迄の罰として君の苦しみを僕に背負はせてくれ給へ、僕は出來るだけ君の苦しみを分ち、君と共に苦しまうぢやないか。君も亦、苦しい事があつたら其の苦しみは僕の苦しみであり、亡き母の苦しみでもあると思つて、遠慮なく打ち明けてくれ給へ。それでこそ君も救はれるし、僕も救はれるのだ。君の悪がいかに根深いものであるにしろ、目下の君はきつと靜かに自分の過去を顧み、自分と云ふものをしみじみと省察する機會を與へられたらうと思ふ。……返す返すも僕が君を救ふのだと思はないで、母の靈が君と僕とを救ふのだと思つて貰ひたい。君が救はれれば母の遺志を成し遂げる事が出來るのだし、君のお蔭で僕も偉くなれるのだから。」Aは今の場合にBの心を出來るだけ衝き動かさうと努めたけれども、どう云う譯かBは面會を拒むばかりでなく、幾度手紙を出しても一通も返辭を寄越さなかつた。母の死を知らせても悔みを云つて來るではなし、S子からの折々の差入れ物に對しても、受け取つたと云ふハガキ一本書くではなかつた。

「どうしたのか知ら？手紙ぐらゐよこしてくれてもよささうなものだのに、何かよつぽど考へ込んでも居るのでせうか？」

「さあ、事に依つたらさうかも知れないが、悪くすると益々ヒガンで居るのかも知れないね、まあ餘り樂觀しない方がいゝだらうよ、」

夫婦はよくそんな風に話し合つた。Bの沈默はいゝ意味にも解決出來ないことはなかつたが、悪く取れば深い魂膽があるやうにも感ぜられた。「今に覺えてゐろ、考へがあるから、」何となくさう云はれて居るやうな氣もした。

「ヒガンで居るんだとすると、僕等は此の後どんな非道い目に遭はされるかも知れないんだから、お前もその積りで居ておくれ。」

と、Aは云つた。彼は相手がヒガンで居ると居ないに拘らず、幾度でも根氣よく獄中へ手紙を書いた。Bがどんなに皮肉に出ても自分たちは態度を變へてはならない。何處までもBの爲めを思ひ、母の心になつてBを愛する、――自分たちはその態度で終始一貫しなければならない。――A夫婦はそれを語り合ひ、互ひに警めもし慰めもして、Bの出獄の日を靜かに待つた。

4

A夫婦が久し振りでBのハガキを受け取つたのは、今日で愈々彼の刑期が終ると云ふ日であつた。それが入獄以來の彼の最初の書信だつた。

「大變御不沙汰した、僕は明朝多分十時頃に君のお宅へ行く。しかし斷つて置くが決して出迎へなぞに來てくれ給ふな、僕が此の通知を出すのは、君に充分僕を待ち構へて心の用意をして置いて貰ひたいからだ、ではいづれ明日」

文句は此れだけしか書いてなかつたが、それを見るまでもなく、夫婦は既に「心の用意」が出來て居る積りであつた。

「あのハガキで見ると、やつぱりBさんはヒガンで居らつしやるんぢやないでせうか？。」

Bが訪ねて來る日の朝、Aが緣側の籐椅子に凭れて紅茶をすゝつてゐると、S子はそこへ來て良人の傍に寄り添ひながら云つた。

「さうかも知れない、僕等はまだまだ、此れから苦しまなければやならない。」

「あなた、Bさんが入らしつたら、ほんとに優しくして上げてね、――」

Aが振り返つて見ると、S子の眼からは、涙が少しづゝ潤ほひ出てそれが蠟のやうに白い頬へこぼれ落ちさうに、眼の緣に一杯たまつてゐた。何か玲瓏と透き徹るやうな、悲しいしかし淸々しい氣持ちが、夫婦の胸の中を流れて行つた。

「大丈夫だよ、安心おしよ」

さう云つたAの眼にも涙があつた。

Bは豫告の如く、十時きつかりにやつて來た。書齋に通されて椅子に就いた彼の姿は、前よりも痩せが目立つて、凹凸の多い暗い顔が一層トゲトゲしくなり、眼は落ち窪み、そして時々ゴホン、ゴホンと力のない咳をしたが、自分でもそれが氣になるやうであつた。

「S子さん、毎度美しい入れ物を有り難う、――それから、――あゝさうだつた、僕はまだお悔みも云はなかつた、伯母さんはお亡くなりになつたさうだね、」

彼はそんなことを、極く當り前に、平氣で夫婦に云つた。三人が暫くさう云ふ當り前な話をした後、Bは矢張り何でもない話の續きのやうにして口を切つた。

「……さう云へばつひ返辭も上げなかつたけれど、度び度びの手紙で君の好意はよく分つたよ、僕も實はいろいろ考へたことがあるもんだから、今度は是非君に救つて貰はうと思つてるんだよ。」

その「今度は是非」と云ふ所へ彼は心持ち力を入れた。

「なあに、救ふも救はないもありやしないさ、僕の考へは手紙に書いた通りなんだが、――で、君の考へと云ふのを聞かしてくれ給へな。」

「まあ差しあたつて、此れからの身の振り方だがね、――」

Bはさう云つて、チヨイとS子の方を見て、頭を掻きながら附け加へた。

「――誠に濟まないが、僕は君と二人ツきりで話がしたいんだがね、」

「なぜだね、S子が居ては惡いのかね、」

「少し、――少し都合が惡いんだ。」

「でもS子は僕と同じものだよ、極まりの惡いことはないぢやないか。」

「いや、極まりが惡いばかりぢやない、外にも理由があるんだ。僕は君に救つて貰ひたいんだよ、君等にではないんだよ。君の手紙にも僕等とは書いてなかつただらう、だからその積りで僕は來たんだがね。」

「S子、お前あつちへ行つておいで。」

Aの顔は青くなつた、Bの顔もそれと同時に青くなつたが、その青みの中に奇妙な薄笑ひがあつた。

「A君、――」

と、S子がドーアの外へ去るのを待つてBは始めた。

「身の振り方の相談をする前に、一應君に聞いて置きたいことがあるんだ。僕は先づ君の好意はよく分つたと云つたけれど、實はまだ分らない所がある。手紙で見ると君は僕を救ふと共に、君自身を救ひたいと云ふ事だつたが、若しそれが兩立しなかつたらどうするんだね？」

「兩立しないとは僕は思はないもんだから、――」

「いや兩立しない。若し兩立するなら、そんな救はれ方は御免を蒙むる。僕は誰の爲めにでもなく、たゞ僕の爲めにしかならない方法で救はれたい。たとへそれでどんなに僕が救はれるにしろ、それと同時に君も救はれるやうだつたら、寧ろ僕は救はれない方がいゝ。」

「なぜだらう？、その譯を聞かしてくれ給へな。僕はそんなに君から恨まれて居るのだらうか。

「そりや、或は恨んで居るかも知れない。だが其の恨みは意地悪から出た下らない恨みぢやないんだよ。君の御蔭で牢へ入れられたから、それで恨むんぢやないんだよ。僕は入獄中、君の推察通りいろいろの事を考へさせられた。あれは僕に取つて又とない好い機會だつた。しかし其の結果はどうかと云ふと、要するに僕が以前から信じて居た事を確かめたに過ぎない。僕は實際、君が度び度び寄越してくれた手紙を、一つ一つどんなに丁寧に讀んだか知れなかつた。僕も非常に苦しかつたから救はれるものならほんたうに救つて貰ひたかつた。だがあの手紙を讀むと、君の心と僕の心とがあんまりひどく駈け離れて居るので、いよいよ淋しくなるばかりだつた。君は未だにまるツきり僕と云ふものを理解してゐない、それだのに僕を救ふ救ふと云つて居る、愛してくれとも云はないのに愛する愛すると云つて居る、そればかりならいゝが、愛する事で自分を偉くしたい、偉くさせてくれと云つて居る。僕は皮肉でも何でもなく、そんな勝手な、不人情なことがあるものかと云ひたくなる。君に偉くなられたら僕は猶更獨りぼつちになるんだよ、君はお母様の

遺志を成し遂げたら嬉しいだらうが、僕は世の中に嬉しい事なんぞ一つもないんだよ。斯う云ふと又ヒガミだと云はれさうだけれど、僕の位置として見たらヒガムのは當り前だらうさ。それだから僕は云ふんだ、君は僕を救つてくれたり愛してくれたりしないでもいゝから、せめて自分を救はうだの偉くしようだのとしないでくれ給へ、僕を氣の毒だと思ふなら、僕と一緒に救はれない人間になつてくれ給へ。それが僕を救ふ道なんだ。」

「僕の手紙が、君にさう云ふ氣持ちを起させたのなら、僕は改めて君に詫まるよ。救ふと云ふと語弊があるけれど、それはあの手紙にも書いた通り、君の苦しみを僕が分ちたい、さうしてそれで幾らかでも君を慰めたいと云ふ意味だつたんだ。だから苦しい事があるなら何なりと打ち明けてくれ給へな。どんな事でも、君の苦しみを減ずる方法があつたらそれを敎へてくれ給へな。——ねえ君、それも君はいやだと云ふのだらうか?」

「そりや僕にしたつて、救つて貰ひたいと思へばこそやつて來たんだから、ほんとに君が僕の苦しみを背負つてくれるなら、いろいろ賴みたい事があるんだ。まあ差しあたつて、今も云ふ通り僕は身の振り方に困つて居る、君の外には、誰も世間で相手にしてくれない。昔のやうに創作の筆でも執れればいゝんだが、もうそんな自信も能力もないんだし、僕は此の先、どうして喰つて行つたらいゝか分らないんだ。」

「喰ふ心配なんかしないでもいゝよ、少しでも君に肩身の狹いやうな思ひをさせちやならないから、そこはどうにでも君の氣の濟むやうにして、出來るだけの事はしようぢやないか。母に仕へる氣で、君に仕へようぢやないか。僕は君に云はれないでも、疾うから其の積りで居たんだから。」

「有り難う、さう云つてくれれば何より安心だ、——だが云ふ迄もない事だけれど、物質的にはそれでどうやら救はれるやうなものゝ、精神的には何の慰藉にもならないんだよ。糊口に窮する心配がなくなつたつて、苦しい事や淋しい事

は依然として變らないんだよ。僕はさう云ふ事まで、君にどうかしてくれろと云つちや惡いだらうか。」

「それをどうかするのが僕の責任だ。だから君がさう云つてくれるのは何より嬉しい。僕は君を物質的に補助しただけで、それで義務が濟んだなぞとは思つちや居ないんだ。——何か君の考へた事で、君を精神的に慰藉するものがあるなら云つてくれ給へ。」

「僕はね、A君、——金ばかりでなく名聲が欲しいんだ。僕は君たち善人と同じやうな名聲が欲しいんだ。斯う云つただけぢや分らないかも知れないが、昔の僕には、——藝術家として立つて行けた時代には、僕は何かしら一種の誇を持つて居た。己は惡人だけれど唯の惡人ぢやない、己は善人からも惡人からも畏敬されて居ると云ふ自負心があつた。そんなものは極く下らない虚榮心に過ぎないのだが、それでも僕の孤獨は幾らか慰められて居たんだ。僕はせめてもう一度あの名譽を得たい。あの男は矢つ張り偉い藝術家だつたと云はれて見たい。だから誠に勝手なお願ひだけれど、君の力で僕をさうして貰ひたいんだよ、少くとも藝術家として通れるだけの人間にして貰ひたいんだよ。」

「そりや及ばずながらも力を貸さう。——だが、藝術家としての名譽を得るには、何より先に藝術家になつてくれなけりや駄目だ。僕も勿論出來るだけの事はするが、僕の力は間接にしか働かないんだから、君が第一にその氣になつて、君の中にあるいゝものを育てるやうにしてくれ給へ。僕も外側から、そのいゝものが芽を吹くやうに骨を折つて見ようぢやないか。さうなつてくれればほんたうに有り難いんだ。僕はそれを望んで居たんだよ。」

「まあ待つてくれ給へ、さう云はれるとちよいと困るんだ。僕は藝術家にならないで、藝術家の名聲だけが欲しいんだよ。そりや、なれるものならなつてもいゝんだが、もう度び度び口を酸ッぱくして云ふ通り、僕の中にはそんな『いゝもの』がある譯はないんだからね、いくら君に骨を折つて貰つたつて、僕の此の頭の中から藝術の才能や天分が芽を吹

く筈はないんだからね。──僕が頼むのはそんな無理な事ぢやないんだよ、もつとやさしい事なんだよ。僕はたゞ、君の力で名聲だけを授けてくれれば滿足するのさ。」

「名譽だけを？──ぢや、どうしたらいゝんだらう？」

「つまり、君の持つて居る名譽を、──君が文壇で占めて居る地位を、そつくり僕に讓つてくれる事だ。さうして君が僕の地位に落ちてくれる事だ。此れから以後の君の創作を僕の名で發表して、その名譽と報酬とを僕にくれる、それでいゝんだ。君が僕をほんたうに愛して居るなら。そのくらゐな親切は見せてくれ給へ。」

Aが默つて、昂奮を押し鎭めつゝ考へて居る間に、Bは續けた。──

「君はよく、藝術家は永遠に生きようとしなければいけない、一時の名聲に囚はれてはならないと云つて居たね。僕には永遠なんてものは分らないんだが、君が眞に永遠の生命を信ずるなら、一時の名聲なんか快く讓つてくれてもいゝ筈ぢやないか。さうでなければ君はにせ物だ、今迄僕や世間を欺いて居たのだ。僕の要求は過大でも何でもない。僕は君から、君の最も大切なものを取らうとはしないで、それに附隨するほんの上ッ面の、有つても無くてもいゝものだけをくれと云ふんだ。考へて見ると、何も取ることにはなりやしないんだ。」

「そりや成る程、藝術を取られることにはならない。けれども僕は、藝術と共に最も大切な德義を捨てなければならない。僕の物が君の名前で發表されれば、君とグルになつて、世間を欺くことになるんだから、……」

「しかしだね、假りに世間を欺くとしても、それがどれだけ實際に害を及ぼすだらう。君の藝術が社會を救ふ力があるなら、誰の名前でも同じことだ。君の眞の精神には少しも外れて居ないのだ。いやそれどころか、僕を救ふ爲めに、地上の一切のものを捨てゝかゝれば、君は一層藝術に忠實になる譯だ。若し世の中に神があるとすれば、神は恐らく君の

不德義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」

「いや、僕が惡かつたよ、不德義と云つたのは間違ひだつた。」

と、Aはギクリとしたやうに云つた。

「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」

「それより外に僕を慰める道はない、——僕はだゞを捏ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」

「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」

「理由かい？ 理由は極く簡單だ、——僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小說が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は翻然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。——その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに内證で原稿を渡してくれなけりやいけない、——さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を横行濶歩したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を傷くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは其の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな悪人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を頼んでも伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢやさうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな悪人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を頼むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。――どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね？母の心になつて僕を救つてくれるかね？僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね？」

「B君、僕は君にお禮を云ふ、――君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を教へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする悪魔の挑戦とを、一度に感じたのである。

「――僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く讓つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

不德義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」

「いや、僕が惡かつたよ、不德義と云つたのは間違ひだつた。」

と、Aはギクリとしたやうに云つた。

「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」

「それより外に僕を慰める道はない、――僕はだゞを捏ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」

「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」

「理由かい？ 理由は極く簡單だ、――僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小說が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は飜然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。――その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに內證で原稿を渡してくれなけりやいけない、――さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を横行濶步したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を偉くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは此の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな惡人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を頼んでも知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな惡人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を頼むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。——どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね？母の心になつて僕を救つてくれるかね？僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね？」

伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢやさうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承

「B君、僕は君にお禮を云ふ、——君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を敎へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする惡魔の挑戰とを、一度に感じたのである。

「——僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く讓つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

不德義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」
「いや、僕が惡かつたよ、不德義と云つたのは間違ひだつた。」
と、Aはギクリとしたやうに云つた。
「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」
「それより外に僕を慰める道はない、——僕はだゞを捏ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」
「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」
「理由かい？ 理由は極く簡單だ、——僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小說が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は飜然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。——その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに內證で原稿を渡してくれなけりやいけない、——さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を橫行濶步したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を偉くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは其の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな惡人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を賴んでも伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢや さうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな惡人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を賴むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。——どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね? 母の心になつて僕を救つてくれるかね? 僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね?」

「B君、僕は君にお禮を云ふ、——君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を敎へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする惡魔の挑戰とを、一度に感じたのである。

「——僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く讓つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

不德義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」

「いや、僕が惡かつたよ、不德義と云つたのは間違ひだつた。」

と、Aはギクリとしたやうに云つた。

「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」

「それより外に僕を慰める道はない、――僕はだゞを揑ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」

「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」

「理由かい？ 理由は極く簡單だ、――僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小說が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は飜然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。――その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに内證で原稿を渡してくれなけりやいけない、――さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を横行濶步したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を偉くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは此の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな悪人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を頼んでも伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢやさうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな悪人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を頼むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。——どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね？母の心になつて僕を救つてくれるかね？僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね？」

「B君、僕は君にお禮を云ふ、——君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を敎へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする悪魔の挑戰とを、一度に感じたのである。

「——僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く讓つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

不徳義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」

「いや、僕が惡かつたよ、不徳義と云つたのは間違ひだつた。」

と、Aはギクリとしたやうに云つた。

「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」

「それより外に僕を慰める道はない、――僕はだだを捏ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」

「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」

「理由かい？　理由は極く簡單だ、――僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小説が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は飜然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。――その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに内證で原稿を渡してくれなけりやいけない、――さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を横行闊歩したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を偉くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは此の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな惡人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を賴んでも伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢやさうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな惡人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を賴むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。――どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね？母の心になつて僕を救つてくれるかね？僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね？」

「B君、僕は君にお禮を云ふ、――君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を敎へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする惡魔の挑戰とを、一度に感じたのである。

「――僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く讓つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

不德義を責めないで、其の壯烈な精神を褒めてくれるだらう。」
「いや、僕が惡かつたよ、不德義と云つたのは間違ひだつた。」
と、Aはギクリとしたやうに云つた。
「僕がそれで以て、君を救ふ事が出來ればそのくらゐな事はしてもいゝ。するのが當りまへだ。けれども君は、どうしてそれで救はれるんだね？君は世間を欺くばかりでなく、君自身を欺いて、心の苦しみが少しでも慰められると思ふのかね？」
「それより外に僕を慰める道はない、――僕はだだを捏ねて君を困らせる氣ぢやないんだ、ほんたうにさう信じて居るんだ。」
「ぢや、その理由を聞かしてくれ給へな。」
「理由かい？　理由は極く簡單だ、――僕の孤獨を君にも嘗めさせてやりたいからだ。君の小說が僕の名で發表される僕は文壇に復活する、而も今度は飜然と改悟して新たなる人道主義者となる。君の名前はだんだんと忘れられる、Aの才能は涸渇した、もう駄目になつたと云はれる。再びAの時代が去つてBの時代が來る。――その秘密を知つて居る者は天下に君と僕だけだ。誰も君に同情しない、斯く云ふ僕も同情しない、斷つて置くが君はその事を妻君にも話しちやならない、S子さんに内證で原稿を渡してくれなけりやいけない、――さうしたら君は孤獨を感じるだらう。僕が人道主義の藝術家になり濟まして、『Aは氣の毒だよ』とか何とか云ひながら、づうづうしく大手を振つて文壇を橫行濶步したら、嘸かし君は不當に虐げられて居る事を感じるだらう。若しさうなつたら其の時の其の孤獨な感じが、僕等惡人の常に味はつて居る心持ちだと思つてくれ給へ。僕はそれを君に味はつて貰ひたいんだ。さうしたら僕の解せられざ

る悲しみが、少しは慰められるだらうと思ふんだ。君を偉くしないで、君を救はないで、僕だけを救つてくれろと云つたのは其の事だよ。さう云ふ風にしてくれなけりや、僕のやうな悪人は有り難いと思はないんだよ。君は僕を愛すると云ふが、それでも猶且愛する事が出來るかどうか、君自身で試して見給へ。假りに僕が君の愛で救はれるものだつたらそこまで行かなけりや救はれツこないぢやないか。君はお母さんの遺志を成し遂げたいと云つたけね、若しお母さんが君だつたら、きつと此の願ひを快く聞いて下すつただらう。僕がどんなにウソをいつても、我が儘勝手な事を頼んでも伯母さんは一度でも怒つた事なんぞなかつたからね、さうかい、それぢやさうするがいゝつて、いつも氣持ちよく承知してくれたんだからね。況んや伯母さんは、もう今では佛になつて居るんだ。佛と云ふものは僕等のやうな悪人の氣持ちを、きつと知つて居てくれるだらう。僕がこんな事を頼むのも、成る程尤もな譯があるんだと、さう思つて下さるだらう。――どうだね、君、僕が長い間牢屋の中で考へ續けたのは此の事なんだが、君は承知してくれるかね？母の心になつて僕を救つてくれるかね？僕に地上の有らゆる榮光を與へてくれて、君は君のお母さんの住む永遠の世界に生きる氣にはなれないかね？」

「B君、僕は君にお禮を云ふ、――君は僕に、僕の取るべきほんたうの道を敎へてくれた。

Aがさう云つたその眼つきには、無限の感謝と微かな反抗の色が動いてた。彼は自分に難行の機會を與へる母の慈悲心と、自分を地獄へ連れ込まうとする悪魔の挑戦とを、一度に感じたのである。

「――僕は少しでも、自分に都合のいゝやうな論理を考へてはならなかつた。君には地上の物より外に慰められるものがない、しかし僕には、それ以外にも慰められるものがあるのだ。僕は君の欲するものを快く譲つて上げよう。さうして君の苦しみを、君の云ふ通りの意味で背負はせて貰はう。」

「あゝ有り難う、さうしてくれれば僕のやうな惡人でも、いくらか感謝するだらうよ。——ところでもう一度念を押すが、君は大丈夫Sさんに秘密を守つてくれるだらうね？ 今後原稿を僕の手に渡すまで、標題も內容も、絕對にS子さんには讀ませないやうにしてくれるね？」

「よろしい、それも分つたよ、」

Aは敢然と、物を突き破るやうな聲を出した。

「ぢや、僕は君の持つて居る『善人の良心』を信用して置かう。——くどいやうだけれど、默つて居ても自然に分つたんだなんて、そんな言ひ譯は聞きたくないからね。それでも君は僕の孤獨に比べれば、まだ仕合はせだよ。僕はほんたうの獨りぼつちだが、君の秘密は君の妻君こそ知らないけれども、僕だけは知つて居るんだ。」

「いや、君の外にも、もう一人知つて居る。——」

「僕の外に？——あゝさうか、天に居る君のお母さんか。——しかし斷つて置くが、君はそのお母さんのお蔭で 僕がいつかは善人になつて、奪ひ取つた名譽を返すと思つたら飛んだ間違ひになるかも知れんよ。」

「そりやいくらでも、僕を苦しめるだけ苦しめてくれ給へ。」

「ふん、まあいゝ。さう云ひながら、君はその實僕の改悟を豫期して居るんだらう。——それからもう一つ斷つて置くがね、君の目的は名譽にあるんぢやないんだから、さうなつたからつて急に書けなくなつたなんて、そんな事を云ふんぢやないんだらうね？ 君の人道主義はそんな迫害に遭へば遭ふほど、緊張しなけりやならない筈だからね。」

「無論の事だ、僕はさうなればますます書く。僕の仕事には一層意義が生じたんだ。」

「さうだらうとも、さうなつて來なけりや噓だからね、——それだけ聞けば僕は安心だよ、もう何も云ふ事はないんだ。」

Bは、凡べてが自分の思ふ壺へ嵌まつた事の愉快を感じた。戰ひはまだ此れから續く、此れからが眞劍勝負だ、……が、彼は殆んど勝つた氣がした。

「S子、僕はお前にウソをつくことは出來ない、Bから或る事を頼まれたのは事實だ。しかしBは、それをお前に話してくれるな、誰にも内證で、僕一人でやれと云ふのだ。僕がBの苦しみを苦しむ爲めには、Bと同樣に孤獨になつて欲しいと云ふのだ。」

「まあ、Bさんもあんまりですわね、」

「いゝや、お前はBを恨んではならない。Bとして見れば僕にお前と云ふものがあるだけでも、どんなに自分をヒガンで考へるか知れやしない。僕がお前の助けを借りようと思つたのも、やつぱり僕の身勝手だつたのだ。お前が僕を愛してくれるなら、何卒その事に就いて何も聞かないでおくれ。」

「でもいつになつたら、私はそれを知る事が出來ますの？」

「いつかはきつと知る事が出來る。僕の誠意が通じて、Bが眞人間になる時が來れば、――」

「さう云ふ時がいつ來るでせう？ 若し來なかつたら、私はいつ迄も知る事が出來ないんでせうか？」

「來ないことはない、きつと來るに違ひないよ、五年かゝるか十年かゝるか分らないが、いつか一度は僕の愛がBを救ふ時が來るのだ。お前もそれを信じて居るがいゝ、それを樂しみに待つて居るがいゝ。」

「私の心は今まで一度もあなたの側を離れた事はなかつたのに、五年も十年もそんな風にして生きて行くのはあんまり

です。あたしにもBさんを救はせて下さい、あなたの心配を分けて下さい、あたしだつて、あなたのお母様の子なんですもの。」

「そりや分つて居る、だがお前がBを救ふつもりなら、僕の苦勞を分けてくれるつもりなら、お前もその孤獨に堪へなきやいけないのだ。僕の孤獨を、お前も味はつてくれなけりやいけないのだ。お前も僕も悲しいには違ひないが、私たちの苦しみ方が足りないと云つたのは此處の事だよ。それを嫌だと云へばそれこそお前はお母様の子ぢやないのだよ。お前は何も知らないだつて、僕を信じる事が出來るぢやないか。お母様の愛に依つて、僕の心とお前の心とは矢張りシツカリ結び着いて居られるぢやないか。ねえ、さうだらう、さう考へちやくれないかね。」

「そりやさうだと思ひますけれど、……ぢや、Bさんが眞人間になる時が來たら、きつと話して下さいますのね、きつとですわね、それを約束して下さい。」

「あゝ、きつと約束するよ、きつとBを救て見せるよ、Bと三人で笑つて其の話が出來る時節が、今に來るのだと思つておいで。」

「その時が來たら私どんなにうれしいかしら。お母樣がさうなるやうにきつと導いて下さいますわね。」

「さうだとも、さう思つて何も云はずに待つて居ておくれ。」

「えゝ分りました、待つて居ますわ何年でもね、……」

その會話があつたのは、Bが訪ねた日の晩であつた。A夫婦はさう云つて相抱いて泣いた。

5

AとBとの關係は斯うして又一二年つゞいた。

Aの作物はBの名で續々發表された。果してAの藝術は迫害の爲めに傾はされないばかりか、一層その光を增した。地上の一切の榮光を捨てて、眞に永遠に生きんとする者の苦しみと樂しみとを、Aはその時始めて味はつたのである。さうして、その時、文壇では既にAの名を忘れかけて居たのであるが。

Bは一方ではAを陥れ、一方では社會を欺くことに限りない興味を感じた。もう誰の眼にも、半生の罪を悔い改めた立派な人道主義者として映つた。彼はさう見せる爲めに、Aの作品で足りない所を自作の獄中記や懺悔録や、人に應接する時の態度や話し振りで、狡猾に拔け目なく補つて行つた。「僕はAを祖述して居る。僕と云ふ人間はAのお蔭で救はれたのだ、だから僕の書く物にはAの影響が多分にある。」そんなことを云つて、出來るだけ多くの人を煙に卷き、出來るだけ自分自身を欺瞞する。――さう云ふ風にしてよく生きて居られるものだと、善人だつたらさう思ふところであるが、Bにはそれが自己に忠實な所以であつた。彼の惡の魂は其の仕事を糧として生き それに培はれて枝を伸ばし根を擴げて行つた。Bは嘗て彼自身の作品で名聲を博した時よりも今の仕 の方に餘計生きがひのある自己を感じた。「此の生活が己の藝術だ、此れこそ眞に惡の藝術だ。」と彼は思つた。

そこで、Aの藝術は直ちにBの藝術となつた。Aの原稿がBの手に渡る時、Bは確實にそれを自分のものとした。善の魂が生み出したそれらの作品に、同時に惡の魂が籠められた。Aの孤獨が深められると共に、Bの孤獨も深められた。二人が顔を合はせると、お互ひにその淋しさを笑つて語り合つた。二人の胸にはそれぞれの誇と得意とがあつた。善と惡とは不思議な形で、圖らずも手を握り合つたのである。

或る晩、眞夜中の二時頃の事である。Aが書齋で筆を執つて居ると、扉の外でかすかにS子の泣く聲が聞えた。

「S子、お前はまだ起きて居たんだね。」

Aは立つて行つて、扉を細目にあけて見た。彼女はその暗い廊下に泣き伏して居たのである。

「あなた、あなたは毎晩、さうやつて何をして居らつしやるんです、」

「何をして居るか、――それは云はれない、云ふ譯に行かない、お前は僕の仕事に就いて、何も聞かない約束だつたぢやないか。」

「でも、何か書き物をして居らつしやるんなら、若しさうだつたら、どうぞそれだけ仰つしやつて下さい。それだけでも私は嬉しいんですから。」

「なぜだね、どうしてそんな事を云ふんだね！」

「だつて、もう長いことあなたは創作をなさらないんですもの、世間ではあなたが駄目になつたと云ふんですもの、それが私には悲しいんです。――ねえ、あなたはきつと、何か書いて居らつしやるんでせう！、何卒ほんたうの事を云つて下さい。私を安心さして下さい。

お前がさう云つてくれるのは、僕もどんなに嬉しいか知れない、しかし今は、何もお前に云へないのだよ。僕がどう云ふ仕事をしてるか、書いて居るか居ないかと云ふやうなことも、一切云ふ譯に行かないのだよ。けれども僕は、決して駄目にはなつちや居ない。お前はただそれを信じて居ておくれ。」

「そりや信じて居ますとも。信じて居ればこそ本當の事が聞きたいんです、――Bさんはもう救はれたんでせうか？。眞人間になつたんでせうか？、Bさんの發表なさる物は、あれはBさんの物でせうか？あなたはよもや、Bさんと一緒になつて、私を始め世の中を欺して居らつしやるんぢやないでせうね。あなたはいつか、私に嘘はつかないと仰つしやつたぢやありませんか。」

「Bの發表するものは、あれはたしかにBのものだ。まだ眞人間にはなり切らないとしても、Bは少しづつ救はれて居るのだ。お母樣も草葉の蔭できつと喜んで居らつしやる。――」

Aはキツパリとさう云つて、祈るやうな眼つきをした。

「それぢやあなたはいつあなたのものを發表なさるの？」

「まだ當分――僕のものを發表する時は來ないかも知れない、だが後生だからもう何も云はないでくれ、僕はお前との約束を忘れはしない。その時が來れば何も彼も分ると思つて、それを樂しみに待つて居ておくれ。お前にウソをつくまいとすると、僕はつひBに對してウソつきにならなきやならない。お前の愛が僕をそんな風にしてはならないぢやないか。もう斯うやつて居るだけでも、僕の孤獨は慰められて居る。僕はBに申し譯がない。――さあ、分つたら彼方へ行つて寢ておくれ、何も云はずに、ぢつと僕の事を思ひ詰めて寢ておくれ、それが一番いゝ事なんだから。――」

さう云つてAは、靜かに扉をしめた。

S子がうすうす感づいて居るらしい事、――それを考へると、彼はBに濟まない氣がした。「自然に分つたんだなんて、そんな言ひ譯は聞きたくない、」と云つたBの言葉を彼は時々想ひ出して苦しくなる事があつた。「S子には絕對に知らせない」――その約束を完全に履行するには、單にその事を知らせないだけでなく、いろいろな場合にいろいろな事を隱し立てしなければならなかつた。夜中にこつそりと原稿を書いたり、それを又こつそりと、彼女の眼を盜んでBに渡したり、それが發表された時、Bの作品として彼女と語り合はねばならなかつたり、一つの秘密を守る爲めに幾つもの罪を妻に重ねる。――そんな風にして行くうちに、いつかは全く名ばかりの夫婦になりはしないか。「きつと分る時か來る。」さう云つて慰めては居るものゝ、若し運惡く其の時が來なかつたら、二人は斯うして一生を送ら

なければならないだらうか。その場合を想像すると、Aは慄然としないでは居られなかつた。彼はS子の顔を見るのさへ辛いことがあつた。

BはAとS子との間を、常に注意して監視することを怠らなかつた。善人が惡人に欺された時はまだ幾らかにあきらめが着く、なぜなら善人には多くの味方があるから。――だが、それと反對に、惡人が善人に欺された時、その口惜しさは幾倍であらう。彼は世の中にたつた獨りで、自分が最も得意とし、而も唯一の頼みとする武器であべこべ敵に刺されるのである。その無念さを想つて見るがいゝ。それ故にBのAを疑ふ度は執拗であつた。「若しやS子に話したのぢやなからうか、夫婦がグルになつて己を欺すのぢやないか。」さう思ふだけでも、彼は食ふ物が咽へ通らなかつた。

「S子さん、此の頃僕の書く物を讀んでくれますか。」

と、Bは或る時Aの留守に來て、彼女に云つた。

「えゝ、……時々、……」

「時々ぢや心細いな、始終氣を附けて讀んで下さいよ。A君は何か批評でもしますか知らん?、」

「いゝえ、めつたに批評なんかしやしないわ、――でもね、あなたは今に偉くなるツて、さう云つて居ますの。」

「今に偉くなる?、――へえ、さう云つてゝくれますかね、偉くなるとすればA君のお蔭ですよ。」

「そんな事があるもんですか、やつぱりあなた自身の力だわ。」

「しかし文壇では、僕の書く物に大分A君の感化があるツて云つてますよ、あなたさう思はないでせうか。」

「さあ、どうですかしら、――感化があつたつて、Aが偉いんぢやなくあなたが偉いんだわ、あなたがそれを自分のものにしたんですもの。」

Bははつとして S子の澄んだ瞳の奥を深く深く、探るやうに見据ゑた。が、彼女も亦、その言葉を云ふと共に謎のやうな眼を向けて、真つ直ぐに、突き徹すやうにBを見た。その眼は「どうかして秘密を知りたい」と願ふ切ない思ひに燃えて居るやうでもあつた。

「ところで一體、A君はどうしたんだらうな、もうあれツきり書かない積りなのかしら？」

「いゝえ、今にきつと書くツて云つてるんですけれど、あゝやつて居るうちに書けなくなりはしないでせうか。あなたもさう云つて、是非書くやうに力をつけてやつて下さい、ねえ、お願ひですから、――」

Bには、その「お願ひですから」が二様の意味に猜せられた。彼はS子が、自分の前に手を合はせて居るやうな思へた。

「なあに大丈夫です、きつと書けるやうになるでせうよ。――」

さう云つて置いて、彼は心の中に無上の満足を覺えながら附け加へた。

「しかしね、S子さん、たとへ書かないでもA君は決して忘れられる人ぢやないんです、なぜかと云へば、A君の中から僕と云ふものが生れたんぢやありませんか、A君の藝術は僕の藝術の中に生きて居るんですからね。」

「そりやAにしたつて、あなたが居る爲めにどんなに心强いか知れないと思ふわ。」

S子の謎のやうな眼の球を掠めて、その時はらりと光つたものがあつた。

6

それから又二三年過ぎた。

AとBとは最早や青年ではなくなつて居た。あと三四年で、四十の坂が見えるやうになつた。

或る秋の夕暮のことである。Aの書齋で、Bはふと次のやうなことを云つた。——

「A君、君と僕とは隨分長い間戰つて來たが、勝負はまだなかなかつきさうもないね、恐らく一生かゝるかも知れないが、君も此の頃は餘程淋しさうに見えるよ。」

「あゝ、ほんとに淋しい、——だが君だつて、昔程の元氣はないやうだぜ。」

「そりや僕だつて淋しいよ、斯うして年を取る度びにだんだん淋しさが增して來る。しかしそんな事は前から覺悟してたんだけれど、近頃少し氣になる事があるもんだから、——」

さう云つてBは、ゴホン、ゴホン、と輕い咳をした。

「何だね、氣になる事と云ふのは？」

「僕の此の咳だ、此の咳がどうも氣になつてならない、僕は肺病になつて居るんだよ、事に依ると近いうちに死ぬんぢやないかな。」

「それぢや醫者に見て貰つたらいゝぢやないか。放つて置かないで。」

「醫者には疾うから見て貰つて居るんだ。實は君に隱して居たけれど、此の間中海岸へ行つてたのも、轉地療養の爲めだつたのさ、正直のところ、僕は出來るだけ長生きがしたいからね、少くとも君より先へ死ぬ譯には行かないからね。」

Aは默つて下を向いた。

「——ねえ、さうだらう、君が默つて居るところを見ると、君にもその心持ちが分るのだらう？、僕が生きて居る間は僕の名譽は確實に僕が握つて居る。けれども先へ死んじまつたらおしまひだ。僕の名前で出て居た物が悉く君の名前に

直される、僕の名譽は殘らず剝ぎ取られて、それがみんな君のものになる。君は僕の死に依つて凡べてを取り返すばかりでなく、更に一層名聲を擧げて、S子さんにも愛せらるし世間からも尊敬される。さうなつたら、僕のした事は根こそぎ壞されてしまふんだ。だから僕は、どうしても君の後まで生きなきやならない。考へて見ると、此の勝負は孰方が先へ死ぬかで極まるんだ。」

「あゝさうか、君もその事を考へて居たのか、」

Aはさう云つて、ほつと苦しさうな溜息を洩らした。

「正直を云ふと、僕もいつかは其の問題に行きあたると思つて居たのだ。二人がこゝまで爭ひを續けて來れば、事に依ると、孰方かが死ぬまでは續くかも知れない。――しかし僕は君に聞くが、君は死んだ後までも名譽を持つて居たいのだらう?、惡人は死後の事なんぞ考へない、生きて居る間さへよければいゝんだつて、いつもさう云つてたぢやないか。」

「さうだ、確かにさう云つた覺えはあるけれど、今になつては死後の事も考へずには居られないよ。君が君の善を永遠に生かしたいやうに、僕は僕の惡を永遠に生かしたい。永遠に世の中を欺きたい。僕の名に依つて發表された物を、僕の全集の中に收めて永く後世に遺したい。そこまで行かなけりや矢つぱり惡も徹底しないんだ。僕が先へ死んでしまへば、君はその偶然の出來事に依つて得た勝利を、善人の受くべき正當の勝利だと思ふだらう。『Bの靈も今は恐らくは救はれただらう』などゝ、良心に都合のいゝ口實を作つて、一旦僕に讓り渡した名譽を、勝手に取り戻してしまふだらう、さうして世間の奴等もみんなそれを正しい事だと思ふだらう。それが僕には口惜しいんだ。それを考へると、とても先へは死なれないんだ。」

「だから、――君にさう思はれるから、僕は君より先に死にたい。」

とAは吐き出すやうに云つた。

「君が今の氣持ちのまゝで死んでしまつたとして、その後にS子と二人で生き殘つて居る事を想ふと、僕はほんとに恐ろしいよ。君と云ふものがあればこそ、君の惡に刺戟されて僕の善は高められ、僕の藝術は生れて居たんだ。君が生きて居る間は、僕はどんな孤獨にでも迫害にでも堪へられたけれど、君が死んでしまつたら僕はどうなる事だらう。僕はもう君を救ふ望みもない、君に依つて母の遺志を成し遂げる事も、愛の勝利を確める事も出來ないのだ。さうなつたら僕は恐らく書く物も書けなくなるし、僕の藝術も、僕と云ふ人間も次第に墮落してしまふだらう。それだけならいゝけれど、さうしてその後の孤獨が恐ろしい。僕が此の世に持つて居てもいゝ名譽は、たゞ君一人が知つて居てくれたのに君はその名譽を奪ひ去つて永久に戻つて來ない。もう僕はほんたうの獨りぼつちだ。いや、獨りぼつちならまだいゝんだが、S子と云ふもう一つの獨りぼつちとさし向ひで、淋しく味氣なく生きて行かなけりやならないのだ。君がどんな惡人でも、草葉の蔭から其の樣子を見て居るとしたら、きつと僕を憐れんでくれるだらう。僕の愛がその時始めて、君の靈に感應するだらう。あんなにあの男を苦しめるなら、一切の名譽を返してやればよかつたと、君の靈はさう思ふだらう。だがさうなつてからでは後の祭りだ。僕がどんなに君の靈に助けを求めても、君を實際に甦らせて君の口から許しを得ない限り、僕は僕の苦しみをS子にさへも打ち明ける事が出來ないのだ。若し打明ければ、──打ち明けてS子の愛を得ようとすれば、僕は生きながら君に負けた事になる。決して君の云ふやうに、僕の勝つた事にはならない。僕の善は君の惡に征服された事になる。僕は冥途へ行つてから君に笑はれる、『君は僕にくれたものを、僕に無斷で取り戻したね。君はそれでも僕を愛したと云へるかね。』と、さう云はれても僕は返す言葉がない。僕はさうなるのは嫌だ、君の後へ生き殘つて、萬一君に負けるのは嫌だ、だから君より先へ死にたいのだ。」

「それぢや僕より先へ死んだら、君は勝つことになるのだらうか。」

「勝つと極まつては居ないけれど、恐らくは勝てるだらうと思ふ。僕の死を見たら、君の心が動かない筈はなからうと思ふ。君が後へ生き殘つたら、いつかは必ず、君が自ら進んで君の名のものを僕の名に返し、僕に代つてS子を喜ばしてくれる時が來るに違ひない。僕はさう思つて居るんだよ。」

「しかしだね、僕が先に死ぬとしても、――しても、ではない、きつとさうなるに極まつて居るから云ふんだが、――君の勝つ場合が全くないとは云はれないね、少くともこゝにたつた一つあるね、君も多分それに氣が付いて居るだらうが、……」

Bはちよつと言葉を區切つて、忌ま忌ましさうな、執拗な凝視をAの顔にぢつと注いだ。

「……君はきつと氣が付いて居る、さうに違ひない、君は僕が死ぬ時の或る狀態を豫想して、そこに一縷の望みをかけて居るに違ひない。君は先、僕が今の氣持ちのままで死んだらと云つたつけが、僕の恐れて居るのは實にそれなんだ。僕は死よりも死ぬ時の氣持ちが心配なんだ。多くの惡人は大概惡人のまゝでは死なない、きつと死ぬ時に善人になる。若し僕が今の氣持ちのまゝで死ねなかつたら、――死に際に罪を悔悟して、凡べての物を君に返してしまつたら、それこそ僕はおしまひだ。僕が君より　で死にたいと云つたのは、それもあるんだよ。」

「成る程、……そりや僕も氣が付いてゐた。生きて居る間に勝負はつかないでも、僕の死ぬ時か、でなければ君の死ぬ時に、きつと勝負がつくだらう、君はその時にきつと改悟するだらうと、僕もさう思つて居ないぢやない。そこに一縷の望みをかけて居る事はたしかだ。けれどもそれは、君が僕より後で死んだつて同じぢやないか。後で死んでも、君がその時改悟すれば、やつぱり君の負けぢやないか。」

「いや、そんなことはない、後で死ねばどんなに悔悟したところで、僕は誰にも自狀せずに死んで行かれる。勿論その時はもうS子さんも死んで居るとする、――さうだ、君ばかりぢやない、S子さんよりも長生きしなけりやならないのだ、――僕はどんなに自分の罪を改めたにしても、君たち以外の人々にまで秘密を打ち明ける必要はない。僕の名譽は何も君から強奪したと云ふ譯ぢやなし、云はば君が僕に對する愛情の印として、好意を以て惠んでくれたものなのだ。あの世へ行つて居る君は、そんな世間的なものなぞに未練はなくなつて居る筈なんだ。さうだとしたら、僕は心から君の愛の賜物を有り難く受け取つて、それを自分の物として此の世に遺して、冥途へ行つてから改めて君にお禮を云へばいゝんだ。若しその時に、冥途だのあの世だのと云ふものがなかつたら、――さうなつたら、僕は勝ちだ。死後の生命がなかつたら、君にはお生憎樣だ。僕の惡は永劫に此の世に打ち立てられ、それで勝負がきまつてしまふ。君も僕も此の宇宙に居なくなつて、たゞ僕の惡業のみが長く人間の世に殘る。――それでいゝんだ、僕はさうなる事を望んで居るんだ。だから後で死ぬのと先に死ぬのとは、僕には重大な問題なのだ。」

「さうすると、若し君が先へ死ぬ場合には、僕の繋いで居る一縷の望みは、多分實現される事になるのかね?君は其の時悔悟する事を、已むを得ない事實として今からあきらめて居るのかね?、斯う云つたからつて、それを心待ちにして居る譯ぢやないんだが、僕も全く苦しいもんだから、時々そんな事を思ふんだよ。不幸にして君が先だつたら、さうしてその時悔悟してくれなかつたら、僕もS子も一生救はれる時がないのだ。……ねえ君、君を救ふことは僕を救ふことだと云つたのは、斯うなつて來ると矢張り本當だつたぢやないか。僕はいよいよ、君に救つて貰はなけりやならなくなつたんだ。僕の幸と不幸とは、君の死に際の一語にあるのだ。そこで僕の運命が極まるのだ。君はその事をよく覺えて居てくれ給へ。」

「あゝ覺えて居よう、さうしてきつと、君の望みを遂げさせないやうにしてやらう。」

さう云つた時、Bの喉からは又ゴホン、ゴホンと、力ない咳が出た。彼の顏は、既に其の死が直ぐ近くまで來て居るやうに物凄かつた。

「僕はどんな場合にでも、君を救ふのは御免蒙むるよ。それは君が憎いからぢやない、君を其處まで苦しめなければ、まだ〳〵僕の慘澹たる孤獨の味が、君に分らないからだ。今の君はいくら孤獨でも矢張り未來に希望を持ち、光明を認めて居る。それで辛うじて善人になつて居る。だがそんな善は嘘ッぱちだ。それ以上の孤獨に落ちて、それで善が通せるかどうか試して見給へ。その時になつて君に始めて、僕の惡が分るかも知れない。君は僕を愛すると云ふのだから、僕の爲めだと思つて、そこまで苦しんで見てくれ給へ。まかり間違つたら、一生を棒に振つてくれ給へ。其の代り僕も死ぬ時は苦しむ積りだ。どんなに苦しくつても決して自己を欺かず、何處までも自分の惡を貫く積りだ。僕は凡べての惡人になり代つて云はうと思ふ、——彼等が死に臨んで悔悟するのは、實は腹からの悔悟ぢやない。それは彼等にシッカリした自覺と勇氣がないからだ。彼等は孤獨に堪へかねて、せめて死に際には自分の氣持ちをゴマカシででも、善人に握手を求める。けれども若し、彼等をもう一度生かして來れば、再び何遍でも惡を繰り返す。惡の魂は死の悲しみでゴマカされても、それで滅びるものぢやないんだ。僕は惡人中の唯一の殉教者として、惡の眞理を示す爲めに、惡の名譽を傷けない爲めに、君たち善人に反抗しつゝ、今の氣持ちのまゝでぢつと靜かに死んで行く。『僕は今、悲しいけれども悔悟する譯には行かない、それは惡人の良心が許さない。』——さう云つて立派に死なうと思ふ。死に臨んでそれだけの勇氣を持ち得る事を、僕は切に祈つて居る。意地の惡い事を云ふやうだが、君の心中を聞いた以上は、猶更それを祈らずにや居られない。」

「そりや、今は君もさう思つて居るだらうし、さう思ふのに差支へはないが、君に限らず多くの悪人は、體の丈夫な時分にはそんな風に考へて居て、さて死ぬ時になると、さうも行かなくなるんぢやなからうか。君はゴマカシだと云ふけれど、僕はさうも云へないと思ふ。それがほんたうだから、みんなさうなるんぢやないかと思ふ。人間が魂ばかりになればきつと善人に復る、悪の魂などと云ふものはない、それこそ却つてゴマカシなので、そのゴマカシが死ぬ時になつて始めて分るんだと、僕はさう思つて居るんだがね。」

「ふん、」

と云つて、Bは鼻の先で笑つた。

「君はさう思つて居るがいゝさ、さう云はれると僕は非常に有り難いよ、その言葉に励まされて、いよいよ勇氣を揮ひ起す事が出來るからね。君のお陰で僕は死ぬのが樂しみになつた。死んで君を困らしてやるのが愉快になつた。」

Bは「何糞」と云ふやうな顔つきをした。

Aは、自分がBに少しづゝ壓倒されて居る事を感じ出してから、次第に書く物が書けなくなつた。Bが死んでからの荒涼たる生活を想像すると、それに脅かされて筆を執る勇氣も失せ、凡べての仕事が徒爾であるやうに思はれた。

「少くとも君の藝術だけは、もう駄目になつたやうだね、」

と、Bは云つた。

「君は僕が生きて居るうちに、半分負けてしまつたんだ。あとは僕の死ぬ時だ、死ぬ時に僕は完全に勝つて見せる。」

Bの勝ち誇つた、物凄い薄笑ひが、屢々その頰に上ると共に、彼の病氣もだんだん惡くなつて行つた。「今日は大分熱がある、いよいよもう近いうちかな、」Aの家へ訪ねて來てはそんな嫌がらせを云つたり、わざと藥壜を提げて來て、苦い顏をして飮んで見せながら、「此れは勝利の前祝ひだ」と云つたりした。

實際、Bの死がさう遠くないことは、Aの眼にも否めなかつた。たゞさうなつても、Aが秘かに賴むところは、Bの臨終の一語である。彼は未だに、全くそれに絕望しては居ないのだつた。「今はあゝ云つて居ても、死ぬ時になればきつと悔悟してくれる。Bにはまだ、死と云ふものゝ嚴肅さが分らないのだ。人間の靈魂が此の世を去る時に、何處からともなく忍びやかに襲つて來る廓落たる境地、――氣高い美しい心持ちが分らないのだ。その時になれば彼は一朝にして、日頃の片意地を捨て去つて聖者の如く死んでくれるだらう。」――Aの私かに豫期するところはそれであつた。若し母の靈が彼の志を憐み、彼の半身たるS子を憐れんでくれるなら、必ず其の時にBの心を導いてくれよう。Aは自分の爲めよりも、寧ろいぢらしいS子の爲めに、その祈りが聽かれることを願はずには居られなかつた。

7

「Bももう長いことはなささうだね、あの樣子では。――」

良人にさう云はれたとき、S子は何と答へていゝか分らなかつた。

Bと良人との間に蟠まる或る疑ひ、それがBの死に際して明かになるものならば、Bには氣の毒であるけれども、その死が待ち遠いやうでもある。長い間、ほんたうに長い間、Bの名に依つて發表された多くの作品が、若し自分の想像通り良人の天才の產物であると分つたら、どんなにその時は嬉しからう。自分は一と言それが聞きたい、それを聞きさへすればいつ死んでもいゝ、良人に愛されなくてもいゝ。今のやうにして生きて居るより、それを聞かして貰つて死ん

だ方が、どんなに幸福だか知れない。自分は良人の天才を崇拜し、その中に自分も生きて居られることを喜び、良人に對する自分の信頼が、遂に誤まりでなかつたことに無上の感謝を捧げつゝ、安らかに死んで行かれる。それにしても、Bが死んだら良人はそれを打ち明けてくれるのだらうか？Bは果して救はれたのだらうか？「救はれれば話してやる。」さう云つた良人が、未だに話してくれないとすると、Bはやつぱり救はれなかつたのだらうか？さうして若し、救はれないまゝで死んでしまつたら――？

Aは、無言のうちに妻のその心を讀むことが出來た。彼がBの死に對して抱いて居る一縷の希望と不安とは、彼女の切ない胸の中にも等しく宿つて居るのであつた。

或る日、――それはもうBの病勢が餘程進んで來て、床に就いたきり起きられなくなつた時分、BはAを端書で呼び寄せて、その枕もとへ据わらせた。

「見給へ、もうこんなに、絲のやうに痩せちやつたよ。熱は此の間からズツト下らない。いよいよ近いうちだね。」

と、彼は靜かに口を切つた。

「まあさう云つたもんでもあるまい、そんなヤケを起さないで、出來るだけ養生して見給へ、持ち直すかも知れないから。」

「なあに、もう駄目だよ、死が近づいたに違ひないよ、その證據には此の頃いろいろな事を考へさせられる。」

「いろいろな事ツて？――」

「僕はね、いつぞや君に大分えらさうな事を云つたけが、何だかだんだん勇氣がなくなつて來さうだよ、矢張り死ぬ時分になると、誰でもこんな風に氣が弱くなるんだね。僕にもそろそろ、死ぬ時の氣持ちが分りかけて來たらしいよ。」

さう云つて彼は、「君のお説へ通りにね、」と、笑ひながら附け加へた。

Aは默つて居たが、しかし心の何處かしらでホツと救はれたやうな氣がするのを、包む譯には行かなかつた。Bは、Aのその樣子を見て見ない振りをしながら、言葉をつゞけた。

「それで、まあ今のうちはまだ幾らかは勇氣があるから、それがなくならないうちにと思つて、君に來て貰つたんだがね、君はどうか、今日の僕の言葉を遺言だと思つてくれ給へ。萬一、──そんなことは多分なからうと思ふけれど、──此の後僕が臨終の間際になつて、どんなに悔悟しようとも、それはその時の一時の氣分に過ぎないので、今日のがほんたうの遺言だと思つてくれ給へ。いゝかね君、大丈夫だらうね、」

Aの顏色は急に變つた、彼はかすかな聲で「あゝ」と云つただけだつた。

「遺言と云ふのは僕の全集の事なんだが、K社から出版するやうに話もついて居るんだしするから、君一つ面倒でも編纂してくれ給へな。原稿は大分澤山あるよ、惡魔主義の時代のものと、人道主義になつてからのものと、大體さう二つに分けるとして、細かい順序は君に一任するとしよう。云ふまでもない事だけれど、僕の名で發表されたものは一つも洩らさないやうに氣をつけてくれ給へ。それから、序文か紹介のやうなものを書いてくれると、なほ有り難いんだがな。」

「折角だけれど、序文だけは斷るよ、僕はウソを書くのは嫌だから。」

「あゝさうか、そんならそれだけはどうでもいゝ。僕も弱くなつて居るから、此れ以上頼む勇氣もない、──だが、編纂の方は大丈夫だらうね、きつと引き受けてくれるだらうね?、」

「よろしい、きつと引き受けたよ、」

「うん、さうか、有り難う。ぢや、まあ、僕も安心して死ぬる譯だ。もう一度くれぐれも云つて置くけれど、僕が臨終

の時にたとへどんなことを云つたつて、それは病人の囈語だと思つてくれ給へ。それで君の責任が解除されたと思はれちや困る。――さうだ、その臨終の時には、此れも遺言の一つとして頼んで置くが、決して君以外の人を病室へ入れないでくれ給へ。それが一番いゝ。實際僕はその囈語を聞かれるのが氣になつてならないんだから。――それが心配だから、かうして今のうちに頼んで置くんだから、――」

生れてから今日の日まで、始終Bの爲めを思ひ、Bを愛しつゞけて居たAの顏に、その時始めて仄かにも憐みの色が浮んだ。が、ほんの一瞬間の後、彼は翻然とそれを打ち消すやうにして、出來るだけ快活な聲で答へた。

「よろしい、君の云ふ事はよく分つたよ、たしかに引き受けたから安心してくれ給へ。」

「有り難う、――それぢや君のものは、永久に僕が貰つたよ、有り難う。」

と、Bがもう一度云つて、仰向きに眼を閉ぢたその口元には、例の薄笑ひが長く長く、神經質にふるへて居た。

8

さうして間もなく、Bの臨終の時が來た。

病室には彼のかねての希望通り、Aがただ一人附き添つて、刻々に迫るBの命を視詰めて居た。

最後の息を引き取る時に、Bは自分の脈を取つて居るAの手を握り返して、それまで考へ詰めて居た事が今漸く分つたやうに、微かな、しかし明瞭な言葉で云つた。

「A君、赦してくれ給へ、僕が惡かつた、僕は君から貰つたものを、死ぬ前に君に返して置かう。」

Bの意識はハッキリして居た、それは囈語とは思へなかつた。

「やつぱり君が勝つたんだよ、此の間の遺言は嘘だと思つてくれ給へ、人が死ぬ時に云ふ言葉はほんたうだから、――」

さう云つても、Aが默つて居るので、彼は氣づかはしげに返辭を促した。「どうか僕の返すものを受け取つてくれ、受け取る、辭つてくれ、」と、繰り返して云つた。

「受け取る」と云ふAの辭ひを、幾度も聞き直して念を押してから、Bは重荷を卸したやうに、安らかに死んで行つた。

Bの死後の話。──

葬式の濟んだ晩に、S子は良人に尋ねた。

「Bさんは救はれたんでせうか?、」

Aはさう答へた。

「多分救はれた、だが、お前の聞きたいと思ふことは、矢張り話す譯に行かない。」

第一の遺言に從ふべきか、第二の遺言に從ふべきかを考へ拔いた末、Aは結句、第一の方に從つたのである。なぜなら、それが最も彼の良心に疚しくない道であつたから。

斯くて、Bの全集は出版された。Bに云はせれば、「Bの惡は打ち立てられた。」

9

Aはその後、何年も何年も、解き難い惑ひと悶えの中に月日を送つた。だが、やがて遂にその苦しみに堪へかねて、凡べての事を、或る日S子に打ち明けてしまつたのである。

S子は喜んだ、そして淚を流した、彼女は報いられたのであつた。けれども、Aの天才が再び甦つて來る時はなかつた。それはBの全集に悉く收められて居た。夫婦は長く、淋しい、寂しい、凡庸な生を送つた。

「AとBの話」は此れで終りである。Aが勝つたのだらうかBが勝つたのだらうか?──

(大正十年、六月作)



或る男

武者小路實篤

四十三

姉の結婚は幸福とはゆかなかつた。彼も時々出かけた。夫は理學士で學校の先生をしてゐた。彼は夫の人に厚意をもつてゐた。しかし尊敬ももてなかつた。快活にうちとけることも出來なかつた。第一記臆に殘つてゐる言葉は殆んどなかつた。たゞ、彼の學校に通つてゐる人で非常に美しい人がゐるが、何と云ふ人だと聞かれたことだけ覺へてゐる。その他は何一つ覺へてゐない。その美しい人は彼が學校で三人圖抜けて美しい人の一人をさしてゐることは知つてゐたが、彼はさう云ふ質問を好まなかつたのと、彼はその人の顏を長いと思つてゐたのを圓顏だと云つたので、彼は氣がつかないふりした。

姉をたづねると、姉はよろこんでくれた。それで、彼もよろこんだ。しかし姉が愉快さうにしてゐた記臆はない。一たい彼の姉は病身だつた。瘠せてゐた。一ぺん病氣の爲に、學校を半年程休んで落第したことがあつたと彼は記臆してゐる。學校

の出來はあまりよくなかつた。しかし母はそれを別に氣にしなかつた。女の子だから學校はどうでもいゝと云ふのが母の考だつた。

姉は小說類をよむのが好きだつた、貸し本屋がよくいろ〳〵の本をもつて來た。彼は七つ八つの時に、姉の借りた昔の木版の本の畫を見ながら母や姉に話してもらつて知らない世界、其處では珍らしい勇士で、忠臣と、惡人と、善人が居た。そして殿樣が美人や、美少年におぼれるのを、心配したり、よろこんだりしてゐる。彼はいつもその勇士や、忠臣を愛して、その人達が惡人をやつゝける畫の少ないのをはがゆがつた。

一番よく覺えてゐるのは白縫物語だつた。それからもう一冊、神秘な本があつた。釋迦八相記だと覺へてゐたので、大きくなつてからその時のことをなつかしく思つてよんだが自分の記憶してゐるのとは感じがまるでちがつてゐた。

彼は姉をお俠な質だと記憶してゐる。少くも頭のよく動く、人の心をよく察することの出來る、弱いものゝ味方をしないではゐられない、きかん氣の强い、そのくせ情に脆い人のやうに覺えてゐる。器量はよくないやうに母は常に云つてゐたが、惡い方ではなかつた。母は妹が器量自慢になることを恐れすぎたのではないかと思ふ。少くも姉は優れた美人ではなかつたらう。しかし自分の戀がもしあつたとしたら、それを遠慮しすぎる必要のある女ではなかつた。少くも彼の記憶では十人並よりは美しかつた。そして姿のいゝことは母さへ認めてゐた。母は姉を思ひ出すのがつらくつて姉の十位いの皆でうつしてゐる寫眞以外は皆、何處かへかくしてしまつた。それで彼は二十年以上、姉の寫眞を見たことはないが、彼は姉の死んだあとで、母がある名の知れない日本畫家に姉の畫をかゝしかけた、かきかけの畫、それは出來上らない內に何處かへ行つてしまつたのを見た時、姉は美しいと思つた。

少くも姉は氣持のいゝ、さつぱりした、背のすらつとした、そして考へのはつ切りした人だつたと彼は覺えてゐる。

姉は芝居がすきだつたが、度々ゆくと云ふわけにはゆかなかつた。小說類はよくよんでゐたが、紅葉を一番好んでゐた。

姉のさう云ふ性質は夫になつた人の性質とはまるであはなかつた、姉の夫になつた人はあとで習字の先生になつたので彼はおそはらなかつたが、性質は殆んど、彼には見當がついてゐる、姉の性質とは凡そあはなかつたと彼は思ふ。彼は姉のことを思ふと、自分がまだ本當に子供だつたことを殘念に思ふ。死んでしまへば同じではあるが、自分がせめて十九か二十になつてゐたら少しは幸福に出來たらうにと思ふ。

姉は夫と一人の女中をつかつて本鄉西片町十番地に住んでゐた。この上なく氣樂で、姉は一人の時が多かつた。夫は二つの學校に敎へに行つた。

しかし氣樂と云ふことが、最上なことではない、凡そ氣樂と云ふことを知らない母にとつては氣樂と云ふことは、それだけで、この上なく幸福なものに思へたであらう。しかし姉にとつては零の生活をよろこぶには、若すぎた、マイナスの生活を知らなすぎた。

姉の內にある生命は燃える相手を得なかつた。そして姉と夫の間には更に不幸な性慾の不調和があつた。之は姉の母への告白である。夫は決して、わるい人ではなかつた。眞面目なきちんとした變化のない心の持ち主で、生活もそれに應じてゐた。そしてすべての性慾の秘密は結婚によつての解放することを許されてゐる種類の男であつた。それは非難すべきことではないであらう。しかし相手がそれに應じられることが必要である。不幸にして病身だつた姉は、或はさつぱりしてゐた姉は、其處に調和を見出すことが出來なかつた。精神的には不向きであつた。性慾的には不調和であつた。之は彼の母の唯一つのしくぢりであつた。母はあまりよく知つてゐる不幸を娘のためにさけすぎた結果、母のまる

で知らない不幸が其處に娘をまつてゐた。

母は多くの姑や小舅にいぢめられすぎた、夫の道樂にすつかりこりた、そして癇癪持の夫にこりた。それで娘にその反對な家庭と夫を撰んだ。そして娘心の憧がれと、自分に自信のない、あきらめのいゝ姉を說きふせた。

しかしこのことで姉よ、母をせめるな、母はその罰を受けすぎた。

姉は半年だつかたゝない內に病氣になつた。姉の病氣のせいを夫に歸せやうとは思はない。姉がよし最も適當な夫を得たにしろ、そして性慾の調和と安眠と心のよろこびと、未來への希望に守護されたにしろ、彼の姉は病氣になつたかも知れない。

恐らくなつたと彼は思ふ。しかしその時は彼は思ひ出してもあきらめがよかつたと思ふ。彼は姉の夫を非難しやうとは夢にも思はない。相當した妻を得られなかつた姉の夫も氣の毒である。又仲人の口が少しはちがつたにしろ、彼はそれを非難しやうとは思はない。たゞ彼はお互に氣心を知り、お互に愛しあひ、そしてどうしても結婚したいと思ひあつて結婚しない不自然が生む不幸に姉がおちたことを心殘りに思ふのである。

之等のことは勿論當時の彼は知らなかつた。

たゞ姉が、彼が行つてよろこぶ時、そのよろこび方に何處か不自然な、無理がある表情をかすかに覺えてゐる。或はそれはもう病氣になつてからかも知れない。病氣になつて床の上に坐つて彼を見て淋しく笑つた表情は今でも覺えてゐる。

彼は始め姉の病氣がそんなに惡いとは思はなかた。しかし母の態度がすつかり變つてしまつた。母の表情がすつかりかはつた。そしておちつきがすつかりなくなつた。そして姉の家にのべつに出かけた。

四十四

母は姉を方々の醫者に見せた。姉の病氣を母は夫にまかせて安心出來なかつた。自分が看病しなくつては氣がすまなかつた。其處にはかくれた原因があるのかないのか知らない。ともかく母は一時間も姉のそばをはなれるのが不安で仕方がなかつた。

彼はあんまり母が心配してゐるので姉の病氣をきいたが、母は大したことはないやうに云つた。そしてその答へも、彼にはいつもよりも、冷淡なおちつきがなく聞へた。彼は母が自分をすつかり顧みなくなつて、姉のこと許り思つてゐるのが、羨やましくさへ感じた。自分も病氣になりたいとさへ思つた。

子供が出來たのかも知れないと或時、母は云つた。もしそうだつたら、どんなに嬉しいだらうと母は云つた。母の口からは彼は姉の病氣を氣にする理由を見出せなかつた。しかし母の態度は姉の病氣の容易ないことが知れた。萬事は母に顧みられなくなつた。金のかんぢやうも大き祖母さんが一人でやつた。そして母は金を借りることに骨折つた。どうしても生かさないではおかない。母は家に歸つても、それは何か品物をとりに歸るので、すぐ出かけた。いろ〳〵の神様が姉の病氣をなほす爲に祈られた。

病氣はいやなものである。殊に愛するものゝ病氣は見てゐられないものである。生命の不安をうけてゐるものゝ表情は正視出來ないものである。どうかして生たい、なほるでせうか、かう云ふさぐるやうな目つきは見るものゝ心をさすたつた一人の娘が、父と同じ病氣にかゝつてだん〳〵瘠せてゆく。苦しめば、苦しむ程よくなるのではなくつて、それがさん〴〵つゞいてあげくの果、死ぬのでは、我慢が出來ない。

姉は死にたくないと云つたさうだ。母も殺したくないと勿論思つた。あらゆること、母のいゝと思ふことはすべてや

つた。どうしたら病氣がなほるかと云ふことが、母の頭に一杯になつて、その他のことは入る餘地がない。母の一言一句は、どの神樣がきゝめがあるとか、何とか云ふ草がいゝさうだとか、醫者がかう云つたとか。そんなこと許りだつた。

たまに母が歸つて來たので彼はよろこんで母にあまへやうとするが、母は無愛想に何か云つて、すぐ涙ぐんでまた出かけてゆく。

四十五

子供の時は母をはなれて夜をすごすことは彼には不可能だつた。たまに何處かへ遊びにいつて泊る。多くは一晩泊りに魚とりに從弟と從弟の乳母の家にゆく、其處は中川べりで舟などがおいてある家で、本職は染ものか何かをやつてゐたのだらう。よく覺えてゐない。彼は其處で晝の間はたのしくすごす。しかし日が入つてあたりがくらくなると彼は急に母が戀しくなる。來なければよかつたと思ふ。夜具をかぶつて從弟に知れないやうに、しく／＼と泣き出す。大きくなつてトルストイの幼年時代をよんだ時に、彼は感心したが、赤坊の時母を失なつたトルストイには、母にはなれる氣持はさすがのトルストイにもわからないのだと思つた。

彼が新しき村に住むやうになつてから、牛の仔を村の豚と交換して、村へつれて來て小屋に入れておいたら、眞夜中まで母をしたつてなきさけんでゐた仔牛が、朝はもう姿を見せなかつた。ためしに母の處へ行つたら仔牛はちやんと歸つてゐた。彼は眞夜中に、二三町の險はしい山路をあるいて、二十五六間程巾のある。深さは二丈以上もある深淵を泳ぎわたつて、七八町さきの母のもとに歸つたのだ。

その時、この牛の仔の氣持がよくわかつた。牛の仔は母の乳を從つたのかも知れない、腹がへつて、しかしそれ以上

四十四

母は姉を方々の醫者に見せた。姉の病氣を母は夫にまかせて安心出來なかつた。自分が看病しなくつては氣がすまなかつた。其處にはかくれた原因があるのかないのか知らない。ともかく母は一時間も姉のそばをはなれるのが不安で仕方がなかつた。

彼はあんまり母が心配してゐるので姉の病氣をきいたが、母は大したことはないやうに云つた。そしてその答へも、彼にはいつもよりも、冷淡なおちつきがなく聞へた。彼は母が自分をすつかり顧みなくなつて、姉のこと許り思つてゐるのが、羨やましくさへ感じた。自分も病氣になりたいとさへ思つた。

子供が出來たのかも知れないと或時、母は云つた。もしそうだつたら、どんなに嬉しいだらうと母は云つた。

母の口からは彼は姉の病氣を氣にする理由を見出せなかつた。しかし母の態度は姉の病氣の容易ないことが知れた。

萬事は母に顧みられなくなつた。金のかんぢやうも大き祖母さんが一人でやつた。そして母は金を借りることに骨折つた。どうしても生かさないではおかない。母は家に歸つても、それは何か品物をとりに歸るので、すぐ出かけた。いろ〳〵の神様が姉の病氣をなほす爲に祈られた。

病氣はいやなものである。殊に愛するものゝ病氣は見てゐられないものである。生命の不安をうけてゐるものゝ表情は正視出來ないものである。どうかして生たい、なほるでせうか、かう云ふさぐるやうな目つきは見るものゝ心をさす

たつた一人の娘が、父と同じ病氣にかゝつてだん〳〵痩せてゆく。苦しめば、苦しむ程よくなるのではなくつて、それがさん〳〵つゞいてあげくの果、死ぬのでは、我慢が出來ない。

姉は死にたくないと云つたさうだ。母も殺したくないと勿論思つた。あらゆること、母のいゝと思ふことはすべてや

つた。どうしたら病氣がなほるかと云ふことが、母の頭に一杯になつて、その他のことは入る餘地がない。母の一言一句は、どの神樣がきゝめがあるとか、何とか云ふ草がいゝさうだとか、醫者がかう云つたとか。そんなこと許りだつた。

たまに母が歸つて來たので彼はよろこんで母にあまへやうとするが、母は無愛想に何か云つて、すぐ淚ぐんでまた出かけてゆく。

四十五

子供の時は母をはなれて夜をすごすことは彼には不可能だつた。たまに何處かへ遊びにいつて泊る。多くは一晩泊りに魚とりに從弟と從弟の乳母の家にゆく、其處は中川べりで舟なぞがおいてある家で、本職は染ものか何かをやつてゐたのだらう。よく覺えてゐない。彼は其處で晝の間はたのしくすごす。しかし日が入つてあたりがくらくなると彼は急に母が戀しくなる。來なければよかつたと思ふ。夜具をかぶつて從弟に知れないやうに、しく／＼と泣き出す。大きくなつてトルストイの幼年時代をよんだ時に、彼は感心したが、赤坊の時母を失なつたトルストイには、母にはなれる氣持はさすがのトルストイにもわからないのだと思つた。

彼が新しき村に住むやうになつてから、牛の仔を村の豚と交換して、村へつれて來て小屋に入れておいたら、眞夜中まで母をしたつてなきさけんでゐた仔牛が、朝はもう姿を見せなかつた。ためしに母の處へ行つたら仔牛はちやんと歸つてゐた。彼は眞夜中に、二三町の險はしい山路をあるいて、二十五六間程巾のある。深さは二丈以上もある深淵を泳ぎわたつて、七八町さきの母のもとに歸つたのだ。

その時、この牛の仔の氣持がよくわかつた。牛の仔は母の乳を慕つたのかも知れない、腹がへつて、しかしそれ以上

母と云ふものにひきつけられ、そばにゐないと安心が出來なかつたのであらう。

それ程、彼にとつて大事な母が、姿を見せるとまもなく歸つてゆく、それも、彼に逢ひたくつて歸つてくるのではない。

自分も病氣になつたらあんなに大事にされるのだらう。病氣になりたいと彼は思つた。

四十六

彼は二三度、姉を西片町にたづねた。大概何かの用があつて出かけた。姉は元氣に、母よりも元氣に笑ひ顏をしながら話した。しかし行く度に彼は姉のやせるのに氣がついた。

あとで母はそつと瘠せたろと聞く、「いゝえ、それ程は」と自分はあいまいな返事をする。

そして「どうを」と聞きかへす。

「大したことはないと醫者は云つた」と母も答へる。

しかしまもなく母は姉と鎌倉に轉地した。

彼は姉のことについて書いたものゝ内にかう云ふことをかいた。

「姉は轉地した。或日母は用があつて東京に歸つて來た時、自分に姉がよむ本を買つて來てくれと云つた。そして僕の金を渡されて自分は古本屋に本を買ひに行つた」

今の彼は新しい本でなければ滅多に買はない、そして買ひたい本なら一度に四冊も五冊も買ふ。しかし當時、彼の家では本を買ふと云へば古本屋にきまつてゐた。教科書も必ず兄と古本屋をさがしにいつて、あつちこつちをひやかして、まけさせるだけまけさして、そして一番やすい忠から買つた。こんなことはあたりまいのことではあらうが、華族

の坊ちやんと世間の人が彼について考へてゐるので一寸かいておく。

教科書の古本、版が新になつたものも、古本でまにあはせたことは、今考へても別に後悔することはない。しかし死んでゆく姉に本を買ふのに、二三十錢の本を、しかも古本で一冊より買へなかつたことは心殘りだ。しかもその一冊さへ、彼はとんでもないものを撰りも撰つて買つてしまつた。

何を買つたら姉がよろこんでくれるだらうと彼は迷ひに迷つた結果、買つた本は、表紙に髑髏のかいてあつた本だつた。露伴の對髑髏だつたと記憶してゐる。買つてもつてかへる途中で縁起のわるいものを買つたことに氣がついた。しかし他の本を買ふ金はなかつたし、彼は姉が死ぬとまでは思つてゐなかつた。ともかく彼はその本を買つた　ひわけを考へながら家に歸つた。

彼はかうかいてゐる。

この本は姉のもとに送られた。自分は日がたつに從つてなぜあんな本を買つたのだらう。姉は淋しく思ひはしなかつたか。自分はとり返しのつかないしくぢりをしたと思つた。姉が死んだのち、母は姉がその本を喜んで讀んだ。と自分に云つた。それを聞いたので一方安心はしたが、自分は母が心のうちでなぜあんな髑髏のかいてある本をよりもよつて買つたのかと思つてゐるやうな氣がして、なるべくその話にはさわらなかつた。

そして彼はその後も、思ひ出すとぞつとした。

四十七

彼はその夏も例によつて金田に行つた。姉のことを思ふと淋しくもあり、氣にもしてゐたが、忘れてゐて、愉快にさわいでゐる時が多かつた。彼は十二三町舟についてもらつて彼の兄と一緒に泳い　り。魚をとつたり、さゞえをとつた

り、舟をこいだり、本をよんだり、海岸で怒鳴つたりしてすごした。

彼は土用浪と云つて、海が荒れて大浪がうちよせてくる時をよろこんだ。いつもの五倍も六倍もある大波がうちよせて來て岩にぶつかつてはねかへる、その姿を無上に愉快がつた。さう云ふ時は大勢で海岸に見にゆく時あつた。又一人でそつと出かけて、岩の上にたつて裸で、波のしぶきを全身にあびながら怒鳴るのが好きだつた。

彼は前にかくのを忘れたが、小學校時分から口演が好きだつた。彼はさう云ふ時、級中で一番大きな聲で饒舌つた。彼のふだんの言葉きゝとれにくゝ、早口であつたが、しかし口演の時間は好きだつた。行軍なんかで軍歌をうたふ時でも彼は調子はづれに大きな聲を出した。

彼は波がうなりながら來て、轟然とくずれ地ひびきをさせておしよせ、岩にあたつてくだける樣を見ると默つてはゐられなかつた。

「おゝ波よ、海よ、空よ、こゝに立つ一人の男を見よ。この男こそ唯の男ではないぞ、よくおぼへておけ」

なぞと人に聞へないことを知つてゐるのでいゝ氣になつて怒鳴るのがすきだつた。

處がある夜、彼は姉と、長屋にゐた女の子と、二人が幽靈になつて來た夢を見た。

彼は目がさめても氣持ちがわるかつた。しかし長屋の娘は丈夫にしてゐるのだから、二人の幽靈を見たのだから、正夢でないのにはきまつてゐる、氣にすることはないと思はふとした。處が二三日して、東京から來た從妹は偶然、その娘が病氣で、十月までもつまいと醫者に云はれたことを彼に話した。彼は安心しやうとしがみついた柱が、思ひがけなくくづれてゐたのにおどろいた。彼はその娘には冷淡だつた。赤の他人以上ではなかつた。しかしその思ひがけない事實は、逆に姉の死をあの夢が語つてゐることを示すのに力をそへた。

しかし彼は氣にしてゐたが、姉の病氣は急にはすゝまないで、姉は彼が東京へ歸るのと、只前後して東京に歸つた。しかし母は姉を夫のもとにおくのでは安心が出來なかつた。そして彼の家の一室で姉は養生することになつた。長屋の娘は、危期が無事にすんで、やせはしたが、出あるけるやうになつた。しかし姉は床についた切りであつた。母は病氣の彼等にうつることを恐れた。それで一家に居ながら、姉の室には入らなかつた。入ることを禁じられた。たゞ便所の手あらいの處から五六間はなれて中庭を通して、姉と顏を見合せる時が時々あつた。姉は床の上に坐つてた。彼はおどつたり、顏を歪にしたりして姉を遠くから笑はした。そしてその最後の時、姉が死ぬ二三日前の時の姉のやせたさびしさうな姿を彼は覺えてゐる。或る日、日曜かと思ふ、彼と兄が室にゐた時、姉の容態がかはつたと知らせられた、彼はあはてゝ行かうとしてとめられた。ついで姉の死が報じられた。姉の死に目にあへなかつたことが自分にはとり返しのつかない心のこりであつた。二人はあはてゝ姉の室に行つた。姉はもう死んでゐた。いくら泣いても、もうおひつかなかつた。

四十八

あとで聞いたのだが、姉はかう云つたさうである。

「私が育つたので、共さんも篤ちやんも育つことが出來たのですね、私の生れたことは無意味ではなかつたのですね」

四十九

母はすつかりうちくだかれた。もう逆さまごとは閉口だと云つた。そして逆さまごとに逢はない爲に、子供より自分が先に死ねるやうに、母は淺草のその方に御利益のあらたかだと云はれる社に每年かゝさずにお參りすることになつた。六七年後にも母は姉のことを口にする勇氣はなかつた。

或時、母は姉にすつかり似てゐる藝者が居ると誰かに聞かされて、その藝者に一度あつて見たいと云つてゐた。しかしその後矢張り逢はない方がよささうだと云つた。

彼も姉の夢を見る度にどんなにひどく泣かされたらう。

「お姉さんは矢張り生きてゐたの」

しかし目がさめると、姉の死んだ事實は否定出來なかつた。

姉の遺骨は夫の墓地の紀州におくられた。

しかし母は姉の遺髮を、亡き父と、自分が百年後に入るべき場所の間にうづめて、其處に土饅頭をつくつて松の木をうへた。

彼の叔母が緋屋の娘の生れがはりと云ふのが本當なら、彼の姉も何處かに生れがへつて今年、二十二になつてゐるはづである。

五十

彼は何か運のいゝことがあると、父と姉が自分のまわりにゐて、自分を守護してゐてくれるのではないかとよく思ふ。彼の理性はそれを否定するが、彼の感じはそれを否定し切るわけにはゆかない。自分のわきにゐてくれるやうな氣がする。

あまりに自分は運がよすぎると彼はよく思ふ。

五十一

死んだ人の夢を見ると云ふことは印象の強いものである。神秘な力がある。彼は死んだ姉の夢、死んだ父の夢を見る

と、泣かないわけにはゆかない。

死んだ父の夢では、ずつとあとで見たのだが、彼がある處へゆくと、人里はなれた處に一軒の家があつて、其處に彼が入つてゆくと、廣間に一人の男が、腰かけて彼のくるのをまつてゐた。彼はその男を見るとすぐ、「お父さん」と思はず云つて、その男の前に跪いて泣いた。

彼に禁物な夢が澤山あるが、當時の彼にとつて禁物の夢の一つは死んだ一人の友達の夢である、その夢は彼が二十一二になるまで、彼をくるしめた。

その友については彼は「西幸態」と云ふ題で小品にかいたことがある。讀んだ人は知つてゐるだらうと思ふ。しかしよまない人に簡單にかかう。それは彼の中學の二年の正月の時だと思ふ。彼のいつも左に腰かけてゐた友が彼の右に腰かけるやうになつて、二人は共同の机と、腰掛にならんでゐた。いつも二人はくつついてゐた。彼の方が一つ上席なのがくせだつたが、今度それがひつくり返つた。

さう始終、同じ机に並んでむかつてゐたのだが、仲はあつさりしてゐて、別にゆき來したことはなかつた。仲のわるい方でもなかつたが、性質は合はない方だつた。

處がその友が、急に休み出した。今日はくるだらう。今日はくるだらうと思つて別に氣にしてゐなかつたのだが、一週間たつても、十日たつても出て來なかつた。

彼はそれでも別に氣にしないでゐた。すると或日、その友が危篤だと云ふ噂がつたはつた。彼はびつくりした。ある興奮を皆感じた。見舞に行つた人も多かつたが、彼はその友の家も知らないので、そのまゝにしてゐた。するとその友は死んだ。そしてお葬式の時、彼は友の家を知らないので、ある友をさそつた。そしてその友が他の人をまちあはせる

或時、母は姉にすつかり似てゐる藝者が居ると誰かに聞かされて、その藝者に一度あつて見たいと云つてゐた。しかしその後矢張り逢はない方がよささうだと云つた。

彼も姉の夢を見る度にどんなにひどく泣かされたらう。

「お姉さんは矢張り生きてゐたの」

しかし目がさめると、姉の死んだ事實は否定出來なかつた。

姉の遺骨は夫の墓地の紀州におくられた。

しかし母は姉の遺髮を、亡き父と、自分が百年後に入るべき場所の間にうづめて、其處に土饅頭をつくつて松の木をうへた。

彼の叔母が餅屋の娘の生れがはりと云ふのが本當なら、彼の姉も何處かに生れかへつて今年、二十一二になつてゐるはづである。

五十

彼は何か運のいゝことがあると、父と姉が自分のまわりにゐて、自分を守護してゐてくれるのではないかとよく思ふ。彼の理性はそれを否定するが、彼の感じはそれを否定し切るわけにはゆかない。自分のわきにゐてくれるやうな氣がする。

あまりに自分は運がよすぎると彼はよく思ふ。

五十一

死んだ人の夢を見ると云ふことは印象の強いものである。神秘な力がある。彼は死んだ姉の夢、死んだ父の夢を見る

と、泣かないわけにはゆかない。

死んだ父の夢では、ずつとあとで見たのだが、彼がある處へゆくと、人里はなれた處に一軒の家があつて、其處に彼が入つてゆくと、廣間に一人の男が、腰かけて彼のくるのをまつてゐた。彼はその男を見るとすぐ、「お父さん」と思はず云つて、その男の前に跪いて泣いた。

彼に禁物な夢が澤山あるが、當時の彼にとつて禁物の夢の一つは死んだ一人の友達の夢である、その夢は彼が二十一二になるまで、彼をくるしめた。

その友については彼は「西幸熊」と云ふ題で小品にかいたことがある。讀んだ人は知つてゐるだらうと思ふ。しかしよまない人に簡單にかからう。それは彼の中學の二年の正月の時だと思ふ。彼のいつも左に腰かけてゐた友が彼の右に腰かけるやうになつて、二人は共同の机と、腰掛にならんでゐた。いつも二人はくつついてゐた。彼の方が一つ上席なのがくせだつたが、今度それがひつくり返つた。

さう始終、同じ机に並んでむかつてゐたのだが、仲はあつさりしてゐて、別にゆき來したことはなかつた。仲のわるい方でもなかつたが、性質は合はない方だつた。

處がその友が、急に休み出した。今日はくるだらう。今日はくるだらうと思つて別に氣にしてゐなかつたのだが、一週間たつても、十日たつても出て來なかつた。

彼はそれでも別に氣にしないでゐた。すると或日、その友が危篤だと云ふ噂がつたはつた。彼はびつくりした。ある興奮を皆感じた。見舞に行つた人も多かつたが、彼はその友の家も知らないので、そのまゝにしてゐた。するとその友は死んだ。そしてお葬式の時、彼は友の家を知らないので、ある友をさそつた。そしてその友が他の人をまちあはせる

約束になつてゐたので、彼も待つた。處がいくら待つても來なかつた。そして待ち切れずに出かけた時は、もう友の家に行つてもまにあはない時間だつた。それですぐ青山へ行つたが、其處では儀式が半分以上すんでゐた。そして彼はひけ目を感じてゐた處を、おくれたことで非難された。しかしおくれたのは彼の罪ではなかつた。そしてその元因をした人はちやんと彼達よりさきに式場に來て、氣輕に彼をせめた。其處で彼は、友の爲めに泣かずに、くやしさに泣いた。

そして遺骸を、埋葬する時、皆が土呂をほりこんだのを、彼は何の爲にほり込だか知らないので、人眞似することの嫌ひな耻かしがりの彼は默つて見てゐた。

その時、一人の友が、

「君は西をうめてやらないのか」と非難した。其處で彼はかつとしてしまつた。そして

「君達のやうに僕は西を葬むることを喜ぶ氣にはなれないから」と云つてしまつた。

其處で皆、土呂をほり込んだ連中は怒り出した。どう議論したかもう彼は覺えてゐないが、青山の墓地から青山の練兵場を通つて四つ谷見附にくる迄、彼は五六人の友を相手に議論した。

そして一人になつた時、彼は心からの淋しさと、悔ひを感じた。

一緒に机をともにしてゐながら、病氣見舞ひもせず、死んでも別に悲しがりもせず、葬場で自分の爲に泣き、心にもない議論をムキになつてして、友の爲には少しも悲しむ暇がなかつた、友はさぞうらんでゐるだらうと思つた。その氣持が彼につきまとつて、その友の夢を見るのは、實にいやだつた。それは死に神のやうに、彼の生を呪ひ、死にさそはないではおかない力をもつてゐるものゝやうな氣がした。今でも彼はその友の顏をはつ切りおぼえてゐた。そして或る恐怖をぼんやりではあるが、感じないわけにはゆかない。二十三四年たつてゐる今でも、ましてその當時はその友に逢

ふ夢は一番いやな夢の一つだつた。

一體彼は身體の弱いせいか、頭をつかひすぎるせいか、夢をよく見、ことに自分の殺される夢や、幽靈の夢や、猛獸におひかけられる夢をよく見る。一年に一度か、二度、生れたことを心から呪ふやうに強く死の恐怖を感じさゝれる夢を見る。死ぬやうな、汗をびつしよりかくやうな夢は殆んど毎晩見る。しかしそれ等の多くは目がさめると夢でよかつたと思ふ。しかし女の夢は目がさめてもこはかつた。

彼はよく思ふ。自分が人殺しをしてゐたら、安眠は出來まいと。そして人殺しをせずに生きられる時代に生れたことを感謝した。

彼は夢でもよく自分よりも何倍も強い人間を投げとばした。またよく議論して相手を負す夢も見た。又うまく飛行術を發見したと思つてよろこんだ夢も見た。しかし彼は人を殺す夢は見たことはなかつた。防禦にピストルで殺しにくる相手をうたうとしたことは、何度もあつた。しかしその時は、きまつて不發なので、がつかりした。

彼はその時分見た夢で忘れないのは、彼の家の玄關のわきに幽靈が出る夢を二晩つゞけて見たことゝ、學校で皆がフートボールをしてゐるので自分もフートボールをしやうと思つて仲間に入つたら、そのボールは臺灣の土人の生首で、切り口に血がべつとりとくつついて、青ざめた無念さうな顔をしてゐるので、ぞつとした。

五十二

姉が死んだ翌日も、彼兄弟は、學校にゆくやうに母に云はれて出かけた。學校にゐる間氣がまぎれてはゐたが、姉のことを思ふと涙が出た。しかし夢のうち程、純粋にひどく泣くことは出來なかつた。そして子供の彼は氣のまぎれる時が多かつた。

姉が死んでから母は、もう勉強しろとは云はなくなつた。身體さへ丈夫ならばいゝと云つた。そして彼は讀みたいものをよんだ。

彼は主に成功と云ふやうな雜誌をよんだ。彼の崇拜人物は楠正成から豐太閤や、ナポレオンや ワシントン、アレキサンダーなぞになつたが、彼はそれ等の人よりもつと偉い人間になりたかつた。少くも太閤がしようと思つて出來なかつた事をしやうと思つた。

彼が作文と語學が不得意なのを、彼の兄が心配した時、彼は冗談のやうに外國人に日本語を覺えるやうにさせるからかまはないと云つた。そして文章なぞは書記さへやとへばいゝのだなぞと云つてゐた。

彼は實際作文は好きになれなかつた。論文の方は、いく分かきたいこともあつたが、記行文ときにはかきたいことがなかつた。彼は空々しいことをかくことは嫌ひだつた。かいてもかゝないでもいゝやうなものをかくのは嫌ひだつた。それでも題を出されても、頭がちつとも動かないので、何をかいていゝかわからないで困つた。時間は遠慮なくたつのに書きたいものは何にもなかつた。仕方がないので何か無理にかき出す時分には、時間が半分位いたつてゐた。白紙業腹でかいて出した。大概、十點滿點で六點だつた。

彼は本をよむ方では大概の人にはまけなかつた。小波のお伽噺や、昔話は大概よんだ。黄金丸を買つてよんだ時、隨分よろこんだことをおぼへてゐる。今辨慶なぞは兄と大いによろこんでよんだ。殊に近江聖人に泣かされた。あかぎれの藥をかひに侍の多勢ゐる處に出かけてゆく處や、雪のなかをはる〴〵と藥をもつてゐつて母に叱られて歸る處なぞには泣かされた。

少年世界や、少國民は出るものをまちかねた。そして兄と二人で買ひに行つた。講談、殊に武勇傳は好きだつた。一

時弦齋のものに夢中になつた。小猫や、飛乘太郎なぞは夢中でよんだ。何となくセンチメンタルな、ロマンチックな、善良なやさしい、そのくせ勇氣のある、思ひやりの深い、人間が好きだつた。

十四五の時迄は長いものでは金田の叔父の處にあつたので水滸傳をよんだ。隨分よろこんだ。それから八犬傳を中學の二年の試驗の最中によんだ、學校の勉强してゐるふりしてよんだ。九時まで試驗のおさらいして九時から自分の時間なので八犬傳をよんだ。犬坂毛野が、女のやうに美しくつて、女にばけて讐うつ處なぞは殊に好きだつた。

彼はアフガニスタンに旗あげして、人心をとる方法や、迷信を應用して、そして仁政をほどこして、そして段々中央亞細亞にせめこむことを考へると同時に、永遠の女性にたいする憧がれに刺戟されていろ〱空想した。

かの美しい少年は、女よりもなほ女らしい處をもつてゐた。彼はその少年に自分がたよられることを私かに望んだ。

ともかく彼は自分を益々すぐれたものにしたかつた。彼は姉のまだ生てゐる時、劍術をならいたがつた。九段に道場のあることを知つて其處にゆきたかつた。しかし母は反對して。姉は彼に同情して母にたのんでくれたが、兄はやるなら學校でやればいゝと云つた。しかし彼は他で眞劍にやりたかつた。皆の氣がつかない内に强くなつてゐたかつた。

彼は常にさきのこと許り考へてゐた。しかし同時に、その爲に彼の信じる道で、誰にも心をうちあけずに、こつ〱用意をしておきたかつた。彼の野心は他人にもしらすことの危險なものである。母や兄にきかれては困るものである。

彼は心を誰にもうちあけずに、一人で考へ、一人で自分を築いてゆくことがすきだつた。

眞面目に相談にのつてもらへるとは思へなかつた。それで何げない風して、膽力と體力を養ひ、兵法を研究し、そして偉大な人間の傳記や、言行を參考にして、自分の望みを達することが出來るやうに骨折つた。

彼は實際。初戀でやつけられず、トルストイに洗禮をうけなかつたならば、きつと變な野心家になつたにちがいなか

つた。野心のくだらないことを本當に知らない間、彼の野心は一通りのことでは滿足が出來なかつた。しか
し一方身體がよはく、氣がよはかつた。しかし他方は、內に燃えてゐる火は中々のことで滿足出來ない火だつた。しか
しその話はあとにゆづらう。

五十三

彼の決心と、彼の膽力養成は無結果ではなかつた。彼は學校で以前のやうに小さくなる必要は感じなくなつた。彼の決心は相手をよけさすに十分であつた。彼は遠慮してではあつたが、人々から侮辱されず、又意地わるをされることはなかつた。一本立ちとして又稀らしい強情ばりとして通つた。

あいつには相手にならない方がいゝ、相手になるとうるさい、あいつは死ぬことを恐れない強情ばりだから、さう云ふ感じを彼は人々に與へた。半けちとりや、棒とりの時、彼に任せれば死んでも放さないだらう。から彼をよく知るものは云つた。實際彼には冗談に生てゐられるには生ることは淋しすぎた。そして風のなかに木が決心して立つやうに、彼は四方から受ける見へない壓迫にたいして立たないわけにはゆかなかつた。

しかしそれは彼には樂ではなかつた、それで彼は依然と一番呑氣ものゝ仲間に入つて、日なたぼつこしたり、呑氣な冗談を云つ笑つたて。しかし彼は彼のそばで下等な話をされるのを嫌つた。そして彼の周圍にはさう云ふ話は起らなかつた。しかし彼は下等なことを空想しなかつたか、又それを私かに實行しなかつたか。

彼は性慾の自覺をうる前に事實を知つてゐた。

彼の家は性慾問題からは超越してゐた。家で下等な話しは影さへ見せなかつた。祖母が二人と母とあとは子供で男氣はなかつた。道樂ものはなかつた。子供が生れるのに性慾が必要だなぞと云ふことを知つたのはもつとあとの話した。

子供は自分にわからないことは不思議がるものだ。彼はある書生と一緒に歩いて通りにゆく時、よく少さい路次をつれられて通つた。

彼は子供心にどう考へても、その道が近い道とは思へなかつた。その路次のつきあたりに湯屋があつて、そして道は左へ二三間まがつてゐる。處が彼の家は右の方にあるのだ。

それでなぜその路次を通るのか彼にはどうしても腑におちないので書生に聞いたら、

「この方が近いのだ」と云つた。

彼はそれが不思議で仕方がなかつた。自分の考がちがつてゐるのか知らん、自分は遠いと思ふが、書生の方が知つてゐるはづだからと思つて、隨分考へた。しかしとう〳〵わからずなりに二十年近かく過した。そして或日ふと思ひあたつた。

それはその路次を通ることで、湯に入つてゐる女を見たかつたのにちがいないと云ふのだつた。なあんだと解決が出來て安心した。

處が、その點で母や祖母や、兄にたいして少しも腑におちない點を彼は見出すことが出來ない。彼は自分だけの賤しさなら思ひ出せるが。

その點、彼は幸福だつた。

彼の母は彼の秘密をいく分か知つてゐたにちがいない。母は彼にかう云つたことがある。

「お前がおなかにゐた時、妾は不思議に心がうごいた、小說類がよみたくなつた。誘惑さへ感じた。私はそれに克つたが、お前は用心しないといけない。Kのおなかにゐた時は私は勉强がしたかつたのに」

又母は云つた。

「Kは大丈夫だが、お前はきつと今に酒や煙草のみになるよ」

母は、「お前は道樂ものになるよ」とも云ひたかつたのだらう。

「お前はきつと氣違ひになる」と母が云つた豫言と一緒に、それは今迄の處ではあたらずに來た。しかしそれは母の警めのおかげが隨分あるとすると彼の母は、彼の性質を知つて尤も結果の多い忠告を知つてゐたと云へる。

彼は侮辱には我慢の出來ない男である。母にさう云はれゝば、

「まあ、見てゐて御らんなさい」

と腹のなかで覺悟をしないではゐられない男だから。

彼は生れて今迄、卷煙草を一本とはすつたことはない、彼も子供の時はまねして、一寸すつて見たが閉口した、二度程、間に何年か何月かおいて口にしたことがあるが、その後は一さい、手にしたことはない。又すいたくない。酒の方は、彼は、白酒は好きだつた。兄は嫌ひだつたが、しかし日本酒は杯に一杯ものんだことはない、皆あはせても。ビールは或人を皆でたづねた時、お茶も出さずに、ビールだけだされたので、コップに半分程、のどがかはいて困つたのでやつて見たがだめだつた。葡萄酒なら水を何倍も入れて砂糖を入れゝば好きである。

或時、彼が二十五六になつてからであらう。志賀や、正親町兄弟や里見と沼津の料理屋へ行つて酒をのめる人は酒をのんだ時、里見は醉つて、「武者君はサイダーで醉ふからうれしい」と云つたが、彼はサイダーをよくのみすぎて腹をわるくした、勿論、よつたことはない。彼は醉つた經驗は一度もないし、醉ひたいと思つたこともない。志賀や正親町は彼を一度醉はして見たいと云つてゐたが、まだその望みは滿されずにゐる。

道樂は、したことはないと云ふのだらう。

彼は遊郭も、待合も知らない、藝者あそびも、淫賣婦を買つたことも彼はない。吉原のある場所を彼は全く知らない。洲崎は一度月を見にさそはれて遠くから見た。しかしそれを自慢にすることは彼には出來ない。

彼は一體食ひ辛坊の方である。菓子は實に食ふ、水菓子も一番さきに手を出す。

彼の父は酒はのめなかつたが、甘いもの丶方で胃をこはした。それで遺言の一つに、子供にはあまり甘いものを食はせるなと云ふことがあつたさうだが、彼はその遺言を滿すことは出來なかつた。彼がこわい夢を見るのは胃をはらして寢るからが多かつた。彼はそれにこりて、明日からは夜は食ふのはよさうと思ふ。しかし明日の晩友達が來たり、行つたりして菓子を見るとつい忘れて、後悔をくり返す、あまり利口でないと自分で思ふ。

しかしそれはずつとあとの話である。

話を前にもどす。

五十四

次の夏休みに、彼は母や兄と紀州の姉の墓參に出かけることにした。

京都は父や母の生れ故郷であるし、彼は何となくなつかしく思つてゐた。

紀州にゆく途中、一週間許り、京都によつた。京都は親類の家にとまつた。其處の主婦は彼の家からかたづいたので、彼はその人を伯母さんと云つて、主人を伯父さんと云つた。公卿華族で神主さんだつた。彼は其處にゐた十二の女の子を可愛い丶女の子だと思つた。彼達が來たのを珍らしさうに石燈籠のうしろから見てゐた。

彼はその他、京都で記憶してゐることは、あまりない。祇園のお祭りの美しかつたこと、仁和加を見に行つて、下半

てゐるのにおどろいたこと、新京極の芝居の看板に女の喉に出刃庖刀をつきさゝれて血が流れ出てゐる幽靈の繪におびやかされたこと。

この幽靈の繪には實際閉口した。目をつむるとすぐその姿が目にうかんでくる。夜床に入つて光りを消すと、其處にその姿がありありと見へてくる。その青白い、うらめしさうな顏や、出刃庖刀がつき通された喉がはつ切り見へる。あんな目にあつたものもあるのか。と思ふと、どうしても眠れなかつた。

幡州皿屋敷の人形芝居を見た以後、そんな恐ろしい幻影になやまされた事はなかつた。その後仲で其處を通つた時、目をつむつて通つたが、矢張りありありと姿が見えた。

それからもう一つ滑稽なことを彼は覺えてゐる。覺えてゐることをかいては切りがないが、しかし子供の單純な頭なことはよくわかると思ふ。

彼は京都の人は大へんおとなしいと聞かされてゐた。喧嘩をするのでもおとなしいと聞かされてゐた。それで彼は、名所、嵐山だつたか、何處だつたかを見に行つた時、停車場であやまつて職人風の男の人の足をふんだ。彼はこんなは

あつと思つたが、相手が京都の人だから許してくれるだらうと思つた。處が頭から怒鳴りつけられた。

づではなかつたと怖さ半分と、ぼんやり半分で默つて聞いてゐた。

話と云ふものは皆ちがふものだと彼はぼんやり考へた。

子供の時のことを思ふと彼は一方中々利口だと思ふが、同時に一方隨分馬鹿で、子供らしいと思ふ。なんでも一圖に思ひこむ。處が事實は中々さうはゆかない。其處で段々彼は考へをなほしてゆく。

紀州でも彼達は大事にされた。彼の母は汽車によはかつた。そのせいか、紀州で腹をこはした。それで彼達の歸りはおくれた。彼達はその夏、學習院の水泳にゆくわけだつた。

彼は姉の墓にお參りし、和歌の浦にゆき、紀伊三井寺を見た。子供らしく、見るものが珍らしく、又何んでも珍らしく、大げさに見たかつたが、しかしはつ切りした記憶にのこつてゐることはなかつた。

そして歸りに、兄と片瀬の水泳場に行つた。こゝでは彼の今迄、知らない世界があつた。

彼は遠足で同級の人と一緒に大勢泊つたことはあつた、しかしそれは毎日顏をあはせてゐる連中で、氣心も知れ、呑氣だつた。處が水泳場では三つ位の級が一緒になつてゐた。そして彼はおくれて行つたので、皆なぢみになつてゐる處へ入つた。しかも彼の級の人は少なくつて、おとなしい人許りだつた。彼より一つ下の級のあばれものがそろつてゐた。そして、その連中が、露骨な話をし、そしてお互に露骨に根性を見せあつた。

あるものは強いものにこびて、御機嫌をとり、あるものは美しい子供を見るとしなだれかかつた。大きな連中がやつて來ては、さう云ふ連中をおいまわす。

露骨な性慾の話が、十人位い圓形をつくつて菓子を食ひながら話される。そして下等な話程、皆がよろこんで大きな聲出して笑ふ。

彼達はすみにゐて、知らん顏してゐる。

彼はのけものあつかいされてゐた。自分も別になることを好んだ。そして木下（利玄）なぞと、夕方になると海岸に出て話をした。早く歸りたいと思つた。殺伐なうるほいのない性慾にかんする言葉の横行、それは彼には閉口だつた。學習院でも、その時分が、さう云ふ方の絶頂だつた。

彼はすべてのものに輕蔑されてゐたやうな氣がした。しかし一人彼をなぐさめたものがあつた。それは前田だつた。前田も美しい方として皆にさはがれる方だつたが、それを嫌つて彼に近づいて、彼に好意を見せた。彼をさがし出しては彼と一緒に散歩したがつた。すると前田をさがしに來て、媚びたり、おどしたりして連てゆかうとした。しかし前田は彼と話すのをよろこんで、いつのまにか彼の處へ逃げて來て、一緒に海岸を歩いたり、腰かけて話したりした。前田は彼とちがう家にゐた、しかしよく彼をさそいに來た。

彼は前田だけが、自分の値を知つてゐてくれるとよろこんだ。

それから何と云つても彼の兄が居ることは氣丈夫だつた。級がちがうので、滅多に逢はないが、途中であふと、やさしい言葉をかけてくれる。

孤獨な感じが強いだけに彼にはそれが貴かつた。

彼はともかく十二三町は泳げたので、ゆくとすぐ試驗をうけて最初赤になつた。泳げない人は赤白でそのつぎが赤だつた。そして櫓廻りと云つて一週すると一町になる三十間の長さに櫓がならべてあるのを、毎日二三十人の人と廻つて泳いだ。その櫓を廻る回數は一日に一つゞゝふへた。彼の兄は先登の仲間に入つて泳いだ。彼は四つから海には親しんでゐたが不器用で、融通がきかないので、自己流の犬かきから小堀流の蛙泳ぎにかはることが出來ずに、いつも犬かきがおたまぢやくしの尻尾のやうにくつついてゐて蛙にはなり切れずに、おくれがちだつた。しかしともかく皆についてゆけた。そして或日、彼は青になつた。その時、彼と同じ家に泊つてゐた一人の人も青になつた。その人は彼より二つ級の下の人で彼とは殆んどつきあつてゐなかつた。その人は溫和しい優しい人だつたから、しかし氣樂に人とつきあへない彼は二人

彼はその人に不快はもたなかつた。

一緒に背になつたが、上級するとおごる不文律があることを知らなかつたし、その人が相談をしかけにくかつた。それでその晩、その人だけが、皆に片瀬饅頭をおごつた。彼は自分も奢らなければならなかつたことをすぐ察した。そしてその饅頭をよろこんで食つてゐる人々のなかに入る氣にはなれなかつた。その連中は彼の一番よろこばない話をする陰然と、その寮の勢力を握つてゐる連中だつた。

皆は始めは遠慮してゐたが、段々彼の奢らないことに皮肉を遠まはしに云ひだした。彼に聞へるやうに云ひ出した。しかし彼は知らん顔してゐた。今更、おごる氣にもなれなかつた。その時一人の男が何か云ひながら彼の方に饅頭をぶつけるやうに投げた。その言葉の意味はよくわからなかつたが、彼のけちなことを非難するやうな意味に彼はとれた。

彼は矢張り知らん顔するより仕方がなかつた。自分はけちかも知れない。しかし自分はさう云ふ習慣を知らなかつたのだ、そして誰も教へてくれなかつたのだ。自分の財布の内は貧しいのは事實だ。しかしそれは自分の恥ずべきことではない。自分は注意書き通り正直に小遣ひをもつて來た。皆はそれの何倍も多く持つて來たにしろ、それは自慢にすべきことではない。自分は忍辱にはなれてゐる。そして忍辱出來ないことを恥るものだ。自分に不當はないのだ、けちだと思ひたければ思ふがいゝ。俺はさう云はれてこつちから頭をさげる氣にはなれない。

彼はそんなことを心に云ひわけしながら、皆の悪意を一人で受けたやうな氣がした。今に見てゐろ、お前さん達よりは私の方が勇氣もあり、氣も小さくないことを知る時があるだらう。彼はさう心に云つた。

彼は他人を羨やむことは恥ぢた。他人に媚びることはなほ恥ぢた。淋しさは彼の心の底に勇氣を、辛抱づよい勇氣を起させた。

彼の小遣ひは皆の眞似して氷をのんだり、菓子を食つたり、江之島へ螺蠑の壺焼を食ひに行つたりするのでその後ま

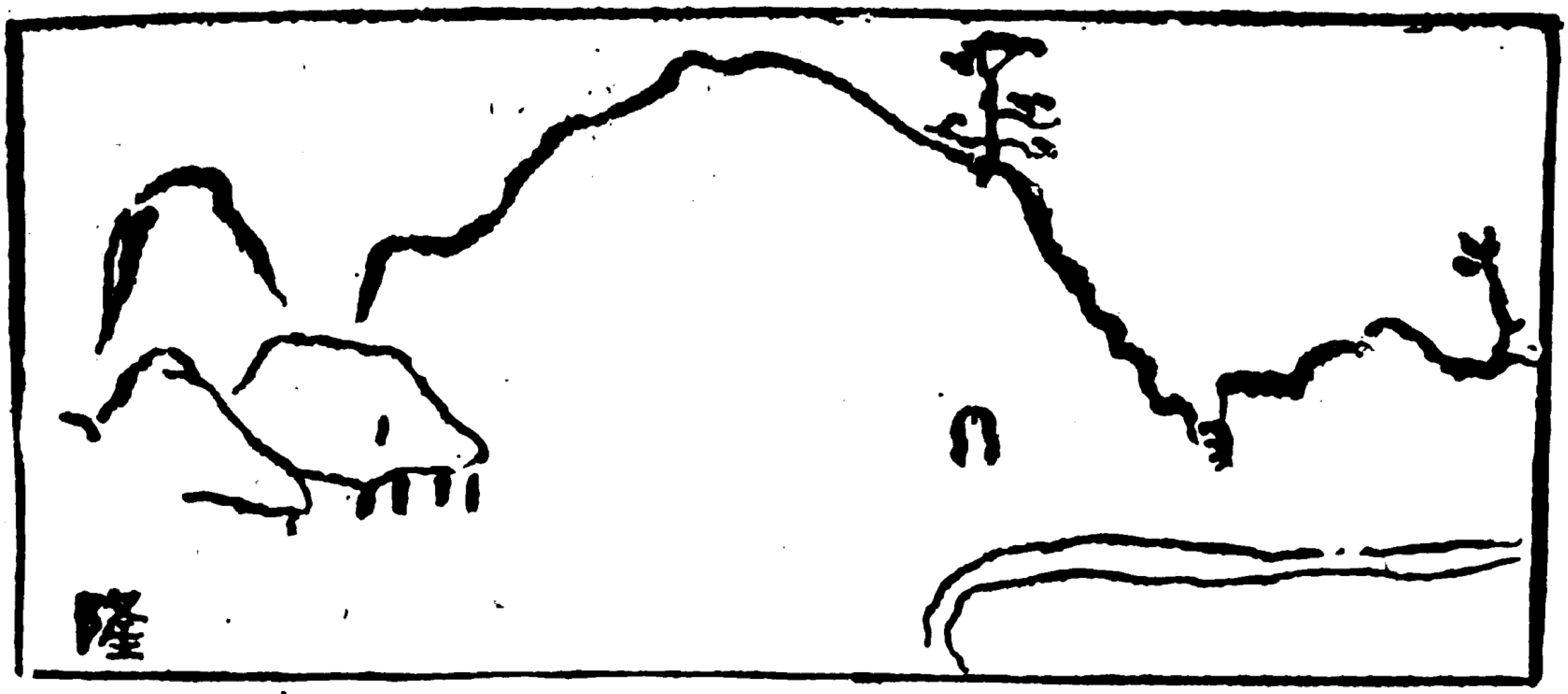
もなくなつた。或日彼は母がつくつた巾着をおとした。偶然椽の上におちたのと中に一錢位い切り入つて居ないのて、下駄で砂のなかにうづめてそのまゝすてゝ來た。もし金がいよ／＼いれば兄にもらへばいゝと思つてゐた。すると翌日彼の兄が、それを拾つて持つて來た。そして笑ひながら云つた。

「篤ちやんのだらう」

「えゝ」

「友達がひろつて持つて來てくれた。金がなくつては困るだらう」

彼の兄は少し自分の內から出して入れてくれた。彼は心からうれしく思ひ感謝した。そして知らずにおとしたやうな顏してすませた。しかし一錢切り入つてゐない糸であんだ巾着を兄の友にひろはれたのは恥かしかつた。兄にも氣の毒な氣がした。しかし兄は別にそんなことは氣にしてゐないらしかつた。（つゞく）



暗夜行路

志賀直哉

廿三

一ト月程經つた。

信行は望み通り會社を罷め、鎌倉の西師門といふ所に百姓家の小さい離れを借り、毎日の圓覺寺の僧堂に通ふやうになつてゐた。一度謙作は其所を訪ねて見たが、山の出鼻の直ぐ横に崖に添ふて建てられた新しい家で、惡くない家だつた。床の間には近頃買ひ集められた古々しい禪宗の本が澤山積んであつた。

父との交渉は信行が鎌倉へ住むやうになつて自然有耶無耶になつたが、これは謙作には却つてよかつた。はつきりした解決をつけようとすれば二人の性質では却つて面白くない事を惹き出したかも知れない。有耶無耶の内に却

つて謙作の思ひ通りの解決が出來てゐた。彼は今は全く本郷の家へ出入りしなくなつた。そして、お榮とは前通り一緒に暮らしてゐる。彼が最初から望んだ通りだ。が、これを父が平氣でゐる筈はなかつたから、其不服を聽かされるのは矢張り時々上京する信行だつたに違ひない。然し信行はそれに就いて何も云はなかつた。謙作の方でも、よりよき解決を得られる的もなかつたから默つてゐた。

それにお榮に對する心持も既に前とは幾らか變つてゐた。何故變つたか。それを明らかに云ふ氣はしなかつたが、矢張り信行が彼に書いたやうに運命に對する或る恐れ、——祖父と母と、そして又、祖父の妾と自分と、から重なつて行く暗い關係が何かしら恐ろしい運命に自分を導きさうな漠然とした恐怖が段々心に擴ろがつて往つたのである。實際彼は信行の云ふやうに強くはなかつた。反對される事がらには否應なしに、はつきりした態度を示す割りに、心持もその樣に毎時、はつきりした態度を持つてゐるのではなかつた。反對が薄らぎ、自由が來ると却つて彼は迷つた。

自分が不義の子であつたといふ事に就いても肯定的な明かるい考へを彼は持つたが、時が經つにつれ、心の緊張が去るにつれ、彼は時々參る事が多くなつた。

彼は妙に落ちつけなくなつた。

彼は移轉と云ふ事を考へた。前にお榮が此事をいひ出し、尾の道から彼がそれを贊成した時に、火災保險にゐた便宜から信行が會社の者に家を探さした事がある。然し謙作の歸京と共にそれも立消えとなつてゐたが、今又、そんな事でゝも氣持を新しくし、もつと落ちついた氣持で、仕事にかゝれさうな氣がすると、彼は又貸家探しの事を信行に頼んだ。

そして或る日、信行は珍らしく石本と連れ立つて訪ねて來た。

「あした、一緒に見に行から。五反田の方に一軒、大井の自家の地所の近所に二三軒あるさうだ。それから今晩はお前

の所へ消るよ。いゝかい？」こんな風に信行は云つた。

三人は暫くして、福吉町の家を出た。

そして其晩彼等は柳橋の或る待合で食事をしてゐた。若い藝者が二人、それと其家の女中が其所にゐた。もう一人桃奴といふ藝者を先刻から再三いつてゐたが、いつも、もう直きといふ返事だけで却々來なかつた。

桃奴をいつたのは謙作だつた。

「元、榮花と云つた女義太夫が此所で藝者をしてるさうだ。わかつたらそれを呼んで貰らひたい」かういつたのだ。

「榮花といふのは昔君に連れてゆかれて聴いた事があるよ。可愛い娘だつた。何んでも今川焼屋の娘だとか云つてた」

石本も其女を知つてゐた。

恰度來てゐる藝者の一人が路次の中で向ひ合はせに住んでゐるとか、桃奴の消息は精しかつた。幾度か電話をかけて來ない所から其女の噂がよく出た。そして藝者も女中も桃奴には好意を示さなかつた。謙作達が個人的に其女を知つてゐるのでない事がわかると、女達は少しづゝ惡意をさえ示した。おさらひの會で土地での古株の藝者と喧嘩をしたとか自動車の中で醉つた客の指環をぬき取つて了つたとか、――古い事では生れたての赤兒をキリ／＼と押し殺したとか、そして今も其男と離れられずにゐるのだとか、――現在一人の若い人を有頂天をさしてゐるとか、その若い人が自動車を持つてゐて、いつもそれを迎いによこし、又自分で會へない時にはよく品物に手紙をつけて送り届けるとか、そんな噂をした。

兎も角昔の榮花、今の桃奴が藝者の中でも最も惡辣な女になつてゐて、仲間でも甚だ評判の惡い女である事がわかつた。

一體、謙作は子供から寄席とか芝居とか、左ういふ場所によく出入りした。それは祖父やお榮が行くのについて行つたので、然し後ちに中學を出る頃からは段々一人でも左ういふ場所へ行くやうになつた。殊に女義太夫をよく聽きに出掛けた。

其頃十二三の榮花は、小柄な娘だつた。美しくなる素質は見えてゐたが、それよりも何か痛々しい感じで謙作は此小娘に同情を持つてゐた。瘠せた身體、眉毛が薄いので、白狐を聯想させる、青白い顔。聲は子供としても甲高い方で、それに何所か悲しい響を持つてゐた。

「あれは倒れて後、やむ、といふ女だね」こんな事をいつた彼の仲間があつた。はつきりしない詞ながら、悲し氣な、痛々しい感じの中にも何所か負けん氣らしい變な鋭さのある事を感ずると、謙作は此評を大變適切に思つた。後でも榮花を考へるとよくこれを憶ひ出したものである。

同級生の間に寄席行仲間が段々に多くなると、その一人の山本といふのが、或る時高座の彼女を見て、「知つてる娘だ」といひ出した。

山本の家の一軒措いて隣りの、然しそれは表通りでいふので、裏では唯一重の隣りに住んでゐる今川燒屋の娘だといふ事だつた。此事は彼等の間に一種の興味を惹き起こした。が、山本と小娘との間には何の交渉もなかつた。然し半年程經つて夏になると、丁度山本の屋敷に非常にいゝ堀井戸があつて、界隈での名水といふ位、近所の者がよくそれを貰ひに來る、そして榮花も其一人として時々山本の屋敷へ來るやうになつたといふのである。

井戸は湯殿の前にあつた。夏の事で窓は開け放たれ、細い葭すだれが其所へ下げてある。或る夕方山本が入つてゐると、すだれ越しに水を汲みに來た榮花が見えた。此方からだけ見えるつもりでゐると、榮花は汲み込んだ手桶を提げる

なり、山本の方を向いて禮をいつて行つた。そしてかういふ事が二三度續いて二人は段々話すやうになつたと云ふのである。山本は風呂の椽へ腰掛け、榮花は井戸側へ後手に倚りかゝりながら、汲んだ水が温るむまで話し込む事もあつた。寄席の内幕話だつた。暫くして、謙作は山本がやつたといふ湯呑を高座に見た。

山本と榮花との交渉は然し少しも深くなつては行かなかつた。山本は華族だつた。山本の家には謙作達がチヤボと字名した小さくて頑固で氣の強い、年寄りの三太夫がゐた。これだけでも深入りするには厄介だつたらう。まして、深入りする程の氣もなかつたらしいので、二人の間には何事もなく二年餘り經つた。

榮花に其間にめき〳〵と美しくなり、肥りはしなかつたが、兎も角身體も女らしく發達して行つた。藝も上がり、人氣も段々出て來た。

其頃丁度二代目の早之助といふのが廢める爲めに、榮花が其三代目を繼ぎ、眞打ちになる事になり、暫く寄席を退き初代早之助の家へ通ひ、専心、藝を勵んでゐる筈の時だつた。不意に榮花は家出をした。近所の本屋の息子と何所かへ隱れて了つたといふのであつた。

隱れ家は直ぐ知れた。榮花の家から三丁と離れない所で、若者は直ぐ連れ歸られたが、榮花の方はその爲めに今川燒屋の家から絶縁された了つた。元々曹長の私生兒とかで、本統の子ではなかつたのである。

若者から引き離され、養家から離縁され、同時に三代目早之助になる望を失つた榮花が自暴自棄になつたのは云ふまでもない。

殊に其時は既に姙娠してゐた。若しもそれが、所謂惡阻の時期とかち合つてでもゐたら、榮花はどれ程自暴自棄になつても未だ足りない氣持だつたに違ひない。そして實際榮花はかなり自暴自棄になつた。溺れんとする者が

掴むやうに――或はもつと本統に愛情を感じたか、よく分からないが、其所に出て來た一人の男に榮花は直ぐ身も心も任かせて了つたのである。

腹の兒は墮胎された。――さうではない、生れたてを押し殺したのだといふ噂を謙作は其頃聽いた。兎も角赤兒はどうかされ、榮花はその爲め全く體をつぶして了つたといふ話だつた。

間もなく榮花は其男に連れられ新潟へ行き、其所で藝者になり、それから又暫くして、北海道へ移つて、其所で出てゐるといふ噂を謙作は聽いた。いつも、所謂惡兄といはれる其男が一緒だといふ事だつた。其男に罪の秘密を握られてゐるので離れられないのだと云ふ事だつた。然し謙作の耳へ入る程度の秘密なら、かなり公然の秘密でもあるらしかつた。

そして三四年經つて、今になり、謙作は或る日何氣なく演藝畫報を見てゐると、其消息欄に榮花が柳橋から桃奴といふ名で出たといふ事が書いてあつた。

「場所が始まると、それは忙しくなるんですよ」こんな事を女の一人が云つた時である。

「よく行くのかい？」と石本が訊いた。

「大概行つてますよ」

「棧敷は何の邊？」石本も角力へはよく行く方だつた。

「正面」

「ふむ。石本さんの棧敷の近かくかい？」石本も仲間と棧敷を持つてゐたが、さういつたのは石本の本家の棧敷の事である。

「えゝ。あの少し上……こちら何んだかお見かけした事があるわ」こんな風に女も調子を合はせた。

「石本さんの誰れか、此邊へ來る人があるかい？」石本は何氣なく訊いた。石本には本家の方に甥が澤山あつた。そしてそれらは道樂者が多かつた。

「えゝ、あるわ」かういつて、女は女中と眼を見合はせて變な笑ひ顔をした。

「幾つ位の人だい？」

「軍人さん。幼年學校といふのがあるんですか。其所の生徒さん——桃奴さんの人つてその方の事よ」女は急に笑ひ出した。

先刻からの話で何んといふ事なし木綿問屋か何かの息子といふ風に謙作は考へてゐたが、それが石本の甥だつた事は一寸不思議な氣がした。

石本はそれとなく尚色々と訊いてゐた。

「石本さんの子供も左ういふのに掛り合つちやあよくないね」

「全くよ」と女もいつた。

遂に榮花の桃奴は來なかつた。來られなければ左うとはつきり云ふがいゝのだと女中が不服を云つた。九時頃三人は其家を出た。

「不思議な事があるぢやないか」と歩きながら石本は此偶然を面白がつた。「實は姉に左ういふ話を聽いたが、何所で遊んで居るのかわからなかつた。最初は決して遊ばない代り自動車を買つてくれといふので、五萬圓だけ貰ふ事になつた中で、一萬圓の自動車を買つたもんだ。馬鹿な話さ。遊ばないからと、それを眞に受ける奴も受ける奴だし……」

信行も謙作も笑つた。

「然しいゝ小說の材料ぢやあないか」と石本は謙作を顧みた。「君は榮花の經歷を知つて居るんだし。今日の事も面白い材料ぢやないか」

「うむ。いゝ話の種だね」と謙作は云ひかへた。左う云つて置かないと彼は氣が濟まなかつた。左ういふ出來事とか、今日のやうな偶然とか、雜談の種にはいゝが、これだけで直ぐ小說になると思ふ事には不服だつた。

三人はそれから散步して、銀座の方へ行き、其所で石本と別れ、十一時頃二人は稲吉町の家へ歸つて來た。

お榮は二人を待つてゐた。そして三人はそれから又暫く茶の間で話した。

信行は其日の事をお榮に話した。信行の話し方はそれ程の經歷を持つた、そしてそれ程に惡辣な女だといふ所を幾らか强調した話し振りなので、傍で謙作は余りいゝ氣がしなかつた。するとお榮が如何にも、いまはしさうな顏つきをしながら、「ひどい女もあるものね」と云つた。

謙作は急に腹が立つて來た。彼は「惡いのは榮花ではない」かういつてやりたい氣がむら〳〵とした。彼には十二三の青白い顏をしたいた〳〵しい高座の榮花が浮んで來た。「あの小娘がどうして、ひどい女だらう……」彼は妙に背中して來た。そして不圖其時、「これは書く事が出來る」と思つた。

廿四

翌日二人が家を川たのはもう二時過ぎてゐた。五反田の方から先に見た。小さい鐵工所の側から狹い坂を登り、下に四五百坪の草原になつた空地を見下ろしながら廻つて行くと其一軒があつたが、きたない平家で、前は割りに廣い庭に

なつてゐるが、日當りは余りよささうでなく、余程手を入れなければ住めさうもない家で、彼は氣乘りがしなかつた。それにかういふ家を餘り見た事のない謙作は、自分が住めばこれが何の程度に居心地よくなるのか見當がつかなかつた何んとなく此がらんとした、きたない家に此儘自分が入るやうな氣がされて一層氣乘りがしなかつた。もう一軒は周圍が狹苦しくつて迚も入る氣のしない家だつた。二人はのんびりした心持で樫の芽の強い香りを嗅ぎながら街道路を大森の方へぶら／＼と話しながら歩いた。信行はもう一卜かどの禪居士になり濟ましてゐた。そして、丁度高等學校時代の知識慾のやうな知識慾で、碧巖錄に載つてゐる話を次から次ぎとよく覺え込んで居て話した。

「さうだ、此道は自家の地所のある所へ出る道だよ」信行は立上つて往來の前後を見較らべながら、かう云ひ出した。「一寸寄つて見るかね。生垣を作らして、未だ誰れも見に行かないんだ」

「うん」

「お前はあの植木屋の龜吉を知つてゐるかい？」

「本鄉の家でいつか見たやうに思ふ。脊の低い頭の大きい馬鹿見たやうな奴だつた」

「さうだ。全く善良そのものといつたやうな奴だよ。手前事は天理教組樣のお見出しにあづかりまして……そんな事を云つてゐる」

謙作は或時皆と茶の間で茶を飲んでゐると其所へ其植木屋が入つて來た、その樣子を憶ひ出した。腰を曲げ、膝をくの字なりにして、實際信行のいふやうに其樣子は善良そのもの、正直そのもの、そして、低能そのもののやうな感じを與へた。妹達はクス／＼笑つたが、植木屋は少しも氣がつかないやうな顏をしてゐた。話振りでも、恭しく茶を戴いて飲む、さういう樣子でも總てが馬鹿叮嚀で、此者に任して置いて、づるい事をされる心配はないと、誰れでも思はない

わけに行かないやうな男だつた。

「然し見た通りが本統だらうか？」謙作は其時何となく疑ふ氣がしたのであつた。餘りに見かけが好人物すぎた。其所に眼に見えない一種の不自然さが感じられた。謙作は歸つて其事を日記に書いて置いた。

「あれは君」謙作はそれを憶ひ出して云つた。「見かけだけの人間ではないかも知れないよ。餘まり見かけが好人物すぎる。」

信行はそれに反對した。二人は間もなく其地所へ出た。長方形に往來に添ふた二千坪ばかりの地所で、今まで畑にしてあつたのを宅地に直し、四つ目垣に結び、これに檜の苗木を植込ましたのである。

「何所から入るのだ」信行は入口を探して歩いた。「入口がないぜ」

「そんな事はあるまい」

「何所にも入る所はないよ。さういへば、俺が龜吉に見積りを出さしたのだが、入口の事を云ふのを忘れたのかも知れない」

二人は笑つた。そして尚、探したが完全に四つ目垣を結ひ廻はしてあつて、何所にも入る所はなかつた。

「作りながら氣がつかなかつたかね」

寧ろ愛嬌だつた。二人はそれから、土地を管理さしてゐる百姓の家へ寄つて入口の事を龜吉へ云ひつける事を頼んで來た。（そしてこれはそれから二三ケ月後の話であるが、龜吉は實際謙作が疑つたやうに本統の正直者でない事がわかつた。草刈りをしたからと、土地の廣さに對しても多過ぎる手間賃を本郷の家から受取つて置いて、草は草で、生えなりに馬の飼ひ葉として賣り、懐手をしながら、兩方から金もうけしてゐたのであつた。）

日が暮れかゝつて來た。大井の山王寄りに一軒建ての二階家があつた。外から見た所では一寸氣の利いた家だつた。謙作はもう疲れてゐた。そして、これで充分だと思つた。

「新しいだけでも氣持がいゝ。間どりもよささうぢやないか」と信行もいつたで、二人は山王の大家の家へ寄つて借りる事に話をきめた。

大森の停車場へ來ると（院線電車のない頃で）上りは少し間があつて、下りが先へ來た。鎌倉へ歸る信行を送りがてら、横濱まで支那料理を食ひに行く事にして、そして晩くなつて謙作は歸つて來た。

五日程して、謙作達は其所へ引移つた。

然しその家は夕方、氣忙しく見て、思つたよりは遙かにいやな家だつた。本統の貸家向きに建てた家で、二階で少し烈しく歩くと家が搖れた。そして誰か下の部屋で新聞でも展げてゐれば其上にバラ〳〵と音がして天井のごみが落ちて來た。

「此方へ來てから髮がよごれて仕樣がないのよ」下の部屋にばかりゐるお榮はこんな事をいつてこぼした。

謙作の氣分は幾らか變つた。彼は此機をはづさず仕事をしようと考へた。尾の道だかゝつてゐた長いものには一寸手がつかなかつたから、彼は榮花の事を書く事にした。

實際會えばどうだかわからなかつた。が、離れてゐて考へると、彼は心から榮花に同情出來た。それには、一方不確かな感じもあつた。會つてどうだか知れない人間に對し、離れてゐるが爲めに同情出來るのだといふ事は仕事の上からも面白い事ではなかつた。然し實際會へば、そして第三者よりも何かの意味で近づけば、それでも自分は現在の榮花に對し同情が起こるかどうか、彼は甚だ心元なかつた。元々書かうと思ふ動機が同情――お榮が少しも同情なしに何かいつ

たのに對する腹立ちにあつたゞけに此事は拘泥しないではゐられなかつた。彼は或る時榮花に會つて見てもいゝと思つた。然し妙に臆劫な氣もし、却々實行は出來さうもなかつた。

　そして彼は自分が榮花に會つた場合に想像して見て、榮花がどういふ調子で自分に對するか？左うなる前の榮花を知る自分に對し、榮花も多少其頃の氣持を呼び起すであらうか？それとも、左う見せかけ、其頃をなつかしむやうな風を見せ、心は現在を少しも動かない、左う云ふ荒んだ調子であるか？何方とも想像出來た。然し何れにしろ、彼は左ういふ絕望的な榮花に矢張り同情出來さうに思へた。絕望的な境地から榮花を救ふ、かういう氣持も彼には起こつた。兒殺しそれから數々の何か罪、左ういふものを總て懺悔し悔改めた榮花。が、それを考へて見て、彼は矢張り妙に空ろな榮花しか考へられなかつた。若し自分が榮花に會ふ場合、かういふ風に、所謂基督信徒根性で簡單にこんな望みを起こすとすれば、それは余り感心出來ない事だと考へた。

　本統に一人の人が救はれるといふ事は容易な事ではないと思つた。

　彼は先年京都で、蝮のお政といふ女を見た事がある、それを憶ひ出した。祇園の八阪神社の下の場末の寄席といつたやうな小屋で自身の一代記を芝居にしてゐた。それを見物したのではなかつたが、夜おそく其前を通ると、入口に頭を奇麗に丸めた女が口上をいつてゐる繪看板が上げてあつた。口上には懺悔する意味で自身、一代記を演ずると書いてあつた。彼はそれを見てから何氣なく其所を立去らうとすると、中から數人の若い女の聲がして、其一番先に立つて來たのが、長いマントを着、坊主頭とナイトキャップを被つた、大きな一見男と思はれる、――その繪看板を見てゐなければ勿論、男と思つたらう、五十余りの蝮のお政であつた。

　繪看板をはづしに來た若い男が、挨拶をすると、お政は一寸頭をあげて點頭いた。丁度電燈の下で謙作は其顏をよく

見る事が出來た。それは氣六けしさうな、非常に憂鬱な顏だつた。心が樂しむ事の決してないやうな顏だつた。

彼は蝮のお政については何も知らなかつた。長い刑期を神妙にして、そして悔改めた事を認められ、何かの機會に出獄して、そして、今は生活の爲めに一座を組織し、旅から旅と自身の過去の罪を賣物に、芝居をして廻はつてゐる。——これだけの事が考へらるのであつた。

そしてこれだけでも彼は其時見たお政の顏つきから其心持を察するには十二分だつた。それが妙にはつきり映つて來た。彼は淋しい、いやな氣持になつた。彼はお政のした悪い事を知らなかつたし、それに何の同情も持つてなかつたが、それでも左ういふ悪事を働きつゝあつた時の心の状態に比し、今が、よりいゝ状態だとは云へない氣がして、變に淋しい不快な氣持になつた。それは何れもいゝ状態でないに違ひない。然しお政自身の心として何方がより幸福な状態であつたかを想像すると、悪事を働きつゝあつた頃の生々して張りのある一種の心の上の幸福は今は全く彼女から消え去つたに違ひないと思はないわけに行かなかつた。そして、其代りに今何があるか。自身の罪を芝居にして廻はつてゐる。それは全く芝居に違ひなかつた。懺悔でも何んでもが芝居に違ひなかつた。しかも見物はそれが當の人物である所に何等かの實感を期待するだけに一層彼女には苦しい偽善が必要となるに違ひなかつた。かういふ生活が彼女をよくする筈はない。そして、一度罪を犯した者は悔改めてからも、假令お政程罪に露骨な關係を持つた生活をしないまでも、屹度かういふ心の不幸に苦しめられないものはないだらうと彼は思つた。

お政は脊の高い男性的な強い顏をした女だつた。若い頃は押し出しの立派な女だつたらうと思はれる所がある。

謙作は今、榮花の事を考へようと思ふと、曾て見た其女を憶ひ出さずにはゐなかつた。彼は現在の榮花を考へ、氣の毒なそして息苦しいやうな感じを持ちながら、然し所謂悔改めをしてお政のやうな女になる事を考へると一層それは暗い

絕望的な不快な氣持がされるのであつた。本統の救ひがあるならいゝ。が、眞似事の危つかしい救ひに會ふ位なら矢張り「倒れて後ちやむ」それが榮花らしい、寧ろ自然な事にも考へられるのであつた。

彼は會ひに行く機會を作る事が、臆劫だつたので、其儘書き出した。

或る時彼は山本に會つた時、その事を話すと、山本は

「あゝ、先日ネ、家内と牡丹を見に行く時、兩國で船に乘らうとして待つてゐると路次の口に立つて此方を見てゐるのが、どうも榮花ぢやあないかと思つた。矢張り左うだつたのだネ」と云つた。實際その路次に榮花の抱妓の家はあつたのである。

「會つて見る興味もないかい？」

「左うだネ、ない事もないが……」山本は言葉を濁し、乘氣な風も見せなかつた。

廿五

謙作は又段々と參り出した。氣候も惡かつた。濕氣の強い南風が烈しく吹くやうな日には生理的に彼は半病人になつてゐた。そして生活も亦亂れて來た。彼は榮花の事を書かうとすると、勢ひ女の罪と云ふ事を考へなければならなかつた。男ではそれ程追つて來ない罪の報ひが女では何故何時までも執拗につきまとつて來るか。或時、元、榮花のゐた邊りを歩き、其本屋の前を通つて、彼よりも若い其男が、何時か赤坊の父となつてゐるのを見て一寸變な氣がした事があつた。赤坊を膝に乘せ、ぼんやり店から往來を眺めてゐる其樣子は過去に左ういふ出來事のあつた男とは思へぬ程、氣樂に落ちついて見えた。それは左ういふ男でも或る時過去の記憶で心を曇らす事はあるだらう。殺された自身の初兒、

こんな事を憶ひ出す事もあるだらう。が、それにしろ、それらは皆其男にとつて今は純然たる過去の出來事で、その苦しかつた記憶も今は段々薄らぎ遠退きつゝあるに違ひない。所が、榮花の場合、それは同じく過去の出來事ではあるがそれは現在の生活と未だ少しも切り離されてゐないのはどうした事か。今の生活は寧ろ其出來事からの續きである。――かういふ事は必ずしも女にかぎつた事ではないかも知れない。一つの罪から隨性的に自暴自棄な生活を續けてゐる男は幾らもあるだらう。が、女の場合は男の場合に較べて更にそれが絶望的になる傾きがある。元々女は運命に對し、盲目的で、それに惹きづられ易い。それ故周圍は女に對し一層寛大であつていゝ筈だ。子供の事だからといふやうに、女だからといつて許さうとしてもいゝ筈だ。所が周圍は女に對して何故か特に嚴格である。嚴格なのは未だいゝとして、周圍は女が罪の報ひから逃れる事を喜ばない。罪の報ひとして自滅するのを見て當然な事と考へる。何故女の場合特にさうであるか、彼は不思議な氣がした。

彼はこんな事を想ふにつけ、亡き母は未だしも幸福な女だつたと思はないわけに行かなくなつた。母の周圍が、もつと愚かな人々でとり巻かれてゐたら母はもつと〳〵不幸な女になつてゐたに違ひない。ひいては自分の存在もどうなつてゐたか分らない。幸ひに芝の祖父でも、本郷の父でも、賢い人々だつた。自分は此事だけでも本郷の父へは心から感謝しなければ濟まないわけだと彼は考へた。――彼の感情は却々其所まで行かなかつたけれども。

彼は榮花の事を書き出した。榮花の事を書くのに彼自身の立場から書くと餘りに材料が少なくあつさりしすぎるので、彼は榮花の立場から、自由に想像を入れて書く事にした。榮花が或る時蝮のお政に會ふ事を書いてもいいかも知れないと思つた。それから、其頃丁度矢張り寄席藝人として出てゐた、箱屋殺しの花井お梅といふ女を見る事なども書いていゝかも知れないと考へた。謙作は實際或時高座に其女を見て、慘めな、不快な感じを受けた事がある、與乙罪を罪のま

ゝに押し通してゐる女の心の張り、その方に彼は遙かに同感が起るのであつた。

彼はこれまで女の心持になつて、書いた事はなかつた。その手慣れない事も一つの困難だつたが、北海道へ行くあたりから先が、如何にも作り物らしく、書いて行く内に段々自分でも氣に入らなくなつて來た。

そして、彼は何んといふ事なし氣持の上からも肉體の上からも弱つて來た。心が妙に淋しくなつて行つた。彼が尾の道で自分の出生に就いて信行から手紙を貰つた、其時の驚き、そして參り方は可成りに烈しかつたが、それだけにそれをはね退けよう、起き上がらうといふ心の緊張は一層強く感じられた。然し其緊張の去つた今になつて、丁度朽ち腐れた土臺の木に地面の濕氣が自然に浸み込んで行くやうに、變な淋しさが今ジメ〳〵と彼の心へ浸み込んで來るのをどうする事も出來なかつた。理屈ではどうする事も出來ない淋しさだつた。彼は自分のこれからやらねばならぬ仕事――人類全體の幸福に繋(つな)がりのある仕事――人類の進むべき路へ目標を置いて行く仕事――それが藝術家の仕事であると思つてゐる。――そんな事は殊更頭を向けたが、彈力を失つた彼の心はそれで少しも引き立たうとはしなかつた。只々下へ〳〵引き込まれて行く。「心の貧しき者は福なり、」貧しきといふ意味が今の自分のやうな氣持をいふなら餘りに慘酷な言葉だと彼は思つた。今の心の狀態が自身これでいゝのだ、これが福になるのだとはどうして思へようと彼は考へた。若し今一人の牧師が自分の前へ來て「心の貧しき者は福なり」といつたら自分はいきなり其頰を撲りつけるだらうと考へた。心の貧しい事程、慘めな狀態があらうかと思つた。實際彼の場合は淋しいとか苦しいとか、悲しいとかいふのでは足りなかつた。心が只無闇と貧しくなつた――心の貧棒人、心で貧棒しきる――これ程慘めな事があらうかと彼は考へた。

これは確しかに生理的にも來てゐた。尾の道にゐた時、既に彼は左うなりかけてゐた。其所に自身の出生に就いて知

つた。此事は然し一時的に彼の心を緊張させる上に却つて有効な刺激となつた。が、その刺激がなくなり緊張が去ると其所には一層悪いものが殘された。これなしにさえ弱つて行きつゝあつた彼の心はその爲めに不意に最も悪い状態まで沈められて了つた。

信行は時々彼を訪ねて來た。彼の方も近頃は今までになく信行に親しみを感ずるやうになつた。そして彼は信行から色々禪の話を聽く事を喜んだ。

いぐてい一指頭の禪とか、南泉猫兒を斬る話とか、石鞏の弓箭を向ける話とか、船子和尚と夾山の話とか、徳山が龍潭の所で悟る話とか、それから百丈、潙山、黄檗、睦州、臨濟、普化、さういふ連中の色々な話など、總てが、現在の謙作には理想的な心の境地であつた。「何々、こつ然大悟す」其所へ來ると彼はよく泣きさうになつた。殊に徳山托鉢といふ話などでは彼は本統に泣き出して了つた。其話が彼の貧しい心に心の糧として響くからばかりでなく、一方それの持つ一種の藝術味が、烈しく彼の心を動かすからでもあつたらう。

彼がさういふ話に腹から感動するのを見ると信行は遠慮しながら、鎌倉へ來る事を勸める事もあつた。然しさうなると謙作は素直になれない方だつた。師につくといふ事が、いやだつた。禪學は悪くなかつた。が、悟り濟ましたやうな高慢な顔をした今の禪坊主につく事は閉口だつた。

若し行くなら高野山とか叡山の横川あたりに行きたい、さう彼は考へた。然し後年彼は高野山へ登つて見て こんな所ならあの時來ないでよかつたと思つた。

彼は四十枚近かく書いて又行きづまつて了つた。今のやうな氣持で、内の力を外へ働きかける、書くといふやうな仕事のうまく行く筈はなかつた。

無爲な、然し彼には息苦しい淋しい日が何週間か經つて、或る日の事である。それは蒸暑い風の吹くいやな日だつた。彼は晝の食事を濟ますと急に氣が重くなり、何をするのも憶劫なやうな氣持で、茶の間に寢ころんで其所にあつた翻譯小說を別に見る氣もなく二三頁讀んでゐた。

「それは左うと由を博覽會へやるのは何日がいゝでせう?」南洋館といふので土人の踊りがある、宮本が喜んでよくそれを見に行くといふ、左う其朝桝本といふ友達からの便りがあつた。それを憶ひ出して、彼は傍で針仕事をしてゐたお榮に話しかけた。

「何日でもかまいませんよ。一人でやるんですか、それとも誰れか連れて行つてやるの?」

「一人で行けるでせう」かういひながら彼は直ぐ「少し無理かな」と考へた。そして何日やらうかと考へると、それも却々決められない、何かしら六ケしい事のやうに彼には思はれるのだ。これは前からもあつたが、近頃になつて段々烈しくなつた一つの癖である。決めて了うと何か其所に困る事が起りさうに思はれるのである。何の根據もない單に自身の心の病氣から來てゐる事と承知しながら、それで却々彼には超越して考へられなかつた。一つそ、これから自分で連れて行つてやつてもいゝ、と彼は考へた。それを云ふと、お榮は

「でも、今日は信さんがお見えになる筈ぢやないんですか」と云つた。

「此前來た時そんな事をいつてたやうな氣がするんですがね。或は僕だけ左う思つてるのかも知れない」かういひながら、今日由を連れて行かずに濟む事を何かしらほつとするやうな氣持で彼は感じるのである。

三時になつた。三時十分に橫須賀からの汽車が着く。來ればそれだ。それで來なければ今日はもう來ない。左う思つて彼は何んとなく落ちつかない心持で其邊まで出て見る事にした。一重羽織を着て、時計を帶へ捲くと、財布も懷へ入

れた。信行に會へば否應なし其日の行動は決まるが、若し來ないとすると、それから先がどうなるか自身でも全でわからなかつた。然し實は漠然とした心持はあつた。が、それをどうとはつきりさすと、同時に厭になる近頃の癖から、一方はつきりしてゐる事すら、はつきりさせないで置くやうになつて居た。

「一寸出ます。めし迄には大概歸ります。信さんに會へば一緒に直ぐ歸つて來ます」左ういつて家を出た。

信行には會はなかつた。あてにして居た列車は鹿島谷と云ふ所を歩いて居る時に姿は見えなかつたが、烈しい地響だけをさして東京の方へ走つて行つた。

大森の停車場へ來たが、新橋行までは尚三十分程あつた。彼は品川行の電車の方へ廻はつた。間もなく電車は來た。

彼は懷から西鶴の小さい本を出して本朝二十不孝の仕舞ひの一節から讀み出した。彼は二三日前お榮から日本の小説家では何んといふ人が偉いんですか、と訊かれた時、西鶴といふ人ですと答へた。左ういつたのは丁度その前讀んだ二十不孝の最初の二つに彼は悉く感服して居たからであつた。それは餘りにと云ふ程徹底してゐた。病的といふ方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くとすれば、あゝ無反省に惨酷な氣持を押し通して行く事は如何に作り物としても出來ないと考へた。親不孝の條件になる事を竝べ立てゝ書く事は出來るとしても、それをあの強いリズムで一貫さす事は迚も出來る事ではないと思つた。――弱々しい反省や無益な困惑に絶えず苦しめられてゐる今の彼が左う思ふのは無理もなかつた。で、實際西鶴には變な圖太さがある。それが、今の彼には羨しかつた。自身左ういふ氣持になれたら、如何に此世が樂になる事かと思はれるのであつた。

彼は仕舞ひから見て行くと、どれも最初の二つには較べ物にならなかつた。

品川で市の電車に乘換へると、もう讀むのも少し面倒臭くなつた。彼は只ぼんやりと車中の人々の顔を見てゐたが、

其内不圖前にかけてゐる人の顔が、寫樂の描いた誰かに似てゐるやうに思ひ出すと、どれもこれもが、寫眞の眼に映つたやうな一種のグロテスクな面白味を持つて、彼の眼にも映り出して來た。

薩摩原の乘換へ來ると、本郷の家へ行つて見ようかしらといふ氣を一寸持つた。暫く會はない咲子や妙子に會ひたい氣が急に起つたのである。然し父がゐるかも知れないし、それに咲子にでも氣持がしつくり行きさうもない氣が直ぐして來ると、彼は矢張りその儘乘越して了つた。宮本か桝本かの家へ行つてもいゝと思ふが、妙にゐさうもなく、假りにゐても今の氣分で行けば、屹度氣まづい事をするか云ふかしさうで彼は氣が進まなくなる。氣まづい事を避けようと氣持を緊張さすだけを考へてもつらくなるのであつた。打克てたい慘めな氣持を隱しながら人と會つてゐる苦み、そしてへと／＼に疲れて逃れ出て來る憐れな自分、それを思ふと、何所へも行く所はないやうな氣がするのであつた。結局只一つ、彼が家を出る時から漠然頭にあつた、惡い場所だけが氣輕に彼の爲めに戸を開いてゐる。左う思はれるのだ。彼の足は自然其方に向ふのである。

そして彼は同じ電車の誰れよりも自身を慘めな人間に思はないではゐられなかつた。兎も角、彼等の血は循環し、眼にも光を持つてゐる。が、自分はどうだらう。自分の血は今ははつきりとした脈搏を打つて流れてゐる血とは思へなかつた。生温るく、だら／＼と流れ廻はる。そして眼は死んだ魚のやう、何の光もなく、白くうぢやぢやけてゐる、そんな感じが自分ながらした。

廿六

小さい女は髮結ひの所で丁度解いた所を呼ばれたのだと云つて、その澤山ある髮の毛を紅い球のついた髮差しで襟首の上に輕く留めて置いた。「朝鮮の女のやうでせう？」こんな事を云つて横を向いて見せたりした。戸外は未だ明かるか

つたが、天井の電燈がひとりでについた。風の音がして、それで部屋の中は甚く森々してゐる。

小さい女は彼に早く歸つて貰ひたいやうに如何にも落ちつかない樣子をしながら、何かしら絶えず饒舌つてゐた。

彼は起ち上がつた。そして部屋を出ようとすると、小さい女は失敬と云つて手を擧げた。彼も一寸手を擧げて、一人先に段々を降りて來た。そして出ようとすると、彼は其所に若い女が坐つてゐるのを見た。美しい女だつた。何所か感じのいゝ所があると彼は思つた、

戸外へ出た。そして電車路の方へ歩きながら、今からならお榮に云つて來たやうに明かるい内に歸れさうだと思つた。それは左うと、何故あの女はあんな所に坐つて居たらう。客が來てゐてあんな所にゐるのも變だと思つた。此次ぎ行けばあの女を自分は望むだらうと、彼は思つた。どんな人でしたと訊かれる。その時どう云へばいゝか。云ふやうな事は何もない。實際何の特徴らしい特徴も自分は見てゐなかつた。俺が歸る時、下に坐つてゐた女だ。美しい女だ。せいは？ それは分からない。肥つてゐましたか？痩せた方ではなかつた。こんな事で結局要領を得さうもない氣がした。そして彼は此儘電車に乘つて了ふのが惜しい氣がした。今の小さい女が未だゐるかも知れない。或は近所で會ふかも知れない。「忘れ物をした」かういへばいゝ。左う思つて彼は又、前の家の方へ引きかへして行つた。

彼は格子の中に立つて女中と話した。

「今、其所に居たのはお客さんで來てゐるのか？」

女中にはこれだけで通じた。

「今、上に一人呼んで居るんです。それと交代で上がるんです。直ぐですから、お上りなさい」

「俺を先にしないか」

女中は顔をしかめて見せた。そして又、直ぐですと云つた。

彼は下駄を脱いだ。次の間を通る時、其襖のかげに今の會話を聴いてゐた女が隠れるやうにして立つて居た。彼は見ないやうにして二階へ上がつて行つた。が、上がると直ぐ矢張り後は困ると思つて、彼は手を叩いて女中を呼んだ。隣りには其客といふのがゐるので彼は小聲で云つた。

「隣りは別の奴を呼べばいゝじやないか」

「いゝえ、名ざしなんです。それに先刻顔を見ちやつたんです」

「困るな」彼は氣六ケしい顔つきをして默つて了つた。

彼は別に根據もなしに其女をおとなしい、素人臭い、善良な女と云ふ風に何時か心で決めて了つてゐた。

隣りから一人の女が出て行つた。間もなく其女が其部屋に入つて行つた。彼はじつとしてゐられない氣持になつた。

そして又手を叩いた。

女中は入つて來て、彼が何も云はない先に、

「今入つた所です。直ぐです」と、なだめ顔に云つた。彼は

「硯を貸して呉れ」と云つた。

懐から白紙を出し、それを食臺の上に延べて彼は下腹に力を入れて習字を始めた。慈眼視衆生、福聚海無量、こんな文句を書いた。が、こんな文句をこんな場所で書くのは勿體ない氣がしてそれは直ぐやめたが、兎も角彼は隣りを頭に浮べたくなかつたのである。

女が入つて來た。笑ひ顔をした、いやな顔ではなかつたが、彼が勝手に決めて居た顔とは大分異つてゐた。

「ありがたう」少し斜めに向いて膝を突き、彼の顔を見ながら可愛いお辭儀をした
ユートだつた。先刻の神妙らしい樣子とは別人だつた。

「何時から出てゐるんだ」

「二ケ月程前から」女はあやふやな調子で答へた。

「お前ははたちだらう？」

「十九よ」

「本統か？」

「本統。ほんまどつせ」

彼は女を膝へ抱き上げてやつた。女は自由になつて居た。そして物憂さうに首を傾け、彼の肩へ其頰を押當て、休んでゐた。

「俺と一緒に何所かへ行く氣はないか？」

「何所へ？」

「遠くへだ」

「連れてつて下さい」

「俺は笑談で云つてるんぢやないよ」

「私だつて笑談ぢやないよ」

女は頰をつけ、眼を閉ぢた儘、だるさうに云つた。彼は肩を揺すり、

女中は顔をしかめて見せた。そして又、直ぐですと云つた。

彼は下駄を脱いだ。次の間を通る時、其襖のかげに今の會話を聽いてゐた女が隱れるやうにして立つて居た。彼は見ないやうにして二階へ上がつて行つた。が、上がると直ぐ矢張り後は困ると思つて、彼は手を叩いて女中を呼んだ。隣りには其客といふのがゐるので彼は小聲で云つた。

「隣りは別の奴を呼べばいゝじやないか」

「いゝえ、名ざしなんです。それに先刻顔を見ちやつたんです」

「困るな」彼は氣六ヶしい顔つきをして默つて了つた。

彼は別に根據もなしに其女をおとなしい、素人臭い、善良な女と云ふ風に何時か心で決めて了つてゐた。

隣りから一人の女が出て行つた。間もなく其女が其部屋に入つて行つた。彼はじつとしてゐられない氣持になつた。

そして又手を叩いた。

女中は入つて來て、彼が何も云はない先に、

「今入つた所です。直ぐです」と、なだめ顔に云つた。彼は

「硯を貸して呉れ」と云つた。

懷から白紙を出し、それを食臺の上に延べて彼は下腹に力を入れて習字を始めた。慈眼視衆生、福聚海無量、こんな文句を書いた。が、こんな文句をこんな場所で書くのは勿體ない氣がしてそれは直ぐやめたが、兎も角彼は隣りを頭に浮べたくなかつたのである。

女が入つて來た。笑ひ顔をした。いやな顔ではなかつたが、彼が勝手に決めて居た顔とは大分異つてゐた。

「ありがたう」少し斜めに向いて膝を突き、彼の顔を見ながら高いお辭儀をした。それが如何にも只のプロスティチユートだつた。先刻の神妙らしい樣子とは別人だつた。

「何時から出てゐるんだ」

「二ケ月程前から」女はあやふやな調子で答へた。

「お前ははたちだらう？」

「十九よ」

「本統か？」

「本統。ほんまどつせ」

彼は女を膝へ抱き上げてやつた。女は自由になつて居た。そして物憂さうに首を傾け、彼の肩へ其頬を押當て、休んでゐた。

「俺と一緒に何所かへ行く氣はないか？」

「何所へ？」

「遠くへだ」

「連れてつて下さい」

「俺は笑談で云つてるんぢやないよ」

「私だつて笑談ぢやないよ」

女は頬をつけ、眼を閉ぢた儘、だるさうに云つた。彼は肩を揺すり、

「オイ」と起こしてやると、女も、

「オイ」と眼を開きざま、彼の鼻先でその二タ重になつた白いあごを突き出した。

「貴様は俺が出鱈目を云つて居ると思つてるな。馬鹿な奴らしいから解かるまいな」

「馬鹿だから解からない」

女は彼の膝に腰かけたまゝ恥づかし氣もなく、彼の顏を上から瀏然と見下ろしてゐた。

女は少し本氣になり出した。實は半年ばかり前から出てゐる事、自家は深川で、母と姉だけだが、母は姉夫婦が見る事になつてゐるから自分は只、それを助けるだけでいゝのだといふやうな話をした。

「姉さんの御亭主は何をして居るんだ」

女は暫らく默つてゐたが、

「納豆屋」といつて笑ひ出した。うそか本統かはつきりしなかつた。

女は今居る家に七十圓ばかり借金をしてゐるが、それさへ返えして貰らへば、何所へでも行けるのだと云つた。女は何故か時々京都訛りを眞似た。「きつたいな事を云ひなはる」などいつた。「奇體」と「怪體」を混同してゐると彼は思つた。

「京都は好きか？」

女は乘氣らしい返事をした。

何もはつきりした話はせず、間もなく彼は其所を出て、眞直ぐに自家へ歸つて來た。

そして翌日になり、夕方になると、又彼は前日と同じやうな氣持で、妙に落ちついてゐられなくなつた。彼は用意の出

來かけた食事を待つ間も苦しいやうな氣持で家を飛び出した。鎌倉の信行は今日も來なかつた。乾度素通りをして本郷の家へ往つたのだと思ふと、一寸不愉快な氣分に被はれた。輕蔑されたやうな氣がした。ひがみだとは知つてゐた。が、左う思つても何んだか彼は愉快でなかつた。彼は前から總ての人が自分に惡意を持つてゐる、かう感ずる事がよくあつた。それは然し、本統のひがみで何の根據もないものだと打消してはゐたのだが、今自分の出生知り、それを若し却つて皆が前から知つてゐたとしたら、皆は自分の背後に何時も何か醜い亡靈を見、それに顏を脊向ける氣持を待つてゐたのではなかつたらうか、左う今更に彼には想ひ起されるのであつた。皆のその氣持が自分に反映する。自分は知らず／＼に意固地な氣持を又皆へ投げ返す。そして人々から更に何かしら惡意らしいものを感ずる。こんな事ではなかつたか。

實際近頃の彼にとつて接するもの總てが屈辱の種でないものはなかつた。何故左うか。左う思つても自分でも分からなかつた。只、彼はもの皆が左う云ふ風に感ぜられるのであつた。彼にとつては、根こそぎ、現在の四圍から脫け出る、これより道はない氣がするのだ。二重人格者が不意に人格が變つて了ふ、そのやうに自分も全く別の人間になる。どんなに物事が樂になる事か。今までの自分、――時任謙作、そんな人間を知らない自分、左うなりたかつた。

そして、今まで呼吸してゐたとは全く別の世界。何所か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓。しかも自分がその仲間はづれなら一層いゝ。非所で或る平凡な醜い、そして忠實なあばたのある女を妻として暮らす。如何に安氣な事か。彼は前日の女を想つて少し美し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうなのだつたら、どんなにいゝか。互に慘めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で靜かに一生を送る。笑ふ奴、憐む奴、などがあるにしても、自分達は最初から左ういふ人々には知られない場所に隱れてゐるのだ。彼等は笑ふ事も憐む事も出來ない。そして假令笑つても憐んでもそれは決して自分達の所までは聽こえて來ない。自分達は誰れにも知られずに一

生を終つて了ふ。如何にいゝか――

汽車で新橋へ着くと、兎も角彼は自動電話に入つた。前日桝本からの手紙で、「君が郊外に引移つた事を初めて聴いた。近くお訪ねしたいが、いゝ日を知らして貰ひたい」から書いてあつた。それを憶ひ出し、桝本を訪ねて見てもいゝと思つたのである。が、ベルを鳴らすと、もう彼は迷ひ出した。幸ひ交換手が直ぐ出なかつたので、彼は其儘受話器をかけて出て了つた。

銀座に夜店あきうどの出始める頃だつた。彼は夜店のない側の人道を京橋の方へ歩いて行つた。出來るだけしつかりした足どりで歩かう。彼は下腹に力を入れて、口を堅く結んでみた。そして毎時のやうに、きよろ／＼せずに穏やかな眼で行く手を眞直ぐに見て歩かう、左う思つた。松が叫び、草が啼いてゐる高原の薄暮を一人、すうつと進んで行く。左うありたかつた。現在銀座を歩きながら左う云ふ氣持で居たかつた。多少そんな氣持がしないでもなかつた。これは何んでも寒山詩か何かにあるのだと信行から聞いた。實に今の彼には理想的な心の境地であつた。

寒山詩を買はう。日本橋へ行くまでに二三軒漢籍を賣る家があつた筈だと思ふ。

間もなく彼は彼より五つ程年上の舊い友達が若い細君らしい女と一緒に向ふから來るのを見た。左ういへばもう少し前にも彼は彼より年下の知人が肉附のいゝ矢張り細君らしい若い人と往來の向ふ側を歩いてゐたのを知つてゐた事を今更に心附いた。

二間程の近さに來て友は漸く氣がついた。兩方で立止まつた。

「僕は今、我孫坊の×××番地に居る。夜は何時でも居る。遊びに來玉へ」と云つた。

彼は素より行く氣はなかつた。然し我孫坊と云ふと何處だつたかなと考へた。知つてゐるやうで思ひ出せなかつた。

あれは狸穴(まみあな)だつたかな、など心で迷つた。そして、「我善坊といふと、どの邊だつけ」から云はうとしたら、「我」を「がん」と云ひかけて、ドギマギして了つた。

「芋洗坂の下だつたかネ」こんな事をいつた。

「まるで異うさ」

後ろにゐた細君が何か注意すると、「あゝ電話を教えて置かう。芝の三千七百四十六だ」と云つた。

「迚も覺えられない」

「ミナヨムと覺えて置き玉へ。いつでも夜はゐるよ」

別れる時細君は叮嚀にお辭儀をした。其時彼は何所かで見た事のある人だと思つたが、憶ひ出せなかつた。

彼は一寸氣持を亂だされた。こんな事では駄目だと思つた。

松山書店と書家の書いた看板をあげてゐる古本屋へ來た。顔眞卿の千字文の楷書があつた。然し余り上等でないので彼はそれから、兩側の高い書棚を叮嚀に見て廻はつた。聞いた事のあるやうな、ないやうな本が一杯につまつてゐた。一休何とか双紙といふ紙切れを見て、一休の隨筆のやうなものかと思つて下ろして見たが、それは柳下亭種員の戯作だつた。

「寒山詩はないかい」

「丁度持合はしませんでしたな」

「宗門葛藤集は?」

「へえ、それも相憎持合はしませんでした」

丸善の前へ來た。店を仕舞つて、小僧達が横手の口から歸る所だつた。飾窓には埃及模樣をつけた惡趣味の書棚が飾つてあつた。

青木嵩山堂といふ本屋に來る。その前に小林嵩山堂といふ、矢張り古い本屋があつた筈だがと思つたが、見落したのか、もうなくなつたのか氣がつかなかつた。彼は青木嵩山堂で李白の小さい詩集を買つた。十年程前にも同じ本を此店で買つた事がある。然しあの本などは何所へ行つて了つたらうと考へた。

腹は空いてもゐなかつたが、食事をするなら、此邊がいゝやうに思ひ、彼は魚河岸の中へ入つて行つた。顏馴染のある怠け者のすし屋が珍らしく屋臺を出してゐたが、彼はその前を素通りにして、先の天ぷら屋へ行つた。彼はすし屋が其前を素通りにする自分を怒つて、どうかしはしまいかといふ不安を一寸感じた。そして、少時して天ぷら屋を出る時にも、其所にすし屋が待伏せしてゐて自分を袋叩きにしはしまいかといふ愚にもつかぬ不安を感じた。自分ながら馬鹿氣た不安と氣がついたが。

それから橋を二つ渡つて、彼は右へ折れて行つた。前日彼は其所を少し行つた所の時計屋で、多分プラチナだらうと思ふ時計を見て一寸欲しい氣を起こした。百九十圓といふ札がついて居た。彼はそれをもう一度見て、若し今日も欲しい氣がしたら、買つてもいゝと考へた。三ケ月程貧棒暮らしで我慢すればいゝのだと思つた。が、今日見ると前日程欲しい氣はしなかつた。それは一寸淋しい氣持でもあつた。五六年前までは欲しいと思ひ出すと、例へば浮世繪のやうなものでも、手に入れるまでは氣になつて仕方ない方だつたが、段々に近頃は一つ物に妙に執着が感じられなくなつてゐる。物を欲しいと思ふ、前日既にそれを珍らしい事だと思つてゐたが、案の定、今日はもうそんな氣がしなくなつてゐる。これは彼には矢張り淋しい事だつた。が、同時に貧棒せずに濟んで却つてよかつたとも思つた。

彼は尙暫く、其飾窓を硝子越しに眺めて居た。其内不圖、店の者が自分を泥棒と思ひはしまいかといふ氣がした。彼は一寸顏の赤くなるのを感じた。そして歩き出した。

前日の家へ來た。下の部屋では三味線を彈いて騷いでゐた。彼は二階へ上がると、

「昨日の人を呼んで吳れないか」と云つた。女中は降りて行つた。彼は本屋で包んで吳れた李白の詩集をほどいて見始めたが、「昨日の人」だけでは不充分だつたと氣がついた。手を叩くと異ふ女中が登つて來た。

「昨日の後の人だ」

女中もそれを呼びに行つたのだと云つた。彼は安心したが、家にゐればいゝがと、一寸不安な氣もした。

詩集の初めに傳記が二つついてゐた。それは現在の彼には實に理想的に思へる生活だつた。が、余りに性格が異つてゐる。──階下の騷ぎが八釜しい。尤も「白猶興飲徒醉於市」こんな事が書いてある。李白ならこんな中でも平氣に自分だけの世界にして呼吸してゐたらうと思ふ。「囊中自から錢あり」こんな事をいつて酒屋で仰向けになつてゐる李白を杜甫か誰かゞうたつてゐるのを想ひ出す。李白が酒好きだつた事は鬼に鐵棒に違ひなかつた。然し六十余歳で死んだのは酒の爲めである所を見ると、酒から來る不快もあつたにはあつたらう、など考へる。彼は酒はどうしても好きになれなかつた。それ故その鐵棒は別に羨しくも感じなかつた。──女は却々來ない。

雜に本文を見る。「莊周夢蝴蝶。蝴蝶爲莊周」何んといふ事なし、こんな句が彼の心を惹いた。

漸く女が來た。前日とは大分異つた印象を彼は受けた。前日程女のいゝ所が彼に映つて來なかつた。何か表情をすると矢張り美しかつた。笑ふ時八重齒の見えるのが妙に誘惑的だつた。然し澄ましてゐると、如何にも平々凡々だつた。

多少裏切られたやうな心持で彼は一切前日の話は持ち出さなかつた。女も忘れたやうに云はなかつた。

彼は然し、女のふつくらとした重味のある乳房を柔かく握つて見て、云ひやうのない快感を感じた。何か價うちのあるものに觸れてゐる感じだつた。輕くそれを揺すると、氣持のいゝ重さが掌に感じられる。それを何と云ひ現はしていゝか分からなかつた。彼は只、

「豐年だ！　豐年だ！」と云つた。

左う云ひながら、彼は幾度となく。それを揺す振つた。何か知れなかつた。が、兎も角それは彼の空虚を滿たして與れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴として彼には感ぜられるのであつた。（前篇了）

（後篇は半年程休んでから出す。作者）

移轉廣告

今回左記の所へ移轉いたしました。

東京市芝區櫻田備前町壹番地

大正拾年七月

改造社

電話銀座二九五四番
振替東京四八〇二番

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八十錢	二錢
半ヶ年	四圓八十錢	不要
壹ヶ年	九圓六十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正十年七月廿日印刷納本
大正十年八月一日發行

編輯兼發行印刷者　東京市芝區伊皿子町四拾番地　平田貫一郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田備前町一　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

◇一世壓する完璧

改造社編輯局編纂

文化哲學叢書

監修者として哲學界の完璧を網羅し、一世を壓する權威の所産を社會に提供することは既に前號に豫告せる如し。今回愈々その準備成り、各方面に亘りて一粒選りの新鋭を物色して執筆を依囑したり、尙全部十二册とする考なりしも、佛國のアルカン叢書の如く、册數を制限せず、頁數も制限せず、その出版の年限を定めずして、永久に「文化哲學叢書」の名を以て發行するに至るべし隨つて大體は著書の形式を採るべきも、中には飜譯の形式を取る者もなしとせず。

監修者（いろは順）

文學博士 波多野精一
文學博士 米田庄太郎
理學博士 桑木彧雄
文學博士 西田幾太郎
文學博士 田邊元
文學博士 藤井健治郎
文學博士 朝永三十郎
法學博士 左右田喜一郎
文學博士 深田康算